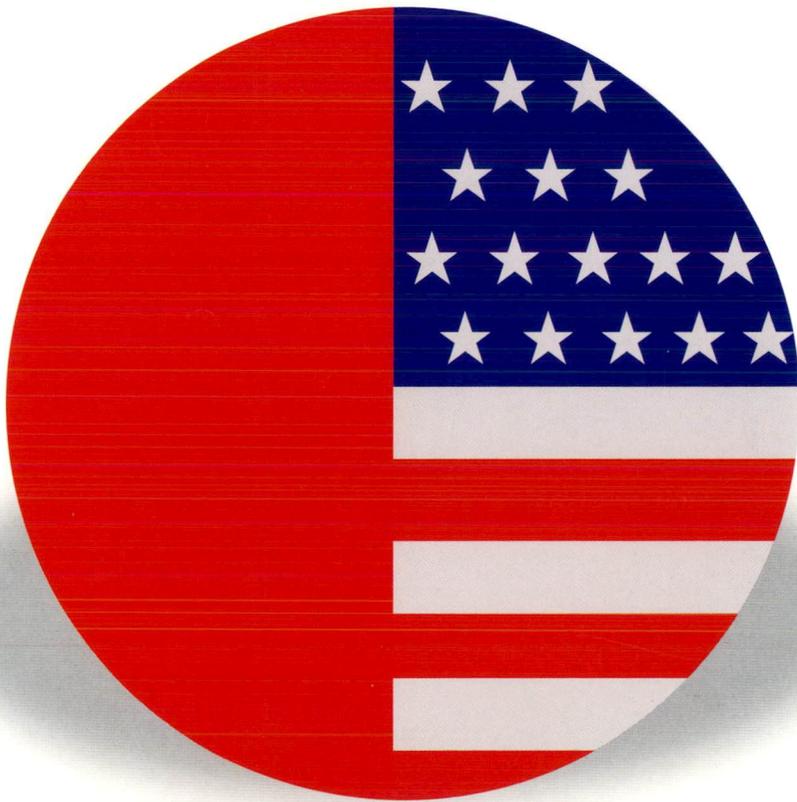


第59回日米学生会議

日本側報告書

The
59th
Japan-America
Student
Conference



太平洋から世界へ
～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～
Advocating Japan-America Participation in Global Change

第 59 回 日米学生会議 日本側報告書

序 章

日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶	2
アメリカ側実行委員長挨拶	3
内閣総理大臣からのメッセージ	4
日米学生会議の歴史	5
過去の参加者からのメッセージ	6
宮澤喜一氏	
ヘンリー・A・キッシンジャー氏	
本文中の略語について	6

日本側実行委員長挨拶

第59回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長 川口 耕一郎

日米関係が「世界で最も成熟した二国間関係」と評される現在、日米を代表する72名の学生が1ヵ月間会議を行う意義とは何か。

日米学生会議（JASC）は、満州事件を契機に悪化する日米関係を憂慮した日本人学生4名によって創設された。創設当初は、貴重な草の根国際交流の場とされ、学生が会議を運営するという新鮮さも相まって、非政府的外交使節団としての役割を大きく期待され、宮沢喜一氏、ヘンリー・キッシンジャー氏などの多くの人材を輩出してきた。だが、80年代から日米関係が良好になり、国際交流が一般化する中で、会議の意義が問われるようになる。

「なぜ、今JASCか」

毎年、各回の実行委員はその問いに悩み、一年間「JASC中毒」のように本会議の企画、運営に奔走した後でも、その答えを見つけ出すのは難しい。それは、第59回実行委員会も例外ではない。「学生の、学生による、学生のための会議」と言われるJASCだが、その開催は多くの公的機関、企業、一般市民の方々の善意に支えられている。72名もの学生のための1ヵ月に及ぶプログラムは社会の支援なしでは到底成り立たないものだが、はたしてその支援に見合うだけの社会的意義がJASCにあるのか。委員会発足当初は、実行委員長の私でさえも迷いがあった。

しかし、「時代の変化とともに、相対的にJASCの意義が低下してきたのか」という問いは、会議の本質に真剣に向き合うことからの逃避であることに気付かされた。相互理解の難しさは、1934年も現在も変わらない。日米関係は良好とされる現在であっても、草の根レベルで本当にお互いを信頼できる関係ではない。

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という設立当初の理念。世界大戦が迫りつつある中、第1回会議参加者はJASCを通して単に日米関係の安定に寄与しようとしたのではない。日米間の平和の先にある世界の平和。それこそが彼らが得ようとしていたものであり、70年以上のときを超えて尚JASCに脈々と受け継がれる基本精神である。その点で、JASCの理念は2007年現在でも達成されていない。

国際交流を通した「相互理解」、「世界平和」。そんな抽象的な理念を掲げる団体は数多くある。しかし、特定の利益や立場に拘束される大人にそれが可能なのか。また、学生の場合はしばしば企画、運営力に限界がある。

宮沢喜一氏は回顧録で、JASCを通して「一生の思い出、

一生の仲間」を得ることができたと振り返る。私も、そして他の実行委員全員も、第58回会議参加者としてその感想に強く共感し、確信を持って言うことができる。「参加者同士の「絆」がJASCの一番の財産である」、と。「絆」などJASCに参加するまで恥ずかしくて使ったことがない言葉だが、それが自然に口に出るようになったのも、JASCの力なのかもしれない。真の相互理解、国際交流の場、それがJASCである。

第58回会議に多くのものをもらった私たち第59回実行委員会、次の会議を通じて何を与えられるか。それを考えたところ、以下のような結論にたどり着いた。1ヵ月にわたる共同生活を通し、日米両国の学生は特定の利益に拘束されない率直な議論を重ね、個人間の絆を深め、異文化間の相互理解に向けて心を開いていくことにより、日米間、個人レベルでの「グローバルパートナーシップ」を探究していく。そして、学生としての可能性を探究すると共に、「会議」という活動を通してその成果を広く社会に還元する。参加者内の相互理解、会議の成果の社会発信の二つを目標に掲げ、第59回日米学生会議は“Advocating Japan-America Participation in Global Change” 「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」というテーマの下で、東京、秋田、広島、京都で開催された。

第59回実行委員会は、会議の質向上のため、学生だけによる企画、運営という従来の体制をあえて踏襲せず、積極的に公的機関、企業、一般市民の協力を得て、準備を進めてきた。このように、多くの方々のご協力を得ることで、分科会、アカデミックなフォーラム、実際に現場を訪れるフィールドトリップ、ホームステイ、文化体験といった全ての活動が有機的に結びつき、参加者の相互理解、信頼醸成を深めていった。そして、現在の日米、そして世界にまたがって存在する諸問題に対する学生の立場からの考察を広く社会に発信し、同年代の学生に国際交流の最前線に立つ我々の活動を知ってもらい、刺激を与えられればとの思いから各開催地で行った一般公開のフォーラムも、地元高校生、大学生を中心に多くの方々にご来場頂き、無事成功を収めることができた。参加者同士が真のグローバルパートナーとなり、次代を切り開いていく。会議の成果を広く社会発信していく過程で、実行委員会が総合テーマに込めた理念は実現されたと感じている。

最後になりましたが、第59回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜りました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、JASC Incの皆様、そして温かく現役の活動を支えて下さった会議OB・OGの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力を頂いた全ての皆様がこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

アメリカ側実行委員長挨拶

Morgan Swartz

Chairperson, American Executive Committee

59th Japan-America Student Conference

September 19, 2007

Being a member of the Executive Committee for the 59th Japan-America Student Conference was one of the most difficult yet rewarding experiences of my life. As I reflect upon the conference, I can see how the hard work and dedication of myself and the rest of the Executive Committee came to life with the delegates. I watched as forums that had only been in my mind before July suddenly became real and meaningful events where the conference participants learned about the world and their places in it. Friendships grew over our month together in Japan, and some of them were challenged when different ideas and perspectives clashed during discussions in roundtables or over dinner in special topics. However, because of those clashes and arguments, delegates learned more about the difficulty of inter-cultural communication and the importance of moderation and mutual understanding.

Through business visits, dinner receptions, panel discussions, and meetings with conference alumni, delegates learned more about the Japan-U.S. relationship and the many different roles that need to be filled in order for the relationship to remain strong. We made professional connections that will help us enter the working world and give us a better idea of how to achieve our goals and ambitions. Through our presentations, we made impacts upon each other and those who came to see us, influencing their opinions and perceptions of the world. These influences and connections ensure the future of JASC, and that its legacy and

impact on the future of the relationship between the United States and Japan will continue.

None of this could have been possible without substantial support from the community of people interested in the connection between our two countries. So I would like to offer my most sincere thanks to all those people and companies that dedicated some of their time and money to the success of this conference. They gave the delegates opportunities to visit their workplaces and learn about the different aspects and responsibilities of being involved in international relations. Many alumni took time to attend our forums and receptions where they met the new delegates and offered them valuable connections and resources. Without all of this help, the Executive Committee would not have been able to put together a conference that lives up to JASC's tradition. Because of their participation, JASC will continue for another year and reach out to aspiring students who wish to become mature, internationally-minded individuals who are active contributors to global society.

I could not have asked for a better 59th JASC, and my thanks again to all the delegates and supporters who worked together to make this summer so memorable.

Sincerely,

Morgan Swartz

内閣総理大臣からのメッセージ

第59回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議は、1934年の開始以来、今日に至るまで70年以上に渡り、日米の学生たちの企画・運営により活動を継続し、両国の学生間の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきました。ワシントンの日米学生会議事務局には、戦後の日米関係が飛躍的に発展する立役者の一人となり、先日惜しくも亡くなられた宮澤喜一元総理が学生時代のワイシャツ姿のスナップ写真が今も残っていると聞いています。これほど長く、戦争と平和の時代を乗り越えて続いてきた学生会議は世界に類を見ません。

日米両国は、自由、民主主義、基本的人権、法の支配、市場経済という普遍的価値を共有し、強力な同盟関係を築いています。本年4月、私はキャンプ・デービッドでブッシュ大統領と会談し、「かけがえのない日米同盟」を確認しました。今後、日米両国は、この同盟関係を一層強化していくとともに、エネルギー安全保障や気候変動等の分野を含む幅広い国際的な課題に共同で取り組んでいきます。

本年の日米学生会議のテーマ「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～Advocating Japan-America Participation in Global Change」が示すとおり、日米両国は、世界が直面する地球規模の問題の解決のため、ますます緊密に連携、協力していかなければなりません。そのような日米両国の未来を担うのは若者たちであります。その意味で、この日米学生会議を通じて、国際社会において果たすべき役割や明るい未来に向けた施策について多くの提言がなされることを期待しております。

この会議が実り多いものとなり、皆さんが末長い友情を育まれる機会となることを祈念します。

内閣総理大臣 安倍 晋三

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協議会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、下記の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回（1936年）早稲田大学。第4回（1937年）スタンフォード大学。第5回（1938年）慶應義塾大学。第6回（1939年）南カリフォルニア大学。第7回（1940年）津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国からの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初め

て米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「二国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。時は折しも55年体制の成立を目前に控えた情勢にあり、3月に日米M S A協定が調印された1954年でもあった。また、1955年にはアジア・アフリカ会議が開催されている。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。結果、第1回会議当時の参加者が、半数以上の理事を務めていた国際教育振興会が日本側主催者としての責任をとることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、

序章 日米学生会議概要

米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。

1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後、日米学生会議は財団法人国際教育振興会とJASC, Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると云えよう。

過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣 宮澤 喜一氏

1939、1940年 日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官 ヘンリー・A・キッシンジャー氏

1951年 日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese

artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

本文中の略語について

JASC (ジャスク) : 日米学生会議 (Japan-America Student Conference) の略。

JASCer (ジャスカー) : 日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。

JASC, Inc : アメリカ側主催団体である Japan-America Student Conference, Inc の略。

EC : 実行委員会、または実行委員 Executive Committee の略。

AEC : アメリカ側実行委員会 American Executive Committee の略。

JEC : 日本側実行委員会 Japanese Executive Committee の略。

デリ、**デリゲート** : 日米学生会議参加者、delegation。

ジャパデリ : 日本側参加者。

アメデリ : アメリカ側参加者。

アルムナイ : 日米学生会議の過去の参加者。

サイト : 本会議開催地の意味。東京サイト等。

RT : Round Table の略。参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。

リフレクション : 会議中、参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

第 1 章

第59回 日米学生会議概要

第59回日米学生会議テーマ・概要	8
参加者一覧 日本側	10
アメリカ側	11
メディアへの掲載	12

“Advocating Japan-America Participation in Global Change”

太平洋から世界へ ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮していた4人の日本人学生が太平洋を渡り、1934年日本初の国際学生交流プログラムである日米学生会議を創設した。以後、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ数々の困難を乗り越えながら、学生同士の率直な対話が相互理解を深め、平和の実現に貢献するという創設者の信念が継承され今日に至る。日米学生会議は創設時より学生独自による会議の企画、運営が行われ、毎年夏日米交互で開かれる約1ヵ月の会議は、日米の学生による相互理解と友情を醸成する場であり続けた。第59回日米学生会議は「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」というテーマの下で、東京、秋田、広島、京都で開催された。

グローバル化の進展により、日米両国には環境、テロ、貧困、人権、移民などの世界規模の課題に対処するため、二国間の枠組みを超えた協力関係を築くことが求められる。その主体は決して政府に限定されず、企業、NGO、個人などを含めた多様なものになる。太平洋の平和が続き、日米関係が成熟しつつあると指摘される今、会議設立当初の理念に回帰し、地球規模の問題に対応できる協力関係、すなわち「グローバルパートナーシップ」のあり方を探究していく。

分科会活動、アカデミックなフォーラム、実際に現場を訪れるフィールドトリップ。本会議中、1ヵ月にわたる共同生活を通し、日米両国の学生が特定の利益に拘束されない率直な議論を重ねる。時には互いの価値観を衝突させ、受容しながら、自己を相対化することができ、個人間の絆を深め、異文化間の相互理解に向けて心を開いていく。第59回日米学生会議によって育まれた豊かな人間関係は、必ずや日米両国の国境を超えたパートナーシップを実現すると同時に、太平洋の、そして世界の平和と安定をもたらす創造的な次代を切り拓く礎たり得ることだろう。

事業概要

【主催】

財団法人 国際教育振興会

【開催地】

東京、秋田、広島、京都

【企画・運営】

第59回日米学生会議実行委員会

【参加者】

日本側36名（実行委員8名を含む）

アメリカ側36名（実行委員8名を含む）

【後援】

外務省、文部科学省、米国大使館、財団法人 国際
ビジネスコミュニケーション協会、社団法人 日米
協会、日米文化センター

本会議概要

第58回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。参加者が決定した後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講

【本会議開催期間】

2007年7月26日（木）～2007年8月20日（月）

演会や勉強会、合宿などの事前活動を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、各開催地で開かれるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第59回会議のテーマである「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論にとどまらず、ホームステイやフォーラムなどにおいて積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第59回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

【分科会】

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方からなる参加者が、本会議期間を通じて議論を重ねる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪れるなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第59回会議における分科会は以下の通りである。

- ・ 開発：貧困撲滅への新たなアプローチ
Innovative Approaches to International Development
- ・ メディア：グローバル社会の影響力
Media Influence on Global Society
- ・ 暴力と平和：武力行使に対する価値観の再考
Pacifism and Belligerence: Examining Different Perspectives on the Use of Force
- ・ 教育：次代を担う市民の育成

Creating a Global Citizen: Education Focused on International Concerns

- ・ ナショナリズム：国への思いと排外主義
Nationalism: Patriotism or Xenophobia?
- ・ アイデンティティの社会学
Opposed Identities: Ideology, Ethnicity, and Inequality in Conflict
- ・ 文化：グローバリゼーションの渦中で
Eastern and Western Popular Art: Who is Imitating Whom?

【フィールドトリップ】

分科会の議題や各開催地に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGOおよび研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

【スペシャルピック】

議題がすでに固定された分科会と異なり、参加者が個々の興味に沿った議論を自由に設定し、異なる視点からの議論を行なう。より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

【リフレクション】

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

【ファイナルフォーラム】

会議の最終開催地、京都で行われる。本会議における分科会の発表など、第59回日米学生会議の成果を提示していく。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会に発信することを目標とする。

第59回日米学生会議日本側参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	分科会
川口耕一朗*	東京大学	法学部	3年	
菅家万里江**	慶應義塾大学	文学部人文社会科学	3年	Global Citizen
杉山亮太	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	Pacifism & Belligerence
高井竜輔	東京大学	文学部フランス文学科	4年	Eastern & Western Art
廣瀬裕子	慶應義塾大学	経済学部	3年	International Development
松田浩道	東京大学	法学部	3年	Nationalism
三窪英里	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	Opposed Identities
安田雅治	千葉大学	文学部行動科学科	4年	Media Influence

*は実行委員長、**は副実行委員長を表す。

日本側参加者

伊関之雄	京都大学	経済学部	2年	International Development
上田 來	早稲田大学	政治経済学部政治学科	4年	Opposed Identities
上野良輔	海上保安大学校	航海科	3年	Pacifism & Belligerence
呉 宣咏	早稲田大学	国際教養学部	3年	Eastern & Western Art
角田亜沙子	一橋大学	社会学部	2年	Pacifism & Belligerence
加納康宗	東京大学	教養学部文科二類	2年	Nationalism
菊池なつみ	東京大学	教育学部	3年	Global Citizen
金 大鐘	早稲田大学	人間科学部人間情報科学科	4年	Media Influence
櫻 静香	一橋大学	商学部	3年	Opposed Identities
佐藤逸美	早稲田大学	国際教養学部	4年	Media Influence
篠原由香里	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	Eastern & Western Art
高野恭平	岐阜大学	医学部医学科	4年	Pacifism & Belligerence
竹内菜緒	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	Media Influence
武田尚樹	慶應義塾大学	経済学部	2年	Global Citizen
土岐吉史	立命館大学大学院	国際関係研究科	2年	Media Influence
平井麻祐子	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	2年	Opposed Identities
廣田隆介	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	Opposed Identities
古屋佑樹	東京大学	法学部	4年	International Development
堀 沙織	東京大学	文学部哲学科	3年	Eastern & Western Art
本郷亜紀	立命館大学	法学部国際比較法専攻	2年	Global Citizen
間嶋絵梨	金沢医科大学	医学部医学科	4年	Eastern & Western Art
間橋大地	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	3年	International Development
望月進司	東京大学	教養学部文科一類	2年	Nationalism
李 凌叡	東京大学	法学部	3年	Nationalism
山本詩乃	福井大学	教育地域科学部地域社会過程	4年	Global Citizen
吉川真由	京都大学	農学部食品生物科学科	3年	International Development
渡辺恭子	広島市立大学	国際学部国際学科	3年	Pacifism & Belligerence

Global Citizen=教育:次代を担う市民の育成、 Eastern & Western Art=文化:グローバリゼーションの渦中で、 International Development=開発:貧困撲滅への新たなアプローチ、 Nationalism=ナショナリズム:国への思いと排外主義、 Media Influence=メディア:グローバル社会の影響力、 Opposed Identities=アイデンティティーの社会学、 Pacifism & Belligerence=暴力と平和:武力行使に対する価値観の再考

第59回日米学生会議アメリカ側参加者名簿

アメリカ側実行委員	大学	学部・専攻	学年	分科会
Kendall Jackson	Oklahoma University	German	Masters	Global Citizen
Justin Long	Cornell University	China-Asia Pacific Studies	Junior	Opposed Identities
Alissa Marque	UC Berkeley	Pol. Science/Japanese	Senior	International Development
Brian Miller	Sonoma State University	Int'l Business Management	Senior	Media Influence
Hiroyuki Miyake**	Macalester College	Economics/Mathematics	Sophomore	Nationalism
Andrew Ruffin	Duke University	Public Policy/Japanese	Sophomore	Pacifism & Belligerence
Casey Samulski	Sarah Lawrence College	Writing	Senior	Eastern & Western Art
Morgan Swartz*	Kalamazoo College	International Studies	Post Grad.	

*は実行委員長、**は副実行委員長を表す。

アメリカ側参加者

Bryan Beaudoin	Cornell University	College Scholar	Junior	International Development
Brad Bower	Kalamazoo College	Economics/Business	Sophomore	Eastern & Western Art
Maureen Campbell	Furman University	History/Asian Studies	Junior	Opposed Identities
Susannah Davidson	UC Berkeley	Japanese	Freshman	Media Influence
Lindsey DeWitt	Univ. of Washington	Comparative Religions	Masters	Global Citizen
Jasmina Dizdarevic	Barnard College	Human Rights/East Asian Studies	Freshman	Nationalism
Jennifer Eusebio	Univ. of Michigan	Creative Writing & Literature	Senior	Global Citizen
Jessica Hutchins	Fashion Institute of Tech.	Fashion Merchandising	Sophomore	Media Influence
Gurpreet Kalra	Univ. of Pennsylvania	Political Science/English	Junior	International Development
Mary Lancaster	New College of Florida	Literature	Junior	International Development
Jessica Lee	Harvard University	East Asian Studies	Masters	Pacifism & Belligerence
Tsz "Jess" Kiu Liu	UC Berkeley	Mass Comm./Political Science	Senior	Media Influence
Bethany Marsh	Univ. of Washington	Japan Studies	Masters	Media Influence
Rachel Mason	Kalamazoo College	Economics/Business	Freshman	Nationalism
Alison Miller	University of Kansas	Art History	Masters	Eastern & Western Art
Mia Monnier	Middlebury College	Undeclared	Freshman	Global Citizen
Aya Nakanishi	Univ. of Pennsylvania	Psychology/Hispanic Studies	Sophomore	Eastern & Western Art
James Pillar	University of Kansas	Japanese	Senior	Pacifism & Belligerence
Jazmine Rodriguez	Tulane University	Int'l Development/Anthro.	Sophomore	International Development
Josh Schlachet	Cornell University	Asian Studies/History	Junior	Pacifism & Belligerence
Samantha Scully	Bowdoin College	Asian Studies/History	Sophomore	Opposed Identities
Hidemi Tanaka	Macalester College	Political Science	Sophomore	Global Citizen
Marquita Taylor	North Central College	Print Journalism	Junior	Eastern & Western Art
Josh Turner	University of Hawaii	Japanese	Junior	Pacifism & Belligerence
Ryan Urie	University of Idaho	Philosophy	Senior	Nationalism
Danielle Vokal	Univ. of Wisconsin	Ed Leadership/Policy Analysis	Ph.D.	Opposed Identities
Nancy Xu Yang	Harvard University	East Asian Studies	Sophomore	Nationalism
Sophia Yang	Monterey Inst. of Int'l Studies	International Policy Studies	Masters	Opposed Identities

メディアの中の第59回日米学生会議

第59回日米学生会議実行委員会は、より多くの方に日米学生会議の存在を知っていただくために、様々なメディアを通じた広報活動を行ってきた。本会議中にも取材を受け、記事として取り上げていただいた活動やイベントもあった。以下に掲載するのはその主なものである。(記事は3章にも掲載。)

- ・『京都新聞』2007年1月24日「共に暮らし、共に語ろう」
- ・『秋田魁新報』2007年2月4日「第59回日米学生会議 本県開催へ準備進む」
- ・『秋田魁新報』2007年2月7日「本県で日米学生会議」
- ・『秋田魁新報』2007年2月9日「日米学生会議 秋田開催に」川口耕一郎
- ・『毎日新聞』2007年2月9日「日米学生会議講演会」
- ・『中国新聞』2007年2月15日「広島など4都市で今夏日米学生会議」
- ・『岩手日報』2007年2月20日「日米学生会議参加者募集」
- ・『山陽新聞』2007年2月21日「日米学生会議開催へ」
- ・『中国新聞』2007年5月24日「日米広島学生会議 被爆地の声出そう」
- ・『秋田魁新報』2007年7月19日「国際理解を深めよう」
- ・『育英ニュース』2007年7月20日「国のアイデンティティを超えた繋がり」
- ・『週刊アキタ』2007年7月27日「秋田で初の日米学生会議」
- ・『どまん中』AKT秋田テレビ 2007年8月3日放送「日米学生会議秋田フォーラム」
- ・『北羽新報』2007年8月4日「白神通じて環境学ぶ」
- ・『秋田魁新報』2007年8月4日「秋田の伝統を体感」
- ・『北羽新報』2007年8月5日「雨の白神山地も格別」
- ・『秋田魁新報』2007年8月5日「地域との交流深まる」
- ・『NEWSリアルタイムあきた』ABS秋田放送2007年8月8日放送「日米学生会議フォーラム」
- ・『朝日新聞』2007年8月9日「秋田訪問の米学生」
- ・『読売新聞』2007年8月9日「日米の相互理解深める」
- ・『秋田魁新報』2007年8月9日「日米学生会議フォ

ーラム」

- ・『中国新聞』2007年8月11日「広島で日米学生会議開幕」
- ・NHK各地のニュース 日本放送協会 2007年8月13日放送「日米広島学生会議」
- ・『中国新聞』2007年8月14日「広島で日米学生会議シンポ」
- ・『イデチャンネル』AKT秋田テレビ 2007年8月17日放送「第59回日米学生会議」
- ・『京都新聞』2007年8月18日「京でフォーラム、両国学生が意見発表」
- ・『京都新聞』2007年8月19日「日米学生会議 伏見で交流会」

他、大学新聞や地域広報誌など

◆日米学生会議参加者募集
7月26日から8月20日まで、東京都、秋田県など全国4カ所で開催。国際教育振興会主催。「太平洋から世界へグローバルパートナーシップの探究と次代の創造」をテーマに、日米両国の学生が共同生活を通して議論を重ねる。募集は28人。書類と面接、教養試験で選考する。希望者は日米学生会議のホームページ(<http://www.jasc1.apan.com/>)から申し込み。2月28日締め切り。問い合わせは事務局(03・30059056)へ。

『岩手日報』2月20日

日米学生会議
参加者を募集

国際教育振興会

財団法人・国際教育振興会が、「太平洋から世界へ」グローバルパートナーシップの探求と次代の創造」をテーマに開く第五十九回日米学生会議の日本側参加者二十八人を募集している。

七月二十六日から八月二十日までの一カ月間、東京、秋田、広島、京都を回って共同生活をしながら、米国の学生と貧困や教育、テロ、ナショナリズムなどについて討論。ホームステイやフォーラムなど地域住民との交流も図る。

大学生・大学院生などが対象で、申し込み・問い合わせは同会議のホームページ (<http://www.jasc-japan.com>)。締め切りは今月二十八日。四月上旬に参加者を決定、春合宿(五月三〜五日)や事前活動、直前合宿(七月二十五、二十六日)などがある。同会議は一九三四年の創設で、宮沢喜一元首相も参加した。日米で交互に開かれ、両国の学生が主体的に企画・運営にあっている。

【山陽新聞】 2月24日

広島など4都市で
今夏日米学生会議
参加者を募集

国際教育振興会

国際教育振興会(東京都)は、七月二十六日から八月二十日にかけて広島、東京、京都、秋田の四都市で開く「日米学生会議」の参加者を募集している。

暴力と平和、開発、ナショナルリズムなどをテーマに、日米の学生が寝食を共にしながら意見交換する。広島市では八月中旬に核兵器と平和と題したシンポジウムを開く。五、七月に事前合宿もある。参加費は十二万円。

面接や英語の選考試験を経て、四月上旬に参加者(二十八人)を決める。対象は大学、短大、高等専門学校などの学生で、留学生も含む。締め切りは二月二十八日。日米学生会議のホームページを通じて申し込み。事務局 ☎ 03(33659)0563。

【中国新聞】 2月15日

「京都新聞」 1月25日

共に暮らし、共に語ろう

日本と米国の学生が一月の間、共同生活を送りながらさまざまな問題について議論する「日米学生会議」が今夏、京都市など全国四会場で開催される。同会議実行委員会は二月一日から参加者を募集する。

毎年、日米交互で開催している。今年は「太平洋から世界へ」グローバルパートナーシップの探求と次代の創造」をテーマに開く。

日米学生会議
参加者を募集

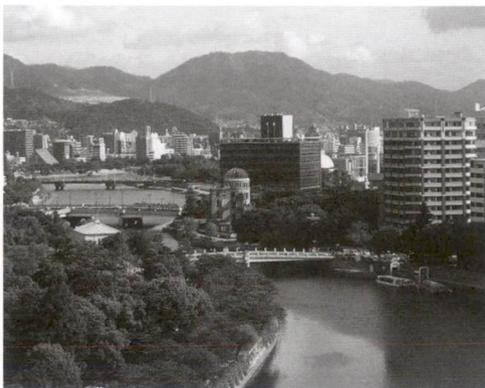
と会議総括のフォーラムも予定している。
全日程と準備活動に参加できる学生が対象。二月二十八日までインターネット <http://www.jasc-japan.com> で受け付ける。定員が定まる。最終地の京都市は八月十三日から一週間の日程で、会費の参加費が必要。問い合わせは同会議事務局 ☎ 03(33659)0563。

今夏 京など4会場で開催

第1章 第59回日米学生会議概要



『JASC前 上見れば 混乱の渦巻き JASC後 上見れば すっきり晴れ渡る空』伊関之雄



第2章

事前活動

事前活動とは.....	16
第2回日米ユースフォーラム	16
アメリカ大使館講演会	16
ビジネス講演会	17
クラウチ氏勉強会	18
春合宿	19
英語ディベートワークショップ	23
防衛大学校訪問	24

事前活動とは

第59回日米学生会議では、7月に始まる本会議に向けた準備として事前活動を行った。事前活動は、会議参加者が決定する前からの講演会に始まり、顔合わせの合宿、現在進行形の国際社会のトピックスについてのレクチャー、コミュニケーションスキルの講座など、本会議をより充実させ、円滑に進行するための諸活動を指す。本章では、これらの事前活動の様子を紹介する。

第2回日米ユースフォーラム

日時：2006年10月30日(月)

共催：JASCジャパン、社団法人 日米協会、日米教育委員会

後援：東芝国際交流財団

テーマ：“Reconciliation in a troubled world: Perspectives from Japanese and American Youth”

パネリスト：Hana Heineken (第55回日米学生会議米国側実行委員長)

川口耕一朗 (第59回日米学生会議日本側実行委員長)

唐沢由佳 (第58回日米学生会議日本側実行委員)

Lasantha Lucky Gunasekara (第57回日米学生会議米国側実行委員)

モデレータ：David H. Satterwhite (日米教育委員会事務局長)

日本外国特派員協会にて歴史認識をテーマに、120人以上の来場者を迎え、第2回日米ユースフォーラムが開催された。4人のパネリストは日本、アメリカという枠組みを超えた多様なバックグラウンドを下に、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点から発言した。

東京裁判の正当性、広島原爆投下の是非、日中韓に現存する歴史認識の差異、日本における外国人差別の歴史についての発表が各パネリストからあり、その後の会場を交えての質疑応答の際にはパネリス

トと来場者との間の活発な意見交換が行われた。イスラエル・パレスチナ問題などを例に、「和解とはお互いの差異を許容することである」という指摘があり、その具体策は次代を担う若者が考えていく必要があるとの提言もなされた。

当日は高円宮妃殿下にもご臨席を賜り、英語スピーチをいただき、共催者団体の関係者の方々からお言葉をいただいた。

懇親会では、声楽家のメニッシュ純子さんによるJASCソングのコンサートがあり、学生と来賓の方々との懇談が行われた。

アメリカ大使館講演会

「日米関係の軌跡と日米学生会議の挑戦」

日時：2月14日(水)

主催：第59回日米学生会議実行委員会

後援：米国大使館

テーマ：「日米関係の軌跡と日米学生会議の挑戦」

パネリスト：阿川尚之 (慶應義塾大学総合政策学部長、元在米国日本大使館公使)

David H. Satterwhite (日米教育委員会事務局長)

乗竹亮治 (第55回日米学生会議日本側実行委員長)

Hana Heineken (第55回日米学生会議米国側実行委員長)

モデレータ：川口耕一朗 (第59回日米学生会議日本側実行委員長)

講演内容：米国大使館の後援の下、東京アメリカンセンターにて、第59回日米学生会議講演会を開催した。第1部では、「日米関係と軌跡」と題して、日米間の人的交流に携わってきた、阿川氏、Satterwhite氏から、それぞれ日本側、米国側から見た二国間交流の歴史、意義についてお話いただいた。第2部の「日米学生会議の挑戦」では、第55回日米学生会議日本側、米国側両実行委員長に、会議の意義や55回当時のお話をしていただき、その後の質疑応答では、来場者との活発な議論が行われた。

【実行委員後記】

本講演会は、第59回実行委員会が主催する初めての行事であったこともあり、試行錯誤を重ねてようやく実現した。応募に向けた、59回会議の説明会を目的としていたこともあり、日米両国の有識者、また会議OB・OGからそれぞれ、日米関係における会議の意義を伝えていければと考えていた。

阿川、Satterwhite両氏からは、日米関係150年における人物交流の歴史を踏まえた上で、現在の会議の意義についてお話いただいた。その後、乗竹、Heineken第55回日米学生会議日本側、米国側両実行委員長からは、59回会議の企画、運営における困難、その過程において考えた会議の意義についての考察を伺った。

1934年の会議設立当初の緊迫した状況とは異なり、良好な日米関係の下で、72名の学生が1ヵ月交流を深める意義はあるのか。会議の根幹とも言える問いに、私自身答えを見出せずにいた。しかし、両委員長の考察は示唆に富み、経験に裏付けされたものであり、自問自答を繰り返していた私に光を与えてくれた。「人生の縮図と呼ぶべきJASC」—乗竹氏のそんな言葉から、JASCの組織としての成長の必要性を感じた。
(川口耕一郎)



意見を交わすパネリストたち

ビジネス講演会・国際コミュニケーションワークショップ

【企画概要】

日時：2月19日(月)

主催：第59回日米学生会議実行委員会

協力：大和証券、NPO学習学協会

講演会：(株)大和証券グループ本社 CSR本社

金田晃一氏 「CSR時代の企業とNGOのパートナーシップ」

ワークショップ：NPO学習学協会代表理事 本間正人氏 「国際コミュニケーションワークショップ」

講演会内容：金田晃一氏講演会「CSR時代の企業とNGOのパートナーシップ」では、今発展を遂げているCSRの現状と可能性について、またアクター間のパートナーシップはどのように築けているかについて、金田氏の豊富なキャリア経験を通し、分かりやすく語っていただいた。

本間正人氏は、ビジネス・ラーニングとコーチングのパイオニア、NHK教育TV「実践ビジネス英会話」や企業研修講師など多分野で活躍中である。その本間氏による「国際コミュニケーションワークショップ」では、国際人に必要とされるコミュニケーション力を広げることを目指した。また、これに併せ、第59回会議の説明会、第58回会議のビデオ上映をそれぞれ行った。

【実行委員後記】

本日の前半の講師金田晃一先生は、第58回会議の報告会でも講評をいただいた方だ。流暢で分かりやすい講演によって今まで知らなかった企業の様々な努力に関心を持つようになった。特に、今回も強調なさっていた"Trust-Building PDCA Model"は我々実行委員も常に銘記しなければならない重要なものであろう。日米学生会議の簡単な説明会を挟み、後半はNPO学習学協会代表理事の本間正人先生に活発な参加型ワークショップを行っていただいた。まずは、二人組の性格あてっこゲーム。初対面の人とわずか10分もたたないうちに打ち解けられる。その後は4、5人の組に分かれ、国際コミュニケーションにとって大切なものはなにかについてBrain Stormingとグループごとの発表。本間先生のユーモアいっぱい、知恵いっぱいの楽しいコメントを挟みつつ、国際コミュニケーションの極意を参加者がと

第2章 事前活動

もに考える、濃密なワークショップだった。

(松田浩道)



金田氏による講演



本間先生によるワークショップ

クラウチ氏勉強会 ～米国の安全保障政策～

【企画概要】

日時：2月27日(火)

主催：米国大使館

テーマ：「米国の安全保障政策」

講師：J.D Crouch 国家安全保障問題担当大統領次席補佐官

講師履歴：南カリフォルニア大学博士課程終了後、米国の安全保障政策に従事。国防省次官補、ルーマニア大使などを歴任後、2005年に安全保障分野の

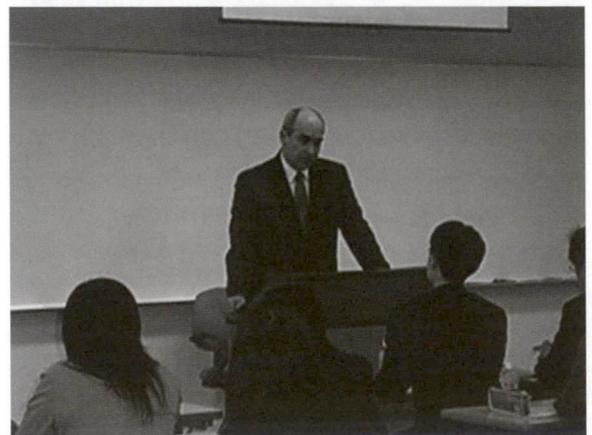
No.2にあたる、大統領次席補佐官に就任した。

勉強会内容：来日中のJ.D Crouch 米国国家安全保障問題担当大統領次席補佐官による勉強会が早稲田大学にて開催された。テーマは米国の安全保障政策から、日米関係、北朝鮮、イランの核問題、6者協議、イラク戦争など多分野に渡り、それぞれのテーマにつき、米国政府の公式見解、Crouch氏の個人的見解を伺うことができた。

【実行委員後記】

アメリカ大使館の協力のもと、来日したクラウチ米国大統領次席補佐官(国家安全保障問題担当)を迎えた勉強会が早稲田大学の教室を借りて行われた。日本の大学生と率直な意見交換を行ってみたいという次席補佐官の意向を反映し、参加者からは「将来的な核兵器の廃絶の可能性」や「今後のイラク情勢と米国の対応について」など、昨今の国際問題に対するかなり突っ込んだ意見が出された。会場には学生の他、日本の外務省職員の姿も見られ、通常ではあうことの出来ないアメリカ政府高官と直接対話できたことに参加者は一様に興奮した様子だった。

(高井竜輔)



学生と対話するクラウチ氏

春合宿

5月3日～5月5日にかけて、代々木のオリンピックセンターにて第59回日米学生会議参加者が初めて一堂に会する春合宿が開催された。2泊3日という短い期間の中で、自己紹介とアイスブレイキング、大先輩による日米学生会議の歴史と理念に関する講演、講師の先生とエルマイラ大学の学生を招いた英語ディスカッションの練習、大勢のアルムナイを招いてのレセプション、分科会活動と全体討論会など、盛りだくさんの内容の合宿であった。以下、参加者の感想文を中心に活動を振り返る。

〇〇B講演会



講演される岩崎洋一郎さんと中瀬正一さん

合宿が開始した初日に、大先輩に当たる岩崎洋一郎さん、中瀬正一さんを招いての講演会を行った。戦後間もなくの会議の経験をもとに、新しく日米学生会議の一員となったメンバーに対して激励の言葉を頂いた。

【参加者後記】

拍子抜けした。しかし同時に尊敬できることもあった。講演会後の私を感じた率直な感想である。日米学生会議には非常に長い歴史があることは有名である。そのため、お二方からどんな「刺激」を得られるか、なぜ日米学生会議を発展させることができたのか、彼らの情熱や考えにまで肉薄できると考え

ていた。

実際に講演として聞けたのは、そのほんの一部でしかなかったため、少々残念だった。「講演会」という場で、多くのことを知ろうとした私の考えも甘かった。

しかし、私はお二人を心から尊敬できる場面に遭遇した。それは、お二人が私を含めた多くの学生の質問に対して、丁寧にお答えしていたことだ。当たり前のように思えるかもしれないが、簡単なことではない。若い学生から質問・意見を真摯に受け答えできるような「謙虚さ」は誰もが持てるものではない。私はお二方のそんな何気ない「優しさ」こそ、この日米学生会議の真髄ではないかと感じた。

(間橋大地)

〇English Communication Program

英語によるディスカッションを円滑にすすめるため、SFCの樋柴ひかる先生を招いてのワークショップを行った。積極的に英語でコミュニケーションをするコツを教えていただき、大変盛り上がった。また、エルマイラ大学の学生を招いて班ごとに英語ディスカッションと立食パーティーも経験し、本会議の雰囲気味わうことができた。



英語ワークショップの一幕

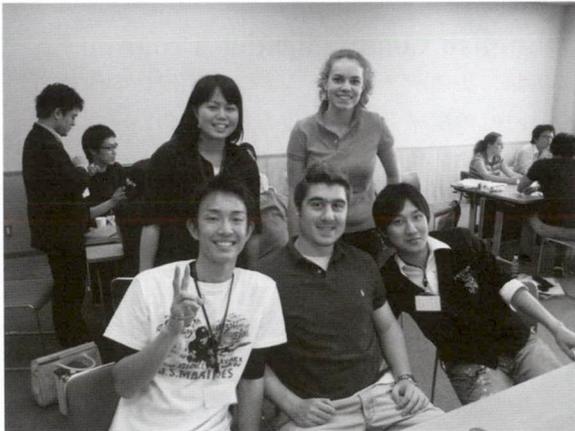
【参加者後記】

私は自分の英語に自信がなく、ワークショップ開始前は不安と緊張でいっぱいでした。しかし、ひとたび始めるとその不安は俄然やる気になりました

第2章 事前活動

た。人と人とのコミュニケーションにおいて、言葉それ自体が表す内容よりも、表情や姿勢によってより多くの情報が相手に伝えられる事実を理解し、これならすぐにでも自分にできると自信をもつことができたからです。言語はツールであるということを確認しました。ワークショップでは様々なゲームを通して意思疎通を学ぶ機会が多く設けられましたが、そのとき何よりも心地よかったのが、参加者全員が熱く、真剣にゲームに取り組み、その効果を最大限に得られたことでした。

アメリカ側参加者との合流、JASCを通して出会う人々とのコミュニケーションがうまくいくように、ここで学んだことを普段から意識し、本会議につなげたいと思います。(本郷亜紀)



エルマイラ大学の学生と

○分科会活動

全員が揃ったところで、分科会も本格的に始動した。それぞれが本会議に向けた方針や活動内容を熱心に話し合い、合宿の最後には全ての分科会が順番に発表し議論した。最後の質疑応答は大人数ながらECの期待をはるかに上回る熱気を見せた。以下に参加者2人の感想文を掲載する。

Nationalism RTは最高だった。“いかつい”メンツが集まったせいか、議論では全員が積極的に発言し、「双方向」そのものだった。基本方針は初日の夕食までにスッキリまとまり、2日目からは議論も発表も全て英語に切り替えた。各自の論文も方向性

やRTでの位置づけが明確になり、安心して取り組む環境が整った。お陰でメンバー全員の満足する結果となった。思えばこれだけ効率的に熱く議論出来たことも珍しい。ファイナルフォーラムでは「観客を徐々にしっかりと引き込む」ことを至上命題とし、そのための具体的な秘策を次々と練った。中味は・・・お楽しみに！

(加納康宗)

いまだ経験したことの無いほど、アカデミックな議論を私の細胞全てが求めていた。次々出る鋭い質問、トピックへの解釈や問題意識、意見をすり合わせて全体を纏め上げていく作業…どれをとっても分科会のメンバーが発言すればするほど、相乗効果で他の発言がより意味深いものとなるため、発言せずにはいられない。一心不乱に耳を傾け、そして考えを言葉にして紡ぐ。合宿会場へ向かう私の頭の中にあつた、自分が議論へ果たして貢献できるか、という疑問は1日目に消え去り、3日目には密な議論がメンバーの心の絆まで強くしてくれていた事に気がついた。今は本会議でのさらに熱い議論を夢にみている。

(平井麻祐子)

○参加者感想（春合宿全体）

2007年5月3日から5日まで、国立オリンピック記念青少年総合センターにて春合宿が開催された。この日、私はようやく待ちに待った第59回参加者に会うことができた。

初日はまず、この有意義な会議をサポートしてくださっている主催者側からの講演やJASCのOBの方々から由緒あるこの会議の歴史的背景を知ることができた。私も含めた参加者にとっては、当初とは少し違ったJASCの側面に触れることができた。もちろん、それだけでなく初日から自己紹介を通じて少しずつ参加者同士、またECとの意思疎通が少しずつ見えてきていた。さらに一体感が見えてきたのが“English Communication Program”であった。ここでは講師を招いた英語でのコミュニケーション能力の向上のためのアクティビティーや東京に語学

留学に来ていた十数名のアメリカの大学生を交えた分科会の議論を進める機会は非常に充実していた。その後は、JASCのOBの方々を交えたレセプションや飲み会も企画されて、改めてJASCが偉大な先輩方の人生におけるかけがえのない冒険であったことが感じられた。

このように初日・二日目はJASCの概要を知るうえで非常に重要な企画が盛りだくさんであった。さて、個人的にこの春合宿で刺激的で、ハートに火をつけた瞬間を紹介したい。それは全分科会がこの春合宿で話し合った内容に関して参加者・実行委員・3名のOBの方の前で発表する場であった。アメリカの高校を卒業した私にとって、現在在籍している大学でよく思うことがあまりにも議論が少ない授業・講義が多いことであった。しかし、今回の各分科会の発表の後に末永く続いた議論はまるで日本にいるようでいない変な空間にいるようであった。近年、「日本人にはコミュニケーション能力がない」とか「NOといえない日本人」と日本人のコミュニケーション能力に対して問題視されているが、春合宿での最後の発表はそのような危機感を緩和してくれるような気がした。

そして、忘れてはならないのが春合宿を企画した実行委員である。春合宿まで行ってきた選考・春合宿準備・本会議準備、それはとてつもなくハードで忍耐力のいる「任務」である。今年のECの一つのテーマは「笑顔でいること」のようであった。だが、今までの準備からの疲れとストレスの蓄積が、ようやく春合宿で参加者と出会えたことで、それら負の連鎖がすべてゼロに戻った瞬間であったように見える。それによって出たECのとてつもない「笑顔」が第59回参加者にとっては非常に刺激なものとなったと考える。

参加者のユニークさ、ECの努力と凄まじい忍耐力、この双方がアメリカ側とうまくコラボレートできたら、第59回JASCは何かすごいものを後世に残すのではと期待している。その日まで、約2ヵ月半…
(伊関之雄)

○参加者による一言コメント

・議論は驚くほどの進展と熱気を見せ、また食事や夜更かしではみんなの多様性を楽しめた。どうしてここまで一気に馴染めるのか。JASC万歳！GW明けたらhomesick start!!
(加納康宗)

・「合宿」という日常から切り離された「バーチャル」の中で、普段は言わないことが言え、しないことができました。そして良い出会いがありました！

(望月進司)

・人生でこんなにも濃密な3日間は、存在しなかった。たくさんの刺激を受けると同時に、このメンバーなら歴史に残る会議をつくれると直感した。(間橋大地)

・59回JASCは72人で作り上げるのではなくOB・OG協力して下さってる方々皆の夢。ありのままの私で萎縮せず、足りない知識は補ってもっと皆と話していこう！前向きになった。(間嶋絵梨)

・JASCの先輩方の歴史を背負い、36+36で自分たちの会議を作っていく為のビジョンと気力を養えた3日間。夏が今はひたすら待ち遠しい。

(平井麻祐子)

・各々が自身を高めようとする意識を持って臨んでおり、励まされた。また自分自身において今何が必要であるかというランク付けができ、大変有意義な合宿となった。(古屋佑樹)

・とても密度の濃い3日間だった。それはひとえにECの優れた統率力と、メンバー一人ひとりの意識の高さによるものだと思う。本会議に対する期待とやる気が上がりました！(上田 来)

・「Energyが溢れている。」私の春合宿の印象だ。きっとこれがJASCモードに入るといことなのだろう。私も乗り遅れないようにしなければ。

(角田亜紗子)

・ただ事じゃない！ただものじゃない！(笑) この集団の目のキラキラとエネルギーは半端ないです！でも心から嬉しい!!一杯勉強して本会議に臨みます！(山本詩乃)

・春合宿最終日、マジ眠かった…。本会議は長いし、もっと寝不足になるかと思うと不安だ…。でもJASCの可能性を感じることができたのは良かった。

(武田尚樹)

第2章 事前活動

・ECとして、多くの不安を抱えて迎えた合宿でしたが、参加者の予想以上のやる気と情熱にもうびっくり！きっと素敵な会議になると確信できました。

(松田浩道)

・春合宿、初めは緊張していたけど、一緒に時間を過ごすと共に打ち解けることができました。このメンバーなら本会議も絶対大丈夫!!

(土岐吉史)

・春合宿で素晴らしい人たちに会い、信じられないくらいのエネルギーをいただきました。世の中にはこんなに凄い人がいるのか、人はこんなにも色んなことができるのか、こういう発想もあるのか、と驚きの連続でした。これからこの素晴らしい仲間と一緒に過ごしていけることが楽しみです。これからぶつかり合うこともあるでしょうが、そうやってお互いをピカピカに磨き上げていけたらな、と思います。

(吉川真由)

・僕と彼女とJASC。君に出会ったこの瞬間、時間は動き出した。

(上野良輔)

・このメンバーで一生、時には熱くアカデミックな議論をし、また時にはバカ騒ぎをし、とにかくずっとこの場所に居たい、そう思わせてくれる空間でした。

(廣田隆介)

・JASCで本当に素敵なメンバーひとりひとりに出会えた事を感謝しています。春合宿を終えてモチベーションも高まり、“Life Changing Experience”にする為にも頑張ろうと思います。

(竹内菜緒)

・今は春合宿がJASCエピソードのほとんど。あっという間の3日間が、夏に向かうパワーになる。可能性を引き出す熱気の結集に感謝します。

(堀 沙織)

・この春合宿は本当に濃い3日間だった！とにかく色んなイベントが盛りだくさんで、自分がJASCerの一員であることの喜びを実感できた!

(金 大鐘)

・春合宿では仲間のレベルの高さを知り、良い刺激を受けました!また、こんな短期間にここまで親しくなれたことに本当に驚かせられました!

(櫻 静香)

・素敵な出会いと刺激的なプログラム。歴代Alumniの方々。不安、焦り、でもわくわく。そんな複雑な感情と共に過ごした濃い春合宿だった。

Cheers Jasc59!

(渡辺恭子)

・たった3日間という短い時間でしたが、参加者同士が見知らぬ人から「仲間」へのステップが確実に踏めた大変有意義な時間でした!

(本郷亜紀)

・やっと理解して言えるようになった「Life changing experience」という言葉がこれからは口癖になりそうな予感がした3日間でした。

(呉 宣咏)

・春合宿を通して、自分の現状をみつめることができた。そこで得られた課題をしっかりと把握し、夏につなげたい。

(高野恭平)

・ぎゅうぎゅう詰めスケジュールに、ぎゅうぎゅう詰め会議室。そんな物理的状態と共に、各人の心の距離も近くなったみたい。

(李 凌韻)

・春合宿は、これから、59回会議がはじまるのだという自分の実感も持ったのと同時に、そこは、日本側参加者36人の期待と熱気でうまった空間だった。

(安田雅治)

・初めて59回の全員に会うことができわくわくしました。分科会発表での質疑応答で鋭い意見がいくつも飛び交っていた光景が印象的です。

(篠原由香里)

・興味や関心分野の違う人達と討論する中で、新しい発見がたくさんありました。個性的なみんなと一緒に、一つの“JASC”を作り上げていくのが楽しみです。

(佐藤逸美)



レセプションに訪れたアルムナイとともに

英語ディベートワークショップ

日時：6月3日(日)

場所：ココデシカ

講師：井上敏之氏



ディベートに盛り上がる参加者たち

英語での議論に備え、論理立てて話す訓練の一環として日米学生会議OBの井上敏之氏による英語ディベートワークショップ開催された。参加者は、英語の口慣らし、短いスピーチ練習の後、作戦タイム(15分)⇒賛成派立論(2分)⇒反対派立論(2分)⇒反対派反論(2分)⇒賛成派反論(2分)⇒賛成派まとめ(2分)⇒反対派まとめ(2分)の流れで、3人1組でディベートを行った。本会議に備え、英語で話すための大変よい訓練となった。

【参加者後記】

JASCのOBでもある講師の井上敏之氏の英語ディベートワークショップは衝撃の幕開けだった。ホテルのフロントにあるようなベルが1回鳴ったと思ったら、井上氏を含め参加者は全員頭を英語に切り替えて講義が始まった。まず一対一でPREP(結論・理由・裏付け・結論)の方式で4分のスピーチをした。これを20人以上が1つの部屋でやるのだから、英語の嵐になったことは想像できるだろう。

本題のディベートとしては、3人グループを8つ作りそれぞれ対戦する形がとられた。「マックが世界にもっと広まるべきだ」や「日本は核兵器を所有

すべきだ」という様々な命題に対して賛成派・反対派に別れ、活気ある論議が行われた。ここではコンテツの重要性と人を惹きつけるプレゼンテーション能力の大切さを身をもって知った。いくら心を込めても中身のないスピーチだと聞いてもらえないし、良い主張でも観客に伝えられなければ意味を成さないのだ。本会議までの間にこれらの技を習得できればと願う。
(角田亜紗子)

(井上敏之氏のウェブサイトは、

<http://www.speech-debate.com>)

防衛大学校訪問

日時：6月22日（金）

防衛大学校訪問は、毎年行われている日米学生会議の正式な事前活動である。日米学生会議参加者にとって、普段なかなか接することのない防衛大学校生との交流は安全保障問題を考える上で非常に大きな刺激となる。

本年度の研修は、防衛学国防論教育室太田一等陸佐によるイラク人道復興支援に関する講義によって始まった。そして、防大生との学生食堂での会食、防大生の課業行進見学の後、国際関係学科岩田教授による核に関する講義を受けた。

その後、防衛大生と日米学生会議参加者による分科会ごとのディスカッションを行った。安全保障、憲法9条等様々なテーマについて活発に意見交換がなされ、終了後の懇親会会場でも白熱した議論が続いていた。

【参加者後記】

防衛大学校は、大学の施設や規模等を除けば、起床整列や巡検等の寮生活、敬礼や行進等の基本動作、上級生と下級生の関係、学生の話し方や物腰など、海上保安大学校と共通する部分が多く見受けられた。



防衛大学校生を交えた分科会の様子



歓迎レセプションで

今回の訪問の中で最も印象に残っている事は、分科会ごとに防大生を交えて行われたディスカッションである。私たちのグループは「日本の国防」というテーマで議論を行ったが、そこで「大学校生」と「一般大生」との「違い」が如実に現れていたことが興味深かった。大別すると、制服を着ている私や防大生側は、有事法制や集団的自衛権に対して前向きな立場をとっていたのに対し、一般大生側は正反対の立場をとっていた。この「違い」はどこから生まれるのか考えるべき点であるが、仮にそれが自衛隊や海上保安庁への理解不足や知識の欠如から生じているのであれば、対策を講ずる必要がある。なぜなら、我々の任務は国民の信頼と協力があって初めて遂行が可能となるからである。平和や安全に対する脅威が専門化・多様化・国際化している今日、日本の平和と安全を守るためには、消防、警察、海上保安庁、自衛隊等の活動だけでなく、国民一人ひとりの「高い意識」が極めて重要なのである。

この防大訪問を通して、テロ対策や不審船対策、大量破壊兵器拡散防止訓練といった広範な分野において、海上保安庁とより緊密な連携が求められる自衛隊の将来を担う防大生と交流できたことは、価値ある貴重な経験となった。（上野良輔）

第3章

本会議・サイト活動

東京	26
秋田	35
広島	48
京都	59

東京サイト

7月25日～8月2日

サイトコーディネーター

高井竜輔 三窪英里 Hiroyuki Miyake Brian Miller

東京サイトスケジュール

- 7月25日(水) 日本側参加者 直前合宿
- 7月26日(木) アメリカ側参加者来日
ジョイントオリエンテーション#1
- 7月27日(金) 開会式兼外務省主催レセプション
世界銀行環境マルチラテラルフォーラム (世界4カ国同時テレビ会議)
- 7月28日(土) ジョイントオリエンテーション#2
スキット上演
分科会活動
Amedele Led Project “Capture the flag”
- 7月29日(日) 分科会活動
リフレクション
- 7月30日(月) 分科会フィールドトリップ
アメリカ大使館主催レセプション
VISA International Asia Pacific Ltd. 訪問
スペシャルトピック
- 7月31日(火) アジアユースフォーラム
- 8月1日(水) 文化体験企画
東京都内観光
- 8月2日(木) 横須賀米海軍基地 訪問
横浜中華街 観光
- 8月3日(金) 秋田サイトへ出発

東京サイト理念

江戸開府から四百余年。1200万の人口を擁する巨大都市に成長した東京は日本の政治・経済的中枢であると同時に常に新しい文化の発信地であり続けてきた。米国を始めとする各国の企業、公館、国際機関が集中する世界有数の大都市である一方、浅草・上野に見られる情緒溢れる古き良き日本の一面をも残す。東洋と西洋、歴史と現在、そして未来。様々な人種と価値観が交錯するエネルギッシュなこ

の街で、第59回日米学生会議全体の理念であるグローバルパートナーシップの構築に向けた前進を図る。

東京サイトの目指すもの

サイトコーディネーターとして、東京サイトで達成したい目標は三つあった。

まず、政治・経済・文化、それぞれの分野で日本の「一流」に触れること。大使館訪問で政治に、企業訪問で経済に、伝統文化体験を通じて文化に触れる。フォーラムやフィールドトリップの機会を通じて、国際社会に山積するグローバルイシューと、その解決に向け自分たちに何ができるか考える。分科会活動の充実を図るとともに、本会議全体のテーマである次代の創造へ向けた足がかりを提供できたと考えていた。

次に、第一サイトとしての役割があった。例年、会議序盤のサイトでは日米両国のデリゲートが親睦を深める機会に恵まれず、互いの交流が進みづらいという問題点が指摘されてきた。そこで今回の東京サイトでは分科会の枠を超えて、ヴァーバル、ノンヴァーバル両面でのコミュニケーションの機会を拡充することでこの解消を図った。前者はスペシャルトピックや、フォーラム前のスモールディスカッションという形で、後者はALPや観光体験でプログラムに落とし込んだ。

最後に、これは主に日本側のデリゲート向けであるが、東京や日本について、新たな発見のある東京サイトにしたかった。いつもの東京の町並みも、JASCerと一緒に歩くと全く違って見えてくる。普段何気なく生活する中で見落としがちな「日本」や「東京」について、その来し方行く末を見つめなおし、再考するきっかけとなれば、日本側参加者にとってもきっと得るものがあるに違いない。

参加者の皆にももう一度感謝を。どんなに趣向を凝らしたプログラムという名の箱も、参加者皆の協力とインスピレーションがなければ輝かない。本当

にありがとう。そして願わくは、東京の、59回会議の思い出を一人でも多くの周囲の人に伝えて欲しい。内にあるは参加者同士の信頼が、外にあるは会議の成功となり、JASCの社会的評価と信用の向上につながっていく。次回以降の日本開催も、成功しますように！
(高井竜輔)

直前合宿

7月25日 日本側直前合宿

全国各地に住む日本側参加者がこの日、国立代々木オリンピックセンターに集合した。全員が集まるのは5月に行われた春合宿以来のことであり、それぞれ再会を喜び合った。スキット（異文化紹介の寸劇）の練習やこれから始まる英語漬けの毎日に備え、分科会ごとに英語でのプレゼンテーションを準備した。明日にはアメリカ側参加者が到着し、本会議が始まるという信じがたい現実に不安と期待の入り混じった様子であった。

7月26日 アメリカ側参加者来日 ジョイントオリエンテーション

午後6時半過ぎ、成田から36名のアメリカ側参加者を乗せた大型バスが到着した。プレゼントである手作りの扇子とネームカードを持ち、まずは自分のBuddy探し。日本でもアメリカでもない特別な空間がそこには生まれ、新しい出会いとこれから始まる1ヶ月に期待で胸膨らませることとなった。



アメリカ側参加者が到着し、59回会議が幕を開けた

夕食後、初めて一同が大きな部屋に会してジョイントオリエンテーションが行われた。アメリカ側参加者の長旅の疲れを考慮して、実行委員の自己紹介やグラウンドルールなど最小限必要なことのみを共有し、本格的なプログラムが開始される明日に向けて調子を整えた。



ジョイントオリエンテーションでの実行委員

7月27日 開会式兼外務省主催レセプション 世界銀行環境マルチラテラルフォーラム

第59回日米学生会議の開催に伴い、ご協力いただいた方々をお呼びしての開会式が東京プリンスホテルで行われた。開会式は本会議開催直前に世界に知られたJASC アルムナイの宮澤喜一元首相への黙祷に始まり、主催団体の大井理事長や後援者の方々からお言葉をいただいた後、日本側実行委員長の川口耕一郎と米国側実行委員長のMorgan Swartzがスピーチを行った。外務省主催によるレセプションも同時に行われ、文化交流部部長の山本忠通氏からお言葉をいただいた。外部に対して開会を宣言することで、JASCが社会と深く結びついていることを感じ、JASCerとしての自覚が芽生え始めることとなった。



開会式・外務省レセプションの様子

第3章 本会議・サイト活動

その後世界銀行東京事務所の協力を得て、世界環境マルチラテラルフォーラムを行った。環境というグローバルな問題に対して、世界において特別な地位にある日米両国がどのように働きかけるべきかという問題意識の下に行われたこのフォーラムは、第59回会議のテーマである「日米によるグローバルパートナーシップの探究」を最も明確な形で体现することとなった。



真剣な表情で聞き入る参加者たち

【世界環境マルチラテラルフォーラムを振り返って】 第59回日米学生会議アメリカ側実行委員 三宅博之

日米の参加者が合流した翌日、開会式の直後に世界銀行東京事務所の一室を借りて世界環境フォーラムを開いた。フォーラムは三部構成だった。学生会議参加者によるスモールグループディスカッション、三人のパネリストを招いてのパネルディスカッション、そしてガーナ・フランスの学生との同時テレビ中継会議だ。

学生会議参加者によるスモールグループディスカッションでは、7つのテーマを設定し、そのテーマに沿って日米学生で議論をした。テーマは環境法からフェアトレード、バイオエネルギーの活用など多岐に渡り、「政府はいかに法を使って持続可能な社会を実現できるか」や「次代の環境保護のフレームワークは京都議定書のもの踏襲すべきか」などといった問いに対する答えが模索された。

第二部では、環境省の小林豪氏、国際NGO・Conservation Internationalの日比保史氏、そして千

葉大学の上村雄彦准教授からお話を頂いた。小林氏は環境問題全体を見渡した後、京都議定書の現状と未来、そして日本の問題解決に対する取り組みについて解説された。日比氏はバイオダイバーシティの重要性と、それがいかに危機的状況にあるかについて話してくださった。上村准教授は環境税やグローバルな税金による問題解決法について持論を展開された。それぞれ政府、NGO、学会という立場ならではのお話だったと思う。

学生も交えた質疑応答では、「先進国か発展途上国か、どちらに焦点をあてて問題解決を図って行くべきなのか」、「バイオダイバーシティのhot spotsのインバランスを指摘されたが、どうやってそれを再配分すべきか」など、学生から積極的な質問が出された。

第三部は日米学生によるプレゼンテーションで幕を開けた。Samantha Scullyと武田尚樹がそれぞれ、自分や自国の環境に対する配慮や、今後の改善点についてスピーチを行った。すべてのアクターが共有財産の為に努力しなければならない、環境に配慮した行動を習慣化せねばならない、などマクロ、ミクロ両視点からスピーチが展開された。その後、テレビを通じてフランスの学生によるプレゼンが行われた。「フランスの優れた環境技術や原子力発電の活用を例に挙げ、生活の質を犠牲にする事なく技術によって環境問題を解決して行くべきだ」、といった主張がなされた。最後のプレゼンはガーナの学生によるものだった。自国の森林破壊などの問題を挙げ、NGOなどの積極的な参加、イニシアチブを求めた。その後全員を対象とした4ヶ国同時テレビ会議が行われた。「日米ではどのような問題が重用視されているのか?」「核エネルギーに関してどう思うか?」「京都議定書に関してどう思うか?」最初はお互いの距離や違いを意識した質問が出たり議論されたりしたが、最終的には日米・フランス・ガーナの学生たちの意識に大した差はないように見受けられた。すべてのアクターが行動しなければならないこと、現在の取り組みでは不十分である事など、現状に対する認識では一致できた。

会議初日から、四時間以上に渡る長いフォーラム

があり、参加者たちもさすがに疲れていたようだが、この数時間のうちに得られたものは大きかったと思う。

【参加者後記】

小議題はJASCで初めてマネージするディスカッションテーブルだった。英語で議長をやるのは初めてだったが、パネリストも務めるサマンサや最初に仲良しになった“BRachel” (Brad & Rachel) が積極的に発言してくれて助かった。日本人だけの議論なら日本語でも沈黙が訪れていたなと考えると、JASCersに頼もしさも覚えた。同時にアメデリの大半がリベラルであることも知った。

パネルディスカッションはレベルが高く、英語についていけない所も多々あったが、同時にJASCで楽しみながら頑張れることのありがたみも再認識した。

(加納康宗)

【世界環境マルチラテラルフォーラム：第1部ディスカッションテーマとリーダー】

- ・先進国と途上国の環境への意識の差異 上田 来
- ・ボードレス化する世界でどのような

環境対策が求められるか

- ・バイオ燃料と食料
- ・二酸化炭素排出権
- ・環境法
- ・CSR と環境
- ・フェアトレードと環境

- 加納康宗
- 金 大鐘
- 古屋佑樹
- 李 凌毅
- 武田尚樹
- 伊関之雄

7月28日 スキット上演 ジョイントオリエンテーション 分科会

Amedele Lead Project” Capture the Flag”

7月28日土曜日、快晴。来日以来のハードなスケジュールも一段落し、参加者同士の本格的な顔合わせの機会となる日米ジョイントオリエンテーションが行われた。各自が会議に対する抱負を混ぜながら自己紹介した後、パディ同士がプレゼントを交換。続いて日米のグループに分かれ、互いの文化を演劇形式で紹介しあうスキットエクステンジとなった。アメリカ側は、テレビのショーやアメフトなどの現代米国風俗をコミカルに表現し、日本側は電車内の風景や秋葉原のオタクカルチャー、ビリーズブートキャンプを取り上げ笑いを誘った。こうした作

業を通して、ひと夏を共に過ごす仲間たちの間に、少しずつだが親近感が芽生え始めた。



◀日本側スキット的一幕、本格的なアキバボーイズ

アメリカ側スキットの一幕、ロックスターの誕生



昼食後は分科会に分かれ、最初の分科会セッションが行われた。自己紹介や各自が興味を持つ分野を共有したり、早速ファイナルプロジェクトに向けて話し合うグループもあった。



藤原教授を迎えて

RTで頭を使った後は、ALP (Amedele Lead project) で身体を使う時間となる。参加者は運動に適した服装に着替えて代々木公園に移動、日米混成のキャプチャーザフラッグが戦われた。思えば事前準備段階からキャプチャーザフラッグに寄せる相方Brianの気合は並大抵ではなく (Yoyogi Parkの様子をgoogle mapで調べたんだが、なかなか良さそ

第3章 本会議・サイト活動

うな場所だな、Ryusuke!）、日米の参加者が英語で楫を飛ばしあいながら真剣にゲームに興じている様子は、会議全体の理念である“Global Partnership”の萌芽を感じさせるのに十分であった。



Capture the Flagの合間に

7月29日 分科会リフレクション

分科会の時間が中心となったこの日、暴力と平和分科会では東京大学の藤原帰一教授を、アイデンティティー分科会では青山学院大学の押村高教授を招きレクチャーを受けた。専門家の話を受けて知識を深め、自由に日ごろ抱いている問題意識を問うことができたほか、他の分科会メンバーも各レクチャーに参加したため、議論がより活発になり充実した分科会活動となった。

その後、まだ慣れない環境への不安を共有しやすくするために、日米別のリフレクションミーティングを行った。日本側では、英語へのストレスを軽減させお互いに理解を助けるための工夫や、ホスト国参加者としての意識を持ちアメリカ側参加者をケアするべきといったような意見が交わされ、生産的なミーティングとなった。

7月30日 分科会フィールドトリップ アメリカ大使館主催レセプション

VISAビジネストリップ スペシャルトピック

午前中は、分科会ごとに靖国神社や放送局、NPOなどそれぞれの分科会テーマに関連する場所を訪れ、教室での議論を超えた新しいインスピレーションを多く得ることになった。

午後はアメリカ大使館にて政治、経済、環境、科



靖国神社を訪れたJASCer

学技術、広報など多岐にわたる分野の大使館の職員の方々7名からブリーフィングを受けた。質疑応答の時間には活発なやりとりが交わされ、中には核兵器に対するアメリカの姿勢を問う学生もいた。その後軽食を取りながらの大使館職員の方々との交流会はよりカジュアルな雰囲気で行われ、外交や国際問題を仕事にすることについて、目を輝かせながら自らの将来と照らし合わせて熱心に話を聞く参加者の姿が印象的だった。

その後VISA International Asia Pacific Ltd.で井村牧氏の協力の下、Vice PresidentのJim Allhusen氏から日本、世界でNo.1のシェアを誇るVISAブランドについて、また日本人とアメリカ人のマナーカルチャーの違いについてレクチャーを受けた。身近にあるVISA cardがnon profitの会社であることに驚きを感じる参加者が多く見られた。日本で働くことを夢見るアメリカ側参加者にとっては特に、日本経済の中心である丸の内では日本の外資系企業を知ることになり、非常に有意義な経験となった。



国際ビジネスの最前線に触れる

その後は、各グループに分かれてスペシャルトピックを行った。スペシャルトピックとは、参加者が好きな話題を設定してグループをリードし、食事を取りながらリラックスした中で行われるディスカッションである。多忙なスケジュールの一日であったにも関わらず、「両国の高等教育」「イラク戦争」「日米間に見る恋愛観の違い」など思い思いのグループで楽しむ様子がうかがわれた。

7月31日 アジアユースフォーラム

7月31日火曜日、晴れ。アジア財団との共催となるアジアユースフォーラムが行われた。フォーラムでは北東アジアの歴史問題と若者の果たすべき役割というテーマの下、東京大学の姜尚中教授と、テンプル大学のジェフ＝キングストーン教授による基調講演に加え、日米中韓4カ国の学生によるパネルディスカッションが行われた。JASCからも日米各2名のデリゲートがパネリストとして参加し、会場参加者との間で熱心な質疑応答が交わされた。第二次世界大戦に起因する北東アジア歴史問題の現在性と、その解決のため果たすべき学生の主体性という二つの問題意識を学生に喚起する有意義なフォーラムであった。



会場と質疑応答を行う学生パネリスト

フォーラム後はご臨席の高円宮妃殿下を交えてのレセプションが行われた。参加者は訪れた多くのアラムナイや官財界からの出席者から多くの刺激を受ける一方、58回会議の参加者も多数会場を訪れ、59回実行委員にとってはさながら同窓会のような素敵な夜を過ごした。



高円宮妃を迎えてのレセプション

以下アメリカ側参加者代表のパネリストを務めた Joshua Evan Schlachet の感想文を掲載する。

【アジアユースフォーラムを振り返って】

Asia Youth Forum Reflection

The 59th JASC American Delegation

Joshua Evan Schlachet

Participating in the Multilateral Asia Youth Forum was a highly valuable experience for me. Never before have I had the opportunity to learn from such a diverse and insightful group of students from the nations of East-Asia. Though each of us spoke about significantly differing topics, this forum was a new step forward in encouraging dialogue at the level of individual citizens of our respective countries. In an often delicate political climate that is so heavily dominated by the discourse of governments, it was encouraging to see our youth stepping forward to present distinctive and unconventional voices. This program was particularly inspiring in the sense that it highlighted the shared desires for peace, equality, mutual understanding and responsible global involvement that we all possess.

At points during my fellow students' presentations, I could hardly help becoming overwhelmed by the deep convictions for change that we all felt and expressed despite our superficial differences

in nationality and upbringing. Such passion for the wellbeing of our planet and its inhabitants, regardless of national identity or ethnicity, clearly exists throughout East-Asia, and will only be fueled and encouraged by events such as this. Never before in my life have I learned so much in five short minutes about a topic, about another person or about myself than I did during the Asia Youth Forum. I believe I formed a deep connection with each of the presenters despite the brevity of their speeches, and such bonds of shared principles form the basis upon which positive change is founded.

The Asia Youth Forum was so significant because it allowed us a platform to offer these alternative views not only to our fellow students, but also to political and business leaders, academics and the general public. The generous patronage of Princess Takamado — and especially her inspiring and heartfelt word — underscored the special significance of such international communication. I sincerely hope that this program can carry on into the future and continue to expand and incorporate new international perspectives. Thank you so much for allowing me to participate in such a worthwhile event.

8月1日 伝統文化企画 東京都内観光

8月1日水曜日、快晴。この日は文化体験が行われた。午前中は江戸切子や屏風作りなどの伝統工芸体験を行うグループと、江戸東京博物館を訪れるグループに分かれ、それぞれ東京の「歴史」や「伝統」を直接学ぶ契機となった。



文化体験・江戸切子を体験する

昼食後は都内自由観光の時間。日米参加者が目的地別にグループを作り、秋葉原やお台場、原宿などで思い思いの時間を過ごした。「自由」観光といっても、JASCのプログラムであることに変わりはなく、日本側の参加者が米国側参加者を迎える「ホスト側」としての自覚を持って観光のイニシアティブをとってくれたことは、実行委員として嬉しい限りであった。



浅草寺の前で

8月2日 横須賀米海軍基地訪問 横浜中華街散策

8月2日木曜日、快晴。東京滞在中も実質最終日となる今日は、米軍横須賀基地への訪問研修が行われた。横須賀基地ではシーファー駐日大使臨席のラン

チをはじめ、係の方による基地と日米防衛交流史の解説、イージス艦への搭乗体験など、多くの貴重な経験を通じ、日米の防衛・安全保障について議論・考察した。

通じ合う心▶



◀日米の安全保障政策について学ぶ

基地での研修後、横浜中華街で夕食となった。日米の参加者は中華料理を堪能しつつ台頭しつつある中国に思いを馳せた。今日で別れを告げる東京サイトを振り返りつつ、出発まで思い思いの時間を過ごした。



東京サイト最終日



中華街を体験するJASCerたち

8月3日 秋田サイトへ向けて出発

秋田サイトへのお発向に向け、午前6時半にオリンピックセンターを後にした。早朝のお発向となったため前夜は早めにパッキングを済ませて床に就く者、一晚中語り明かす者など様々だったが、10日間の東京サイトを経て、JASCer同士の絆は深まったようだ。

東京サイトコーディネーター後記

三窪英里

日米学生会議73年の歴史の中で、東京は1度を除き常にサイトの一つであり続けてきた。1200万人の人口を抱える国際都市東京は政治、経済、文化の中心であり、日本を語る上で外せないばかりか、会議を行う上で最も多くの可能性が眠る重要な開催地だと認識していた。

第59回会議においては、東京が持つ可能性を最大限に用いることでよりテーマの実現に近づきたいという思いがあった。第59回テーマである「グローバルパートナーシップの探究」の礎となるような幅広い分野におけるアカデミックな刺激に多く触れること、そしてそれらの刺激が参加者の抱える根底の意識を喚起した結果、長期的なタームで人を変え、世

第3章 本会議・サイト活動

の中に働きかけるという意味での「次代の創造」となりえることをめざし、プランニングを進めた。

私たちがコーディネートをやる上で、絶対に譲りたくなかったのは、「政治、経済、文化に触れるという3つのうちのいずれも外さない」、「最初のサイトであり、かつ10日間の長丁場であることからイベントを詰めることを避け、参加者同士の心の距離を縮める努力をすること」であった。そしてもう一つこだわらなかつたのは日本側参加者の視点だ。アメリカ人にとっては、日本に来て異文化に触れるだけでも最高にエキサイティングであろう。しかしかにかに同数の日本側参加者が東京を日常の風景に感じず、感動を覚えられるサイトにするかが東京サイトプランニングの上でのキーポイントだと思った。

期待が次々と高まっていく一方で、限られた時間の中でどれだけのパフォーマンスを発揮させるか、ロジスティクスを確実にこなすかということに常に直面しながらのプランニングであった。しかし、東京の仕事であれば言葉のバリアも少ないということから、アメリカ側実行委員が大使館へのお願いやビジネストリップの実現のために海の向こうから果敢にコーディネートに携わってくれたことがうれしく、大きなモチベーションとなった。

このような思いをもってサイトを作ってきた私たちであるが、初めて参加者同士が顔を合わせた5月の春合宿後は、実行委員がそれまで作りかけてきた箱を一気に完成へと運ぶことに集中する一方で、ホスト側として日本側参加者が高い意識を持ち、世界銀行フォーラムのスタッフとしてディスカッションリードをしてくれたり、東京観光スタッフとして住み慣れた東京をいかに魅力的にアメリカ側参加者に伝えるかを必死で考えてくれたりと、箱に宝石がちりばめられていくかのように輝きを加えてくれた。

現在、東京サイトを振り返ると参加者同士の相互理解を得た上で、多くの刺激・インプレッションを得てほしいという当初の願いは叶い、初志貫徹できたのではないかと考えている。程よい緊張感の中、学ぶときは全身で吸収し、カラオケや居酒屋ではしゃぐときは思いっきりはしゃぐことで参加者同士がすぐに打ち解け笑顔に余裕を見ることができたこと

は無論、どのサイトよりも多く行われたレセプションやフォーラム、企業訪問などを含めた外部との係わり合いを通じて新たな気づきを得、そこで出会った人々との交流を通して一步前進するというプロセスを最も多く踏むことができたサイトだったのではないと思う。「東京で生まれ育ったのに知らないことばかりだった」「東京、すごく充実して楽しかったよ」と感想を漏らしてくれた参加者の言葉も助け、東京サイトは成功したのではないかと感じている。

これも、私たちを支えてくださった多くの方々のご理解、ご支援の賜物に他ならない。時には無理を承知で情熱だけを持って飛び込み急なお願いであったにもかかわらずご協力賜った方々、素敵な機会をご提供くださった諸官庁、企業、大使館の方々、そしてご助力くださったアルムナイの方々、いつもそばで私たちを温かく見守ってくださった主催団体の方に心から感謝している。この場を借りて御礼申し上げたい。

最後に、時には衝突しつつもお互いの苦手分野を補完しながら一緒に走り続けてきたパートナーの高井君、5月以降米国から帰国し夏休みを返上して、的確かつすばやい仕事ぶりでコーディネートを助けてくれた三宅君、常に冷静沈着「助けることはない？」と喋ってバインダーなど細かい仕事を正確にこなしてくれたBrian、世界銀行企画に熱い思いを持ち一緒に進めてくれた安田君、そして1年間を通して常にどっしりと構え仕事と共に精神的にも支えてくれた委員長の川口君に深く感謝したい。



波乱万丈
東京サイト・コーディネーターの4人「一年間おつかれ様でした」

秋田サイト

8月3日～8月8日

サイトコーディネーター

川口耕一郎 菅家万里江 Justin Long Kendall Jackson

デリゲートスタッフ

金大鐘 竹内菜緒

秋田サイトのスケジュール

- 8月3日(金) 秋田到着
能代市にて歓迎レセプション
能代市、八峰町、藤里町にてホームステイ
- 8月4日(土) 白神山地散策
温泉入浴
ホームステイ
- 8月5日(日) 国際教養大学に移動
分科会活動
リフレクション
- 8月6日(月) 分科会活動
秋田市内散策
竿燈祭り
- 8月7日(火) 分科会活動
Amedele Led Project
Field Day
秋田フォーラム準備
- 8月8日(水) 秋田フォーラム
秋田日米協会主催レセプション
- 8月9日(木) 広島へ移動

秋田サイト理念

山に囲まれ日本海に開けた「美の国」秋田。初の北東北開催となる秋田サイトの狙いは以下の二点にある。

第一に、秋田は世界最大級のブナ原生林である白神山地や、日本一の水深を誇る田沢湖をはじめ、豊かな自然に恵まれ、なまはげや竿燈祭りなど、独自の伝統文化の宝庫である。それだけでなく、日本有数の米どころであり、野菜やりんご、牛肉など、全国の食料供給基地として重要な役割を果たしている。秋田ではホームステイや農業体験などを通し、東京、京都、広島などの都市では味わえない、日本

の「地方」を参加者に体感してもらった。

第二に、第59回の理念の一つである社会発信の場を秋田で設けた。最終日に開催した秋田フォーラムでは、秋田サイトの総括として、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」をテーマに、明石康氏による基調講演、日米学生会議OB・OGによる会議に関する講演、第59回会議秋田開催の総括、日米関係の軌跡と今後の展望についての有識者と会議参加者によるパネルディスカッションをそれぞれ行った。日米学生会議の73年の歴史、第59回会議の成果を県民の方々に広く伝え、地元の中予、高校生、大学生との交流の場を設けることができた。

国際理解を広めよう

県内で来月 日米学生会議 明石氏の講演も



「若い人の参加期待」委員長の川口実行委員長(左)と菅家万里江副委員長(右)が、8月17日(水)に秋田市内の秋田ホテルで開かれた「国際理解を深めよう」の講演会に出席し、菅家氏(右)が講演中。

「若い人の参加期待」委員長 川口実行委員長
菅家万里江副委員長
菅家万里江副委員長は、8月17日(水)に秋田市内の秋田ホテルで開かれた「国際理解を深めよう」の講演会に出席し、菅家氏(右)が講演中。

菅家万里江副委員長は、8月17日(水)に秋田市内の秋田ホテルで開かれた「国際理解を深めよう」の講演会に出席し、菅家氏(右)が講演中。

『秋田魁新報』7月19日「国際理解を深めよう」

本県で日米学生会議

872
日米学生

自然や文化を体感



本県での会議開催について説明する川口委員長(右)と常務副委員長—秋田魁新報社

今年八月に秋田市内で開かれた日米学生会議の模様。秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。今年も秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。今年も秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。

第59回日米学生会議 本県開催へ準備進む 地域格差問題など考察



公開フォーラムの使用言語をめぐり議論する実行委員たち—東京・四谷

今年八月に秋田市内で開かれた日米学生会議の模様。秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。今年も秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。

【秋田魁新報】2月7日「本県で日米学生会議」

8月3日 能代市にて歓迎レセプション、ホームステイ

秋田空港から秋田サイト期間中の宿泊先、分科会会場である国際教養大学にて秋田サイトオリエンテーションを行った後、ホームステイ先の一つである能代市へ移動した。能代市では歓迎レセプションにて斉藤能代市長から激励のお言葉をいただいた。その後、能代市、八峰町、藤里町の3つの自治体に分れ、これから2泊3日お世話になるホストファミリーとの対面を終えた参加者は、各自のホスト宅へと向かった。



ホストファミリーの温かいおもてなし



ホストファミリーを通しての地元の人々との交流

「秋田魁新報」2月4日「本県開催へ準備進む」

「先週は、日米学生会議の準備を進めています。秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。今年も秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。

対話 会話

日米学生会議 秋田開催に

今年八月に秋田市内で開かれた日米学生会議の模様。秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。今年も秋田魁新報社が主催する「日米学生会議」は、今年で二十回目を迎える。

【秋田魁新報】2月10日「対話 会話」

8月5日 国際教養大学に移動、分科会、リフレクション

朝、ホストファミリーと最後のひとときを過ごした参加者は、各自治体の公民館に集合し、2泊3日のホームステイを終えた。写真を撮る者、抱き合い涙を流す者、ホストファミリーと参加者はそれぞれ互いの別れを惜しんだ。その後、残りの秋田サイト期間中の滞在先である国際教養大学に戻り、分科会を行った。夜には初のジャパデリ、アメデリによるジョイントリフレクションが開催され、東京サイトの総括を行うとともに、ホームステイ中の思い出などを語る参加者が目立った。

【参加者日記】

2泊3日お世話になったホストファミリーに朝、別れを告げる。温かいおもてなしをして下さった御家族と離れるのは辛く、涙が溢れて止まらない。必ずまたお会いしましょう、とAIUに戻るバスに乗り込んだ後も姿が見えなくなるまで手を振り続ける。

AIUに到着後、2日ぶりに他の町にステイしていたJASCerと再会。なんだか凄く長い時間会っていなかった様な気がする。いつの間にか皆と一緒にいるのが当たり前で、私にとって皆はなくてはならない存在になっていたのだと気付く。昼からは久しぶりのRTwork。大自然の中でたっぷり休養したせいか活発な議論が行われる。

夜はリフレクション。皆といるとホッとする。嬉しい事も辛い事も私達は共有している。どんなに厳しい問題でも自分で考えて皆とだったら解決策を見い出せる気がする。本会議が始まって10日しかたっていないのにJASCが私の中に根付いている事を確信する。JASCで学んだ事や経験を、出会った人、そして社会に還元していきたい、そんな風に思った一日だった。

(間嶋絵梨)



八峰町にて、ホストファミリーの皆様と最後の一枚

ホストファミリーノート (五十音順、敬称略)

・色んな人と話がしてみたいという動機で、役場からホームステイの依頼を引き受けました。食事に関しても何でも食べてくれ、心配していたほどコミュニケーションに関して困らず、楽しく過ごせました。滞在期間が短かったのは残念でした。(安部得直)

・藤里町国際交流協会会長として、ホームステイはいつでも受け入れるつもりでした。事前に連絡が行き届いていたので、食事などに関する問題もなく、学生の態度も良好でした。(加茂谷芳文)

・皆、とても食事を良く食べてくれ、常に礼儀正しく好感が持てました。日米学生同士が一緒になってコミュニケーションをとって、私達家族にお互いの国の文化を伝え合うことができ、とても有意義に過ごせました。(木藤直)

・秋田国体での民宿を予定しておりましたところ、地域の国体民宿担当者から引き受けの打診があり、日米学生会議を知りました。提供してくれた食事すべてを喜んで食べてくれ、大方ナス、トマト、レタス、じゃがいも、スイカ、オクラといった自宅の畑で採れた食材を使いました。日米のお二人とも礼儀正しく、今の若い方には珍しいほど心配りがあり、感心しました。おかげさまで、私達家族も異文化に触れることができ、素晴らしい体験をさせていただきました。特に小学生と幼稚園の孫二人は喜んでおりました。今後とも、本事業が長く継続されますことを祈念いたします。(工藤金美)

・日米の学生は立派でした。自分の考えをしっかりと持って、この研修、会議に臨む姿に我が家の高校生の二男は驚いており、いい刺激になりました。どちらの学生にとっても、日本の田舎を知ることはとても良いと思います。(工藤金悦)

・初めての経験でしたが、楽しい二日間でした。またお出でになるのをお待ちしております。学生達には非常に好感を持ちました。(鈴木三男)

・学生は孫娘のように可愛く、彼らから与えられたものは大きかったです。滞在中の態度も素晴らしかったです。(豊沢幸夫)

・ホームステイに興味があり、どんな方が泊まってくれるか楽しみでした。八峰町を知ってもらい、娘、甥がホームステイの経験があり、恩返しをしたかったという動機がありました。学生は挨拶や言葉使いもよく、礼儀正しい好青年達でした。日本の風習や食事の面でも、チャレンジしようというところが好感をもてました。はじめは不安もありましたが、すぐ打ち解けて、楽しい時間を持ってました。またこの様な機会があったら是非参加してみたいと思います。台風は非常に残念でした。(日沼宏平)

・英語を聞き話す機会を作り、将来を担う若者の支援をしようとホームステイを受け入れましたが、ホームステイによる交流も異文化理解と国際平和への貢献ができると気付きました。学生は自主的で友好的で、平和確立への意思が明確で将来への希望も抱かせていただきました。(増山裕弘)

・学生たちは環境に順応し、私達ホスト側にも気を使ってくくださるなど、とても好感を持てる人達でした。出会えたことを嬉しく思います。ホームステイの期日が短すぎて、少し残念でした。(油井日出男)

8月6日 分科会、竿燈祭り

午前と午後に渡って分科会を行った後、秋田市街に移動した。この日は北東北三大祭りの一つである竿燈祭りの最終日ということもあり、100万人を超える観衆で町は混雑していた。躍動感溢れる竿燈祭りの演技を堪能した後に、参加者は帰路についた。



浴衣姿のジャパデリ・ガールズ

竿燈祭り観賞



8月7日 分科会、秋田フォーラム準備

分科会を午前、午後と行った後、Amedele Led Projectにてアメデリによるダンスパフォーマンス、Field Dayがそれぞれ催された。夜は翌日の秋田フォーラムに向け、スタッフは会場がある秋田市街に移動し準備を進める中で、他の参加者は自由時間の中で、大自然に囲まれたキャンパスでそれぞれリラックスした夜の交流を楽しんだ。

8月8日 秋田フォーラム、秋田日米協会主催レセプション

秋田サイト最終日である8月8日に、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」と題したフォーラムを開催した。当フォーラムは2月から半年間かけて、秋田日米協会との共催で取り組んできたプロジェクトである。秋田ビューホテルの大ホールを借りて行われた当フォーラムは、当日多くのメディアの取材が入り、総勢300名程度の来場者数を記録する、非常に大規模なフォーラムとなった。以下が本フォーラムの概要である。

【開催目的】 第59回日米学生会議秋田開催の総括フォーラムとして、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」をテーマに、明石康氏による基調講演、日米学生会議OBである茂木健一郎氏による会議に関する講演、第59回会議秋田開催の総括、日米関係の軌跡と今後の展望についての有識者と会

第3章 本会議・サイト活動

議参加者によるパネルディスカッションをそれぞれ行う。日米学生会議の73年の歴史、第59回会議の成果を県民の方々に広く伝え、特に地元の中学、高校生に国際交流、国際関係に興味を持ってもらい、秋田県から次代を担う人材の育成に寄与する。

【日時】 2007年 8月8日(水)

【会場】 秋田ビューホテル 飛翔の間

【テーマ】「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」

【言語】 日本語及び英語(日英同時通訳付)

【概要】

① 主催者挨拶・来賓挨拶(13:30～14:00)

<主催者挨拶>

第59回日米学生会議実行委員長 川口耕一郎

秋田日米協会会長 須田精一

<来賓挨拶>

秋田県副知事 西村哲男

秋田市市長 佐竹敬久

※その他前参議院議員金田勝年様、岩手県庁増澤享様から祝電を頂いた。

② 第一部(14:00～14:30)

明石康氏基調講演「今日における日米のパートナーシップの重要性」

元国連事務次長である明石康氏に、太平洋の平和を目的とした二国間関係から、世界の平和を目的とした二国間関係へと変貌し、これからの可能性に向けて模索を続ける現在の日米関係について、ご自身の国連での経験を交えながらご講演頂いた。興味深い内容に、フォーラム参加者は熱心にノートを取っていた。

③ 第二部(14:35～15:25)

茂木健一郎氏記念講演「私と日米学生会議」

日米学生会議OBである茂木健一郎 ソニーコンピュータサイエンス研究所上級研究員兼東京工業大学大学院連携教授より、茂木氏が参加された日米学生会議の思い出について語って頂いた。茂木氏はNHK放映のテレビ番組「プロフェッショナル」でパーソナリティーを勤められる傍ら、脳科学者として様々な分野でご活躍されているが、そのような過密なスケジュールの中、「日米学生会議のためなら」

ということで無理を押してご出演くださった。時に冗談を交えながら、日米学生会議の経験、及びそれから受けた影響、会議の意義についてご講演くださり、会場を沸かせた。



地元テレビでもフォーラムの様子が放映された



「映し合う」(茂木健一郎 クオリア日記から抜粋)

日米学生会議(Japan-America Student Conference)というのは、1934年に始まり、戦争による中断を挟んで今日まで続いている学生主体の会議。今年で59回目。毎年、交互にアメリカないしは日本で開催され、日米の学生が約1ヶ月間、各所を回りながら経験し、討論を重ね、相互理解を深め合っていく。宮澤喜一さんや、ヘンリー・キッシンジャーもかつて参加した。私は第38回に参加した。アメリカに行く回で、シカゴやミシガン、ボストン、ニューヨークを回った。本当に強度の高い経験で、さざざまな忘れられない思い出がある。

最初の夜に、アメリカ側の参加者たちが、「I am a typical American」という劇をやったそれぞれの祖先がどこからやってきたかを喋ってから、最後にI am a typical American(私は典型的なアメリカ人です)と付け加えるのである。私の祖母はイタリアから、祖父はイギリスから来ました。ニューヨークで会って恋に落ちました。私は典型的なアメリカ人です。私の両親はロシアから移民してきて、カリフォルニアに住んでいます。私は典型的なアメリカ人です。私の祖先はアフリカから来ました。私は典型

的なアメリカ人です。様々なバックグラウンドの人たちがいて、それぞれが「典型的なアメリカ人」である。素晴らしい演し物だった。アメリカ側の学生たちは、各地に散らばっていて、出会ってから一日くらいしか経っていない。それで即興で劇を作り上げる。瞬発力に感銘を受けた。ミシガンでファーム・ステイした時は、毎日食事はポークとポテトとコーンだった。夏の盛りで、フェアが来て、メリーゴーラウンドとかそういうものがどこまでも広がる麦畑の中にぱっと現れ、夢のように消えた。とても宗教的な人々。海辺に二組の足跡がある。「もう一人は誰ですか」と聞くと、神が、「私がお前と一緒に歩いたんだよ」と答える。「なぜここは一組しかないのですか」と聞くと、神が、「私がお前を運んで歩いたんだよ」と答える。そんなカレンダーをくれた。心の優しいひとたち。シカゴで突然大雨に降られて、アレックスたちとびしょ濡れになって大笑いしたこと。ニューヨークのアムネスティ・インターナショナル本部を訪問して、「手紙を書くこと」が良心の囚人の待遇を劇的に変えることができることを学んだこと。素敵な思い出がある。私は22歳だった。

第59回の会議は日本各所を回りながら開催中だが、その実行委員長の川口耕一朗くんから、秋田フォーラムに来てくれないかとお誘いを受けた。日米学生会議からの依頼ならば、ぜひとも受けなければならない。秋田駅前の秋田ビューホテル。会場にいる日米の参加者に声をかけて、談笑した。どれだけ準備が大変か、経験者としてよく知っている。自分たちで全部やる。企業を回って、寄付をお願いすることとか、各所のイベントの準備、関係者との折衝とか。だから、ボクは、参加者たちに、偉い、がんばれ、楽しめよ、身体には気をつけろよ、と言いたい。川口くんからは、秋田の高校生など地元の人も多いし、同時通訳も入っているから日本語でと言われていたが、ボクもどうせだったら英語漫談をやりたいと思った。それで、日米学生会議の思い出と、日米関係についての思いを40分くらい喋った。いやあ諸君、楽しかったであるゾ。秋田で日本とアメリカの学生が出会い、高校生がたくさんきて、出会っ

て、共鳴して。こういうことは掛け替えがない。他者とは出会うべきだ。映し合うべきだ。

④ 第三部 (15:30~15:45)

会議参加者による第59回日米学生会議秋田開催総括
第59回日米学生会議参加者であり、メディア分科会所属の金大鐘と竹内菜緒が、秋田日米協会及び有限会社アルファビジョン千葉康彦氏、並びに株式会社ニューフォト北日本のご協力の下、日米学生会議秋田開催の模様をまとめたビデオを制作し、会場で放映した。参加者の楽しそうな表情と、作品の完成度の高さに会場から大きな拍手が起こった。その後、金大鐘とアメリカ側実行委員で秋田サイトコーディネーターのKendall Jacksonに秋田サイトの感想をそれぞれ語ってもらった。

⑤ 第四部 (15:45~16:30)

日米学生会議参加者と高校生との交流会

地元高校生及び大学生100人弱と日米学生会議参加者72人が、16のグループに分かれて、別室にて交流会を行った。交流会には、秋田県教育委員会教育長の根岸均様もご参席下さり、会のはじめにご挨拶を頂いた。当プログラムでは、教育分科会のメンバー8名を中心とする日米学生会議参加者16人のグループリーダーのリードのもと、地元学生と日米学生会議参加者が英語によるアイスブレイキングや歓談を楽しんだ。非常に和気藹々とした雰囲気、参加者からも「とても楽しかった」という声がかかることが出来た。この交流会を通じて、秋田県の学生が国際交流の楽しさや面白さを少しでも味わってもらえたならば本望である。



地元学生との交流会

⑥ 第五部 (16:30~17:30)

パネルディスカッション 「グローバルパートナー

第3章 本会議・サイト活動

ーシップの探究と次代の創造」

有識者と日米学生会議実行委員が第59回日米学生会議のテーマである「グローバルパートナーシップの探究と次代の創造」というタイトルの下、パネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、これからの日米のパートナーシップの可能性や、国際教育等など多岐にわたる分野を討議した。



有識者と実行委員によるパネルディスカッション

【パネリスト】

- ・明石 康 元国連事務次長
- ・中嶋嶺雄 国際教養大学理事長・学長
- ・大井 孝 財団法人国際教育振興会理事長・東京学芸大学名誉教授
- ・菅家万里江 第59回日米学生会議日本側副実行委員長・秋田開催責任者
- ・Morgan Swartz 第59回日米学生会議米国側実行委員長
- ・Jonathan M. Hall (ファシリテーター)
Assistant Professor, Department of Comparative Literature / Film & Media Studies
日米学生会議OB

【スタッフ】

秋田日米協会 鈴木力雄、松橋恭太郎、関口弘子
ガッツエンターテイメント 石垣政和 (MC)
ABS秋田放送アナウンサー 松井絵里子 (MC)
ユーランドホテル八橋 松村譲裕

【通訳】

野口由紀子
佐藤直人
藤田恵里子

【共催】

- ・財団法人 国際教育振興会、秋田日米協会

【企画・運営】

- ・第59回日米学生会議実行委員会

【特別後援】

- ・外務省、文部科学省、米国大使館、秋田県、秋田市、国際教養大学、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、社団法人 秋田日米協会、日米文化センター

【後援】

- ・秋田放送、秋田テレビ、秋田朝日放送、NHK秋田放送局、秋田魁新報社、河北新報社 秋田総局、朝日新聞社 秋田総局、毎日新聞社 秋田支局、読売新聞社 秋田支局、産経新聞社 秋田支局、日経新聞社 秋田支局

【賛助】

- ・株式会社サンプリッジ、いちごアセットマネジメント株式会社、21委員会、多逢会、国際教養大学教育振興会

【広告協賛】

- ・秋田日産自動車株式会社、株式会社秋田ニューバイオファーム、株式会社伊徳、大森建設株式会社、開発株式会社、株式会社サノ・ファーマシー、戸田鉄工株式会社、中田建設株式会社、株式会社飛良泉本舗、本庄電気工業株式会社、株式会社ヤマダフーズ、秋田陸運送株式会社、株式会社秋田ジェーシービーカード、株式会社北日本オフィスエンジニアリング、株式会社工藤興業、コマツ秋田株式会社、株式会社東北ビルカンリ・システムズ、岩田光学工業株式会社、サントリー株式会社、株式会社間組 秋田営業所、株式会社アイセス、秋田共立株式会社、株式会社秋田銀行、アキタセキエレクトロニクス株式会社、秋田ビューホテル株式会社、秋田ヤナセ株式会社、羽後電設工業株式会社、雄勝セラミックス株式会社、有限会社加賀谷新聞店、住友生命保険相互会社 秋田支店、医療法人せいとく会、瀬下建設工業株式会社、タプロス株式会社、辻兵商事株式会社、東京海上日動火災保険株式会社 秋田支店、由利工業グループ、株式会社ニューフォト北日本、北日本興業株式会

社、株式会社共立エーティーエス、株式会社栄田電器、有限会社佐藤製作所、株式会社三栄機械、高尾工業株式会社、株式会社山二、株式会社秋田新電元、株式会社相場商店、株式会社大久保製作所、小松ばね工業株式会社、JUKI電子工業株式会社、東北電力株式会社、秋田アーバンビルド株式会社、羽後設備株式会社、天寿酒造株式会社、向井建設株式会社 東北支店秋田営業所、両関酒造株式会社

【メッセージ】

＜麻生外務大臣＞

第59回日米学生会議秋田フォーラムの開催に当たり、日本国外務大臣として、日米両国の学生の皆さんを心より歓迎いたします。

ワシントンにあるJapan-America Student Conference (JASC：日米学生会議)の事務局には、戦前に撮影された1枚の白黒写真が、今なお大切に保存されていると伺っています。1人の学生を写した、今は色褪せた写真です。その時代故、栄養状態が良くなかったのでしょうか、痩せすぎたその青年は、白いシャツと、折り目の取れたズボンという質素そのものの格好をしています。表情には、わずかに含羞を湛えた笑みが読み取れるということで、おそらくは後年、私自身、お近く接した、あの馴染み深い風貌を彷彿させるものでありましょう。青年とは、宮澤喜一元総理でありました。宮沢元総理は、1939年の第6回と、1940年の第7回、すなわち戦前では最後に当たる2回の日米学生会議に参加した、草分けの一人です。もしご健勝であれば、どれほどか現役学生諸君の輪に加わり、共に語り合いたかったであります。惜しむらくは過ぎる6月28日、世を去られました。戦後の日米関係に大きな足跡を残された政治家が、もはやこの世におられないことを、改めて悼むものであります。

日本と米国に、歴史は時として過酷な試練を課しました。しかし潜り抜けてみると、絆は必ず強くなりました。今や志と価値観を共にする両国は、21世紀の世界に安定と平和をもたらす確固たる礎をなしています。けだし宮澤元総理を始め、日米学生会議に集った若者こそが、両国関係に今日の姿をもたら

すうえで大いなる貢献をなした人々であったことを、私は信じて疑いません。

日米学生会議は、太平洋をまたぐ学生交流として最も長い歴史をもつ、他に類例のない集まりです。先人たちの築いた伝統を継ぐ者として、今日の参加者学生諸君にはぜひ、誇りを高くもっていただきたい。日米が相共に、いかなる善をなし得るかを考えていただきたい。そしてなによりも、長く続く友情を豊かに育ててほしいと願うものです。

＜伊吹文部科学大臣＞

第59回日米学生会議秋田フォーラムの開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

日米学生会議が、本年ここに記念すべき初の秋田開催を迎えられましたことに対し、本日参加の皆様、更にこの会議を支援された関係者の皆様に心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議が1934年以来、世紀を越えて今日まで引き続いていることを喜ばしく思います。日米両国は戦後半世紀にわたり共通の価値観の下、世界でも他に類を見ないほどの強固なパートナーシップを築き、世界平和の維持と発展に貢献して参りました。そのような歴史の中で、過去の会議参加者が日米両国において大いに活躍されていることを見るにつけ、次世代を担う若者の交流の重要性を強く認識させられる次第であります。

学生の皆さんが、まさに使命感を持って日米関係のあり方を考えていくことは、皆さんの将来にとっても、また日米両国の将来にとっても非常に有益なことであると考えます。皆さんが自由闊達な意見交換を通じ、今後の日米関係、更には国際社会の発展に貢献して下さることを大いに期待します。



秋田日米協会主催
レセプションにて、
なまはげと

サイトコーディネーター後記

川口耕一郎

JASCと秋田。JASCを知れば知るほど、なぜ秋田をサイトの一つとして選んだかを疑問に持つだろう。東京、京都、広島、沖縄とここ十数年間、サイトは固定されていた。59回でも、当初はその4サイトに行くことを考えていた。

「日本の風情、伝統を日米の学生に体感してもらいたい。」この一年間、秋田を選んだ理由を幾度となく問われる度に使ったこの言葉。最初は後付けの理由に過ぎなかった。心から発した言葉ではなかったように思う。秋田に対する期待感より、責任感、いや重圧に近いものから最初の半年近くは準備を進めていた。

思えば、去年の9月。会議の事務局長である伊部氏より、秋田開催決定の旨を伝えられた。学生の方では東京、京都、広島、そして沖縄ではなく鹿児島で会議開催を開きたいという合意が出来ていた後だったので、正に寝耳に水であった。最初は、私も含めて連日事務所を訪れ伊部氏を説得したが、彼の意見は変わることはなかった。JASC初の北東北で開催する意義、世界遺産白神山地に行く意義、そして受入れを承諾して下さった国際教養大学の広大、かつ充実したキャンパスに滞在する意義。伊部氏の熱弁を聞く度に、私の心が揺れ動いていった。山形出身で、秋田にも数回行ったことがあったので、故郷の東北でJASCを開催したいという思いが日に日に高まり、他の実行委員を説得する決心が付いた。

しかし、秋田開催が決定するまで、さらに一ヶ月近い時を要した。鹿児島に決まっていたこともある。だが、それ以上に秋田で何をするのか。地味なサイトで応募者が集まらないのではないかという実行委員からの問い。彼らにとっては何気ない一言だったと思うが、その時はなぜか生まれ故郷の東北を馬鹿にされたように聞こえた。恐らく実行委員は全員、渋々納得したのであろう。いや、正直私も彼らを説得しながら迷いがあった。秋田にコネもなく、地理に詳しいわけではない。JASCに適正かは分らない。確かに沖縄などに比べ、観光色は希薄になる。担当

秋田訪問の米学生

「もてなしに感謝」

「日米学生会議」成果報告



フォーラムでは講演会や交流会が催された。秋田市中通2丁目の秋田ビューホテルで。

『朝日新聞』8月9日
「秋田訪問の米学生」

山形県立大学から、新設された国際教養大学へ、秋田訪問の米学生が、秋田ビューホテルで、フォーラムを開催した。米学生は、秋田の歴史や文化について、興味を示し、秋田の自然や観光資源についても、積極的に質問応答があった。米学生は、秋田の歴史や文化について、興味を示し、秋田の自然や観光資源についても、積極的に質問応答があった。

日米学生会議フォーラム

明石氏 国際貢献訴え



最終日 県内高校生と交流

県内の高校生と交流する日米学生会議の参加者。秋田市のホテルで。

秋田市のホテルで、日米学生会議の最終日。県内の高校生と交流する日米学生会議の参加者。秋田市のホテルで。

『秋田魁新報』8月9日
「日米学生会議フォーラム」

フォーラムでは、本県出身の明石康元国連事務次長が「今日における日米のパートナーシップの重要性」と題して講演。続いて学生時代に同会議に参加した脳科学者茂木健一郎さんが講演し、「日本の高校では偏差値の高い大学に入ることが最優先だが、米国ではどんな大学にも優秀な学生がいて大学を単純に比較できない」と語った。その後、米国の学生らが八幡町など県内でホームステイした体験や卒業（かんとう）まわりの感想を発表した。

日米の相互理解深める 秋田で学生フォーラム

日米の学生が相互理解を深める「第59回日米学生会議秋田フォーラム」が8日、秋田市内で開かれ、日本人学生35人、米国人学生36人が参加した。同会議が本県で開催されたのは初めて。フォーラムでは、本県出身の明石康元国連事務次長が「今日における日米のパートナーシップの重要性」と題して講演。続いて学生時代に同会議に参加した脳科学者茂木健一郎さんが講演し、「日本の高校では偏差値の高い大学に入ることが最優先だが、米国ではどんな大学にも優秀な学生がいて大学を単純に比較できない」と語った。その後、米国の学生らが八幡町など県内でホームステイした体験や卒業（かんとう）まわりの感想を発表した。

学生メンバーは県内の高校生も交えて、伝統文化について話し合い、相互理解を深めた。県立秋田南高校2年、木元紫月さん(17)は、「普段接することのない他県やアメリカの学生と交流できて良かった。『秋田を気に入った』と言ってもらえてうれしかった」と話していた。



英語と日本語を交えて会話する県内の高校生と米国の学生（秋田市内で）

『読売新聞』8月9日「日米の相互理解深める」

サイトを決めた日に、一緒に秋田サイトコーディネーターになった菅家さんの厳しい表情が、その後の険しい道のりを象徴するかのようであった。

やはり、実際に準備を始めると進展がなかった。ホームステイをやりたいはいいが、コネもない。依頼の仕方も分らない。秋田県庁にでもお願いをなさいと伊部氏より指示を受けるが、担当者が誰なのかも分らない。1月まで秋田に関係する様々な方にお会いしたが、具体的には何も進まなかった。

そんな窮地を救って下さったのが、国際教養大学の担当者である辻田さんだった。秋田サイトの一週間の予定表に助言を下さり、各企画の実現のためにその方面の担当者を紹介して下さった。そして、2月に初めて秋田に出張に行った時、やがてお世話になることとなる秋田県庁、山本地域振興局、秋田市役所、秋田魁新報社、そして国際教養大学中嶋学長と明石康氏との面会を私達二人のために設けて下さり、一日中付き添って下さった。今思えば、あの日の面会がなければ、ホームステイも、竿燈祭りも、そして秋田フォーラムも全て実現していなかった。

2月の出張の際、もう一つ大きな出会いがあった。連れられたのは、秋田一のホテルである秋田ビューホテル最上階のVIPルーム。夜行バスの旅の後、秋田でただただ頭を下げ続けてきた私にとって、シャンデリアの光の眩さには圧倒された。面会の相手は秋田日米協会会長、由利工業グループ代表の須田精一氏。そして開口一番に、

“Are you an optimist or a pessimist?”

会長の堂々たる風貌に威圧感すら覚えていた私にとって、想定外の質問に答えるだけの余裕はなかった。その後30分間近く、JASCの話はあまりしなかったように思う。若者たるもの、optimistでなければ成功しないと。JASCの委員長もそうではないのかという問いに、作りかけの笑顔で返すしかなかった。それまでの秋田サイトに対する守り、逃げの姿勢を見透かされていたのであろう。部屋を退出される時に、「必要な協力は何でもします」と言われた時には、安堵感と同時に、自分の弱さに気付かされ

た。

この2月の出張が大きな転機だった。辻田さんのご紹介で、白山山地周辺の自治体である能代市、藤里町、八峰町でホームステイを行う話も進展するようになった。そして、須田会長の命でJASC担当となった由利工業の松橋さんとは、会議最終日にレセプションを計画する話が進んでいた。

2回目の出張を控えていた、2月下旬。参加者の選考を契機に、会議の理念に関して実行委員で意見が割れた。感想文に詳細は言及してあるが、「社会発信」をどこまで具体化させるかで委員が二分された。一方では、一般公開のフォーラムの重要性を主張するもの。他方では、フォーラム開催の困難を現実的な視点から説明するもの。前者に属していた私は、それを契機に自分のサイトである秋田でフォーラムを開きたいと考えた。経済問題でもない、政治問題でもない。JASC、いやそこで輝きを放つ参加者72名を社会に発信するフォーラムを開催したい。秋田サイト最終日に開催した「秋田フォーラム」の原点はこの時であった。覚えたての企画書作りを早速実践に移し、有識者による日米関係の講演、OBによるJASCの歴史についての講演、59回デリゲートによる秋田サイトの総括、秋田サイトのビデオ上映、そして有識者と学生によるパネルディスカッションを含んだ「秋田フォーラム企画書」が完成した。自分で読んでも非現実的な企画書。でも、実現させたかった。本気で「史上最高」の回に相応しい、社会発信を59回で達成したかったから。

しかし、フォーラムをやると言っても、集客のための広報の術もコネもない。講師も決まっていない。何よりも、何十万、いや何百万というフォーラム開催の費用をどのようにして捻出するか。2回目の出張の際、朝迎えに来て下さった松橋さんに恐る恐る聞いてみた。秋田日米協会の方で、フォーラムの協力してくれないかという問いに、松橋さんは驚いた表情もせず、「会長もそのつもりです」と。出張の全日程を終え東京に帰る直前に、松橋さんから須田会長の伝言を聞かされた。

「金の心配はするな。」

それは、秋田サイトに対して守り、逃げの姿勢でいた自分を変えてくれた一言。“pessimist”ではなく“optimist”に変わった瞬間だった。この秋田の地で、JASCの歴史の中で「史上最高」規模のフォーラムを実現させたい。以後、毎月夜行バスによる秋田出張を重ねた。私に代わり、3月から「秋田サイト総責任者」になった菅家さんの働きで、懸案事項であったホームステイ先も見つかり、国際教養大学での滞在も詳細まで詰めることができた。そして、秋田フォーラムに関しては出張以外でも、日々彼女と松橋さんとが連絡を取り合っていた。財務、広報活動は秋田日米協会が担当し、フォーラムの中身は私達の方で企画を進めた。松橋さんだけでなく、秋田日米協会の鈴木事務局長、関口さんにもご協力いただき、準備は進められた。

フォーラム当日。300人近い来場者に加え、テレビ、新聞といった報道関係者も多くみられた。最後のパネルディスカッションでアメリカ側委員長のモーガンと菅家さんの二人がJASCの意義について、明石氏、中嶋氏、大井氏といった有識者の方々と対等に議論を交わしていた時、スタッフとして会場後方に待機していた私は必死に涙をこらえていた。議論に耳を傾け、頷く来場者の一挙一動を見守りながら、JASC史上最高規模の「秋田フォーラム」を完成した喜びに浸っていた。

秋田では、ホームステイ、竿燈祭りなどで日本の風情、伝統を体感でき、かつ分科会や自由時間を通して、参加者間の「絆」を築くことができた。そして、秋田フォーラムで会議のもう一つの軸である、「社会発信」を達成することができた。実行委員長としては悔いが残ることもある。しかし、秋田サイトコーディネーターとしては十二分に力を出し尽くすことができた。それも、須田会長の一言で、“optimist”に生まれ変わることができ、地元根付いた会議を行うことができたからであろう。

最後になりましたが、第59回日米学生会議秋田開催に際し、多大なるご協力を賜りました関係者の皆様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。あ

りがとうございました。



フォーラム会場で、秋田日米協会の松橋さんと

菅家万里江

このたび秋田サイトを非常に意義のある充実したサイトにすることが出来、大変嬉しく思います。そして、そのようなサイトにすることが出来たのも、ひとえにご協力いただいた諸団体、諸自治体の方々のおかげだと心より思っております。本当にどうもありがとうございました。

さて、日本側実行委員長の川口と二人三脚でこのサイトをコーディネートしてきたため、川口のサイトコーディネーター後記にほとんど私が言いたいことが集約されています。そのため、重なる部分は省かせていただき、川口が言及していないホームステイ及び国際教養大学滞在について述べさせていただきます。ゆえにこの文章内でお礼を言わせていただくことは出来ませんが、辻田様、秋田日米協会の方々には心より感謝申し上げていることをここに銘記させていただきます。

秋田サイトでのホームステイについては、秋田についてあまり知識が無かったこともあり、まったく手探り状態から出発した。しかし、辻田様ご紹介くださった、山本地域振興局の古井様が、いくつか候補地をご提案くださり、その中から、白神山地に近く日本の自然が満喫できる場所、ということで、能代市、藤里町、八峰町の3自治体を決定した。

ホームステイ実現への第一歩は、各自治体への御挨拶周りから始まった。古井様のご協力の下、刺すような冷たい北風と豪雪に悩まされながら、一つ一つ自治体を回り、市長、町長をはじめとする自治体のトップの方々及び、実際にコーディネートをお手伝いしてくださる方と面会し、直接ホームステイをお願いさせていただいた。ホームステイの前例のない自治体では、ホストファミリーの募集などの懸案事項に難しい顔をされる場所もあったが、あらかじめ古井様の方からお話を通していただいたこともあり、ホームステイ実現に向けたご協力を快く引き受けてくださった。それからは、ホストファミリーの募集、連絡等は、すべて自治体の方が行ってくれた。会議直前まですべてのホームステイ先が決定せず、時々不安に思うこともあったが、自治体の方々の全面的なご協力のおかげで参加者72名のホームステイ先を確保することが出来、またホストファミリーへの連絡ミスもなく、非常にスムーズに企画を進めることが出来た。

またホームステイ中の白神山地散策に関しても、自治体の方の全面的なご協力を得た。特に、能代市役所の工藤次長が日曜日を返上して私たちを白神山地に連れて行ってくださり、実際のコースとスケジュールを手伝ってくださった。工藤様には心よ

り感謝申し上げたい。あいにく、当日は台風が上陸し、雨天となってしまったが、その際のスケジュールの変更に関しても、自治体の方がリードして下さったおかげで、白神山地を体験する企画をキャンセルすることなく、また違った形で秋田の自然と伝統を楽しむ機会を得ることが出来た。ご協力いただいた方々には心より御礼申し上げます。

また、国際教養大学滞在期間に関しても、非常なご協力を得ることが出来た。施設に関するオリエンテーション（LANの貸し出し、国際教養大学の施設やバス等の情報をまとめたブックレットの作成などを含む）、ベジタリアンや食物アレルギーを持つデリケートへの対応、新設の寮の使用、24時間オープン図書館の利用など、私どものために全面的に施設を開放して下さり、また多くのスタッフの方にご協力いただいた。全面的なバックアップ体制をとっていただいたおかげで、参加者がゆったりとした気持ちでお互いの絆を深め、また、分科会をより充実させることが出来た。国際教養大学の方々には、心より感謝申し上げたい。

最後になりましたが、秋田サイト開催のためにご尽力くださった方々に改めて御礼を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

広島サイト

8月9日～8月12日

サイトコーディネーター

松田浩道 廣瀬裕子 Alissa Marque Casey Samulski

デリゲートスタッフ

渡辺恭子

広島サイトスケジュール

- 8月9日(木) 広島着
- 8月10日(金) 分科会活動
宮島訪問
お好み焼き体験
- 8月11日(土) 日米広島学生会議 1日目
広島での学生による平和公園ガイド
松原美代子氏による被爆体験講話
平和記念資料館見学
市内散策
- 8月12日(日) 日米広島学生会議 2日目
平和と核についての班別討論
シンポジウム発表準備
一般公開シンポジウム

※宿泊場所：ホテルサンルート

広島サイト理念

核問題は国際政治において非常に重要な位置を占め続けているし、日米の原爆投下に対する歴史認識の差は依然として大きい。

広島では、現地からの学生を27名募集し、地元が開かれた形で広島の学生とともに平和学習と討論を行うことを目指した。「平和の重要性を再認識し、平和を祈る」という従来の平和学習のスタイルから一歩踏み込んで、実際に平和を実現するために日米はどうすべきなのか、我々はどう行動すべきなのかという現実的な側面にも議論が発展するよう準備を重ねた。さらに、講演が中心となる従来のフォーラムとは異なり学生の発表を中心に置き、学生の主体性が存分に発揮できるよう工夫を凝らした。

真剣な討論と一般公開のシンポジウムとともに、宮島では美しい景観のなかで親睦を深めるとともに、お好み焼きを実際に自分たちで作って味わう企画も行い、あらゆる側面から広島を経験し、友情を深めることを意図した。

原爆投下めぐり議論

広島で日米学生会議開幕

日米の学生が多様なテーマで意見交換し、相互の価値観の対立も経験する理解を深める「日米学生会議」(国際教育振興会主催)の広島会議が十日、広島市で始まった。

七十二人は初日、中区の広島国際会議場などで分科会を開いた後、宮島を観光した。実行委員長の東京大三年川口耕一朗さん(21)は「広島で

は原爆投下をめぐる日米の価値観の対立も経験すると思つた。互いの違いを認め合つた上で平和を議論したい」と意欲を語つた。

十一日は地元元大生ら約三十人を交え、原爆資料館を見学するなど平和学習をする。十二日午後二時半から資料館東館のメモリアルホールで開く。入場無料。

学生会議は一九四三年からほぼ毎年、日米交互に開催。今年は、七月二十六日から東京と秋田で国際協力や日本文化について討論して

きた。十三日に京都に移動し、二十日まで会議を続ける。(森田裕美)



平和記念公園でミーティングをする日米学生会議メンバー

『中国新聞』2007年8月11日「広島で日米学生会議開幕」

8月9日 広島着

関西空港からバスで長時間かけ、広島に入ったのは夜遅くであった。レストランで夕食を取った後、徒歩でホテルへと向かった。途中原爆ドームの横を通った際の受け止め方は各自それぞれだったようだ。

8月10日 分科会活動、宮島訪問、お好み焼き体験



宮島での参加者たち

お好み焼き体験

オタフクソース、お好みフーズ、JA広島、キリンビール、三三三（みささ）さんの協力により、お好み焼き体験を行った。日本側で行ったオタフクさんの事前研修の成果も活かし、本格的な鉄板を使っての広島風お好み焼きを堪能した。同時に、参加者の親睦を深める非常によい機会となった。



作り方を教わる参加者

【参加者日記】

今日はフェリーに乗って宮島に行きました。基本的に終始自由行動だったので、厳島神社に行ったり、美術館を見学したり、川原で遊んだり、鹿を追い掛け回したりと、みんな思い思いの時間を過ごしていました。ちなみに私は昔ながらの商店街を歩きつつ、広島の名産である牡蠣やもみじまんじゅうを試食しました。そして、晩ご飯には「三三三」というお好み焼き屋さんで、広島風お好み焼き作りを体験しました。まず店の人が焼き方のお手本を見せてくれて、その後、一人一枚ずつ挑戦しました。見栄えはイマイチだったけど、みんなで作ったお好み焼きの味は格別でした。（佐藤逸美）

日米広島学生会議 8月11日～12日

広島側参加者

阿部真実	広島女学院高校	1年
栗野真由子	広島女学院高校	1年
浦田真穂	広島女学院高校	1年
小田康弘	広島学院高校	2年
落合由里	広島女学院高校	1年
梶川直樹	広島市立大学	3年
串岡理紗	広島女学院高校	1年
久保田千尋	広島市立大学	2年
小林可奈	大阪外国語大学	2年
小林萌子	京都大学	1年
佐藤未希	広島市立大学	3年
清水勇佑	広島学院高校	2年
新宮清香	東京大学	2年
高井麻里子	広島市立大学	3年
高松麻実子	広島市立大学	4年
寺澤智弘	広島学院高校	2年
中村英一郎	広島大学	2年
平田仁胤	広島大学 博士課程後期	2年
平原舞子	広島女学院高校	1年
堀越未花	広島女学院高校	1年
松浦花穂	広島女学院高校	1年
丸橋綾子	広島女学院高校	1年
村上有佳	広島大学	4年
安永研人	広島学院高校	2年
矢野成美	広島大学	3年
吉本侑加	広島女学院高校	1年
渡部寛史	広島学院高校	2年

8月11日 日米広島学生会議 第1日

広島の子生による平和公園ガイド

広島から参加した学生さんに平和公園ガイドの練習をしていただき、当日英語で班別に分かれてガイドを行う試みを行った。普段ボランティアガイドとして活躍なさっている山根美智子さん、清水恵子さん、住廣寿子さんには6月からガイドの練習のアドバイスをしていただき、広島側参加者はグループごとに練習を重ね、当日を迎えた。



広島の子生によるガイドに聞き入る日米学生会議参加者

被爆体験講話

平和公園のガイドの後、松原美代子さんによる英語での被爆体験のお話を伺った。松原さんは旧制女学校一年生の時、爆心地から東南1.5キロメートルの鶴見町で、建物疎開の後片付け作業中に被爆され、その経験をもとに国内外で証言活動を続けてこられた。海外で英語での証言も行ってこられている。

(ウェブサイト：ヒロシマの心を伝える会

<http://www.hiroshima-spirit.jp/ja/tsutaerukai/miyoko/miyoko.html>)

【参加者日記】

“Please let me go, I have to help my son!”
“Please tell the teacher I came here…” 62年前のこの街で起きた惨劇の中で聞かれた悲痛な叫び声を再現し、会場の私たちを震撼させたのは、「ヒロシマの心を伝える会」代表の松原美代子さん。8月11日、広島平和記念館にて、私たちは彼女から原爆の体験

談を伺った。

あの日爆心地から1.5キロの場所で被爆した松原さんは、世界中のあらゆる場で平和への希求を訴え続けてきたという。歴史を後世に残す行為には記録と記憶の二通りがあると言われる。歴史は国家や立場によって見方が異なり、また平和の定義も人によって様々で当然だが、特に私たちのような“戦争を知らない子供たち”が過去を記憶する上で、今回のような体験談に触れ、その語り部にとっての「真実」を一つでも多く心に留めることが必要だと感じた。会場をあとにして地上に出た瞬間、それまでとは違う広島が見えた気がして、日米両国の学生がこの地に立っていることの意義深さを改めて実感したのは私だけではないはずだ。
(篠原由香里)

8月12日 日米広島学生会議 第2日

以下の10の班に分かれ、午前中にディスカッションを行い、成果を午後のシンポジウムで発表した。講師のジェイコブス先生に講評をいただいたあと、第二部では各班が作った模造紙を会場に展示し、一般来場者を含めて自由に意見交換や交流を行った。

班別のテーマとリーダー

※かっこ内はリーダーを示す

GROUP 1: Education of the Atomic Bomb: Lessons from Hiroshima and Mr. Kyuma

(Joshua Schlachet 加納康宗)

Sample Questions: What lessons should we take from Hiroshima? How should we evaluate the Japanese Defense Minister's remarks that Hiroshima "could not be helped?"

GROUP 2: Ethics of scientists in development of atomic bomb

(Joshua Turner 川口耕一朗)

Sample Questions: Should scientists concern themselves with the political effects of their research?

GROUP 3: The way toward nuclear nonprolifera-

tion and disarmament

(Casey Samulski 山本詩乃)

Sample Questions: What do you think about Japan's Peace Constitution? How can the global community encourage states like India, Israel and Iran not to develop nuclear weapons?

GROUP 4: Relevance of nuclear deterrence in today's world

(Nancy Yang 古屋佑樹)

Sample Questions: Are nations with nuclear weapons less likely to go to war with each other? How does North Korea/Iran's desires for nuclear weapons affect international security?

GROUP 5: Difference between US and Japan's views about atomic bomb

(Samantha Scully 金大鐘)

Sample Questions: How have students been taught about the atomic bomb in the US and Japan? What are the differences between US and Japanese textbooks about the atomic bomb?

GROUP 6: Justifications of and arguments against dropping the atomic bombs in Japan

(Danielle Vokal 上田 來)

Sample questions: What do Japanese and Americans think about nuclear weapons today? Do you view nuclear weapons as an offensive or defensive weapon?

GROUP 7: Japan's nuclear armament and the Security Treaty between Japan and the US

(Tsz Kiu Liu 上野良輔)

Sample questions: What is collective defense? Should Japan have the right to collective defense?

GROUP 8: Controversy surrounding Article 9

(Bryan Beaudoin 渡辺恭子)

Sample questions: What are the pros and cons of Article 9? What are the possible effects on US-Japan relations if Article 9 is revised?

GROUP 9: Differing stories around the atomic bomb and current views about nuclear weapons

(Bethany Marsh 間嶋絵里)

Sample questions: What are the differences between the American and Japanese stories about Hiroshima and Nagasaki? How do Japanese/Americans view nuclear weapons today?

GROUP 10: The right to develop nuclear weapons

(Ryan Urie 高井竜輔)

Sample questions: Should a nation have the right to dictate to other nations their nuclear weapons policy? What can Japan do today to help control international nuclear proliferation?



第二部で一般来場者と活発に意見を交わす参加者



発表のために用意したパネルの前で

【参加者日記】

戦争の面影を今も刻む街、広島。今日はその広島滞在の最終日。私たちは広島などの学生を交え日米広島学生会議と称し、地元の方々を巻き込んだ大きなシンポジウムを開催した。総勢100名を超える参加者が9つのグループに別れ、それぞれ核に関するトピックについて議論し合い、シンポジウムでプレゼンテーションを行うという形だ。

議論に費やせる時間は当日の午前中だけであり、必ずしも十分な議論ができたとはいえないだろう。ここでプレゼンテーションしたことが現在の世界の核状況に直接的な影響を与えとも思えない。しかし、私たちは確かに広島という街で、核についての知識を共有し、真剣に考え、それぞれの意見を述べたのである。このことがどれほど世界に対して影響をもてるのか。この経験が種となり、皆の心の中に息づき、世界に二度と「広島」が生まれえないための何か形成されることを願ってやまない。

(高野恭平)

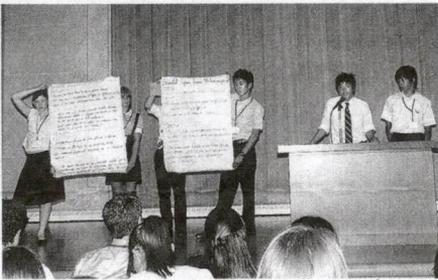
広島の見点から—

広島県出身で学生広報や企画面で活躍した参加者、また、広島からの参加高校生の感想文を掲載する。

第59回日米学生会議参加者
広島市立大学3年 渡辺恭子

長時間のバス移動の末、私たちは、夜だというのに蒸し暑さが残る広島に降り立った。私にとっての広島は、平和を考えるきっかけを与えてくれた土地であり、そして何より緑に溢れ癒しを与えてくれる場所でもある。JAScerの皆とこの地を訪れる事が出来る喜びの一方で、私は不安だった。それは、私がヒロシマを国際政治の力関係に基づく理論よりも、原爆が投下されたという事実に伴う悲しみや苦しみなど、湧き出る感情でしか捉えられていなかったからだ。すでに、秋田のRTディスカッション中に、「広島や長崎は平和のためのgood sacrificeだった」という、肯定的な意見に衝撃を受けていたこともあり、これ以上、広島を否定されるのが怖いという感情があった。実際、広島でのRTディスカッションでも、「原爆投下がなければ広島は今の様に平和を訴えていなかっただろう」という発言も見られた。私のうがった見方かも知れないが、今の広島で平和を切に願い活動している人たち、そして今も苦しんでいる被爆者の人たちの想いを踏みにじられた様に感じた。しかしながら、自分の中で整理できず言葉に出来ない感情や、反論できない不甲斐なさから何も言えないまま泣いてしまった。このままではいけないと思い、怖いながらもそのアメドリと納得がいくまでディスカッションをした。その後、広島や京都などでそのアメドリと話をすることで私たちはお互いが合意している平和創造の部分、相反する創造への道のりなど様々なことを少ないながらも共有できた。平和という言葉には実に多くの意味があり、同じ平和を目指しながらもその過程が異なるというだけで、対立が生まれる事もある。しかし、分かり合えないことも沢山あるけれど、大事なものは、分かろうとする姿勢、また色々な異なる価値観がある事を認識する事だと私はJASC、そして広島を通して強く感じた。秋田で迎えた8月6日から平和の願いを

日米学生核と教育討論 広島で



日米の学生が核兵器廃絶、米広島学生会議シンポジウムで平和と教育の在り方について意見を交わす様子。写真：国際教育振興会

核と平和をテーマに提言する学生
主権が十、広島市中区原爆資料館東館と訴えた。
であった。広島や東京、米国の大学生ら計約百人が、事前に十班に分かれて討議した内容を提言も交えて班ごとに発表した。
「原爆の教育」と題して討議した班は、原爆投下に関する両国の教育の現状に触れ、「若い世代が原爆を過去のものと捉え、世代間で認識に開きがあることが問題」と指摘。「北朝鮮は核保有国が増える中、原爆を今、そして将来の問題として考えるよう教育を改善しなければならぬ」と訴えた。
核不拡散条約をテーマに討議した班は「まず核を減らすことを優先すべきだ」と指摘。米国の指導力が不可欠とし「自ら核兵器を減らし、模範を示すべきだ」とも強調した。「貧しい人々を助けるべきで核武装で平和は築けない」「八月六日を米国でも平和を考える記念日にしてはどうか」との意見も出された。(冊日隆彦)

『中国新聞』2007年8月14日「広島で日米学生会議シンポ」

こめながら作った折鶴を、最終日の夜、サダコの像へみんなで捧げた。「鶴の折り方教えてくれる？」の一言から始まり、折り慣れない難しさに四苦八苦しながらも真剣なまなざしでもくもくと折っていたアメデリ。RTの休憩時間、ホテルのロビー、飛行機の中、様々な場面で協力しながら折鶴を創っている光景はまさに平和を肌で感じる瞬間だった。日米学生会議という、社会的な利害関係なしに、お互いの考えや感情を率直にぶつけ合える環境で、ヒロシマ、そして平和について考えられたのは非常に忘れがたい経験となった。

広島女学院高校1年 堀越未花

私は今回初めて日米学生会議に広島の学生として参加させてもらい、とてもたくさんの事を学び、経験させてもらいました。

以前わたしは学校で所属している有志グループの先輩方と核についてディスカッションしたことがあり、とても興味のある内容だったため今回もいろいろな人のいろいろな視点からの考えを聞いてみたいと思い、「核抑止論の効能」についてのトピックに参加することを希望しました。希望通り、核抑止論のグループに入ることができたのですが、自分で調べたりグループの人と打ち合わせをしたりしていくうちに、ちゃんと自分の意見を英語で伝えられるかどうか不安になってきました。実際にいろいろな英語の資料を送っていただいた時も、その文章を理解することが出来なくて前日まで逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。そんな中12日を迎えたのですが、前日にみなさんと半日過ごしたということもあって、変に構えることなく楽な気持ちで会議に参加することが出来たと思います。

正直、聞き取るのに精一杯で自分の考えを英語で十分に伝えるということは出来ませんでした。が、大学生の方々が私が日本語で言ったのを英語で訳してくださいだったので自分の意見をみなさんに伝えることが出来ました。アメリカの学生の方が指をパチパチして賛成して下さったときは嬉しくてちょっと泣きそうになりました。また同時に、「自分の意見を自分の口から伝えられたらいいんじゃないかなあ」と

強く感じました。

そして、いろいろな意見を聞いていると核抑止論についての考え方はみんな違ってみんな平和を想い、核が使われてしまうような世界がもう二度とこないようにと願っているということを強く感じました。

高校の先輩方とディスカッションしたときには聞けなかったような意見や考えをたくさん聞くことができ、私は今まで偏った考えしか持っていなかったのかもしれないと気づかされたと思います。今までは核抑止論に対して「核を持って核を制す」というイメージしかなかったし、それをただ否定するだけでしたが、今すぐに核をなくすのは難しいことだと思うので、まずはどの国も核を使わないようにする方法を考えることから始めていく必要があるのだと思いました。

日米学生会議の最後に、ディスカッションした内容を皆さんの前でスピーチさせていただく機会を与えてくださり、とっても緊張したけどいい経験になりました。緊張しすぎていっぱい間違えてごめんなさい。

また、初日に行われた平和公園内のガイドでは私のカタコトな英語を皆さんが真剣に聞いてくださったので感謝の気持ちでいっぱいです。少しでも伝えられたことがあったらヒロシマの学生として嬉しいです。

11日が来るまでずっと不安に思っていました。日米の大学生の方々がたくさんフォローして下さり優しく接して下さったので、2日間とても楽しく過ごすことができました。また、これからの進路に役立つお話や大学生活の貴重なお話を聞くことができて私自身、すごく収穫の多い2日間になりました。まだまだ夏休みの宿題は残っていますが、今回この学生会議に参加させてもらったことは宿題よりも多くのことを学べたと思います。とても楽しかったです。大学生になったらぜひJASCに応募したいと思いました。2日間、ほんとうにありがとうございました (^ω^)

広島女学院高校1年 粟野真由子

今回、日米学生会議に参加させていただいて本当にありがとうございました。たった2日間だけでしたが、多くの事を考え、また吸収することができ、とても有意義な2日間を過ごせたと思っています。これも、学生会議の皆さんが私たちに優しく接してくださったおかげだと思っています。1日目の碑巡りの際、全くと言っていいほど、碑のことについて伝えられませんでした。しかし、そんなときも、私たちの話を真剣に聞いてくださり、またフォローしてくださって、本当に嬉しかったです。

このように楽しく過ごせたことも、有意義な時間を過ごせた理由のひとつですが、なによりも核について、アメリカの方や、他県の方と話し合えたことが、私にとって本当にいい経験となりました。

いままで、私は一人ひとりの考えの持ち方を変えられることによって、平和な世界をつくることができると思ってきました。また、友達と話し合っても、みんな同じような考えで、意識を確認しあう、といった感じでした。

でも、今回は違いました。核廃絶は不可能だという意見や、テロリストなどから身を守るためにも、核は必要だといった意見を聞きました。いままでに自分の耳でそういった意見を聞いた事がなく、またそのような方法で世界平和が作り出せるのか？という疑問を持ちました。でも、その意見に納得する自分がいて、とまどってしまい、考えをまとめることができませんでした。この経験は、まだ平和についての考えが未熟な私を刺激してくれました。

今でも私の考えはしっかりとしたものではないと思います。でも、やっぱり核は廃絶していくものだと思います。ヒロシマの悲しみを繰り返さずしてほしい。そしてそのためには、やはり核廃絶が必要だと思います。

このような平和についてより深く考えるきっかけとなり、参加させてもらったことを本当にうれしく思っています。数年後に、今度は学生会議のメンバーとして参加したいです。今回はありがとうございました。

広島女学院高校1年 串岡理紗

まずこの会議に参加しようと思ったきっかけは、去年の8月6日をオーストラリアで過ごしたときに、8月6日への関心があまりにも薄かったことにショックを受けて、広島で起こった出来事を風化させないようにするのは、広島に住んでいる人がまず行動を起こすべきだと考えるようになったことです。特に外国人に、より理解して欲しいと思っていたところ、偶然ホームページでこの会議を知り参加を決めました。

私の班は「核抑止論」という正直普段考えたことのないことを議論しました。私自身は、「No more Hiroshima」という立場で「核と人類は共存できない」と考えていました。しかし議論をすすめていくうちに、「平和を守るために核が必要」という自分にとって新鮮な視点を知って、徐々に「核が全く無い世界」というのはもしかしたら理想であって、実際は難しいのではないかとも思いました。

ですがもちろん「核が無い世界」というのは広島さんの願いです。今回の会議で分かったことは、今後はその願いをどこまで届けられるか、そしてその願いから何が生まれるかということが大切だということです。私は地元の中国新聞の平和に関する新聞を作るジュニアライターとして、新聞やネットを通じてこの願いを発信していきたいです。そして、多くの人にもっと関心を持ってもらうのが目標です。最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の方々と、頼もしく支えてくれた大好きな班のメンバーに感謝したいと思います。ありがとうございました！

広島学院高校2年 小田康弘

広島での日米学生会議に参加して、普段は接することのできない広い世界に足を踏み入れることができたように思います。高校生のみならず大学生、それも広島だけでなく全国さらには海外に住む方々と一緒に過ごした二日間は、地元にながらの異文化体験でした。

ディスカッションでは一人一人の考え方の多様さに驚きました。広島で暮らしていると忘れがちな視

点から見た考えも沢山聞き、自分の考えの浅さに気付かされました。発言に社会的責任が伴わない学生だからこそ可能な、自由で真摯な話し合いだったと思います。

多くの大学生と話ができた、というのも私にとっては異文化体験でした。発言、振舞い、オーラ、全てが垢抜けていて、大人と子供の境界を見たようでした。大学生活についても色々と教えて頂き、大学生の世界の広さに驚きました。

広島から参加した他校の高校生と話ができたのも有意義でした。同じ街に住んでいながらこれまで話をしたことがなかったので、各校の生徒の活動を初めて聞いて、多くの学ぶべきことを見つけることができました。これからは、情報を共有したり連携して活動したりする道がないか模索しようと思っています。

二日間の会議を終えて改めて感じるのは、この会議は文字通り学生が創る会議である、ということです。企画の全てをECの方々が一年がかりでなさり、そして参加なさる大学生が本番の会議で会に意義を加える、というのは、無から価値を創造する活動であり、とても凄いことだと思います。このような会議に短い間ながら参加させて頂くことができ、そして多くの尊敬しております大学生の先輩方や高校生の友達に出会えて、大変幸せに思っています。

アメリカ側の視点から—

アメリカ側実行委員 Alissa Marque
Reflection of an AEC

As many 59th JASCers know, the word “reflection” was one of the most commonly used words during the Conference. Whether it referred to just one person digesting the day’s activities and discussions, or the entire delegation expressing their thoughts or concerns, there seemed to be a great expectation that everyone would spend much time “reflecting.”

As an EC, it was hard to reflect about the heavy issues we discussed during JASC, such as comfort

women, Pearl Harbor, the atomic bombings in Japan, and the effects of war. I often found myself in a rapid rush keeping track of who returned their hotel room keys, where the next meal was going to be served, and who was in charge of which activity. As much as I enjoyed and relished my role in the Conference, I couldn’t help but feel numb a lot of time, perhaps because I was overwhelmed by both the joy and burden of leading a group of 56 delegates with 15 of my fellow ECs.

But one night, I finally let myself step back from the daily activities of JASC and “reflect” without even meaning to do so. It had been a long day at the Hiroshima Peace Park, where local high school and college students gave JASCers a tour of the Park. Two JECs and I had spent the afternoon and early evening preparing for the next day’s Hiroshima Peace Symposium, putting together pamphlets and finalizing the details of the program.

Later that night, one JEC member and I headed back to the hotel after a series of errands including photocopying, laundry, buying bento at 7/11, and purchasing poster boards. It was a beautiful evening in Hiroshima. For once during the Conference, I found the weather bearable, and the slow walk home gave me time to mentally rest. Only then did I finally realize, and truly acknowledge, that I was in Hiroshima. My fellow ECs and I had been planning the Hiroshima site for an entire year, and until that night it had felt like a mere project with dates, times, places, and strangers. It did not feel real – even after we had reached Hiroshima, all of the planning and preparation felt like it was for something that was yet to happen. In reality, it was happening, and I suddenly realized we had arrived in Hiroshima, a city of enormous historical, and now personal, significance.

During our stroll back from doing errands to

the hotel, this JEC member and I had been talking about everything ranging from the rise of China's economy to the activities we participated in during high school and college (nerdy, I know). As we were walking along the famous river that runs through the city by the Atomic Bomb Dome and the Hiroshima Peace Park, it occurred to me how unimaginable such a scene would have been 62 years ago. A Japanese college student and an American recent graduate walking side-by-side, comparing our lifestyles, ways of thinking, and views of the world... who would have thought, amidst the destruction of the atomic bombing, the countless deaths, and unthinkable pain, that two young people like ourselves would be talking, let alone friends? The world witnessed some of the ugliest events of humanity not so long ago, and it was overwhelming to realize how far our nations and people had come in reconciling our pasts.

Throughout the Conference, many delegates asked, "I've heard JASC is supposed to be a life-changing experience - how is it supposed to be life changing?" Perhaps I am pessimistic, but I was always skeptical of the notion that JASC would truly change my life, or the life of anyone else. Sure, there are a few JASCers who discover a particular career path or a new interest in a foreign country during that special month. However, most JASCers do not experience a dramatic fireworks-like change in their lives. That night, though, I learned to be satisfied with the thought that JASC does not have to change lives to have a great impact. I am the same person I was before I attended the Conference - my career plans have not changed, nor has my general view of the world. But the moment as brief as the one I shared with this JEC member in Hiroshima will always stand out in my mind as one of my life's most memorable experiences. And for me, it's those small memories that build a life and make it

worth living. Thank you for reading.

サイトコーディネーター後記

松田浩道

初めて広島市にコンタクトを取った時のことは、今でもよく覚えている。一月、サイトコーディネーターのやり方がまだ全然つかめていない頃に、おどおどしながらまずは市長の講演依頼のために広島市に電話することにした。そこでつないでいただいた担当の方は大変親切に対応して下さり、広島サイト全般のあらゆる相談に乗っていただいた。準備のため広島を訪れた時も市長をはじめ、様々な方に紹介していただいたり、会議室探しや宿泊先の交渉を手伝って下さったりと、きめ細かくサポートして下さった。特に、広島市平和推進課の山口芳明さんの多面にわたる協力なしでは、今回のような形で日米学生会議を広島で行うことはできなかったであろう。深く感謝したい。現地で会う企業、財団、日米協会、青年会議所、新聞社、テレビ会社の方々も熱心に話を聞いて下さり、応援して下さった。広島市立大学広島平和研究所のジェイコブス先生は、ディスカッションピックの選定から企画全般に対するアドバイスまで、丁寧に支援して下さり、内容面での充実度を確保することに貢献して下さった。お好み焼き企画を全面的にサポートして下さったオタフクソース、お好みフーズさんにも感謝している。広島を訪問して準備を重ねるごとに広島の人のあたたかさを肌で感じてますます思い入れが強くなると同時に、自信を得て日米学生会議広島開催の意義について様々な思いをめぐらせた。

「どのような企画にするのが広島にとっても学生会議にとっても意義深いことになるのか」一緒に広島を担当していた実行委員の廣瀬裕子とともに考えてたどり着いた企画案は、当初は全くイメージもしていなかったものだった。広島で新たに学生を募集して、一緒に平和学習とディスカッションの2日間の活動をし、最後に学生主体の一般公開シンポジウムで議論の成果を発表する。学生募集のため新たに広報活動をして広島で説明会を開いたり、連絡を取

り続けたりとやらなければいけない仕事の量は膨大なものになるが、それでもこのような形にしたのは日米学生会議の社会的意義をめぐる自分たちなりの考えがあった。

学生会議は社会発信をテーマに掲げているが、そもそも実のある発信内容を一ヶ月で学生が作ることは極めて難しい。とはいっても、数多くの団体から賛助を受けていながら社会に対して何も還元することなく、参加者のなかだけで話し合いをすることで十分なのか。自分たちの身の丈にあった、しかもしっかりとした意義のある「社会に対する開かれ方」を見つけ出したかった。その自分なりの答えが、今回の広島での企画である。

訪れる現地の学生に積極的に関わってもらい、日米学生会議のデリゲートとともによい刺激を与え合う。これこそ、社会からも求められ、自分たちにふさわしい社会への価値還元のある方ではないか。第59回学生会議のテーマにある“Advocate”や「次代の創造」の具体的な方法として、より多くの学生を開催地で巻き込み、しかもシンポジウムを一般公開にして自分たちの発表を中心に据えた背景にはこのような理念があった。

当初、シンポジウムにおいて社会にインパクトを与えられるような新しいヒロシマのメッセージを学生の視点から世の中に発信することまで目指していたことは事実だ。時間的制約と学生としての限界から、そこまで目標が達成できたかといえば残念ながら達していない部分が多く残る。しかし、長期的視野に立った教育効果という意味では、十分に意義のある企画に仕上がったのではないかと思う。

広島において協力して下さった数多くの方々、そして会議に参加して一生懸命ガイドの練習とディスカッションの準備をして下さった27名の学生の皆さんに、改めて感謝したい。

廣瀬裕子

人間として一度は訪れるべきところ。そんな思いから第59回会議の開催地として広島を提案し、準備を開始した。実質三日間という日程の中で広島のと文化を楽しみ、広島の平和に対する主張を学び、

それ以上に平和というテーマを自分に結びつけ、自ら考えるきっかけをどのように提供することができるか。そして、逆に広島を訪れる私達から広島に対して何かしら与えられるものはないだろうか。

多くの議論の末、私達はアメリカ側参加者と日本側参加者、そして広島の子とが協力し、「核兵器と平和」というテーマのもと、異なるサブテーマに基づく班別ディスカッションを行い、一般公開のシンポジウムで成果を発表することを目標とするプログラムを設計した。

出張やメールのやり取りを通じて、観光コンベンションビューローの下岡様や広島市平和推進部の山口様、多くの広島の方々にご支援いただき、広島滞在を企画することが出来た。

広島の子への募集を広島のウェブサイトや中国新聞の記事に取り上げていただき、6月末の説明会が初めての顔合わせとなった。説明会には多くの学生が集まってくれ、それぞれの想いを話してくれた。広島を訪れ、多くの方々とお話させていただく度に感じていた「一緒にこの会議を実現させたい」という想いは一層強くなった。その後、ガイドの住廣様、清水様、山根様のお力を借り、会議参加者の渡辺恭子がガイド練習を率い、前日までそれぞれが会議に向けて努力を重ねた。

各班のリーダーとしては、日本側参加者とアメリカ側参加者とがペアを組み、会議前から当日のディスカッションの議題となるkey questionsと参考資料を作成した。8月6日には、渡辺恭子が手を挙げ、この日が広島に原爆が落とされた日であること、そしてそれぞれのメッセージを込めて千羽鶴を折り、広島へ贈ろうという提案を日米の学生へ伝えた。彼女の主張を聞いた会議参加者は、彼女や他の会議参加者から鶴の折り方の丁寧な指導を受けながら、皆で毎晩遅くまで鶴を折り続けた。このプロジェクトは、会議参加者に自分はどのようなメッセージを鶴に込めたいかを考え、話し合う大切なきっかけを与えてくれた。

広島に到着した初日は広島学生として参加してくれた村上さんが迎えてくれ、広島のパンフレットの整理や71名の大移動までも手伝ってくれた。そして、

第3章 本会議・サイト活動

日米広島会議初日は広島の学生が平和公園の記念碑めぐりをリードし、初日の班行動や二日目のディスカッションのファシリテーションは全て班リーダーが行った。

日米広島学生会議は、一人一人の努力によって形作られた。私達実行委員二人では、このような形で五日間の企画を実現させることは不可能であった。温かくご支援いただいた方々、27名の広島の学生さん、そして会議参加者に心から感謝したい。

学生が主体となって行うシンポジウムには、確かに限界はあるかもしれないが、自分達がイニシアティブを取り、自らが設計し、発信することが出来るということを少しでも感じてもらい、力としてもらえたらと願っている。



サダコの像に折り鶴を贈呈

京都サイト

8月13日～8月20日

サイトコーディネーター

安田雅治 杉山亮太 Andrew Ruffin Morgan Swartz

京都サイトのスケジュール

- 8月13日(月) 広島出発、神戸日米協会主催企画、京都到着
- 8月14日(火) 環境フィールドトリップ、タレントショー
- 8月15日(水) 京都観光+伝統文化体験
- 8月16日(木) 分科会セッション(フォーラム準備)
- 8月17日(金) 京都フォーラム
- 8月18日(土) 第60回実行委員会選挙、伏見日米学生交流会
- 8月19日(日) Free Day、Farewell Party
- 8月20日(月) 第59回日米学生会議解散、米国側帰国

京都サイト理念

長い歴史持つ大都市、京都は、神社仏閣などの建築物それから有形無形の伝統文化を有し、世界的に有名である。それは戦争による破壊から免れた文化の力があつたからでもあり、このため東京に次いで多くの外国人が訪れる観光都市である。さらに、ここは大学、ベンチャー企業、NGO・NPOを多く抱え、未来に向いている都市でもある。過去を大切に、頑にアイデンティティーを守る。そのことでむしろ高度に国際化したユニークな都市、京都。この場で過去・現在をとらえ直し、その先にある日米のこれからをローカルとグローバル双方の視点から考えていく。

京都サイトは第59回JASCの締めくくりを飾る場所となった。タレントショー、フィールドトリップ、伝統文化体験、そして、一カ月の集大成となる京都フォーラムを開催した。最後に、次回のJASCである第60回のECを選出して、第59回JASCは別れの時を迎えた。

立命館大学衣笠セミナーハウス

第59回日米学生会議は8月13日から8月20日までの京都開催期間中、京都市北区の立命館大学衣笠セミナーハウスに滞在した。ここでは、宿泊のほか、分科会活動、タレントショー、Farewell Party、第60回実行委員会選挙を行った。

立命館大学はJASCがここ10年にわたり特別のご好意と協力を得ている大学であり、本会議以外にも、毎年、選考面接、広報などでもお世話になっている。第59回会議も京都開催が決定してすぐ、立命館大学へ依頼することを決めた。

従来JASC日本開催は滋賀県にある、びわこ・くさつキャンパスを使用することが多かったが、京都開催が最終サイトであることを考慮し、京都市内にある衣笠キャンパスの利用を考えた。この施設は、本来、学内生しか利用できないものであるのに関わらず使用の許可を得た。そればかりか、夏期全学休業期間における使用をはじめ、予約の時期、使用期間、利用料金など、数々の特別のご好意をうけて第59回JASCの京都開催は成立した。

この場をかりて、立命館大学、特にJASCの担当であった衣笠国際課の田中清子様に感謝の意を表したい。

京都サイト準備経緯

第59回日米学生会議を京都で開催することは、第58回会議の最終サイト、サンフランシスコでの実行委員ミーティングで決定した。

一番重要となる宿泊、会議室等の施設は、長年JASCがお世話になっている立命館大学様に依頼した。企画面では、京都の現代と革新を体験するものとして、環境フィールドトリップを、歴史と伝統を体感するものとして観光ならびに伝統文化体験を企画した。1カ月の締めくくりとなるファイナルフォーラムでは、京都の人々との連携できるものを求め、京都最大の学生団体である京都学生祭典とのコラボ

第3章 本会議・サイト活動

レーションを企画した。第59回会議の集大成を発表する場に相応しいものとなるように基調講演者依頼、広報活動や財務活動だけでなく、会場のセッティングや当日のロジスティックス組みなどを行った。

8月13日 広島から京都へ、神戸日米協会レセプション、SPring-8 姫路城見学

【参加者日記】

朝、眠そうな顔をしながら2台のバスへと乗り込んだJASCers。広島に別れを告げ、最終サイトである京都へと向かった。途中で大型放射光施設であるSPring-8を訪れ、第59回日米学生会議では初めてとなる科学に関わる施設を訪問した。神戸日米協会では昼食に美味しい天ぷらとそうめんを頂いたあと、姫路城を見学し、移動日にも関わらずイベントが満載であった。しかし、バスの乗り降り、35度を越える厳しい暑さ、そして長い旅の疲れが蓄積したせいかJASCerが次々とダウンして行き、衣笠セミナーハウスに着くころには皆くたびれていた。その夜、タレントショーの練習をするはずがベッドへと直行し、早々と眠りについてしまった。(武田尚樹)

神戸日米協会レセプション

たつの市の志ん具荘にて、そうめんと天ぷらがメインの食事をいただいた。神戸日米協会会長 キラン セティ氏にスピーチを頂いた。ターバンを巻くインド系のキラン氏は、関西弁のネイティブでもあるが、当日は英語のスピーチであった。ここ、兵庫県南西地方は、揖保の糸をはじめとして全国的にそうめんが有名な土地である。この日の兵庫県における企画は全て神戸日米協会専務理事 井上淳也氏にお世話になった。

SPring-8

第59回JASCで唯一の科学施設への訪問となった。SPring-8は財団法人高輝度光科学研究センターが運営する共同利用型の世界最大の大型放射光施設である。極めて明るく、幅広い波長をもつ放射光を利用し、分析、観察、新物質の創成することを通して、技術開発、生命科学、環境から考古学まで広い分野において貢献をしている。ほとんどの参加者にとって、かなり難解であったようだが、テクノロジー

に興奮するアメデリも多かったようだ。

姫路城

安土桃山時代に築かれた、白漆喰の美しさで、特に天守閣が有名な城である。400年の間、戦火などから逃れ当時のままをのこしており、国宝・世界遺産に指定されている。



姫路城にて

8月14日 環境フィールドトリップ、タレントショー 環境フィールドトリップ

京都は、京都議定書締結の地として世界的に有名であり、その独自の環境に対する取り組みでも有名である。2007年は京都議定書の第一次約束期間が発効され、環境が大きなテーマであるG8サミットが次回日本で開催されるということもあり、日米のグローバルパートナーシップが問われる環境問題はさらに注目をあつめている。東京で行われた世界銀行での環境フォーラムに対し、本企画では京都独自の実際の取り組みを、ビジネス、科学技術、CSRといった幅広い視点からこの問題について考えられるように4グループに分かれてフィールドトリップを行った。京都の企業は、江戸時代から西陣織りなど、手仕事の技術の伝統があり、近代、現代と独自の技術とセンスで東京を飛び越えグローバルに活躍している。現在と未来の京都を知るのに、絶好の機会であったらう。

1. 関西電力

関西電力京都支店のご好意でバスをチャーターしていただき、京都市東部～琵琶湖沿岸の関西電力施

設を訪れた。そこでCSRのレクチャーを受けるとともに、環境問題とビジネス・生活水準維持という倫理の問題について考えさせられた。

2. 堀場製作所

堀場製作所本社を訪問し、工場を見学しながら環境とビジネスとのありかたについて伺ってきた。堀場製作所は分析・計測機器メーカーとして有名で、特にエンジン排ガス測定・分析装置分野では世界シェアの80%を占めている。

3. 島津製作所

島津製作所は分析技術で環境分野をリードし、ノーベル賞受賞者田中耕一氏を輩出したことで有名である。島津創業記念館を訪れ、江戸末期から現在に至る科学技術の発達過程を学びつつ、京都企業の独自性と世界の環境貢献するに至った過程を学んだ。

4. 京エコロジーセンター

京都議定書が採択された地球温暖化防止京都会議を記念してつくられた、京都市環境保全センターの京エコロジーセンターを訪問した。地球規模の環境問題を学ぶとともに、京都ならではの環境の取り組みを体験してきた。

タレントショー

毎年、JASC本会議の恒例となっている企画である。内容、形式もすべて自由に、自分の自信のある出し物を披露するものである。今年は、歌、合唱、ダンス、ピアノなど音楽に関するものが多かった。参加者たちは、出し物の準備と大いに盛り上がった本番を通じて理解と友情を深めた。

【参加者日記】

時間の経過はとても早く感じ、ついに最終サイトである京都の2日目に突入した。炎天下、盆地特有の暑さが厳しい京都サイトの2日目の午前中、JASCersはグループに分かれて関西電力、堀場製作所、島津製作所、京エコロジーセンターとそれぞれ企業訪問を行った。私は関西電力の企業訪問で、琵琶湖等を訪れながら関西電力の会社のCSR等のレクチャーを受けることができ、貴重な経験をすることができた。午後は、少ない時間のなか参加者が用意したタレントショーが行われた。タレントショーとは、59回の参加者がダンスや歌、ピアノなどという

特技をステージで披露するものである。残念ながら、多くの人が体調を崩してしまっていた中だったので、全員がそれぞれの特技を充分披露することができず残念であったが、それでも多くの参加者がそれぞれの素晴らしい特技を披露してくれた。タレントショーの後は、スペシャルトピックディナーで、私は「日米両方のステレオタイプについて、またJASCによってそのステレオタイプは変化したか」というトピックについて有志メンバーでモスバーガーを食べながら熱い議論をもつことができ、改めてJASCという場が参加者に及ぼす“影響力”を感じた。
(竹内菜緒)

8月15日 京都観光+伝統文化体験

京都の1つの目玉である本企画は単なる観光ではなく、京都の歴史と伝統、その精神やエッセンス、雰囲気まで感じ取ることができればとの思いを込めて企画した。

4つのグループに分かれ京都市内の神社・仏閣、伝統文化体験スポットをめぐり、最後に京都一の繁華街である四条地区で自由に夕食をとった。本企画はでんでんの大きな協力をいただいた。実際のコースは以下の通りである。



伝統工芸体験

1. 金閣寺・二条城コース

立命館大学→金閣寺→二条城→丸益西村屋（京友禅体験）→四条烏丸→立命館大学

2. 清水寺コース

立命館大学→丸益西村屋（京友禅体験）→清水

第3章 本会議・サイト活動

寺→高台寺→四条烏丸→立命館大学

3. 東山コース

立命館大学→銀閣寺→哲学の道→南禅寺→伝統工芸ふれあい館→八坂神社→四条烏丸→立命館大学

4. 嵯峨野・嵐山コース

立命館大学→(京福電車嵐山駅)→中嶋象眼(象眼細工体験)→天竜寺・嵐山散策→四条烏丸→立命館大学

【参加者日記】

8月15日はRTのディスカッションで始まりしました。日本の終戦記念日ということもあり、メディアRTでは日本とアメリカのメディア(主に新聞)の日本の終戦記念日に対する報道の違いについて話しました。15日は日本にとって大切な日ですが、アメリカでは特別な日として扱われません。それよりも12月8日の真珠湾攻撃の方がメディアでは大きく取り上げられます。日米の外交や歴史認識の差は、この様なところにも原因があるのではと感じました。昼からは気分一転、京都観光に出かけました。金閣寺の派手ではあるものの品格を漂せる雰囲気アメリカととともに酔いしれました。ディスカッションと観光を通じ、より一層相互理解を深めることのできた一日でした。(土岐吉史)

8月16日 分科会活動(京都フォーラム準備)

【参加者日記】

長かったJASCの日々も、今日を含めとうとう残り四日となってしまった。5月の春合宿に始まる事前活動から、明日のファイナルフォーラムのためにずっと準備をしてきた。そして今日が最後の分科会活動となる。

ファイナルフォーラムの準備に関しては、本会議が始まって以来、メンバーの間で意見が合わず、苦しい思いをするときもあった。しかし今日、メンバー一人ひとりが明日の本番のために力を合わせて取り組んだ結果、全員が納得のいくプレゼンテーション資料を作成することができた。

さすがはJASCerたちだ、やるときはやるな、と感心する一方で、自分をもっとグループの活動に貢献できたのではないかという思いを感じることもあ

る。ただ、JASC全体を通じて学び、反省して事をJASCが終わってからも実践していくことが大事なのだと思う。

いよいよ明日がファイナルフォーラム。自分たちの分科会のプレゼンに集中しなければいけないが、他の分科会の発表を聞けるのもまた非常に楽しみである。(上田 来)

8月17日 京都フォーラム

【参加者日記】

第59回日米学生会議の集大成であるファイナルフォーラムが京都市国際交流会館にて開催された。川勝平太氏の基調講演に始まり、京都の学生による活気溢れるダンスパフォーマンス、そして各分科会の成果発表など本会議を締めくくるプログラムが組まれた。分科会発表では、本会議における活動の様子や成果がスキット・パワーポイント・映像など、問題意識や成果に応じて各々のやり方で来場者の方や日米学生会議関係者に向けて発信された。フォーラム後は、場所を移し来場くださった高校生や大学生を交え自由に質疑応答が行われ、本会議の活動を始め日米学生会議についても話す時間になった。フォーラムが終わったこの日、各自思い思いの夜を過ごした。朝7時まで遊びつくすと出かけていった者、翌日の次期実行委員選挙の準備をする者、ソファで語り合う者と様々だった。日米学生会議が終わりに近づく中、それぞれが想いを抱きながら過ごした夜だった。(渡辺恭子)

8月18日 第60回実行委員選挙、伏見日米学生交流会 第60回実行委員選挙

京都フォーラムで59回の正式なプログラムは終わったが、まだ重要な仕事が残っている。この日の午前、次回会議の実行委員に希望する立候補者がスピーチを行い、質疑応答の後、選挙結果の発表があった。フォーラムの翌朝という過密日程ながら、立候補者は一生懸命準備して、自分の思いをスピーチにぶつけた。今回は近年になく多くのデリゲートが立候補したため激戦となった。発表後には悔し涙、うれし涙、祝福の涙、多くの涙があった。新実行委員はその直後から、翌日のFarewell Partyまで次回アメリカ開催に向けたミーティングを行い、他の参加者は

伏見交流会へと向かった。



選出された新実行委員

伏見日米学生交流会

第59回会議のテーマである社会発信と次代の創造は、真言宗の開祖である弘法大師・空海が開設した日本で最古の大学の流れをくむ種智院大学と日米学生会議が共同で、次代を担う京都中の高校生との交流会を催すことで完成をみた。習字（梵字）の実演・体験、納経実演、空海思想・四国遍路に関する展示や学生作の宗教的絵画の展示等、宗教の神秘さを感じることができ、日米の両参加者にとって刺激的となった。また、種智院大学の学生や伏見区の高中生と「キリスト教と仏教の違い」の議論が起きるなど、参加者は思い思いの体験を楽しんでいた。その後行われた利き酒大会では、伏見の銘酒に皆感動した。このプログラムを後援いただいた伏見区と会場を提供して頂いた種智院大学、特に挨拶も頂いた学長である頼富本宏様、プログラム運営に大きく協力していただいた種智院大学の古川洋一様ならびに学生スタッフの皆様に感謝したい。

【参加者日記】

猛暑。この日は第60回日米学生会議の実行委員を決める選挙が行われた。それぞれが様々な思いでこの日を迎えた。ある人は熱い情熱をもって、ある人は悩み、不安に駆られながら、ある人は残された日数を精一杯かみ締めながら。そして新たなEC16人が選出された。

午後から新ECはミーティングを行い、残りの参

加者は種智院大学で行われた「伏見日米学生交流会」に参加した。京都の高校生や大学生と交流し、納経実演を見学したり、習字の体験、利き酒大会を行ったりした。夜は仁和寺に宿泊した。広くてきれいな宿坊でリラックスできた。参加者はお酒を飲んだり、語り合ったり、爆睡したりと思ひ思いの夜を過ごした。

(上野良輔)

8月19日 Free day、Farewell Party

仁和寺

世界遺産でもある仁和寺は真言宗の総本山であり、その境内の中にある御室会館という宿坊に宿泊させていただいた。総務部長の沖田定信様のご好意もあり、午前中境内を拝観させていただけることとなり、仁和寺の歴史の長さを実感した。

建仁寺

欧米でも大変有名な禅宗（臨済宗）の寺で、五山派の一角をなす非常に由緒ある寺院である。前夜、仁和寺で宿泊したのち、建仁寺に赴き、貴重な座禅体験をおこなった。

Farewell Party

この夜は参加者全員で過ごす最後の夜となった。衣笠セミナーハウス内でJASC59の71人でお別れのパーティを開いた。2階で食事を取ったあと、1階のホールでパフォーマンス、スピーチをまわしながら、JASC中の様子をまとめたビデオを上映し、1ヵ月が終ることを感じはじめる。60回のお披露目も行われた。明朝の解散まで、思い思いに別れを惜しんだ。

【参加者日記】

アメデリと過ごす最後の日。それぞれがフリーの時間を過ごした。

早朝、建仁寺での座禅。静かに目をつむった私の中には、それまでの思い出が走馬灯のように駆け巡っていた。いよいよやってきてしまった最後の日。寂しさ、楽しい思い出、後悔、満足、未来・・・様々な思いで胸が一杯だった。

みんな最後の一時一時を心に刻み付けるように過ごした。

そしてFarewell。スライドショーを見て思い出を振り返った。国籍もバックグラウンドも違う71人が同じところで爆笑し大変だった時、楽しかった思い

出を今、共に分かち合っている。そのことに胸が熱くなった。このメンバーとJASCを作れて本当によかった!と思った。

最後の夜、手紙書き、パッキング、おしゃべりに明け暮れていたら太陽がうっすら顔を出してきた。

(山本詩乃)



仁和寺で浴衣を着たアメデリ達

8月20日 第59回日米学生会議解散、米国側参加者帰国

【参加者日記】

この日は別れの日でした。前日の夜から最後のJASCメールを書き始め、そのまま残りの時を惜しむように夜通し起きていたJASCerも多かったのではないのでしょうか。空港に向かうバスの前で涙を流しながらハグしあったり、握手したり、言葉を交わしあったり…みんな思い思いにお別れをしていました。そんな様子を見ながら不思議と悲しくありませんでした。むしろきっとまた会えると強く確信しました。この1ヵ月間を一緒に過ごした私たちは本当に強い絆で結ばれていると思います。また「やあ、久しぶり」と会える日が楽しみです。みんなありがとう!

(吉川真由)

京都フォーラム

日時：2007年8月17日(金)

会場：京都市国際交流会館 イベントホール(京都市左京区 221名定員)

テーマ

“Advocating Japan-America Participation in Global Change”

「太平洋から世界へ ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」

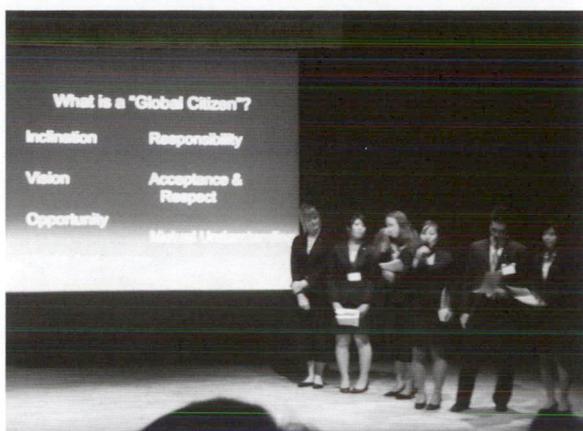
企画趣旨

本シンポジウムは本年度の学生会議の締めくくりで開催される。1ヵ月にわたり、理想と情熱をもってぶつけてきた議論、学生ならではの、学生にしかできない議論、しかしながら同時に常に広く社会を意思しながら続けられてきた議論。それを通じて何を成し遂げられたか、できなかったか。成果を参加学生の中だけで留まらずに広く社会に発信する。日米の学生が伝えたことが、やがては京都から世界へと広がることを、そしてその一歩となる場として本フォーラムを開催した。

企画概要

- 12:30- 開会挨拶 日米会話学院副学院長ジョンフリーマン氏
- 12:35- 来賓挨拶
京都市教育委員会教育長 門川大作氏
学校法人立命館 総長 川口清史博士
- 12:45- 日米学生会議実行委員長挨拶
- 12:50- 静岡文化芸術大学 学長
川勝平太博士
- 13:20- 第59回日米学生会議概要発表
- 13:50- 日米学生会議分科会発表
- 14:40- 京都学生祭典によるパフォーマンス
- 14:50- 日米学生会議分科会発表
- 15:30- 分科会講評 講評者：日米会話学院副学院長ジョンフリーマン氏
- 15:50- 閉会の辞
- 16:20- 交流会
- 17:45- レセプション 来賓挨拶 京都府教育委員会 教育長 田原博明氏

*同時通訳：安部礼子、河村睦美



分科会発表の様子

基調講演者

川勝平太氏 — 静岡文化芸術大学学長

早稲田大学政治経済学部卒業後、同大学経済学部研究科博士課程修了。オックスフォード大学哲学博士、早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授を経て、平成19年より現職。故小渕首相主宰「21世紀日本の構想」懇談会委員、国土審議会委員、教育再生会議委員、「美しい国づくり」企画会議委員など幅広く活動している。また、NIRA（総合研究開発機構）理事、京都迎賓館運営懇談会委員、アジア平和貢献センター理事、京都市社会教育委員、京都経済同友会特別会員などを兼務。

京都フォーラムスタッフ

統括 Logistics	安田雅治
統括補佐 Logistics helper	Morgan Swartz、真田雄太
司会 MC	杉山亮太、Andrew Ruffin
受付 Greeter	山本詩乃、角田亜紗子、 本郷亜紀、平井麻祐子
会場案内 Usher	金大鐘、上田來、Hidemi Tanaka
会場誘導 Guide	望月進司、上野良輔
来賓案内 VIP Usher	川口耕一朗、菅家万里江
マイク Microphone	菊池なつみ、廣田隆介
タイムキーパー Timekeeper	Brian Miller、Hiroyuki Miyake
記録 Camera	Justin Long
JASC59サイト紹介スピーチ	東京サイト：呉 宣咏 秋田サイト：Maureen Campbell



レセプションにて

広島サイト：James Piller

京都サイト：李 凌毅

レセプション司会

安田雅治、真田雄太

レセプション受付

三窪英里、菅家万里江

レセプションスピーチ

Samantha Scully、加納康宗

メディア掲載

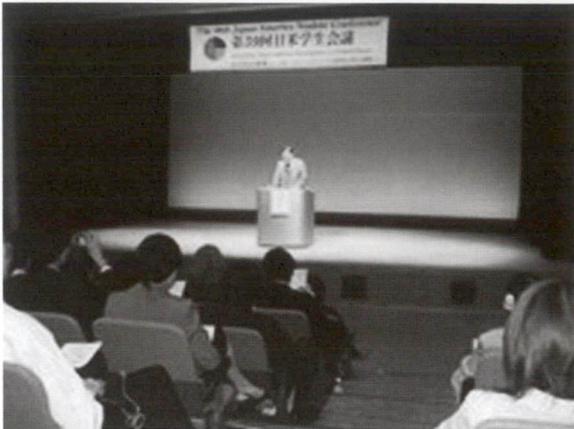
ガクシン記者イベントレポート 2007年9月1日掲載記事より抜粋

(<http://eventreport.kyo2.jp/e28669.html>)

8月17日(金) 59回日米学生会議 京都フォーラム
「分科会の発表と聞くと冀真面目な形式を予想するかもしれないが、劇っぽくしたり、映像にしたりなど、分科会ごとに発表の仕方にもさまざまな工夫をこらしてあった。10分間という短い時間の中で、長く深く話したことをどう伝えるか。そういう部分を意識して作ったのであろう。わかりやすく、なかなか見て楽しめる発表であった。」

「会議全体を通して感じたのは、日米両国の参加者間の仲のよさである。楽しげに会話するその姿は、分科会に分かれて議論して発表した内容よりも重みのある何かを彼らが得ていたことを意味する。会議で得られた成果を彼らはこれから長い期間をかけて何らかの形で社会に貢献、還元していくのではないだろうか。日本とアメリカの関係、ひいては世界の中で。」

— レポートライター：岩田拓真（京都大学・4） —



ファイナルフォーラムでの講演

サイトコーディネーター後記

杉山亮太

最終開催地である京都は、本当にたくさんの方々の協力を得て始めて成立したものであり、すべての方に心からお礼を申し上げたい。特に、京都担当である安田雅治と真田雄太、ならびに第25回会議OBの寶槻徹氏の協力なしには成立しなかったであろう。お盆という悪条件の中、企業訪問、観光・伝統文化体験、種智院大学での高校生との交流会、公開フォーラムといった充実した企画内容を実現できたことを嬉しく思っている。また、立命館大学の田中様および衣笠セミナーハウスの皆様には多大なるご協力いただき真に感謝しています。京都日米協会の西村様、関西電力の梅田様、京都府総務部長の太田様、伏見区長の水田様、京都府国際課の山口様、京都商工会議所の日野様、神戸日米協会の井上様、鳥津製作所の天野様、堀場製作所の佐藤様、種智院大学の頼富学長および古川様、でんでんの田尻様や石谷様、仁和寺の沖田様、ガクシンの大久保様・岩田様など名前を挙げればきりがながい、京都におけるプログラムへの協力や相談等非常に親切に迎えていただき、このように本当に多くの皆様の協力をいただけたことを嬉しく思います。ここに名前を挙げきれないほどのたくさんの方々に心から感謝したいです。本当にありがとうございました。

いま思い返すと、実行委員になって一年間、何度京都に足を運んだことだろう。京都にいる時が実行

委員として一番充実した時間であったといっても過言ではない私にとって、京都はもはや第二の故郷となった。初めて秋に京都を訪れた時は紅葉に染まっていたこと、真冬の京都まで夜行バスで行ったこと、選考試験準備の為に春休みを利用して滞在したこと、その後も新幹線でとんぼ返りするように何度も足を運んだことを今でも昨日のことに思い出される。なかなか思うようにサイトコーディネーターが進まず、苦しんでいた時期もあったが、京都の前回会議参加者やパートナーである安田や真田と共に、夜は京都の町に繰り出し語り、笑いあい、支え合えたことが、私にとってかけがいのない癒しの場となり、京都サイト担当として最後まで全うできたと思う。また、幅広い広報活動の結果多くの応募者の中から関西圏から6名もの参加者ができ、彼らと一緒に広報活動や関係先訪問、あるいは企業訪問を出来たことは有意義であった。

京都は、日本が世界に誇る文化の発信地であり、また伝統と革新が共存している地だと考える。アメリカ人が日本に来るのであれば、その伝統に触れてほしいという思いと、また同時に革新的な部分、たとえば企業の先端技術や環境に対する取り組みを体験してほしいと考えていた。また、京都には多くの大学や宗教団体が存在し、学生の社会的取り組みが盛んであることから、そうした京都の大学生や高校生を絡めた企画を織り交ぜ、「京都日米学生会議」というかたちで第59回日米学生会議の理念であった「社会発信」と「次代の創造」を実現しようとした。

その集大成が「京都フォーラム」であったと考える。200名も入る観客席が埋まっている光景を、司会席から見たときは本当に感動的であった。当初、実行委員間でどのようなフォーラムにするかの見解が全く統一できず、4月に入るまでその形が決まらなかったが、分科会の発表を最大限重視するという方針に統一してからというもの、多くの困難を乗り越えながらも納得のいくフォーラムの形にするべく努力した。京都に着いてからは、疲れから来るストレスや真夏日の気温に加えて、多くの体調不良者や想定外のトラブルの連続にと大変ではあったが、Morgan, Andrew, 安田や真田の協力の下、会

議は最大の危機を乗り越えることが出来た。来賓挨拶に基調講演、分科会発表に演舞披露等すべてのプログラムが順調に進み、ここにきてすべての参加者が第59回会議のすべてを発表するという目標の下にひとつとなり、“59th JASC as a Team”という私の個人的目標も達成されたかのようにさえ思えた。

京都サイトは、このように実行委員達の努力だけでなく、本当に一人ひとりの会議の参加者の努力や熱意、それをサポートしてくれた数え切れないほどの多くの方々の協力をもって初めて成立したのであり、そのすべての方々に最後に心から感謝を伝えたい。本会議終了後、多くの参加者から「京都サイトが一番楽しかった」という声を聞いたことは、彼らへの感謝の気持ちをより一層強くさせるとともに、今後も日米学生会議がこうして多くの人に支えられ、より素晴らしい会議になっていくことを期待させてくれた。

安田雅治

59JASCerの70人に、そして関西地区でお世話になった方々全てに厚く御礼を申し上げるところからこのサイトコーディネーター後記をはじめたい。

8月20日、最終の新幹線で京都駅から実家のある品川駅へ向かった。実行委員としての1年間、京都サイトコーディネーターとしての1年が終わりを迎えた。何度も行き慣れたこの道、また次の月には同じ様に関西に行くのかもしれない。そんな不思議な余韻があった。大体、京都からの帰りは疲れきっていることが多いのだが、この日だけは違っていた。

初めて、実行委員として京都に来たのは前年の10月だった。実はまだ、実行委員の中で正式にはまだサイトの担当は決まっていなかった。この時は、自分の専攻分野の学会で京大にも行っていた。この後、京大に幾度となく来ることになるとも思いもしなかった。もちろん京大だけではなかった。初めての夕食は前年の関西担当実行委員に到着早々案内された中華料理店。京都ではかなりメジャーなチェーン店だ。そこで、都内ではあり得ない、昭和とかアジアの空気に圧倒されたことはいまでも記憶に新しい。そのまた2ヵ月前、前回58回会議の最終日に、San Franciscoで既に京都担当への思いを公言して

いた。

京都の伝統と未来を魅せる。京都の人々との交流を目指す。そして、最終日に多くの涙を演出したい。いくつかの思いのもと、サイトの運営をはじめた。それから、時間はあっという間に過ぎていった。その過程は後悔と自戒の連続だった。京都にいる、関西につながる多くのJASC内外の友人が癒しだった。

今年の京都は記録的な猛暑だった。ただでさえ厳しい暑さで有名なまちなのに。京都に着いてから、深刻な健康問題が広がったため、2～3日の間は立命館でなく病院などにいることが多かった。個人としては、貴重な経験ではあったが、会議の運営をまかされているものとしては、これは危機であり、会議がふっ飛ぶ可能性もあった。不安が不安を呼びかねない心境だった。結果として危機管理が成功したのは幸運なことだし、これもまた、ある意味1年の準備の賜物だったのかもしれない。

京都フォーラムが終わり、会議の終わりが近づくにつれ、フォーラムについて、京都について、会議について、満足と感謝の言葉を聞くと、自分のやってきたことが、正しい部分もあったのではないかと思えてきた。もちろん、各々、会議中考える所があっただろう。必ずしもいい思い出だけではあるまい。しかし、あらゆる意味でつらい経験が会議への思いを強くしていくことは（限度はあるが）、58回の経験上自信をもって言える。新EC選挙結果発表後の多くの涙、解散の時の多くの涙、そしてその後の充実した彼らの笑顔を見て、やっと自分の思いは確信にかわった。

京都サイトコーディネータ活動記録

2006年

10月 立命館大学へ挨拶、宿泊等の施設利用の依頼
【安田】

2007年

1月 立命館大学説明会【杉山】

熊本大学説明会(熊本市)、立命館アジア太平洋大学説明会(別府市)京都市内の学生団体へ参加者応募の広報活動【安田】

2月 大学コンソーシアム京都へ京都フォーラムと

第3章 本会議・サイト活動

広報活動の協力依頼【安田】

- 3月 立命館大学にて参加者選考2次面接、関係各所へサイト準備協力に向けた訪問(京都府、京都市、京都商工会議所、京都市国際交流協会、滋賀県、京都日米協会、神戸日米協会、島津製作所、京セラ、村田機械、堀場製作所、でんでん、仁和寺、立命館大学、大学コンソーシアム京都)【安田、杉山】
- 5月 堀場製作所勉強会、サイト準備への協力依頼(京都市、京都日米協会、でんでん、種智院大学、仁和寺)【杉山】
- 6月 島津製作所勉強会、サイト準備への協力依頼(京都府、京都市、京都市国際交流協会、でんでん、種智院大学、堀川高校)【安田、杉山】
- 7月 京都府内の高校と関西の学生団体へ京都フォーラムと伏見交流会の広報活動、サイト準備への協力依頼(京都府、京都市国際交流協会、大阪日米協会、関西電力京都支店、京都学生祭典)【安田、杉山】



別れの時



第4章

分科会活動

開発：貧困撲滅への新たな アプローチ	70
メディア：グローバル社会の影響力	75
暴力と平和：武力行使に対する 価値観の再考	80
教育：次代を担う市民の育成	86
ナショナリズム：国への思いと 排外主義	93
アイデンティティーの社会学	99
文化：グローバリゼーションの渦中で	103

開発：貧困撲滅への新たなアプローチ

Innovative Approaches to International Development

分科会メンバー

廣瀬裕子*

伊関之雄

古屋佑樹

間橋大地

吉川真由

Alissa Marque*

Bryan Beaudoin

Gurpreet Kalra

Mary Lancaster

Jazmine Rodriguez

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

貧困撲滅。言葉にするのは簡単だが、達成は容易ではない。途上国において最も深刻な貧困問題は国際社会が共有する課題として、従来は、各国政府やNGO、国際機関が取り組むものと考えられてきた。しかし、近年ではフェアトレードのような個人の消費活動の見直しや環境問題に取り組む学生運動、人権の尊重や途上国との持続的な取引を理念として掲げるビジネスなど、個人にとってより身近なレベルでの革新的なアプローチがみられる。貧困撲滅の達成と持続可能な開発を目指すためにはこのようなより多くの働きかけが必要である。当分科会では、貧困撲滅に対し日米に何が出来るか、従来のアクターに加え、主体的に行動する一アクターとしての個人が果たせる役割を探究する。

活動内容

1. 事前活動

開発という広いテーマをどのように扱っていくか、そして貧困の現状を私達はどのように理解することが

出来るか。春合宿でこれらの難しさと重要性について話し合い、春合宿後は会議に向けて様々な講演会に参加し、勉強会を企画した。

プラネットファイナンスジャパンにより東京で開かれたマイクロファイナンスシンポジウムや、ヒューライツ大阪による「新たな国際開発の潮流と人権—地域や学校で支える子どもの人権：カンボジアでの人身売買との闘い」と題される研究会に参加した。

また、JICAアフリカ部調査役の山本愛一郎氏より「コミュニティー開発から考えるエンパワーメントと国際協力」というテーマのもとレクチャーをいただき、フェアトレード研究をされている京都大学農学部 辻村英之教授、カンボジア出身で、開発経済学を専攻されている東南アジア研究所職員のランヒセラ・ドロテア・アグネス氏、南アフリカ共和国出身、NGO活動をされているトーマス・C・カンサ氏、「ほっとけない世界のまずしさ」CSOネットワーク共同事業責任者の今田克司氏など、開発にかかわる様々な活動をされている方のお話を伺った。

これらと同時に、東京、京都を中心に何度か合宿

を開き、週末にはスカイプによりインターネットを通じて本会議に向けて話し合いを重ねた。

また、各自がトピックを決め、ペーパーの作成に取り組んだ。それぞれのトピックは以下である。

伊関之雄 “What is the ‘innovation’ from Fairtrade perspective”

古屋佑樹 “What are needed for people to make action?”

間橋大地 “Participatory Development and Good Governance”

吉川真由 “The Possibilities of Gene Modified Foods”

Bryan Beaudoin “Mapping Disease and Community : Lessons from Indonesia”

Gurpreet Kalra “Women’s Status in the Household : Reexamining Approaches to Gender and Development”

Jazmine Rodriguez “Working Between the lines : The Role of Women’s Organization in Sudan”

(分科会参加者 吉川真由、伊関之雄)

2. 本会議

本会議の議論はまず各自の興味関心がどのようなものであるのかということをお互いに知ることから始まった。そのためにそれぞれが作成した開発に関わるペーパーに基づいてプレゼンテーションを行った。それに加え、質疑応答、ディスカッションが活発になされた。このセクションを通じ、新しい視点を各自が得ることができたように思われる。報告者自身の私見ではあるが、日本の男性はとかく女性の社会進出に対する意識が低いように思われた。アメリカの女性はこの意識が強く、女性の社会への参加がいかに大事であるのかということが日本人の間でよく理解されたとと言える。

また会議中にフィールドトリップとしてマイクロファイナンスを行っているNPO団体“PlaNet Finance”を訪問し、事務局長のロン・ベバクア氏よりレクチャーをいただいた。このフィールドトリップを通じ、マイクロファイナンスとは何かという

ことについてより深く理解することができた。特に過去ならびに現在具体的に行われているプログラムを伺うことにより、貧困の削減に対して具体的にどのように関わってゆけるのか理解できたことが、このフィールドトリップの成果であったと言える。

上記のごとく一通り各自の興味関心が共有された後、どのように各自の考えを発表に反映させていくかということが問題となった。そこでひとつの問題にフォーカスし、その問題の中でそれぞれの問題意識を反映させていくことにした。そして、数ある問題の中からエイズ問題について考えることにした。これは多様な問題が存在する中で、比較的私たち学生にも身近な問題として考えることができると考えたからである。問題の考察を進める方法として、政府、企業、NGOによるエイズ問題への取り組みに関する問題点とその解決策について議論を重ねた。この議論を通じ、エイズ問題についての各アクターによる貢献の可能性を探ることができたと感じると同時に、それぞれの興味関心が反映されたと感じた。

しかしメンバーに共通する想いがあった。それは、私たち「個人」がいかにして具体的に問題解決に貢献できるのかということだった。

そこで具体的に、個人による問題へのかかわり方としてどのような方法があるのか、ということについて話し合った。その中で最終的に、フェアトレード、マイクロファイナンス、CSR（企業の社会的責任）、これらの枠組み、仕組みを通じていかに個人が関わっていくことができるのかということについて検討した。

同時に、一般の方に対して発表するということから、ただ取り組んできたこと、考えたことを話すだけでは興味を持っていただけないと感じた。そこでそういった方々の注意を引くために“skit”と称される寸劇を発表に織り交ぜ、検討したことについて発表することになった。

最後に討議で感じられたことについて述べる。まず発表を一定の形にしなければならないという制約上、コンセンサスを優先したため議論を深める時間が足りなかったことが反省点の一つである。また、どのように伝えるのかという方法論に多くの時間が

第4章 分科会活動

割かれてしまったことも然りである。一方、異なる背景を有する学生10人がお互いに考えをぶつけ合い、それをひとつの形にまとめられたことはひとつの成果であったと感じられる。また最終的に議論が具体的な形でなされたことにより、個人としての問題への関わり方が明確になったと言える。よってもうひとつの成果として、具体的な形にして個人のアプローチを提示できたことを挙げる。

以上が本会議での議論を通じての感想であり、報告である。

(分科会参加者 古屋佑樹)



東京での分科会の様子

3. ファイナルプロジェクト

京都サイトに入ってから、本格的にファイナルプロジェクトの準備をスタートした。ファイナルプロジェクトとして、これまで貧困問題の解決方法として上げていたCSR、フェアトレード、マイクロファイナンスの3つを紹介した。しかし、この3つをどのようにして聴衆にわかりやすく紹介するかが問題であった。ビデオやパワーポイントなど様々な方法があったが、どれもしっくりくるものはなかった・・・。

最終的にはスキットを使うことになった。7分間をフルに使って、私たちRTの1ヵ月間の成果を出すことは容易ではない。いかにして“見せるか”がポイントであった。CSR、フェアトレード、マイクロクレジットの3つのアプローチ方法を、ただ単純に良い面ばかり強調することだけでなく、ネガティブな面も含めるようにして、できるだけ多面的な視点を取りいれようと努めた。以下がスキットの台詞である。

Mayu: Hi, Gurpreet! What took you so long?

Gurpreet: Sorry Mayu! I was shopping. So were you, I see!

M: Yeah, I got lots of cool stuff—a shirt, a book, a towel... And it was all Fair Trade!

G: Fair Trade stuff is a little too expensive for me...

FairTrade1: Did someone say Fair Trade? I know all about that! If you buy Fair Trade goods, it guarantees that the producer in the developing world got a fair price for their labor.

FT2: For example, the normal market price of coffee fluctuates, but the fair trade price is always fixed, so it gives the producers security.

Slide: picture of fair trade product

G: But I don't see why you would buy Fair Trade products.

M: What do you mean? I want to help the developing world any way I can!

G: If you go to developing country to volunteer and build a house with your own hands you are *really* helping people. But a Fair Trade hat looks just like any other hat except for the Fair Trade label. You can't see the results of your actions when you buy Fair Trade goods. Why do you want to keep buying these products?

M: I'd like to go to another country someday, but right now I am busy with school and my boyfriend. Fair Trade may not be making something with your hands, but you can make development a part of your everyday life, like by always buying fair trade coffee. I feel satisfied with my actions when I buy Fair Trade products because I know that my money is going to a good cause, even if I never really see the result.

G: But we consumers need lots of goods and services provided by non-Fair Trade companies. Fair Trade companies are still quite rare. I wish there was some way to find out if regular

companies are helping out the poor...

CSR1: But there is a way to see what companies are doing for development. It's called a Corporate Social Responsibility report. Many corporations practice CSR which means that they try to improve their community or society. If you want to see the results of your spending, you should buy products made by companies practicing CSR.

G: Do all businesses practice CSR?

CSR2: Unfortunately, no. It does cost money, after all.

M: But, many companies have started practicing CSR because it gives them a good image.

G: But the company itself writes the CSR reports, right? Aren't the reports biased?

CSR2: Yes, they are. However, there are some "watchdog" organizations which keep track of companies' actions. CSR may not be perfect, but it's one way we can work for social change with our everyday habits as consumers.

G: I think it is good that a corporation or government would want to help people in developing countries, but that has its limitations too.

M: Everyone wants a better life, but without the resources and will to realize that hope... Maybe there is a way to help people help themselves. Hmm... That makes me think of microfinance.

G: Microfinance?

MCR1: Microfinance is a way to help the poor help themselves. Most of the world's poor don't have access to basic financial services like savings, loan and insurance. So, they can't prepare for the future, buy the things to start a business, etc. Most loans are less than 250 USD.

G: But governments and NGOs already spend billions in aid. I don't see why the poor need *more* money in the form of loans.

MCR2: Traditional aid is very important, but in

many cases years of aid have not alleviated poverty. The poor may become dependent on aid. By accessing microfinance one becomes an active part of the economy in a sustainable way. It empowers people to make change for themselves.

G: But it takes more than a loan to make a business! The transition from poverty to active involvement in the economy must be a tricky thing.

MCR1: That's true. Luckily many microfinance lending institutions also provide free trainings on how to use their services, start a business, use computers, etc. In some cases loan officers visit their clients every week to make sure they are doing well. Good microfinance isn't just about money, it's about people.

M: Wow, cool! Then microfinance would make people much more independent and empowered.

G: That's right! There are many ways to empower ourselves and others!

M: We can involve ourselves in development in a way that fits our lifestyle.

G: Yeah! Let's sit down and drink some Fair Trade coffee!

プレゼン後のQ&Aセッションでは、様々なコメントをもらうことができた。

(分科会参加者 間橋大地)



ファイナルフォーラムの発表の様子

4. 総括

Innovative Approaches to International Development. 開発：貧困撲滅への新たなアプローチ。このようなテーマを設定した理由は、過去と現在のアプローチをしっかりと学びながら、学ぶだけにとどまらず、貧困撲滅というテーマを自分自身に引きつけ、一個人として取り組むべきか、もしそうであればどのように取り組むことが出来るのかを探りたいという考えが根本にあった。

更に“innovative”という言葉を用いる事で、一つの答えがある訳ではないということ認識し、今まででは考えられないような視点やアプローチだとしても、分科会メンバー10人で柔軟にクリエイティブにこのテーマについて議論がしたいという気持ちがあった。

議論をする際に、「開発プロジェクトが行われる現地の人々の気持ちを尊重する」ということを重視し、プロジェクトを進めることが重要だが、相手の現状、更に相手の気持ちを把握することは非常に難しいというジレンマを皆で感じていた。貧困の現状を理解し、相手の気持ちを想像するために、多くの方々と勉強会をさせていただいた。それぞれ異なるきっかけや考えを持ち、開発という分野で活躍されている方々と議論をさせていただいたことで、「貧困」の現状には様々な形があり、一つのアプローチが最も有効ではないということ、そして私達自身もそれぞれが開発という言葉に対して異なる価値観を抱いていることに気付かされ、大変刺激的であった。貴重なお時間を頂き、私達を開発の現場に近づけて頂いたことに心から感謝したい。

結局貧困の解決法を探しても、一つの答えは見つからない。探す事自体に疑問を持つこともあるかもしれない。貧困というもの、そして貧困からの脱却のための開発という概念も、決して自明なものではなく、創り出されたものに過ぎないのかもしれない。「開発プロジェクトが行われる現地の人々の気持ちを尊重する」という考えを重視するからこそ、このようなもどかしさを感じた。

しかし私は、このもどかしさこそ重要であるので

はないかと思う。これが正しいと信じ込み、物事を進めることは、確かに精神的に落ち着き、自信を持つことが出来る。しかし、新たな困難が発生した時、求められる成果と異なる方向へ進んでしまった時、軌道修正は難しい。そして、いつの間にか正しいアプローチを達成しようと「現地の人々の気持ちを尊重する」という発想自体を忘れてしまう可能性を持つ。そうであるならば、常にもどかしさを感じつつも、現状を理解しようと、そして相手の気持ちを想像しようと務めること、これこそが私達が会議を通じてたどりついた答えなのではないかと思う。ファイナルプロジェクトの劇を作成し、適切な台詞を考える際に分科会メンバー一人一人が丁寧に取り組んでいた作業がこれを表す。お互いとコミュニケーションを取ることによって、想像力は膨らみ、可能性は大きく広がった。

基本的なことであり、シンプルではあるが、日々の生活でも現状を理解しようと、謙虚さを忘れずに相手の気持ちを想像しようと心がけること、そのプロセスにおいて様々な方と協力すること、これが私達がたどり着いた新たなアプローチであるのではないかと思う。

私自身、一生をかけてこの作業に取り組んでいきたい。

(分科会コーディネーター 廣瀬裕子)



開発分科会のメンバー

メディア：グローバル社会の影響力

Media Influence on Global Society

分科会メンバー

安田雅治*

金 大鐘

佐藤逸美

竹内菜緒

土岐吉史

Brian Miller*

Susannah Davidson

Jessica Hutchins

Tsz “Jess” Kiu Liu

Bethany Marsh

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

現在メディアは確実に力を増している。科学技術の進展により、その影響力は簡単に国境を越える。世論の流れを、投票行動をも変えてしまうこともある。マーケティングと広告戦略により消費行動にも深い影響を与える。インターネットの浸透により今では個人も発信者になりえる。情報科学、通信技術の進歩は加速し、新しい可能性も膨らみ続ける。もうメディアなしの生活など考えられないだろう。そもそもメディアとは何だろうか。そこに流れるものには真実とそうでないものが混在し、時に容易に人を傷つけうる。本分科会では、メディアの持つグローバルな社会への影響力に注目し、日米のメディアの違い、メディアと市民との間にあるべき関係性について理解することを目指した。

事前活動

春合宿5月3日(木)~5月5日(土)

期待と不安のなか、春合宿ではじめてメディア分科会の日本側メンバー5人は顔をあわせることとな

った。ここから59th JASCの事前活動がスタートする。まず自己紹介をし、互いを知り合うことからじまった。それぞれの「メディア」についてのビジョンを共有し、分科会のテーマについて議論した。広島サイトで日米の平和への意識の違いと相互理解をテーマに日米共同でドキュメンタリー作品をつくり、それをFinal Projectの日本側案とすることになった。さらに、アメリカ・エルミララ大学学生と英語でディスカッションする機会を得た。

防衛大学校研修6月22日(金)

6月の防衛大学校研修の分科会セッションでは、分科会コーディネーターだった大山優君を始め、8人の防衛大生と「イラク戦争とメディア」のテーマで討論を行った。防衛大、JASCともにそれぞれプレゼンテーションを行い、それにもとづいて議論を進める形式で行われた。防衛大側は、戦争報道における政府とメディアの関係について、イラク戦争時の日本の報道各社と政府との取材協定をもとに発表した。JASC側は「国際政治の場におけるメディア(ソフトパワー)の影響力」のタイトルで、竹内菜緒

第4章 分科会活動

が発表した。

Online Meeting

毎週、メッセージャー、スカイプなどを利用し、インターネット上でメディア分科会のミーティングを行った。5月から日本側ではじまり、6月からはアメリカ側と共に10人で行った。まずは互いを知ること（特にアメデリと）からはじめた。事前活動やRT paperの進捗状況と内容のシェアリング、連絡事項の伝達をした。本会議の議論のテーマと進め方についてディスカッションし、Final Projectのアイデアを話し合った。

RT paper

日米の分科会メンバーは、事前活動期間に自分の興味分野に関してRT paperという形の論文にまとめた。RT paperは本会議の議論の土台となるもので、各自の知識の整理と補充、興味分野の関心向上を目的とした。日本側は英語で6ページ程度を目標とした。なお、アメリカ側で毎年行っているRT paperのコンテストで、メディア分科会のSusannah Davidsonが1等を受賞した。

事前勉強会・企業訪問

本会議に向けて各自の興味を深め、知識と見識を高めるためにメディア分科会で事前勉強会を開いた。分科会メンバーでドキュメンタリー作品、ビデオの上映会や、Final Projectの議論やRT paperの相談会をした。しかしそれだけでは不十分であり、専門家の意見を聞くため、そしてメディアの現場を実際に見るために企業訪問や外部講師を招いた勉強会を4回行った。

1. Dr. Jonathan M. Hall 勉強会6月16日(土)

講師：カルフォルニア大学アーバイン校助教
Jonathan M. Hall博士

2. TBS訪問6月20日(水)

講師：株式会社TBSテレビ 報道局取材センター
外信部 田勢 奈央 様

この日はJASCアラムナイでもある田勢様に案内していただき TBSの夕方のニュース番組「イブニン

グ5」の本番をスタジオで見学したほか、報道フロアやスタジオ、副調整室なども見学した。その後、日本のテレビ業界、ドキュメンタリー制作についてお話を聞いた。

3. 電通訪問6月27日(水)

講師：株式会社 電通 第8営業局 吉野 次郎 様
汐留の電通本社を訪問し、電通のマーケティング・広告戦略について、具体的な事例をもとにお話を聞いた。吉野様はJASCアラムナイでもあり、過去のJASCのお話もして頂いた。この日は金大鐘がコーディネートをした。

4. NHK訪問7月5日(木)

講師：NHK スペシャル番組センター チーフプロデューサー 宮本 英樹 様

NHKスペシャルなども制作されている宮本様にお話を伺った。日本とアメリカのテレビの違いや、NHKの公共放送としてのありかたについてお話を聞いた。学生による日米共同ドキュメンタリーについてアドバイスを頂いた。竹内菜緒がコーディネートをした。

Dr. Jonathan M. Hall 勉強会

6月16日、日米会話学院にて、UC Irvine助教授でありJASCアラムナイのJonathan Hall氏による勉強会<参加型講義・ディスカッション 使用言語：英語>を行った。Dr.Hall氏はメディア・映画・比較文化の研究が専門で、今回メディア分科会で「映画からとらえるイメージ分析」について日本、北米の実験映画を見ながら、そこから何を読み取れるのかを文化比較をまじえながら分析していく、という趣旨の元で勉強会を開いた。

私たちメディア分科会の“Media Influence”という題目について、そもそも“Influence”とは何か、という所から講義は始まった。Influenceとは何らかのpower（権力）で人々の思考に影響を及ぼすものである。そこで、“イメージ”という媒体が大きく関わっているということ。私たちは映画や広告、新聞によって多くの“イメージ”を目にしてい、無意識のうちにそれらを吸収している。

本番でドキュメンタリー映画製作を目論んでいる

私たちが、今回の勉強会でドキュメンタリー映画をつくる意義を再確認できたと言えども、同時に映像の難しさや、社会的責任の重さを感じた。しかし、自分達には多くの仲間の支えがあるので、本合宿に向けて頑張っていきたい。(竹内菜緒)

本会議7月26日(木)~8月20日(月)

議論の流れ

分科会セッションは毎回、次の3部構成ですすめられた。

- 1) メンバー各自のRT paperの発表とそれをもとにしたディスカッション。議論の準備の時間を考慮し、1日の中でアメリカ1人とジャパネリ1人の2人が発表した。
- 2) Final Projectの話し合い
- 3) フリートピック。事前活動期間中のOnline Meeting で、デリゲートが挙げていたトピックの中から選び議論した。(国際政治とメディア、好きな映画etc.)



RT paper題目一覧(発表順)

東京サイト 7月29日(日)

Bethany Marsh: "CNN Effect"

佐藤逸美: "The Challenge of Japanese Newspaper Industry"

秋田サイト 8月5日(日)

Jessica Hutchins: "The Affects of Fashion on Global Societies"

土岐吉史: "The analysis on the strategy of

SOFT POWER"

秋田サイト 8月6日(月)

Tsz "Jess" Kiu Liu: "The Bigger, the Better?"

金大鐘: "Report of the U.S. journalists from abroad: Its deficiencies and resolutions"

秋田サイト 8月7日(火)

Susannah Davidson: "Asian Americans in Film and Television: The Road to Shattering the Stereotypes"

竹内菜緒: "Media Imperialism: Globalization of Mass Media"

広島サイト 8月10日(金)

Brian Miller: "International Media Reporting of 9-11 and the Aftermath"

安田雅治: "Secrecy and Openness: Two different minds on Media"

フィールドトリップ 7月31日(火)

講師: NHK スペシャル番組センター チーフプロデューサー 館谷 徹 様

前々日が参議院選挙という、放送業界は大変な繁忙期であったのにも関わらず、館谷様の特別のご好意によりこの日の企画は実現した。分科会メンバー10人でNHKを訪問した。まず、局内を案内して頂いた。報道フロアや副調整室、スタジオを見学した。7時のニュースのセットでは、実際にどう撮影・放送するか説明を受けた。アナウンサーの席に座り、自分がモニターに写る姿を見る機会も得た。その後、Q&A形式で館谷様とディスカッションをした。NHKと民放との違い、日米のテレビの違い、報道と政治の圧力、ジャーナリストの適性とは、など、テーマは多岐に渡り、時間はあっという間に過ぎていった。

Tokyo Bayside Break 7月30日(月)

メディアRTはNHK訪問の日程が他のRTのフィールドトリップとずれていたため、他のRTが出かけているこの時間に余裕が生まれた。1人の提案はすぐに全会一致するところとなった。品川にある、27階のパーティールームにメディア分科会全員で出掛け

第4章 分科会活動

た。ここからは東京湾が一望でき、お台場は目の前だ。一同すばらしい眺望に感激し、それまでの過密日程からはなれ、リラックスタイムを過ごした。会議が始まってまだ5日目、この日は日米双方の総合的な理解、会議中のRTの抜群の仲の良さにつながる絶好の機会となった。

Final Project



世界に広がるメディアの影響に注目した。中でも世界で大きな位置を占め、会議参加者の出身国でもある日本とアメリカのメディアにフォーカスし、メディアの理解をはかった。そのために日米の新聞を比較調査した。なぜなら新聞ははまだ信頼性が最も高く、かつ最も人々に求められているメディアだからである。

【目的】

日本とアメリカで、メディアに扱われているトピックの違いを明らかにする。

【調査対象】

新聞のヘッドラインを、その日の一番大きな順に5つ。それを会議後半の10日分集めて比較した。新聞は日米から4紙ずつ（全国紙3つ、地方紙1つ）をピックアップした。

日本：読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、京都新聞
 アメリカ：USA Today, New York Times, Washington Post, Los Angeles Times

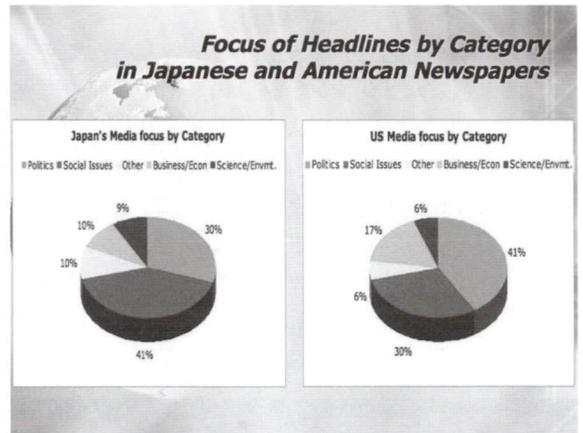
【仮説】

1. 政治に関する記事はアメリカが日本より多い

2. アメリカの方が日本より国際的なニュースを扱っている（ただし自国に関わるもののみ）。

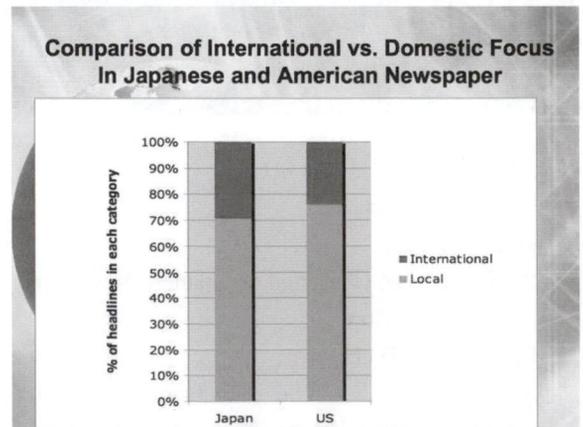
【調査結果】

- ・日本はアメリカよりも、国際ニュースに関心がある。
- ・アメリカで扱われているトピックは予想よりはるかに多様だった。
- ・両国で関心が持たれている分野
 →日本：社会（国内） アメリカ：政治



【調査の過程で分かったこと】

- ・社説・コラムはアメリカより日本で重視されている。
- ・紙面の本の広告から、日本の方がより知識層に向けた紙面づくりがされているように思われる。



【総括】

調査をするうちに多くのことに気付かされた。ヘッドラインを探すのにも苦勞した。インターネット版とプリント版は多くの点で違った。新聞各紙の紙面構成、国による違いなど数えきれない。やはり一番の問題点は、調査に使用したサンプルの少なさだったろう。日本は社会面で扱われる記事が目立った。予想をはずれ、国際ニュースは日本の方が多かった。アメリカでも多くあるが、それはアメリカ人が関心を持つものに限られていた。アメリカはよく自分の事しか関心がないと言われているが、それが反映したのだろうか。アメリカでは地方紙の方に重点がおかれ、日本は全国紙が幅をきかせている。日本の紙面作りが、より知識層を意識したものであったのは、個人の文化・選択の文化のアメリカとの違いを表していたのではないだろうか。メディアの差から見えてきたものは、そのまま、それぞれの社会の違いであった。

最後に

Final Projectのプレゼンテーションに至る道は、決して平坦なものではなかった。はじめはアメリカ側との議論のやり方の違いに日本側は戸惑った。日本人は結論まで考えてから話し始めるが、アメリカ人はまず話し出し、話しながら考える。そのため議論のスピードは早い。東京サイトで夜に日本側5人だけで今後の進め方について話し合ったことがあった。しかし、気付くと後半は恋愛の話で終始してい

たのは、いい意味で当分科会の性格を反映していたのかもしれない。

Final Projectは新聞の比較調査であった。しかし本会議まで、日本側はドキュメンタリー制作を考えていた。日本側、アメリカ側双方にドキュメンタリー制作、ビデオ、写真を経験しているメンバーが何人もいたし、本会議前にOnline Meetingで分科会として一応の合意があったので、実現可能だと思われた。しかし、会議が始まると、日米の意識と思惑には隔たりがあり（米国側はよりシンプルなもの望んでいた）、Final Projectのテーマの議論をやり直さなければいけなかった。これはコーディネーターとしても大きな誤算であり、事前のコミュニケーションの難しさを認識させられた。

最後に分科会が良いものになったのは、メンバーのユニークさとみんなの仲の良さだった。真面目だけど、お茶目でカラオケ好きのブライアン。シニカルなスザンナ。笑いが絶えない大和撫子のベサニー。元気でいつもトップギアのジェサ&ジェス。似顔絵と物まねがうまいテジョン。たよれるイツツ。がんばりやのナオ。関西の風を入れてくれたトッキー。また、みんなの笑顔に会えるのは、そう遠い日ではないはずだ。



暴力と平和：武力行使に対する価値観の再考

Pacifism and Belligerence: Examining the different perspective on the use of force

分科会メンバー

杉山亮太*
上野良輔
角田亜紗子
高野恭平
渡辺恭子
Andrew Ruffin*
Jessica Lee
James Piller
Joshua Schlachet
Joshua Turner
(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

暴力は人類の歴史から切っても切り離せない。暴力が暴力を生む悪循環は繰り返されてきたが、平和主義は実現可能なのだろうか。なぜ紛争やテロはなくなるのか。こうした疑問に答えるべく、当分科会では現代における紛争、テロ、戦争について原因と過程を考察し、国家はもちろんのこと国際機関や非国家主体の役割にも注目して議論をする。日米安保の是非など日米間の武力行使に対する価値観の相互理解を深めるとともに、イラク戦争、コソボ紛争、核抑止、9.11などを背景に現実的な平和の可能性について考えていきたい。

事前活動

1. 富澤暉教授 勉強会 5月19日(土)

元陸上自衛隊幕僚長で現在は東洋学園大学理事兼客員教授の富澤暉氏を訪問し、「アメリカの軍事的退潮はあるのか」と題して、一極化・多極化というテーマを軸にイラク戦争から日本の軍事力の在り方まで、安全保障に関して幅広く講義をして頂いた。新しい発見の詰まった講演会であったが、同時に我

が国を取り巻く安全保障環境の厳しさを改めて痛感した。いつの世も国家の平和を維持することは難しい。「政治とは最も悪くない方針（方法）を選ぶこと」とは、フランスの政治家マンデスの言葉である。国家を守るためには、限られた人員、予算、時間の中で、その時代における最善の手段を選び続けるしか方法はない。

2. ピースボート 渡辺里香さん座談会 5月20日(月)

ピースボートにおいてGPPACのプロジェクト担当をされている渡辺里香さんと座談会を行った。GPPACとは、Global Partnership for Preventing Armed Conflictの略で、紛争予防のために世界各国のNGOが連携したネットワークを築き、地域ごとに作業部会を設けて国際会議を開催し、それらをまとめて世界提言を作成している非常に興味深いプロジェクトである。暴力と平和について個人としてできることを考えたかった私としては、この予防の文化を作り出すことに重点を置く視点は答えを提供してくれているかのように思えた。

3. 岡崎久彦氏 訪問

岡崎氏は日本版NSC（国家安全保障会議）構想の



富澤教授を囲んで

メンバーで、実体験に基づいた意見交換をして下さった。岡崎氏は、集団的自衛権は国家が国連から約束されている権利であるためそれを否定する日本の現憲法（憲法9条）は矛盾しており、日本とアメリカの外交関係の妨げとなっていると説明した。特に、もしも日本が集団的自衛権を認めるのであれば、日本とアメリカの同盟は一層密なものとなり、アジアでの日本の地位の確立へも繋がることもおっしゃった。私個人としてはこれら意見に賛成できなかったが、政府に助言する彼の意見は政府の見解なのであるから興味深かった。

4. 広島市立大学広島平和研究所 浅井基文所長 座談会「憲法9条と集団的自衛権」

関心のある広島の大学生や高校生も交え行われたこの座談会において、浅井氏は、武力により平和を構築するという考えが国際政治において支配的だが、核兵器の出現によりそれは限界を迎えており、9条のように力によらない平和の考えが説得力をもつと指摘された。世界で頻発する暴力の原因を探り、それに対し非軍事的手段で対処することの重要性も強調された。さらに、日本が9条を理由に国際的な軍事貢献から逃げてきた事を指摘し、逆に力によらない平和がいかに本質的なものなのかを世界に訴えていく必要があると言及された。集団的自衛権に関しては、北朝鮮脅威論を取り上げ、米朝の軍事費が100対1という事実を例に挙げ、どういう条件下でアメリカが他国から攻撃をされ得るのかということ

にも目を向け議論しなければならないと指摘し、脅威論は日米軍事同盟を正当化させるためのフィクションに過ぎないとした。正当防衛や人権擁護における武器使用についての質問に対し、民族の存続をかけて自衛の闘争をする場合にも軍事力という暴力を使用するかには議論の余地があるとされ、平和創造と暴力の微妙な関係を認識するとともに、改めて武力行使自体が抱える問題の複雑さを痛感した。

5. 分科会レポート提出

Andrew Ruffin:

“The Future of the Japan-America Security Alliance”

James Piller:

“The Rise of Asymmetric Conflicts and the Usefulness of War”

Jessica Lee:

“Current Generation’s Views on ‘Japaneseness’ and Rising Sense of Nationalism”

Joshua Schlachet:

“Victims of History: Individuality, Narrative and the Future of Pacifism in the Japan-America Partnership”

Joshua Turner:

“A Former United States Marine’s Perspective on: Violence, et al.”

杉山亮太:

“Comparative Analysis of Humanitarian Intervention Towards Ethnic Conflicts”

上野良輔:

“Japan’s Security Framework for the 21st century ~Missile Defense, Non proliferation Regime of WMD, Nuclear Armaments~”

角田亜紗子:

“Peace within our Ninth Article”

高野恭平:

“The Peace Test”

渡辺恭子:

“City of Peace, Hiroshima, and the Thought Towards Creating Peace”

本会議活動

1. 藤原帰一教授講演会および座談会 7月29日(日)

「平和のリアリズム：武力行使に対する価値観の再考」というテーマで講演をいただいた後、分科会メンバーと少人数ディスカッションを行った。米国覇権主義の見直しの重要性、国連改革の必要性、東アジアの安全保障と核兵器の問題および日米のリーダーシップの必要性など多岐に渡った。民主主義の定着を通して世界平和を構築するという米国の政策が見落としているのは、反米国政権が正当な政治的手段で擁立されていく可能性であり、アメリカが今後も不人気な政策を続けることになれば、民主化の波を中東において作り出せたとしてもそれは逆にアメ



藤原教授を迎えて

リカの首を絞めることに他ならないという印象的な指摘もあった。また、効率的かつ戦略的に行われた戦争ほど正当化されやすく、戦争の記憶が多様な価値観のもとで語られていく限りにおいて、人間は今後も戦争と平和の繰り返しから脱却することは難しいという指摘もされ、当分科会が向き合う課題の難しさを痛感することとなった。

2. 靖国神社および遊就館へのRTフィールドトリップ 7月30日(月)

アメリカ側参加者と共に静謐な美しさの中に荘厳な雰囲気漂わせる本殿に祀られている英霊の方々に思いを馳せ、将来における日本と世界の平和と安定を祈念した後、遊就館の展示を見学しながら議論

することができた。今回の訪問や議論を通して、改めて現在日本が抱えている歴史認識問題や靖国神社参拝問題を国家間の争いの種にはならないと痛感した。この問題には、個人的な感情、ナショナリズム、政治的・経済的な思惑、国家の威信などが複雑に絡み合っており、日米・日韓・日中間ではもちろん、日本人の間でさえも捉え方に違いがあり、相互理解が難しい。私は、たとえ他国が外交問題として追求してきたとしても、これらを外交問題として捉えずに、多国間で相互理解を図れるよう努力しつつも、解決には時間を要するデリケートな問題であるという認識に立って、慎重に外交の舵取りを行わなければならないと思う。

3. 分科会セッション：

RT#1-3@Tokyo: Introduction, RT paper presentation, RT Goals, and RT Final Project

初めて全員で顔を合わせてのセッション。自己紹介、平和について考えるきっかけとなった個人的な経験、RTレポートの内容、分科会における興味分野や目標といったことについて各自発表をし、まずはお互いのことを理解することから始めた。事前活動から活発にメールやSkypeを通して話し合ってきたが、こうして円になり英語で議論するのは新鮮に感じられ、興奮するとともに緊張してしまった。Joshua.TのRTレポート後には、イラク戦争をケーススタディとして「君ならどうするか」といった議論もあり、非常に興味深かった。他のRTレポートの内容をここですべて紹介することはできないので、ホームページ等で参照してほしい。

RT#4-5@Akita: Memory of War and the Domestic Issues Regarding Peace and Security

第二次世界大戦の記憶のされ方の違いと9条の問題について話した。特に参議院選挙直後であったため濃い話し合いとなった。WW2に関しては、日米間の歴史認識の相違、あるいはアジアから見たWW2の視点など、日本がいかにかWW2を捉えていくべきかについて意見が割れた。また、9条の話し合いでは、9条改正の問題を①9条が隔てる日本の保

障問題、②自衛隊に絡めた9条が持つ違憲的性質、③9条と日本に求められる国際的役割との矛盾という3つの視点から考えた。その中で、9条は世界に日本が宣言した国際条約という認識や、自民党の改正案では9条だけでなく個人の権利が公共の善の為に制限されうると改悪されている点も紹介された。

RT#6-7@Akita: The International Approaches towards Peace

私たちは世界に目を向け、国連が国際社会の中でどうあるべきかなどについて議論した。はじめに国連の問題点を多角的に探るため、それぞれの国から見た国連像を発表し合い現状把握に努めた。ここで個人的にとても興味深かったのが、世界唯一の超大国であるアメリカと国連の関係についての意見である。アメリカは国連があまり機能していないと考え失望しているが、裏を返せば、その見方はアメリカの単独主義を国連がある程度抑止できている証拠とも言えるのだ。その後、国連をより平和に貢献できる機関にするために、アメリカは、そして日本はどう貢献すべきかについてそれぞれの視点から意見を出しあい、これからの国連のあり方を模索した。

RT#8@Akita: Additional Roundtable Discussions

今後の方針を相談するとともに、日本やアメリカ国内におけるより広い意味での暴力と平和の問題、ならびに人道的介入の倫理と先進国の役割について考えることとなった。アメリカの銃社会の病理、差別や貧困の問題を露出したバージニア工科大学での銃乱射事件、大統領選挙を通じた世界情勢への変化についてなどの議論だけでなく、昨今の米ドル下落の理由や、イラク戦争や二重赤字に伴う債務の激増が世界に与える影響といった国際政治経済的分析にまで及び、“Tax, spend Democrats” “Don't tax, spend Republicans”といった政治批評も飛び出した。また地域紛争のいくつかを例にとり人道的介入のあり方と、その倫理判断の曖昧さに起因する危険性について議論した。「人間の安全保障」を第一義的に考えた介入の手続き整備の必要性、それを違反した際の罰則規定および国際司法裁判所の役割強化

の必要性を認識した。

RT#9-10@Hiroshima: Pros and Cons of Nuclear Weapons and Hiroshima

まず、私たちは貧困のために話し合いや外交で物事を進展・解決する術を知らず、それ故にテロ行為という暴力を利用して自分達意思や意見を通そうとしているのではないかと考え、貧困と暴力との関係性について話し合った。テロなどの深層原因は、米国支配からの脱却と貧困であり、構造的暴力が社会に存在する限り、暴力はなくなるのではないという意見もあった。続いて、原爆投下について意見が交わされた。私たちは、Josh. Sが作成した原爆投下に関する動画を基に意見交換を行い、核兵器の非人道性、原爆投下の是非、核廃絶の方法などについて話し合った。「アメリカは市民を攻撃目標としていた」という事実が米国政府外交秘密文書公開によって明らかにされており、原爆投下の必要性に疑問を感じた。また一方では、冷戦中に原爆が使用されなかった事を引き合いに出し、あの段階で世界が核兵器の破壊力を実体験できたことが、国際的な視点からはいい効果があり、将来的な世界のために広島・長崎は犠牲を払った価値があるという意見を述べる者もいた。核軍縮及び、核兵器廃絶に向けての取り組みに関しては、核保有国のアメリカと被爆国日本がパートナーシップを組んで取り組めば、実戦的かつモラル的なリーダーシップを取ることができ、理想的だとされた。原爆が投下され、そして平和を希求する広島で平和と暴力について話すことは有意義かつ深いものであった。

RT#11-12@Kyoto: Total Reflection/ Final Forum Preparation

1ヶ月話しあってきたことを何度も洗い直し、どの議題を紹介したいかを羅列しランクを付けしていき、最終的に5つの議題に絞った。またファイナルフォーラム後には、分科会メンバー十人十色の平和についての意見やその形成の過程を載せたカレンダーを作成する事を決めた。今回のフォーラムにおいてはその前段階となる、「それぞれが平和を作るた

めに貢献できるのだ」ということを印象付けるような文章を寄稿したものを印刷して来場者に配った。

4. ファイナルプロジェクトおよびファイナルフォーラム発表：

ファイナルフォーラムでは、10分という限られた時間的制約ゆえ、全てのディスカッションについて説明するのではなく9条問題、靖国問題、核問題、人道介入問題、日米のグローバル化でのリーダーシップについて話した。そして、平和の形成の仕方の答えを紹介する時は、分科会内で出た意見のうち異なる5つを台詞のように紹介した。

- ・9条問題：9条に関わる3つ問題（安全保障・違憲的性質・世界での日本の立場の確立）を挙げ、憲法9条が日本国内の問題ではなく国際的な問題として取り扱わなければならないということを説明した。



メンバーの結束

- ・靖国問題：靖国神社訪問を通じた考察。私たちは遊就館と本殿の2つともに入ったのだが、そこで感じるナショナリズム的な雰囲気の違いが違うことを説明した。そして、残念ながら靖国が政治的に使われている事実とA級戦犯者たちの東京裁判が靖国の存在に大きく影響を与えたことも紹介した。
- ・核問題：広島で大きく扱われた原子爆弾については、現在世界が抱えている核不拡散問題と原爆投下についての日米での歴史認識の違いを紹介し

た。この議題は私たちの分科会内で意見が一番分かれた話し合いだったので、結論は出さずに出た意見を羅列していく形をプレゼンテーションではとった。

- ・人道的介入問題：紛争などの起こっている国や地域への人道的介入の問題の説明では、カンボジア、ルワンダ、ダルフルへの介入例を挙げ、成功例が低いことも示した。他にも、介入することにより現れる国内と国外でのプラスファクターの違いが存在することも言い、短期間での結果を目論む介入はよくないという結論に至ったことを話した。
- ・リーダーシップ：日米が世界でリーダーシップを取れる事柄として異なるスタンスを取っているからこそ、ソフトとハード両面から核問題について働きかけられることを説明し、両国がもっとPKOに力を入れるべきだとも結論付けた。

ファイナルプロジェクト [平和に対する10人の考察] (抜粋)：

Andrew Ruffin: “My realistic vision of peace can be achieved when we are willing to intervene in conflict zones despite a lack of national interest.”

Jessica Lee: “Peace is very difficult to achieve because it goes against our basic instincts and human nature... Yet peace is not impossible to achieve. In fact, peace is everywhere... at home, at work and inside us.”

James Piller: “War is a failure to negotiate with your adversary, and a failure to understand them. War should always be the last rational option.”

Joshua Schlachet: “The cycle of war and peace is not a natural one. Each new conflict is the product of human decisions in a time of tension. Thus because we always have the capacity to make better choices, war is never inevitable”

Joshua Turner: “Under current conditions peace would be merely the lack of conflict. When that is achieved it would be reasonable and expected that our definition of peace would change and evolve.”

杉山亮太：“As Coffie Anan stated, *from reaction to prevention* is the key to peace, and that is where each individuals can act as an actor for peace...On the process of building a relationship or environment that prevents conflicts/wars from happening is possible.”

上野良輔：“Working and acting for world peace within the multinational framework based on the effectiveness of legal, moral and military approaches as a member of the international society, even if it includes the use of force, is the fulfillment of pacifism and will mean to be ranked in an honorable status in the world.”

角田亜紗子：“In order to construct peace, not only Japan and America but the world needs to realize and understand that ‘violence’ for peace does not and cannot coexist.”

高野恭平：“We live in an unequal world. To achieve peace, we have to recognize that there are rich people and poor people and that it is important for the rich to help the poor achieve their peace, too.”

渡辺恭子：“I think that peace is when people can live without feeling that they are in danger of death. Everyone in the world is a peace-builder.”

分科会総括：



分科会のメンバー

・米国側参加者 Jessica Lee

Being a part of PBRT was an amazing experience.

It had the right combination of rigorous debate and building mutual understanding between the American and Japanese delegates. We discussed many tough issues but felt comfortable enough to be forthcoming and to speak our minds. I learned a lot from my fellow delegates and wish we had another month to continue our discussions

・日本側参加者 高野恭平

分科会の目的は、世界中の暴力をさまざまな角度から検証することで、何かしらの真実を見つけ、それをもとに政策提言などの情報発信をすることであった。そのために、分科会では惜しげもなく時間すら忘れて自らの意見をぶつけ合ってきた。時にはまったく話がかみ合わないこともあった。泣き出してしまう参加者すらいた。私たちはみんな同じく世界平和を目指しているはずなのに、それに至る過程は全くとっていいほどかけ離れていたのだ。こうして私たちは価値観の違いを学んでいったのである。これは当初の目的の半分は達成できたといえる。しかし、残りの情報発信などそれ以上のことは何もできなかった。それではこの分科会は失敗であったのか。私はそうは思わない。日米学生会議はこの夏で終わりだが、私たち参加者はこれからも生き続ける。これからの人生の中で、私たち各々がこの分科会で学んだことを社会に還元できたとき、初めて成功と言えるのではないか。そして、私はそうなることを確信している。リーダーを始め、素晴らしい参加者たちとともに真剣に議論できたことを私は誇りに思う。

分科会ホームページ：

<http://groups.google.com/group/PBRTJasc59?hl=en>
こちらにて各分科会メンバーの分科会レポート、事前活動報告、本会議中の写真、分科会セッションの議事録、平和に対する考察全文、ファイナルフォーラムプレゼンテーション等が掲載されています。ぜひご覧ください。

教育：次代を担う市民の育成

Creating a Global Citizen: Education Focused on International Concerns

分科会メンバー

菅家万里江*

菊池なつみ

武田尚樹

本郷亜紀

山本詩乃

Kendall Jackson*

Lindsey DeWitt

Jennifer Eusebio

Mia Monnier

Hidemi Tanaka

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

グローバル社会の到来は、自国だけに留まらない社会的、文化的、政治的問題をそれぞれの市民が主体的に考えていかなければならない時代の到来を意味する。様々な人種が混ざり合い、共生していくことが求められる中で、自分と違う肌の色、目の色、宗教、文化、歴史を持った他者をどのように理解し、どのように彼らと向き合っていけばいいのか。テロリズム、環境問題、貧困問題など、ボーダレス化する諸問題に対する個人の参画をどのように促していけばいいのか。それらの指針を与えるものとして、当分科会では、教育を取り上げ、その現状と可能性を考える。教育の、個人の人格形成及び価値観形成に対する影響力を土台として、「グローバルシティズン」像の模索とその方法論を考えていくことを目的とする。

事前活動

Field Trip

国際理解教育に対する見識を広めるため、以下のようなフィールドトリップ (FT) を行った。このFT

では、分科会コーディネーターだけでなく、参加者も主体的にFT企画に参加し、自ら勉強会をコーディネートした。主なFT先は以下の4つである。

文部科学省 F T

文部科学省国際化応接室にて、国際統括官付国際統括官補佐の大村様、初等中等教育局国際教育課国際理解教育専門官の都築様、及び大臣官房国際課総務係長の平田様よりお話をうかがった。

まず大村様より、学校教育にゆとり教育が組み込まれた経緯、またゆとり教育の理念についてうかがった。ゆとり教育や、国際関係について子供たちに教えることの重要性、異・多文化共生社会の理念を教育に上手く取り入れている藤沢市の例などをうかがえたことはとても意義があった。しかし、ゆとり教育には決まったカリキュラムや必須事項はなく、その内容は教師の裁量にゆだねられるため、カリキュラムの柔軟性を高められ、授業における教師の裁量の幅が広がった反面、教師の負担も大きくなり、その理念と現状には大きな隔たりがあることを強く感じた。次に、都築様よりESD (Education for Sustainable Development) についてうかがった。



これは持続可能な開発に向けて活動している様々なアクターをEDSというひとつの傘の下に集約しようという考えである。この教育理念は、日本の学習指導要綱にはまだ取り入れられていないということであったが、世界がグローバルな規模で縮小していくにつれ、「持続可能」という理念を教育にしっかり取り組んでいくことは重要であると感じた。また、今回お話をうかがった方々の中には、日本の子供における学習意欲の低下を障害のひとつと考えられている方もおり、グローバル市民育成にはまだまだ考慮しなければならない課題も多いと感じた。

ユニセフFT

まず、「ユニセフの任務や世界の現状などに関するビデオを鑑賞した後、講師の方のユニセフでの経験についてお話をうかがう」といった国際理解教育のような授業をシミュレーション的に体験した後、担当者の方の国際理解に対する見解をうかがった。このFTを通して地球市民とはなにか、国際理解とは何かという部分について理念的なお話を多く聞くことができ、大変勉強になった。

また、どうすれば表面的な知識の理解に留まらず、子供たちの行動を促していけるのか、という質問の答えとして、担当者の方は、コミュニケーションの重要性を挙げられていた。すでに問題を知っている者や現場に行った者が、国際理解教育を通じて、まだそれらの問題に触れたことの無い子供たちに世界の現状を伝え、その子供たちが、他の子供にそのことを伝える、そのうえで全体的に「国際問題のため

になにかしよう」という風潮が生まれれば、一人ひとりとは動きやすくなる。このようにコミュニケーションによって相互に影響しあえば、自然と意識が変化していくのではないかということであった。以上のことから、学校は閉じられたコミュニティとしてのイメージが強いが、やはり学校外のアクターの存在は大きく、彼らが積極的に学校現場の国際教育に関われるように学校とそれらのアクターが関係作りをしていくことが、国際理解教育にとって重要であると考えた。

JICA FT

教育に学校外のアクターとして積極的に参加し、児童の国際理解に貢献している団体のひとつにJICAがある。JICAは青年海外協力隊に参加した人達を積極的に学校の授業に派遣したり、開発教育教材などの貸し出しを行ったり、ホームページ上でJICAの活動を紹介したりしている。特に今回勉強会で訪問させていただいたJICA地球ひろばは、市民による国際協力の拠点として様々な啓発イベント、展示を行っている。

分科会参加者全員が特に強く感じたことは、JICAが“生きた経験、生きた情報”を来訪者に提供しているということである。これは「グローバル市民の育成」という分科会の目標にとっても大切な視点であり、学校教育にこういった企業やNGOなどが現場の声を多く取り込むことがこれからのグローバルシティズン教育に必要であると感じた。しかし、JICAの基本はODAを中心とした海外援助であり、学校教育との連携に必ずしも積極的なばかりではなく、あくまで副業的に行っているというお話もうかがい、学校教育への外的なファクターの巻き込みは近年進んできてはいるが、まだまだ課題が多いと感じた。

京都教育委員会

この勉強会では、京都は日本でも有数の観光都市であり、外国人観光客、留学生の割合も高く、学校にも多くの国際理解教育が組み込まれていることを学んだ。例えば、様々な学校で英語教育が初等レベルから始められており、地元の留学生を学校に招いての交流事業も積極的に行われている。しかし、京

第4章 分科会活動

都市教育委員会の方のお話によると、京都市が一番重点をおいていることは「地域ぐるみでの教育」であり、地域における伝統文化や環境問題をしっかり学びそれを発信していくことが国際化の時代に大切なことだとおっしゃっていた。特に印象に残ったのは、学校を核に地域コミュニティの再生をというスローガンの元、地域住民や、家庭にも焦点をあて、学校運営協議会などを設け、地域住民と共に子供を育てていくという姿勢であった。これはグローバル化が進む中、同時に必要になる、ローカルな視点、愛郷心などを育てる上で非常に重要な理念であり、京都における先進性の起因するところのように感じた。

＜週末ミーティング＞

春合宿後、毎週末にスカイプまたはmsn messengerにてミーティングを行った。前半は日本側参加者のみで日本語にて行われたが、後半では練習のため英語にてミーティングを行ったり、アメリカ側の参加者も交えるなど、事前活動の中核を成した。ミーティングでは、各活動の反省、分科会の方向性決定、ファイナルプロジェクト（FP）等について活発な議論を交わした他、分科会メンバーの近況報告の場としての役割も果たした。これにより、日本側のメンバーの半数が東京以外の出身という状況の中、全員が会議前に親しくなることが出来、本会議中の分科会活動を円滑に行うことができた。また、毎回、本分科会の日本側参加者である武田尚樹が英語にて議事録を作成し（本会議間近では、アメリカ側参加者の田中英実も同様に議事録を作成してくれた）、それをアメリカ側にシェアすることで、日本側とアメリカ側の情報格差を緩和することができた。本分科会の成功の裏には、この二人の事前活動からの貢献があったことをここに銘記しておきたい。

本会議活動

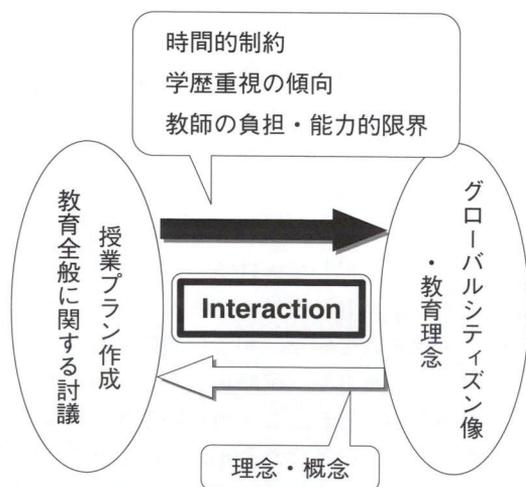
分科会の流れ

本会議では分科会のセッションを計14回行った。最初のサイトである東京サイトでは、自己紹介や本会議までの日米双方の意見の共有、これからの活動方針決めを中心に行った。その後、本会議前から、

FPとして作成する予定であったブックレットの構成作りに着手した。

場所を秋田に移してからの6回は、ブックレット作成に当たって議論の根幹となるグローバルシティズンの定義（詳細は後述の「ファイナルプロジェクト」を参照）についての議論に入った。

ブックレットは、大まかに、地球市民の定義、地球市民育成教育の重要性、具体的教育課程の提案、実際の授業計画で構成されている。「地球市民」という抽象的で大きな概念を主題にした議論やその成果を、いかに現実世界に還元することができるのか、という分科会の統一見解に鑑み、そして、現在、小中高等学校で実施されている「総合学習の時間」の不安定な実状を踏まえて、総合の時間を利用しての教育課程やモデル授業を考案した。具体的な授業内容は、各自が事前に作成していたRTペーパーの発表を通して、議論・検討を行った。企業、地域コミュニティ等、学校内に留まらない様々な教育へのアプローチ方法や、地域経済格差が問題解決を困難にしている環境問題や開発問題や愛国心教育といった具体的な教育の内容について、じっくりとブレインストーミングをした。その結果、私たちは、地球市民育成の教育を、政治・経済、文化、環境の3本柱で捉えることが決定した。次に効果的な指導方法を模索するために、授業展開について議論を進めた。



こうして、秋田サイトのうちに、ブックレットの構成や内容を決定し、各メンバーで役割分担することができた。今振り返れば、ブックレット作成に関する議論は、地球市民や地球市民教育の実体やその重要性、必要性についての主題だけでなく、授業というものを狭い範囲で捉えている現在の学校教育の問題点を注視し、改善策を考える良い機会となったと言える。

広島での2回は、ブックレット作成だけでなく、「教育」という広い分野から、バウチャー制度による教育の市場化、学級崩壊、入学方法、塾の存在等日米双方の教育問題について自由討議した。これにより、教育全体からグローバルシティズン教育を見ることがとなり、自分たちの討議してきた内容を批判的に振り返る契機となった。

京都で開催されたファイナルフォーラムでは、事前活動や約1カ月の議論の成果をスキットし、発表した。教師から生徒への呼びかけ、外部アクターからの講師の招聘、テーマの設定など、私たちが考えるグローバルシティズン教育を具体的な形にし、スキット形式で発表したことにより、より分かりやすく、ライブな雰囲気での私たちの成果をフォーラムの来場者に伝えることが出来たと思う。

ファイナルプロジェクト (FP)

当分科会では、議論の成果をブックレットとして集約し、関係機関に配布することを最終目的とした。ブックレットの内容は、地球市民の定義などの理念的な部分と、実際のカリキュラム及び授業プランなどの実践的な部分で構成された。教育の専門家ではない学生の意見がどれほど価値を持つのかという点で、不安を感じた参加者もいたが、以下の三点により、当分科会がオリジナルな視点を持つという結論に達した。まず、私たちは、現在の教育制度を直接体験したばかりの(若しくはしている)学生であるということ。次に、私たちの視点は、日本とアメリカの様々な背景を持つ学生の視点を組み込んでいるという点でユニークであるということ。第三に、私たち自身が、世界市民の問題について積極的に話し合う世界市民であり、他の人々が世界市民に参加するきっかけになりたいと願っているということ。こ

れらの点から、作成されたブックレットは価値があるものだと考える。

尚、ファイナルフォーラムでは、ブックレットを要約したパンフレットを配布し、発表の理解の助けとして活用してもらった。

以下、当日配布したパンフレットの日本語の要約を掲載する。

地球市民とは何か？

地球市民とは、相互に依存しあい、関連しあう世界において、社会全体の目標のために動こうとする意志及び、そのためのビジョンを持つ個人のことである。

地球市民は、地球規模の問題に関心を持ち、そこから生じる様々な結果を自分の問題として捉える。そして、自国内及び地球規模、双方の経済、政治、社会、文化そして環境問題に対する平和的解決に対して、それぞれが貢献できる範囲において、責任を持ち、自ら進んで行動する。

さらに、地球市民は自分自身の人生の文脈にとどまらず、それを超えて物事を考えることのできる能力を持ち、他文化を受け入れ、尊重し、機会を見つけ相互理解の促進に努める。

地球市民教育にできること

1. 生涯学習のための基礎的かつ必要不可欠な知識技術を提供する。
2. 理論と実践をつなげる。
3. 批判的思考力を身につけさせる。
4. 安全な環境の実現のための、討議すべき、意見の分かれる重要な問題を生徒に紹介する。
5. 市民社会において能動的な参加者になるように生徒たちに動機付ける。

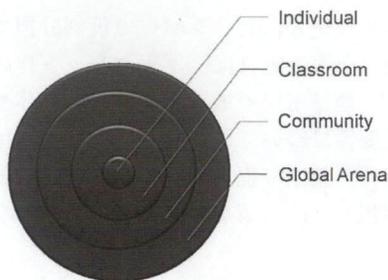
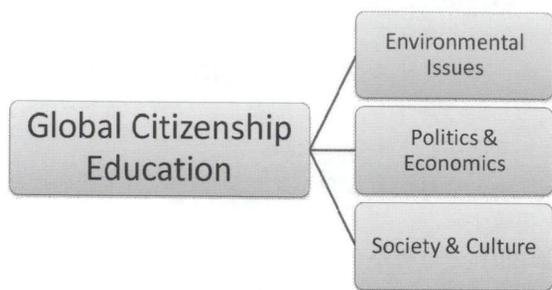
グローバルシティズン教育とその学習の単位

環境問題

- ☆地球温暖化とエネルギー保存
- ☆持続可能な開発
- ☆ゴミ問題とリサイクル

政治と経済

- ☆政治システム比較
- ☆国際経済
- ☆グローバリゼーション



社会と文化

- ☆アイデンティティーと団体
- ☆文化的歴史と宗教的伝統の比較
- ☆芸術や映画などのメディア

バランスのとれた教育へのアプローチ

教育者が地球市民教育を行うときは、以下の4つの基本的事項に留意すべきである。

1. 愛国心：自国を愛することと世界全体について正しく理解することの両方に同程度の重点を置く。
2. 平等なジェンダー表現：歴史や文化において、潜在的にジェンダーバイアスがかかっていることを認識し、全ての領域において男性の重要人物、女性の重要人物について教える。
3. 人種とマイノリティーの差別：文化内部における「違い」、異文化間の「違い」の両方に対して、敏感になるように促す。
4. メディアリテラシー：批判的思考力を育ませるため、様々なメディアの幅広い視点に生徒が触

れることができるように努める

コミュニティ活動（コミュニティアウトリーチ）

地球市民は教室内での学習によってのみ育まれるものではない。地球市民として、自国の国境を越えた問題に対し、責任を持てるようになるには、まず、個人レベルで、一人の人間として互いにどのように関わっていけばよいのか学ばなければならない。

幼いときから子供たちに、自分たちの環境では普段会うことの少ない人々や、彼らの持つ様々な考えに触れさせることで、彼らは生涯を通じて、思いやりを持ち、心の広い人間になる。

また、地域のコミュニティに焦点をあてることによって、地球市民教育は、サポートネットワークを提供し、新しいアイデアが取り入れられる快適な空間としての役割を果たす。

60分の授業例

0～10分	何故、環境保護が大切なのか？（小グループディスカッション）
10～15分	人間性と環境保護の重要性について的小レクチャー
15～25分	ドキュメンタリー「不都合な真実」鑑賞
25～40分	「先ほどの映像はある問題に対する自分の見方を変えたか？」などディスカッション
40～50分	地域レベルの環境問題について生徒自らができることを考える。
50～60分	ただ捨てられたゴミとリサイクルされるゴミがその後どのように処理されるか学ぶ
ホーム ワーク	1週間分のリサイクル可能なゴミを持ってこさせ、自分個人の力がどれだけ環境に影響を与えることができるのか、実感させる。

総括

この章では「教育：次代を担う市民の育成」分科会の総括と称して、分科会コーディネーターの立場から、分科会の内容及び運営について言及したい。

<分科会の内容に関して>

「グローバルシティズン」。この言葉が人口に膾炙してからまだ日は浅いが、このコンセプトはすでに多くの人が理解しているのではないだろうか。グローバル化によって、我々は、国や個人の生活のレベルを超える大きな問題に直面したり、自分と異なる背景を持つ人々と生活を共にしたりすることになった。そのような現代社会へのアプローチとして「次代」「育成」に焦点を当てたのがこの分科会であった。

宗教、愛国心、環境、ESD、地域密着型の教育など、この分科会が対象とした分野は多岐に渡った。その包括する範囲の広さを知るほど、「まだまだこんな可能性もある」、と嬉しく思う反面、教師のキャパシティ、時間の制約など、現実的な問題にも直視することとなった。

また、「いくら国際理解教育を行っても、それが子供たちの行動を変化させるほど大きな影響力を持つことは稀である」、といういわば「教育の限界」というものにも直面し、教育とは何か、その意義とは何か、という問いにそれぞれの参加者が真剣に向き合うこととなった。そのような状況の中でも、「一人を変えなければ世界は変わらない」、という信条を持ち、一人でも多くの生徒が国際的な問題に関心を持つよう、フィルムや文学、外部からの講師の招聘など様々な方法論を討議しあった。

また、具体的な授業内容を考えるだけでなく、その生徒がグローバルシティズン教育の課程を修了したとき、「相互に依存しあい、関連しあう世界において、社会全体の目標のために動こうとする意志及び、そのためのビジョンを持つ個人」になれるよう全体的なカリキュラムも考案した。これを事後活動としてブックレットにまとめ、私たち分科会の成果として社会発信し、現代の日本の教育に何かしらの貢献が出来ればと考えている。

最後に、この分科会を通して気がついたことは、

日米学生会議そのものが、この分科会のテーマと合致することである。我々はこの会議を通して分科会を考え、この分科会を通して会議の意義を知ることになった。そして、その先に見えてきた道、それは、我々のこれからの人生の歩み方そのものが、この分科会の成果とも言えることである。我々は自分たちが見聞きする情報に「教育」され、少しずつ変化を遂げていく。その先にはきっと、我々が描いたグローバルシティズン像を、より大きなインパクトを社会に与える形で具現化した我々がいるのだろう。

その意味で、この分科会は終わらない。

<分科会の運営に関して>

当分科会は、周囲の評価を鑑みるに、非常にスムーズに行った分科会のひとつではないかと考える。この項では、分科会コーディネーターとして、当分科会運営のために行ってきたこと、成功したと考える部分、及びその問題点について言及したいと思う。個人的見解ながら、この文章が後代の実行委員の分科会運営に少しで役立てば本望である。

当分科会運営の出発点となったのは、第58回日米学生会議で所属した分科会への疑問と不満であった。もちろん、個人としては非常に楽しめたし、最高の思い出となっているが、参加者としては運営に関して若干の不満があったことは否めなかった。それは主に以下の3点に集約される。

- ・分科会の方向性決定に関する不満
- ・米国側との見解の相違
- ・FP決定過程に対する不満

まず第一点についてだが、分科会の方向性がすでに春合宿にて決定されていたところに不満があった。個人としては、文化に関する様々な事象を話し合いたいと考えていたのだが、春合宿にて「文化に関する“問題”を解決し、何かしらタンジブルなプロジェクトを打ち上げなければならない」、と聞き、正直戸惑ってしまった。そのため、本分科会では、参加者に主体的に分科会の方向性を設定してもらおうと考えた。もしそれが本分科会の当初の方向性と相違しても、アメリカ側と交渉して、その案を通す覚悟も出来ていた。そのため、春合宿前にメッセージにて会議参加者とミーティングをし、分科会

第4章 分科会活動

の方向性と宿題を参加者に決定してもらった。(そして、その結果、プロジェクト型の分科会運営を行うことが決定した。)参加者としては、日米学生会議で何をするのか具体像が描けていない状態で、このような作業を行うことは非常に困難であったと思うが、この作業により、参加者とコーディネーターとの間に存在する、分科会の運営に対する責任感のギャップを埋めることにもなったと考える。また、その後も毎週末ミーティングを行うことで、分科会の内容の充実と、参加者を分科会運営に積極的に巻き込むことに成功したと考える。

また、第二点目の米国側との見解の相違に関してだが、昨年の会議では事前に米国側との交流があまり行われず、最も大事な「サブカルチャー」の定義についても日本側と米国側で異なっていたため、用意してきた資料及び発表内容がかみ合わないことがあった。それを防ぐために、当分科会では、距離的・時間的に優位な日本側参加者の総意を「日本側からの提案」として米国側に提示し、それを叩き台として米国側が意見を出し、双方の意見を反映させるという形式をとった。その具体的な実行例として、毎週末のミーティングの議事録を米国側に送った。これによって、日本側と米国側の意識・見識の差を埋められたと考える。また、このことは本会議で劣勢に陥りがちな日本側参加者が分科会においてイニシアチブをとることにもつながったと考えられる。

次に、第三点目のFP決定過程に関して言及したい。昨年の分科会では、FPで何を行うかに関して、事前活動期間では決定しておらず、ファイナルフォーラムが近づいた時に、「何が出来る？」と話し合っただけでHPの作成を決定した。その議論の過程においては言語による米国側参加者の優位があり、なかなかこちらの考えを伝えられなかった。そのような事態を防ぐこと、及びプロジェクト型の分科会運営が決定した以上より完成度の高い成果を出すため、本会議前に日本側がイニシアチブをとってFPを決定出来、かつ事前準備活動がFPに集約されるような枠組み作りをした。これにより、本会議中の

分科会の時間を具体的なFPの内容作成に割くことが出来た。

以上、昨年の経験から今年度の分科会運営に向けて改善した点を3つ挙げ、それぞれに関する意見を述べさせてもらった。最後に、問題点に話を移したい。最善の努力を尽くしたつもりだったが、残念ながら問題点もあったことは否めない。最大の問題であったのが、FPを作成に本会議の分科会の時間のほとんどを使ったことに対する不満である。参加者主体で分科会の方向性を決定したため、全ての参加者の意見を吸収することが出来たと思っていたが、本会議が後半に入った頃に、「グローバルシティズン教育」に特化するのではなく、「教育の平等とは」となどといったもっと一般的な意味での教育に対して意見を戦わせたかった、という声があがった。このようなことを防ぐためには、①事前準備段階での意見吸収により多くの時間を割く、②1ヵ月程度のスパンで、方向性を修正する必要性をコーディネーターが積極的に参加者に呼びかけていく、③本会議中の分科会のスケジュールに、バッファを設け、より柔軟な分科会運営を行うこと、の三点が挙げられるだろう。③に関しては、分科会以外の時間に任意で集まって議論をしたり、個々人でそれぞれ新たなトピックに対してリサーチをしたりすることで解消できるようにも考えられるが、暑さの中連日の過密スケジュールをこなす参加者に必要以上の負荷を与えることは委員として避けたいと考える上に、経験的にそのようなことが行えなかった事実を鑑み、分科会の時間内にそのような時間を設けることは必要であると考えられる。

以上簡単ながら、分科会コーディネーターとしての視点から本分科会について述べさせてもらった。学業、秋田サイト、副実行委員長の仕事と当分科会の運営を両立させるのは大変だったが、当分科会のコーディネートが出来て、この分科会のメンバーに会えて本当に幸せだったと心から思う。個人的な感想が入ってしまったが、これにて教育分科会の総括を締めくくらせてもらう。

ナショナリズム：国への思いと排外主義

Nationalism: Patriotism or Xenophobia?

分科会メンバー

加納康宗

立川仁美*

松田浩道**

望月進司

李 凌叡

Hiroyuki Miyake**

Jasmina Dizdarevic

Rachel Mason

Ryan Urie

Nancy Xu Yang

(*事情により事前活動のみの参加)

(**はコーディネーターを示す)



分科会概要

アメリカのネオコンや日本の右傾勢力と呼ばれる人々の台頭はともに国境を越えた関心を集めている。近年では靖国神社や教科書問題をめぐっても議論が活発だ。これらの現象を我々はどうのように理解すべきか。ナショナリズムは時に排外主義と結びつき、否定的にとらえられがちであるが、ナショナリズムと排外主義の関係はいったいどのようなものなのだろうか。教育、歴史、政治、経済、国際組織、地域統合など様々な側面からナショナリズムを考察し、議論を行った。

事前活動

靖国神社、遊就館訪問

日時：5月20日(日)

靖国神社の方に神社の歴史と理念についてお話をいただいた後、遊就館を案内していただいた。神社が戦没者の慰霊を大切にして活動を続けてきたこと、戦没者の思いを現代に伝えるために展示活動をしていることを学んだ。

【参加者後記】

前半の歴史解説においては一般的な本・メディアに書いていることとあまり変わらなかったように思う。とても興味深かったのは後半部分の質問から浮かび上がってきた靖国神社の“姿”。

「展示内容の変更は諸外国の外圧によるものではなく、定期的に行っている変更の一環」「靖国の理念に賛同してもらうことではなく、“共感”してもらうことが大事。それは戦死者の遺品や遺された人々の言葉から感じ取ってもらえば。」「靖国神社としては議論が世の中に起こるのは大いに結構。しかし、関与するつもりはない。」

戦争から60年以上が経過し、当時を知る人々が少なくなっていく中でいかにして靖国神社としてのアイデンティティーを確立していくのが今後重要になってくると感じた。新たなアイデンティティー確立の核となるのが人々にどのようにして“共感”を広めていくことではないか。靖国神社が主張する戦争に対するロジックは諸外国に限らず、国内においても批判を受けることが多い。しかし、その一方で、戦死者やその遺族の中には靖国神社を支えにして生

第4章 分科会活動

きてきた人もいるのも事実だ。彼らが亡くなると次に靖国神社を支えるものが、戦死者の無念さに対する「共感」であるように思う。となると、今沸き起こっている靖国論争も賛成派・反対派ともに、識者と呼ばれる人々がただ、自らのロジックを展開しているだけであり、次の世代に自ら考えるきっかけを放棄させているようにすら私には見える。諸外国の反応、戦争肯定とは別の次元でわれわれ次世代は靖国神社を捉えなくては行けないのだと強く感じた。

(立川仁美)

中国・韓国人留学生と話す会

日時：6月18日(月)

国に対する感覚は国によってどのように異なるのか、また、歴史問題に関する意識は実際にどのように異なるのかを探るため、韓国と中国からの留学生に話を聞く機会を設けた。

【参加者後記】

6月18日、月曜日の夜に僕達ナショナリズム分科会は東京大学本郷キャンパスの安田講堂前に集合し、「中国・韓国人留学生と話す会」を設けた。全員が集まった後、僕達は中央食堂へと移り、食事をとりながらディスカッションを始めた。食堂が午後9時に閉まった後は近くの喫茶店で僕らは話を続けた。

個人的に、特に印象的だったのは日中韓の自国の歴史に関する考え方についての話だった。僕の理解するところでは、その議題でポイントとなった点は：①歴史(国史)の重要性と②国家政府に対する信頼、この2つだった。便宜上、簡略化してしまうと、日本人は①「国史にそれほど重要性を感じない」②「国家政府への信頼が強い」のに対し、中・韓は①「国史に強く重要性を感じる」②「国家政府を信頼している」という風に僕には感じられた。

従って、日本の場合、①「国史の単一性・正確性に重要性を感じないためその編纂は民間に任せ、教科書も多様でよい」②「国家政府を信頼していないために、国史の編纂を政府に任せるのは危険であり、それは民間に任せ多様なものにすべき」という論理が見られた。それに対し中・韓は①「国史の単一性・正確性は不可欠であるため、国史及びその教科書の編纂は国家政府に任せるべき」②「国家政府を

信頼しているため、国史及びその教科書の編纂は国家政府に任せるべき」という考え方をしている、という風に僕は感じ取った。その時僕は、「日本の場合、戦前・戦時中のトラウマと、それによって高められた言論の自由・政府からの自由への意識の高さが影響しているのかな？」と、そんなことを少し想像したのを覚えている。

上のような歴史やナショナリズムの話以外にも、基本的には参加者が話したいことを好きな様に話した、というざっくりばらんなイベントとなり、特殊で、面白くて、楽しい時間だった。(望月進司)



参加したメンバー

三菱商事訪問

日時：6月25日(月)

経済ナショナリズムについての勉強会の一環として、世界中に進出している企業から見たナショナリズムの姿を調査するため、品川のオフィスにお邪魔して三菱商事の山本哲也さんにご自身が関わってきた外国での仕事の経験を中心にお話を伺った。

【参加者後記】

今回の話で特に関心を持ったのは、「ビジネスをやる上で国柄、文化はそれほど関係ない」というものだった。お話によると、よく「日本企業は意思決定が遅く、態度が曖昧」などといわれるが、本当に重要な案件に関してはすぐに決定することもあるし、逆に、海外の企業でも曖昧な対応をする場面もよくあり、決して真実ではないようだ。また、実際にビジネスの現場で働いている人々にとって、国に対する感覚というものがある程度ビジネスの場面で

現れてくることはなく、あくまでもどのような商品はどこに売るとどれだけの利益が出るか、というビジネスの視点でものごとが動くという。

国ごとで企業の仕事のやり方の違いというものがあるから存在すると漠然と感じていた先入観を正すいいきっかけとなった。また、普段企業の活動を知る機会がなかなかなかったため、あやふやな「国に対する感覚」などとは一線を画して一貫したビジネスの論理でものごとが動く世界を垣間見たことは印象的だった。(松田浩道)

いちごアセットマネジメント訪問

日時：6月27日(水)

東京の九段下にあるいちごアセットマネジメントを分科会で訪問した。社長のキャロン氏と清水さんに「日本的経営」をめぐるお話を伺った。

【参加者後記】

私がRT Paperで“日本企業”像を扱うこともあり、訪問の目的は“ハゲタカ”との違いや日本文化への適応を強調する(日本専門)外資ファンドから見た日本企業像や日本の経済ナショナリズムの可能性を聞くことだった。しかし1時間半のインタビューで他にも色々なお話が聞けた。以下にその要約を書く。

「日本的経営」は見る人のスタンスによって変わる。戦後システムなのか、または文化なのか。これを混同しては議論も混乱する。しかし法人(corporation)に対する日米の姿勢の違いは明らか。存在意義を収益に置き、経営者が株主に“your company”という米国、そして社会的意義を大事にして“our company”という日本。しかし同時に企業は株主の貯蓄も預かっている。

途中、短い時間ではあったが社長のキャロン氏が加わった。いちごは「狭く深く」投資し経営者とともに“our company”と言って行動すると揃って強調され、更にキャロン氏は「ニッポンのために働きたい!! 企業価値だけでなく社会貢献も!!」と笑顔でガッツポーズをされた。この「ニッポンのため」だが、実はファンド関係者と企業だけの話ではない所が重要である。年金基金はファンドによって運用されており、今や高齢社会と超低金利時代を迎えた日本でそれは切実さを増している。しかし実際には日本人の巨大

な貯蓄が高齢者の本来不要であるべき苦勞によって国外に向けられる現状がある。多数の高齢者がベトナムへ口座を作りに行くのはその典型であり、その解決にもいちごの存在意義があると強調されていた。

キャロン氏が打ち合わせで抜けられてからは清水さんと4人で様々な事を話した。日本企業と外資の比較はもちろん、“いちご”の名前を巡るいきさつ、日本のファンドを巡る事情、かつて勤務された米系投資銀行、SOX法(内部統制)、そして仕事観といった話題にまで及んだ。私たちの将来を考える上でも非常に興味深いフィールドワークだった。

(加納康宗)

アメリカ大使館訪問

日時：6月27日(水)

国が自由をアピールする際、どのようにナショナリズムがあらわれるのだろうか。この点を探るため、アメリカ大使館にて、広報担当の方にお話を伺った。

【参加者後記】

今回の訪問の目的は各国のPR方式からそのナショナリズムを探るというものであった。米国大使館からは2人の方にスピーチをいただき、その後質疑応答を行った。スピーチの概要はおおよそ(1)米国外務省における広報システムの全体図、(2)各国に対する広報姿勢の違いと日本における広報姿勢の詳細、(3)報道翻訳と日本の反米言論に対する危惧、の三点にまとめられる。質疑応答では回答からアメリカ民主主義への肯定を伺うことができ、ナショナリズムの片鱗が示された。また、米国留学と親米意識の相関性にも触れ、必ずしも比例する訳ではないことを確認した。

広報システムの全体図を丹念に説明してくれる大使館側の姿勢が興味深かった。理念を説明というよりも、事実の活動に基づいた説明、データを用いた演説がスピーチの大半を占めた。理論的に構成されたセッションで理解しやすく、質疑応答でも気取らず率直な態度で応じてもらった。日本の反米言論に対する危惧はいささかオーバーにも思えたが、政府間の安定した関係を一般世論によって壊されたくない気持ちが伝わった。「問題解決国家」というようにアメリカを説明する彼らに、立場ゆえではない

愛国心が伺えた。全体的に見ると、スピーチ、質疑応答共に議論が多岐に及び、大量の情報が交わされた。参加者それぞれが自分の興味をそそる何かを抽出できた勉強会だと思う。(李 凌観)

本会議

本会議では、初日に出し合って整理したテーマに基づき、以下の枠組みで議論を行った。

・アイデンティティーとナショナリズム

各自がナショナリズムを意識するのはどんな時か、参加者それぞれの多様なバックグラウンドも踏まえ各自の経験や意識について共有した。「他者に出会うときにナショナリズムを意識する」という命題が、この時点で既に現れて来た。

・靖国神社訪問準備

フィールドトリップで訪れる靖国神社について、日本側参加者が基礎的な情報をアメリカ側参加者に伝えるという形で準備を行った。日本における死者に対する感覚や、イエ制度など、難しい概念を苦勞しながらアメリカ側に説明し、訪問に備えた。

・歴史の修正と政治的利用

靖国神社訪問を踏まえ、歴史を国がどう扱い、利用するかというテーマ全般を議題としたが、遊就館の展示をめぐる見解の違いでやや議論が交錯し、そこに時間の大部分を使うこととなった。歴史認識に関する問題の根深さ、複雑さが浮き彫りとなった。

・戦争責任(暴力と平和分科会との合同セッション)

分科会合同で大人数での議論となった。戦後に生まれた者も戦争責任があるのか、どのような和解のあり方があるのか、意見を交換した。日本における天皇の戦争責任や謝罪問題にも話が及んだ。

・エスニシティ、宗教とナショナリズム

民族的、もしくは宗教的な意識や誇りとナショナリズムはどのように関係しているか、どのように両者を共存させることができるのかというテーマで議論を行った。マイノリティーに対し国家がどの程度寛容になるべきか、文明の衝突は不可避なのかといった議論にまで発展した。

・経済ナショナリズム

資源をめぐるナショナリズムや、国内の経済的な動向がいかになショナリズムと影響するかというテーマでディスカッションを行った。ナショナリズムと保護主義や排外主義台頭の関係などについて、いくつかの事例を挙げながら議論を行った。

・インターナショナリズムとグローバリズム

インターナショナリズム、グローバリズムはどのようにナショナリズムに影響するか、国民国家に取って代わる仕組みは存在するのか。地域統合や究極的な形としての世界政府の可能性、世界市民としてのアイデンティティーがあり得るのかというテーマで議論を行った。

・広島平和記念資料館と遊就館

亡くなった方の慰霊を主な目的の一つとし、戦争にまつわる博物館ということで共通点を持つ両者を訪問したことを踏まえ、両者においてどのようにナショナルな側面が取り上げられているのか考察した。戦争の記憶のさせ方の違い、博物館の目的の相違点を確認し、どのように戦争を記憶していくのかということについて意見を交換した。

ファイナルフォーラム

以上の議論を受け、ファイナルフォーラムでは議論を以下のようにまとめて発表を行った。

・導入

ナショナリズムとは掴みがたい概念である。アジアと欧米ではその意味することが異なり、前者は歴史認識と密接に絡み後者は多様性と統合とに密接に絡む。当分科会では主に①民族とナショナリズム、②共有される記憶とナショナリズム、③ナショナリズムの展開、に注目して議論した。以下にそれぞれのまとめを述べ、結語とする。

・民族とナショナリズム

我々は「市民国家のナショナリズム」と「民族意識」の対立を軸として議論した。市民国家は共通の信念や価値観でひとつの主権国家を頂く集団であり、多くの場合は複数の民族を内包する。人は市民国家には統合されうるが、その民族性は先天的に決定されている。民族は外部からの期待やステレオタ

イブに応じて強調され、他の民族との対立と市民国家との対立という二種類の対立を起こす。これらの対立に対して、市民国家は、民族間の分裂を共同政権の名の下で統合したり、あるいは全国民に福祉を与えて少数民族の周縁化を防いだりといった方法をとらう。市民国家とは元来、国民を保護したり対立を仲裁したりする働きを持つ概念なのである。



挿絵1 市民国家には様々な民族が内包される

・共有される記憶とナショナリズム

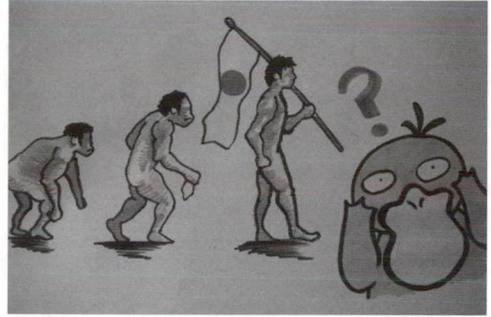
我々は遊就館（靖国神社の博物館）と広島平和記念資料館（原爆資料館）に行き、ナショナリズムとの関係に興味深い対比関係を見いだした。

まず、両博物館の目的が対照的である。靖国神社は戦死者の遺族や友人を慰めるためであるが、同時に戦死者を追悼するためには戦争従軍者も英雄的に捉える。一方の原爆資料館は亡くなった一般市民の遺族や友人を慰めるが、同時に犠牲者を追悼するために戦争を悲劇として捉える。

次に、博物館の向けられた対象にも大きな違いが見られた。原爆資料館は非核と世界平和を全世界に向けて訴えるのに対して遊就館は日本国内だけに対する訴えとなっている。

我々はアイデンティティーの源泉として国ごとの物語が必要とされることを認めたが、それが他国を軽視するナショナリズムに結びつくことを懸念している。国が関わるかたちで公共の展示をする時は、政府はその中立性を監視するか、少なくとも論争から国家を切り離す努力をすべきである。

・ナショナリズムの展開



挿絵2 ナショナリズム進化論

国家は太古の時代からあったものでも永遠不滅のものでもない。そのため我々は国家に代わる枠組みをマイクロ（草の根）とマクロ（世界政府）の方向性で模索した。

マイクロの方向性としては、IT革命により誰でも意見を表明できるようになることがナショナリズムの感情を草の根的なものにする。マクロの方向性としては、世界政府の可能性とその望ましさを検討した。世界政府の成否は、国家の第一義的な役割をアイデンティティーの源泉と考えるか、単なる保安や福祉の提供者と考えるかによって左右される。保安や福祉の役割を担うだけの世界政府なら想像できても、アイデンティティーの源泉としての世界政府は不可能だし望まれないであろう。

より現実的な話としては、各国共通の利益に注目することでナショナリズムを弱める国際機関の連なりが考えられる。国際機関は、平和的な解決のために国家の利己主義を抑制するという重要な役割を持



挿絵3 国際社会から排除されたコダック

第4章 分科会活動

つ。しかしある国が国際社会から孤立すると（挿絵3参照）、国際社会とその国家の対立構造が生じる。それゆえ、我々は国家が国際的枠組みに沿って責任のある行動をすることが国家にとって実用的であるような状況になることを望むものである。

・結語

分科会では、以下の問いが繰り返し提出された。ナショナリズムは「他者」への反発と定義されなければならないのであろうか。

ナショナリズムが自分自身の国を好むことである以上、「他者」の存在は認めざるを得ない。しかしその「他者」との関連付けが敵意である必要はないしそれは必然でもないだろう。

ナショナリズム分科会の感想 加納康宗

事前活動の議論はいつも楽しくて仕方なかった。全員が全く異なるバックグラウンドを持ち全く異なる意見や思想をぶつけ合う。僕は歴史について「自民党のお爺さん」（日本の保守勢力）みたいな感じだったけれど、全員が論理的・理性的・積極的に発言する空間は最高に面白かった。JASCはやっぱり最高の議論の場だった。春合宿ではRT全体と各自のRT paperの方針が予定時間内にすっきりまとまり、その後は充実した議論やフィールドワークを数多く行えた。効率もレベルも高くて本当に言うことなしだった。JASC全体での評判も高く、鼻が高かった。かつて大学のゼミで尊敬したレールイさんの存在には特に勇気付けられた。絶対的にも相対的にも興奮していた。

RT Paperと大学の期末試験を経て、遂に本会議が始まった。議論は全て英語。複雑な概念などが絡むと発言も聞き取りも難儀した。日本語の音読み熟語に相当する英単語には“？”が続出し、疲れている時は得意な議題を除いて諦めたこともあった。でも日本の事情や歴史を色々説明できたのは良かったし自分の「役割」を楽しみながら果たせたと思う。不完全な英語に代わるものを見出せた気もして嬉しかった。

当然ながら意見は対立する。intensityは秋田で頂点に達した。一番辛かったのは僕ではないと思うが、

議論の中で自分を厄介者と感じるようになった。広島では対立のなかった日を幸運と感じた。しかしJASCは学生が妙な「立場」を感じることなく正直に議論する場であるとの視点からそれではいけないと思い直した。そしたら次の京都でやっと分科会がアットホームになった。なぜだろう……色々考えられるがまともに語るとキリがない。京都でやっと発表に値する合意も色々と出せるようになり、いつしか息苦しさも消えていた。

去年は“tangible result”を課されて四苦八苦したと聞く。でも僕たちはよくやった。発表だけじゃない。本来なら不信と反感で終わるはずの所が相互理解とrespectになった。スピーチでも言った、political and sentimental issuesという最もintense, dangerous なRTがこれだけ誇れる結果を出した。最後の発表はリーダーのヒロ×2に頼らずデリ本人たちが成し遂げた。日米の様子は変われど、まさしく日米学生会議、と言いたい。

事前活動でワクワクし、オリセンでドキドキし、秋田でイライラし、広島で落ち着き、京都でマイホームとなったナショナリズム分科会。JASCで最も長い時間を占めた、我が拠り所。

6年前、カナダのホームステイに何故か別のプログラムで来た韓国人2人がいた。あの2人もアメデリから見たジャパデリ@RTのように対照的だったが、突如始まった議論は互いの英語力と知識の貧弱さから事実上不成立。イライラして終わった。6年後にJASCに出会えるとは夢にも思っていなかった。アダム、ヒロ、みんな、ありがとう。



ファイナルフォーラムでの発表を終えて

「アイデンティティー」の社会学

Opposed Identities : Ideology, Ethnicity and Inequality in Conflict

分科会メンバー

三窪英里*

上田 來

櫻 静香

平井麻祐子

廣田隆介

Justin Long*

Danielle Vocal

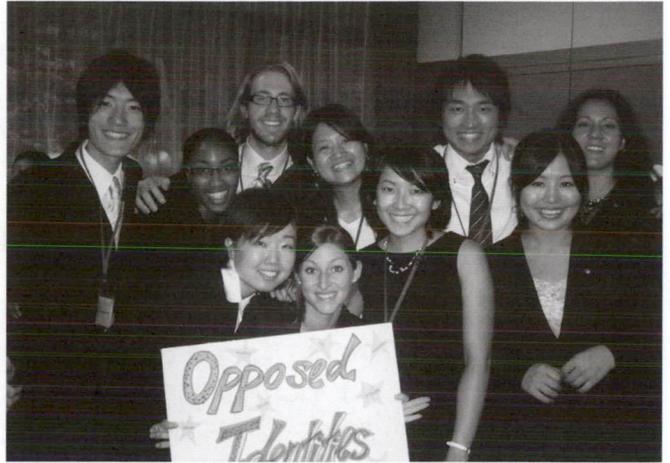
Maureen Campbell

Samantha Scully

Sophia Yang

(*印は分科会コーディネーターを示す)

(注) 本文中のIDは、「アイデンティティー」を示す



分科会概要

世界の均質化を推し進めるグローバル化。その潮流に逆らうように人々は自らを規定するイデオロギーや民族、言語、宗教、文化などへの帰属意識を強固にしている。IDを巡って、時に個人は葛藤し、集団間では対立が起こる。IDはどのように形成され、なぜこのように強い力を持つのか。いかにしてIDの対立は回避できるのか。本分科会では、IDをキーワードに日米国内における差別や移民、格差社会、地域社会における問題だけでなく、紛争解決、平和構築といった国際的事例についても議論を進めることを目的とする。

1. 春合宿

分科会の進め方について意見を交わし、全員で共有した。その後、メンバーがそれぞれもつ問題意識や扱いたいトピックについて自由に話し合った。本会議の集大成であるファイナルプロジェクトの方向性については、「IDの衝突はいかにして回避できるか」という命題について個々のID衝突のケースから仮説を立て、考察を重ねた後に、衝突回避のための条件として普遍的なIDを探し出すことで、日本側参加者の意見がまとまった。春合宿において初めて顔を合わせたメンバーであったにもかかわらず、すぐ

に打ち解け、充実した議論が繰り広げられた。早くも日米10名全員で共に分科会を作りあげたいという思いにかられ、期待に胸膨らませた。

2. 事前活動

春合宿後から本会議までの間、各人の興味に沿った事象についてのリサーチ、およびプレゼンテーション作成に加え、ID問題について考察を深めるべく以下の場所を訪れた。ほか、サミュエル・ハンチントン著『文明の衝突』を読み、冷戦後起こる衝突を文明というパラダイムから捉えた著者の論について討議した。

2.1 映画「パラダイス・ナウ」鑑賞

「IDによる衝突をいかに回避するか」という分科会設置の目的に向けて、個々の衝突事例を取り上げ、分析するため、パレスチナでの自爆攻撃問題を扱った作品『パラダイス・ナウ』を鑑賞した。宗教がもたらす民族間の衝突や自己の葛藤について学び、宗教がもたらす人間の憎悪やID観について議論した。

よくパレスチナ問題はイスラム教とユダヤ教の対立という構図で語られがちだが、それらの宗教に属している個人の不満を解決しない限り永久にこの紛争は終わらないと実感した。ゆえに、分科会としてすべてのIDの対立を克服する「普遍的かつ可変的で

第4章 分科会活動

柔軟なもの」を探求しつつ、同時に個人の内面にまでディスカッションの範囲を広げて議論したいと思った。

2.2 東京アイヌ文化交流センター訪問

東京駅の近くにある東京アイヌ文化交流センターに訪問し、アイヌの方々の歴史や現状を館内にある資料をもとに勉強した。館内で鑑賞したビデオにおいて、繰り返し「言語とは民族のIDそのものである」という趣旨の説明がされていたのが印象的だった。アイヌの人々は、明治政府による「和人」への同化政策の結果、古来より日常会話として使用していた彼らの独自の言語を失ってしまった。しかし現在、北海道やその他全国に住むアイヌの人々の努力により、彼ら独自の言語を再び学び、復活させようとする動きがあるという。このように言語を復活させようとするアイヌの人々の姿勢に、彼らが「和人」とは違う独自のIDを誇りに思う気持ちが垣間見られた。

2.3 モスク訪問—イスラム教の学生との交流—

モスクへの訪問時には、初めは私たちがID問題の繊細さに鈍感であったことによる戸惑いもあったが、最後にはイスラム学生と打ち解け合って話し合いをすることができた。特に、「自分のIDの構成比」をテーマにした自己紹介で、自らのIDが100%イスラムで構成されているというあるイスラム学生の発言は、とても印象深いものだった。

この訪問は、私たちがIDに興味を持ちながらも、いかに先入観で他者を判断しているか、またいかにIDの問題に鈍いかということ気付かせてくれ、とても意義深いものであった。

3. 本会議活動

本会議の活動としては、主にフィールドトリップ、各自のプレゼンテーション、ファイナルプロジェクトに向けた議論の3つの柱があった。

本分科会では「IDによる衝突をどのように回避できるか」という命題の下、様々なケースを扱い、毎回の分科会活動の中でいかに充実した議論ができるかを重んじた。そしてそこでの新たな発見が蓄積されたものを、全てファイナルプロジェクトに結びつけたいという思いがあった。そのため、3つの活動の内容やテーマは違えども、いずれも相互に深く関

係し合っている。

3.1 フィールドトリップ

青山学院大学の押村高教授をお招きし、日本のマイノリティ問題についてレクチャーを受けた。また、ナショナルIDについて学ぶべく靖国神社を訪問した。

【押村高青山学院大学教授によるレクチャー】

7月29日、青山学院大学国際政治経済学部の押村高教授をお招きし、レクチャーを拝聴した。日本が「単一民族国家」であることの神話性について、アイヌ民族や沖縄人、在日コリアンなどを例に挙げ、多民族国家としての日本についてお話いただいた。アメリカ人学生だけではなく、日本人学生にとっても専門的な知識を得た上でマイノリティ問題を再考することとなり、新たな発見の多い時間となった。また、移民受け入れによって起こる雇用問題や競争激化といった両国に共通する問題についても質疑応答が活発に交わされ、非常に有意義なセッションとなった。

【靖国神社訪問】

靖国神社訪問では、神殿参拝、遊就館見学、さらに一般の方々の靖国神社に対する意識調査を行った。その中で、より印象に残っているのは後者2つだと思う。第一に遊就館見学では、大きく意見が2つに分かれた。一方は、遊就館を訪れることで、感



靖国神社前にて

情的に動かされ、今までの靖国神社に対する賛否にかかわらず、国のために戦った戦死者を悔む気持ちを感じるメンバー。もう一方は、遊就館がその偏向

性を隠匿するために、人間の感情に訴えるような展示手法を取っていることは教育上良くないというメンバー。靖国訪問後の議論においては、客観的に物事を見ることにまだ慣れなかった私たちは、双方が納得のいく答えを容易に見出すことはできなかった。皆自分が立脚する立場から中々抜け出せず、議論にわだかまりを感じたことも否めない。しかし、そのような議論での困難を何とか切り抜けようと、必死でお互いの立場になって考えたことは、その後の分科会活動を円滑に進める上で大いに貢献したと思う。靖国神社に関する一般人を対象とした調査では、靖国問題が非常にセンシティブであったがために、特に靖国問題に関して興味があったアメリカ側参加者も緊張気味だった。しかし、やはり様々なバックグラウンドを持った人々の意見を、その人のIDと結び付けて考えることは、とても興味深いものだった。こうして他者の意見を分科会メンバーで共に分析することにより、私達自身の分科会における判断をより客観的なものにできたと思う。

3.2 本会議中の議論内容

各自の興味関心に基づいたID問題について、事前にリサーチしペーパーにまとめたものを一人ずつ発表し、議論を行った。以下その内容をいくつか紹介したい。

【集団的IDの形成のされ方—ナショナルID—】

本会議が始まる前に書いた私のペーパーを基に、日本人のナショナルIDの起源に関するプレゼンと、それについてのディスカッションを行った。

今や所与のものとして受け入れられている、日本人が「日本人」であるという事実は、実は近代の発明品であり、黒船の来航など西洋からのプレッシャーに対応する形で新しく生み出されたものであるという趣旨のプレゼンをした。それに対する反応は、ジャパデリ、アメデリを問わず、日本人の「日本人ID」が意外と新しいことに驚いた様子だった。また、このプレゼンから発展して、9.11のテロ攻撃を受けたアメリカがその後愛国心をより一層強め、一致団結した事例などを話し合った。こうしたディスカッションから、私たちはナショナルIDのような集団的IDは、外敵の存在、外からの脅威によって形成さ

れる傾向にあるという結論を得た。(上田 来)

【日本に住むマイノリティとしてのムスリム—宗教ID—】

マイノリティグループの1つとして、「日本に住むムスリムと米国に住むムスリムの、経験または感じる困難の違い」についてディスカッションをした。ここで驚きだったのは、事前インタビューのデータで、日本に住むムスリムは、米国に住むムスリムに比べ、殆ど差別を受けていないということだった。しかしこれは、マイノリティグループとしてのムスリムが日本で完全に満足しているということではない。ムスリムは、差別はされないが、「いないものとして扱われている」と感じているとのことである。これは、米国における差別と質こそ違えど、同程度に深刻な問題であると感じた。このセッションにより私達は、日本ではマイノリティグループを「ウチ」へ受け入れる教育を施す必要性があると感じるなど、文化によって生じるマイノリティ問題とそれに対して施すべき対策が違うことを認識した。

(櫻 静香)

【戦争の歴史が作り出すIDとは？】

—被爆地・広島から考える—

「原爆ドームを見た瞬間、これほどまで自分のIDを強く感じたことはなかった。」とショックを露わにしながら感情的に話すアメリカ側参加者。なぜ自分の家族が原爆を投下した訳でもないのにこのような気持ちになるのか、日本人はアメリカ人に対して怒りを感じるのか、戦争がもたらす国家・民族IDとは何か。広島平和資料記念館を背に議論は続いた。「何人であるかは関係ない。原爆の悲劇を知り、私たちは人類として共通に平和を願うのだ。」

私たちは約60年前戦火を交えていた国の学生である。(三窪英里)

【普遍的—ID地球市民の視点から考える—】

「地球市民」というIDは、いかにして形成されるのだろうか。強固なIDとは外からの脅威によって形作られるものであるため、私達は地球温暖化やエネルギー問題、食糧問題など、人類共通の脅威の存在が、「地球市民」という意識の形成に寄与するのではないかと考えた。しかしこの種の脅威は、戦争などとは違いその姿が見えにくく、また外敵が自分達

第4章 分科会活動

人類であるというジレンマを抱えているという問題点があることは否めない。(廣田隆介)

3.3 ファイナルプロジェクト

1ヵ月の議論の成果となるファイナルプロジェクトでは、IDの形成とそれによって誘引される葛藤や衝突を最も顕著に表す例として、戦争がもたらすIDに焦点を絞り、靖国神社と広島を軸に作成した。専門家や被爆者の話、フォーラムや分科会の議論など、会議中の全ての経験から命題に対する答えを模索した。

IDの衝突はしばしば避けられず、過去の過ちに対する許しは特別困難である。しかし、他人の立場になって、自らの役割、相手の気持ち、そして自分がどういう人間であるかということを考えることが紛争解決の第1歩になるであろう。そのプロセスは非常に複雑で険しい。しかし、私たちは決して希望を捨てず挑戦し続けたい。

4. 参加者の声

【アイデンティティーの社会学分科会

～本会議中の空気～

国家間関係、マイノリティ問題、ジェンダー、社会階層、対人関係、そして一個人と、とても広いトピックを扱う分科会であったことにより、様々な関心領域、及び問題意識を持った学生が集まったということが、本分科会の最大の特徴であった。ゆえに本会議開始直後は、ファイナルプロジェクトへ向けての方向性の違いが顕著に現れ、衝突を繰り返した。不慣れた環境と24時間共同生活から来るストレス、さらには「自分の思いが上手く伝えられない」、「他人の話を素直に受け入れられない」、などの葛藤から、10日目前後までは、気分が落ち込んだままのメンバーや、感情を抑え切れぬ余りに突然議論の場を立ち去ってしまうメンバーも見られた。皮肉なことに、私達が問題意識を持っていた「IDの衝突」を、いつの間にか私達自身で体現していたのであった。

しかし、転機は突然訪れた。ファイナルプロジェクトの準備と自由討論の時間を明確に分けたことにより、メンバーは常に具体的な成果を出さなければならないというプレッシャーから解放され、その率直な胸の内をポツリ、ポツリと語り始めた。自身の

被差別、差別体験から、個人の信仰のようなナイーブな議題、さらには靖国神社、広島、アメリカの格差社会などについて、白熱した議論が展開された。その過程においては、自らのIDの根幹を再確認せざるをえない場面も多く、さらに再構築を迫られるような新たな発見も多くあった。そして本会議が終わる頃には、全てを曝け出し、晴れ晴れとした皆の表情が、分科会における議論の充実度を物語っていた。一方でファイナルプロジェクトは、充実した議論とは裏腹に、不完全燃焼となってしまった感は否めない。しかしこの分科会で得た経験、すなわち「国籍や言語の壁を乗り越えて、互いを友人として理解し合った」という成功体験は、必ずや私達の未来を通じて、新たなる「IDの衝突」を回避するための礎となるだろう。

(廣田隆介)

5. 分科会総括

国家、性、民族、宗教、経済的格差広いトピックについて話し合われた当分科会であるが、問題によっては社会構造や文化の違いから日米間で非常に大きな意識の差が感じられた。しかし、たとえ狭い、専門的なトピックから入った際でも話題はたちまち広がり、日本人、アメリカ人であることを超越して、個人としての意見が活発に交わされたことは意義深い。

一方で、共通の目標を設定しアウトプットを出すための協働作業に関しては、意見の対立や価値観の違いからくる困難も多々あった。しかしその過程もまた個々のIDの相克であり、JASCそれ自体が異なる他者、そして自分と対峙することで相互理解を目指すためのチャンレジの場であったと考えている。他の立場に立って、自らのIDと照らし合わせ、分かり合おうと努力する。このプロセスを通して毎回のセッションで得られた新たな気づきこそが、当分科会で得られた最大の成果であったのかもしれない。常に真摯な態度で自分の気持ちに向き合い、正直に自己を表現してくれたメンバーと全員で分科会を作り上げられたことを心から嬉しく思う。

(分科会コーディネーター 三窪英里)

文化：グローバル化の渦中で

Eastern and Western Popular Art: Who is Imitating Whom?

分科会メンバー

高井竜輔*

呉 宣咏

篠原由香里

堀 沙織

間嶋絵梨

Casey Samulski*

Alison Miller

Aya Nakanishi

Brad Bower

Marquita Taylor

(*印はコーディネーターを示す)



分科会概要

今日、文化は簡単に国境を越える。日本の若者はヒップホップに夢中になり、村上春樹は全米でベストセラーとなった。進展するグローバル化に伴う文化の伝播や普及は国家の枠組みを超えた交流を加速させると評価される一方で、地域の伝統や特性を破壊するという批判にも晒されている。当分科会では、文学、映像作品、音楽とジャンルを問わず広く表象芸術全般を扱いながら日本およびアメリカ文化の共通点や相違点と、その背後に潜む広範な社会システムへの理解を深めることを主眼とする。日米の文化は互いにかなる影響を与えあって来たか。友好と相互理解の実現に向け文化の果たす役割とは。行動する主体としての学生の視点を忘れずに議論していきたい。

事前活動

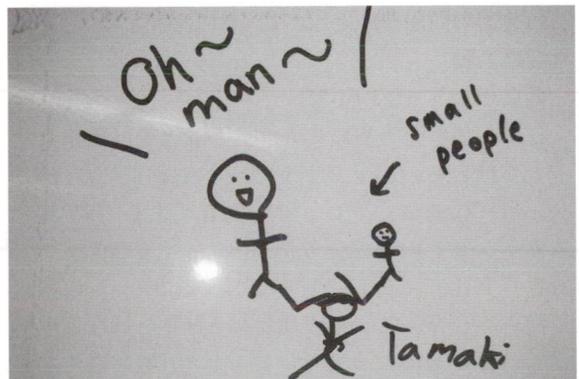
・春合宿 5月3日(木)～5月5日(土)

日本側参加者同士の初めての顔合わせとなる春合宿では、分科会メンバーについてユニークなあだ名を決めた後、各自の分科会に対するビジョンを交換・共有した。グローバル化する現代と文化のアイデンティティ、国際的な相互理解の進展と文化のあ

り方等、各メンバーの興味や関心を基に、共通のテーマや方向性を検討する作業を行った。

・防衛大訪問 6月22日(金)

防衛大学校を訪問し、映画や文学に表象される日米の戦争観・死生観に関する文化的相違や共通点についてディスカッションを行った。『硫黄島の砂』や『父親たちの星条旗』といった映画や第二次対戦を扱った評論を手がかりに、個人主義と集団主義、戦争の描かれ方の変遷と日米の歴史観など、広範な分野に渡って貴重な意見交換が出来た。



第4章 分科会活動

・国際交流基金訪問 6月27日(水)

独立行政法人国際交流基金を訪問し、「文化を通じた国際的な相互理解」について伺った。ロサンゼルス事務所長の井上氏より、芸術文化交流・日本語教育の普及・日本研究支援を通じた総合的な日本理解の促進という国際交流基金の取り組みについてお話を伺った後、所長の小川忠氏のレクチャーを受けた。小川氏は「誇りの不平等」や「近代の超克」と言った言葉をキーワードに、グローバル化する現代における、文化と人々のアイデンティティの保存と衝突について話された。単なる紹介にとどまらない人間同士の交わりがあって初めて文化の交流が成り立つ(=双方向性の重要さ)、あるいは、相互理解は到達点ではなく目指す過程である(=理解したと思った瞬間誤解が始まっている)といった鋭い指摘は、今後の分科会運営に意義深い示唆を与えた。

・分科会合宿 7月6日(金)~7月7日(土)

週一回ペースでオンラインミーティングは行っていたものの、メンバー全員が揃ってミーティングを行う機会が無かったため、本会議を前にもう一度分科会の目指す方向性を明確化することを目標に、国立青少年記念オリンピックセンターにおいて合宿形式のミーティングを行った。メンバーは事前に各自が本会議で扱いたい分野を整理し直して議論に臨み、1泊2日の熱いディスカッションを経て、「グローバル化する現代社会においては、文化と人々のアイデンティティが密接に結びついていること」「異なる文化同士の相互的な理解と共生に向けた文化的共同(=collaboration)の重要性」が日本側メンバーの共通の問題意識として得られた。

本会議活動

・東京サイト (RT#1-3)

日米参加者同士初めての顔合わせとなった東京サイトでは自らのバックグラウンドや将来の夢、RTペーパーに基づくトピックの共有によってRTディスカッションの基盤作りを行った。RTのテーマである「文化」に対し、日本側は“culture”の意味で捉える一方、アメリカ側は“Art”を扱うと理解していたことによるギャップは、「国境を越えて広がり影響を与え合い、主にインターネットを通じて

個人の意思決定に作用するPop culture」という共通のフォーカスを見つけることで解消された。インターネットと民主制を背景とするPop cultureを通じた個人のempowermentという、ファイナルフォーラムに直結する重要なアイデアが提出される一方で、ディスカッションスタイルの違いから、日米間の参加者の間で上手く意思疎通が出来ない場面もあった。

・分科会フィールドトリップ

7月30日の分科会フィールドトリップは、呉宣咏のコーディネートで早稲田大学の関根勝教授よりレクチャーを頂いた。演劇をご専門にされる先生から、日本の伝統的な演劇である能に関するお話を頂けたことは、アメリカ側参加者だけでなく日本側参加者にとっても、自国と文化のあり方を再考する機会となった。



早稲田大学にて。フィールドトリップの帰りに。

・秋田サイト (RT#4-8)

秋田サイトでは二つの重要な進展があった。まず、「発言は挙手を経て司会に指名された後」など、ディスカッションで遵守する日米共通のグラウンドルールを作成した。これにより全員を巻き込んだ議論が円滑に進行するようになった。もうひとつの進展はファイナルフォーラムでビデオを使ったプレゼンテーションを実施すると決定したことである。分科会ではこれまで、最終的な到達点であるファイナルプロジェクトをめぐって、アカデミズムを追求する

か、エンターテインメント性を志向するかという形式レベルでの対立があり、何を追求するべきかというコンテンツレベルでの話し合いが殆ど出来ていない状況にあった。そこで、分科会活動も折り返し地点となる秋田サイトにおいて、全体の方向性を全員の意見を勘案した上で決定し、ファイナルフォーラムに向けてすべきことを明確化する方針をとった。投票の結果、ビデオを作成することで一致した。映像を用いながらもナレーションや字幕による十分な説明を行うことでアカデミズムを損なうこともないという結論からだった。

・広島サイト (RT#9-10)

ファイナルフォーラムに向け、ビデオを作成するという秋田サイトでの決定と、今までのディスカッションを基に、分科会全体の問題意識を反映した個別のテーマを設定し、それぞれについて2～3人のグループワークで探究することになった。具体的なテーマ設定としては後述のように、「ポップカルチャーの定義」「相互に影響を与え合う文化」「国境を越えるポップカルチャーは新しい帝国主義か(=文化とアイデンティティ)」等が挙げられた。過密日程と熱さに悩まされながらも、広島サイトでは各グループの進展状況をシェアし、分科会全体の方向性を鑑みつつ各セクションの内容を改良していく作業が行われた。

・京都サイト (RT#11-12)

ファイナルフォーラムに向け、ビデオを完成させる最終的な仕上げの段階となった。各グループは夜遅くまで自分たちの主張を的確に表現できるイメージの収録や字幕となる解説文の推敲に頭を悩ませた。メンバー同士がそれぞれの得意分野を持ち寄って助け合ったり、アメリカ側と日本側メンバーが時に談笑しつつも集中して共同作業に取り組む様子は、分科会全体がチームとしてまとめ、機能していることを雄弁に物語っていたと思う。慣れない英語でのナレーションの収録や、映像・音声の最終的なチェックを経て分科会のファイナルプロジェクトが完成したのは、フォーラムの日の早朝のことだった。

ファイナルプロジェクト

ファイナルプロジェクトは、分科会の取り組みの成果を踏まえ、以下の内容に照準を当てたビデオを制作した。ビデオは分科会内やフォーラム会場に訪れた以外の人々からも反応を得るため、Youtubeで公開することとなった。

ビデオは

http://jp.youtube.com/watch?v=orx_EAjn5UU のURLから閲覧することが出来る。

ビデオのコンテンツ

- I) Intro (分科会設置の目的)
- II) What is pop culture? (ポップカルチャーの定義)
 - a) Evolution of pop culture (ポップカルチャーの成立)
 - b) Actors (ポップカルチャーは誰とともにあるのか)
- III) Cultural Interactions? (文化の交流?)
 - a) Melting (混交する文化)
 - b) Stereotypes (文化的ステレオタイプ)
 - c) Introducing Cultures (文化を紹介する)
- IV) Colonization? (文化は新しい植民地主義か)
 - a) Cultural Identity (文化とアイデンティティ)
 - b) Economics / Tensions (経済的側面と反発)
- V) Conclusion (結論: 文化の担い手として)

総括

多くのアメリカ人の若者が日本のMangaに夢中になり、ハリウッド映画に代表されるアメリカの生活様式は、今や現代日本人の生活に完全に定着している。世界屈指の経済大国として繁栄する両国は60年前の戦争など無かったことのように友好的だ。歴史も人種も原語も異なる日米両国が高度な水準での「相互理解」を実現できたのならば、紛争の絶えない中東や世界の他の地域にその達成をロールモデルとして提供できないか。それはきっと、70年前に始まった日米学生会議の理念である「太平洋の平和が世界の平和に通ず」につながるものがあるはずだ。

その反面、日米関係の現状を疑うことも忘れてはならない。僕らはどこまで本当にお互いのことを分かっていると言えるだろうか？ 政治的や経済とは異なり、文化やアイデンティティといった視点から、ステレオタイプやイデオロギーの表層を超えた次元での相互理解の獲得を目指すこと。それが分科会を設定した目的だった。日米8人の個性溢れるメンバーと海の向こうの頼れる相棒Caseyとともに駆け抜けたこの半年は忘れられないものになった。みんな本当にありがとう。



京都での分科会の合間に。プレゼンテーションの練習・・・？

第 5 章

参加者の声

伊関之雄

日米学生会議。2週間がすでに過ぎてしまった。5ギガバイトにも及ぶ大量の写真や動画ファイルを毎晩深夜まで眺めていると、どれだけ自分が毎日楽しんでいたかが感じ取れる。

東京

“Harajuku”や“Shibuya”で思い起こされる東京の名所は、初めて日本へ来るアメリカ人にとっては非常に魅力的であったのだろう。フリーの時間になると多くのアメリカ人参加者の頭の中は、カラオケ・買い物・居酒屋・楽しいトコロ…今まで、あれだけ疲れてそうな表情だった子がフリー・タイムになると突然変身してしまう。それだけ東京という場所は彼らにとって心躍る場所であったのだ。その中で、私自身も彼らの行動に同行して“東京観光”へ出向いた。ここで初めて、日本人側としてホストの責務を痛感させられる時が訪れる。日本人の「優しさ・思いやり精神」と「責任・リーダーシップ」をどのようにしてうまく調和させるか、考えさせられた。アメリカ側の提案に対して、話し合いを行う日本人側そして最適な対案が出たと思うと、また違った提案がアメリカ側から出てくる、また日本人側が話し合いを行う…この繰り返して妥協が生まれ結局グループ全体にコンセンサスが出されずに時間のみが過ぎていく。当初は、アメリカ側のアグレッシブな提案の連続攻撃、それに対して考え込む日本人側、という構図が本会議当初では成り立っていた。

私は、この構図にあえて介入しなかった。今後この構図がどう変化していくかを興味深く見ていった。このあたりでは少なくとも、大半のアメリカ人・日本人の参加者はお互いの性質には違いがあることは痛感するもののどのようにしてそれを解していくかのソリューションは見つけることは出来なかった。

秋田

8月7日、私の誕生日。本会議参加者のみんな、お祝いの言葉ありがとう。

東京のようにしてフリー・タイムの間は街に出て、買い物などのような“遊び”はできない。二人部屋をどのようにして全体が楽しめる空間にするかが

問われた。アメリカ側の行動は早かった。私の誕生日会を開くことになる、すぐに準備に取りかかる。私の部屋に人を集めて、音楽を用意し、その他必要な飲食物をセットする。パーティーの開始。私の部屋にいるのは全員アメリカ人。「日本人はみな何をしている」あるアメリカ人の発言。「日本人は他の人の誕生日を祝うことがないのか？」アメリカ人側の日本人に対する懐疑的な感情が見え始める。会議中にあったreflectionの場においても日本人への接し方、議論においてどのようにしたらスムーズに話し合いができるのか、といった議題が目立っていたのも影響していたのであろう。

秋田で参加した竿燈祭り。祭りの見やすい場所を探しに日米の学生が協力を見せなければならぬ夜が来た。最終的には多くの学生は大変満足した夜のイベントであった。

広島

宮島から始まったこの旅。日本三景ともあってアメリカ側のみならず、日本人としてもこの自然に囲まれた絶景を堪能していた。自然と人類の知恵と技術で手がけた建造物との調和が、日米の異文化の調和にも少なからず寄与したのではないかと、あの日を思い返して思う。船を降りた瞬間に出迎えた腹を空かした鹿、ロープウェイへの道のりにあった河川でハイキングの疲れを癒し、木々に囲まれた場所でのグループ写真撮影…そしてまた出迎える腹を空かした鹿。自然と双方の学生が調和できた時間を過ごすことができた気がする。このあたりになり、日本側とアメリカ側との意思決定が迅速になってきたと思われる。日本人の意思を聞き入れ、それらに基づいてアメリカ人は取捨選択して行動を起こすといった構図に変化が表れてきた。クラブに踊りに行きたいグループ、バーへ飲みに行くグループ、ホテルのロビーで語り合うなどのグループの形成が可能となり、自然と人の流れがスムーズになり、次第に学生同士のグループが固定化してきた。

京都

とにかくファイナルフォーラムへ向けての準備で、私はようやく熱がこもってきた分科会に一極集中。分科会リーダーが両方ダウンした中、うまく議

論が進んだと改めて思う。

全分科会のファイナルフォーラムも無事終わり、京都の夜の旅へ20名ほどで出かけた。この時、グループでクラブ・カラオケ・居酒屋どちらを先に行くか悩んでいるときに、アメリカ参加者の女の子が私に「ユキオが好きなほうへ行こうよ、だってユキオは案内だけで精一杯なんだし」…と言った瞬間、正直拒絶反応が出るころであった。あれだけ、東京では案内役の私なんか考えもせず、自分が感じたことしか発言しなかった子が…まさか…

笑い話に聞こえるかもしれないが、真剣にこのように感じていた。

私は、JASCのOBの方から城山三郎著の『友情力あり』の抜粋を頂いた。序章・7章・8章の部分を読み返してみると戦前から始まったこの会議においても、私が長々と書いた同じような場面が数多くあったような気がする。城山氏は主に分科会での会議における、日米の間で生じた偏見・妥協・同情・優越心などを描いていた。今年は59回目の会議であったのにもかかわらず、やはり異質の人間同士が感じる違和感や疑念は異世代の間でも、そう変わることがないということが確信できた。所詮、人間同士の対立だったり、misunderstandingなのだ。

よく本会議中に私は、「JASCとは、どうあるべきなのか」「アメリカ人と話をしている中で何か感じるものがあるのか」と自問自答している瞬間が多くあった。腹痛でベッドに横になっていた時間やAIUの図書館のソファで横たわっていた時などいろいろと回想していたのを覚えている。今年のテーマは：「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」。私にとってはあまりにも壮大なテーマであったとしか言いようがない。しかし、経験を共にした仲間同士が世界の多数の人々を刺激し、影響しあうことにより、本当の意味で世界における「次代の創造」ができるのであろう。決してJASC内に閉じこもる必要などない。

「次代の創造」へ再出発だ。

…これを狙ってのテーマ設定を実行委員の8人は行ったのであろうか？そうであってほしい。彼らの努力に再度感謝してJASCの旅の総括としたい。

上田 来

この夏が意味すること。～第59回日米学生会議を振り返って～

濃くて、長くて、でもあつという間だったJASCの夏が終わり、その後すぐに他の予定が雪崩のようにやってきて、忙しい日々を数週間過ごした。そのため、JASCのことを十分に振り返る間もなくここまで来てしまった。

今考えてみても、JASCの1ヵ月が自分にとってどれだけ素晴らしいものだったのかは、未だによくわからない。それでも、36人のJapadeleと36人のAmedeleと過ごしたあの夏は、確かに変わっていたと思う。あれだけの大人数で、あれだけの長期間をいっしょに旅し、語り、寝た日々は今まで過去に無かったし、これからも将来にわたって起こることはないだろう。ベッドの上で横になる以外は、いつもだれかといっしょにいた。それが普通だった日々が、今ではどうしようもなく非日常に感じる。

JASCを振り返ることができなかったのも、ただ忙しかっただけではなくて、そんな自分にとって不思議で特別な1ヵ月を、ただ簡素な言葉でまとめることも、陳腐な修辞で美化することもしたくなかったからだ。やはりJASCは自分にとって特別だったのだ。

1ヵ月のJASCを通して、オレたちは様々な経験をした。アカデミックなディスカッションに始まり、有識者の話を聞き自分たちからも社会に向け発信したフォーラム、観光地を巡るツアー、夜を通して語りあったことなど、毎日が忙しくも充実したスケジュールで埋まっていた。

それでもこれだけ密度の濃い1ヵ月を、あえて一つの言葉で表すとしたら、それはやはり「出会い」だと思う。70人の様々なバックグラウンドを持った人たちとの出会い、そしてJASCという非日常を通して知った新しい自分との出会いがJASCなんだとオレは思う。なぜなら、一人で本を読んだり、映画を見たりしては得られない感情をたくさん「出会い」から得ることができたから。

新しい知識、新しい価値観に触れたときの興奮。

第5章 参加者の声

たくさんの人に囲まれ、囲み、上手く自分を表現できないことの辛さ。他の人には簡単にできることが、自分にできない時のもどかしさ。知らない者同士が分かり合えた、心で通じ合えた時の喜び。こんな新鮮で時に残酷な感情を1ヵ月を通して経験した。しかもその感情を他の70人といっしょに体験したのが、このJASCだったのだと思う。

1ヵ月間が全て楽しかったといえば嘘になる。自分を相手にうまく伝えることができずに苦勞したことは事実だった。それでも、最後のReflectionで、意を決してみんなの前にたって自分の気持ちを吐露することができて良かった。最後の最後で、自分という人間を他のみんなに共有・共感してもらえた気がする。

彼らとまた、会いたい。あの出会いは、あの夏で終わりではなくて、これからが始まり。出会いを通して、新しい自分になる。新しい自分が、またいつかともにあの夏を過ごしたJASCerたちと出会うだろう。その時に再び感じるであろう新鮮な感情に触れるために、またオレはみんなと会いたいと思う。JASCはよくLife Changing Experienceだというのが、まさにその通りである。JASCを通じて、オレはまた変わるだろう。JASCという出会いを通じて変わっていくJASCerたちに、これからもずっと会い続けて生きていきたいと思う。

上野良輔

2007年、夏。

これまでの人生の中で、最も暑い、熱い夏。かけがえのない「出会い」に詰まった、大切な夏。

第59回日米学生会議では、様々な「出会い」があった。東京では高円宮妃殿下をはじめ錚々たる方々とお会いし、秋田ではホームステイ先で地元の方々と交流し、広島では高校生や大学生と核問題について議論することができた。貴重で素敵な「出会い」であった。

しかし、私にとって何よりも大切であったのは、第59回日米学生会議参加者というJASCerとの「出

会い」であった。7月26日に71名が集結してから瞬く間に過ぎ去っていった1ヵ月間、同じ時間、同じ空間を共有してきたその経験は、何物にも代えがたい財産となった。「朝まで生テレビ」が終わるまで語りあったり、日本外交・環境問題・歴史認識について議論したり、新宿の居酒屋で戦ったり、バスケットをしたり、竿燈祭を見学したり、カラオケで絶叫したり、揉めたり、悩んだりしたことも含めて、素晴らしい思い出となった。

そんなJASCerの中でも、私にはとりわけ大切なJASCerがいる。彼とは春合宿で出会い、直前合宿から1ヵ月間ずっと一緒に過ごしてきた。私の日米学生会議は彼と共にあったといっても過言ではない。宮島で泳いだときも、花火をしたときも、半裸でタレントショーに出たときも、たまに夜寝るときも、特にお酒を飲むときはいつも、彼と一緒にであった。中でも一番心に残っている事は、8月18日、新実行委員を決めるEC選挙での出来事である。彼は悩み抜いた末、選挙には出ないと決めていたにも関わらず、締め切り5分前に「出る」と言い出した私のために、合理的に下した決断を捨てて出馬してくれたのである。彼と一緒に選挙に出られて本当に嬉しかった。

もっち、1ヵ月間、どうもありがとう。これからもよろしくね。

こんなアツい70名のJASCerと「出会い」、共に過ごしたこの夏を、私は一生忘れない。

私はこの会議に参加するために多くの方々にお世話になった。多岐にわたる知識のみならず、学問を、人生を教授して下さった大学校の教官、書いた文章を読んでくれたり、議論や相談相手になってくれたり、二次試験会場まで付いて来てくれた大学校の親友、会議の活動に参加する私のために、週末にも関わらず早朝から協力してくれた両親、そして第59回日米学生会議を創り上げ、私を参加させてくれた実行委員のみんなに、心から感謝したい。

日米学生会議。私は、この会議を知った高校3年生のあの日から、3年間という長い航海をしてきた。

私はあの日、日米学生会議から新たな羅針盤を授かったのだ。

不思議なことに、ここまでの針路は、あの「出会い」の瞬間に定められていた気がする。

だがここからは、私にとって不可視の航路、不可知の海となる。

しかし、私は進み続ける。日米学生会議から授かった羅針盤を胸に。

いざ、次の針路へ。

呉 宣咏

「一期一会」

「今という時は二度と戻らない、今という時間をより大事にしよう。」

これは私が常に思っている人生のモットー的な言葉である。小さい頃から休みには一人で色々なキャンプに行くのが当然なことのように私は新しい人に出会うことには慣れていて、昔から人のことが好きで、誰かと一緒にいる時には笑いが止まらなかった。新しい人に出会い、仲良くなり、それで友達と呼ぶようになったらその後はいつもお別れが待っていた。キャンプが終わってそれぞれ日常生活に戻ってもずっと連絡しようねといつも約束するが、その連絡が長い間続くのは実際難しいことである。離れてから、会えなくなってからその時もっと話せばよかった、もっと仲良くなればよかった等の後悔が多い。それは人に出会うときだけに限らず、仕事や勉強をする時にも影響を与える。今年の正月、周りの友達に送った年賀状に書いたのが私の中で私が生きている今をもっと大事にしようという思いを確かめたきっかけになった。日米学生会議に参加したその1ヶ月は毎日新しく新鮮だったのである。気楽にいられる場所で一秒一秒新たな感動を感じた。その感動から自然に出てくるみんなの笑顔を中心に刻み込んでおきたくて私はもっと笑っていてお互い笑いながら小さくなった目を通して心の対話ができただけかもしれない。先輩達からは日米学生会議のことがLife Changing Experienceであったとよく聞く。しかし、本会議中はその言葉に疑問を持っていたデリ

が多く、私もはっきり見えないその答えをさがそうとしていた何人かの一人だった。その時の答えは私にとって日米学生会議はLife Changing Experienceではないと言っていた。確かに良い経験が出来たというには間違いないが、人生が変わるほどではなかったと言っていた。でも会議が終わってからもう20日が経った今はもし誰かに聞かれたら、日米学生会議はLife Changing Experienceだったと言える。それは私が大事にしようとしていた一分、一秒の時間の中でLife Changing Experienceはいつも起こっている。人は人生を変えてくれるような経験といえはとも大きくてははっきり見えることではないと、それをLife Changing Experienceと思わない。しかし、人生を変えるような経験は実際とても大きいイベントであるかもしれないが、日常生活の中で友達の話の中で耳にした話から本当の自分に気づくこともあるし、それでもっと良い自分になろうとしたらそれはその人にとってLife Changing Experienceだと言えるのではないのか。本会議中には多くの人数に囲まれている中で本当の自分に向き合うのができたと思う。自分にちゃんと向き合っ客観的に見るのができたというだけでLife Changing Experienceができたと思う。本会議中だけでなく会議が終わってからもっと進んだ自分に会いたいと思ったらそれでその人の人生は少しずつ変わってくる。Life Changing Experienceは私達の隣で、私達の中で今も起こっている。そのチャンスを掴み取れるかどうかは自分次第なのだ。

角田亜紗子

「朝5時半にラクロスの朝練に向かうため家を出る。後期に取る授業を友達と相談しながら決める。雨が降ると犬の散歩をしなくて済むからホッとする。」

私は第59回日米学生会議が終了して以前の生活に戻った今も、2007年の夏が夢のようで、未だにその経験を消化し切ることができていない。この学生会議は私にとって壮大であり、かけがえのない時間と友を与えてくれた。4つの都市を回りながら開催された会議の中で、日米の国境に気付いたり、時には

第5章 参加者の声

その国境が消えたり、夜が更けていくことを忘れ語り明かしたり、知らなかった母国日本の美しさに自ら感動したり、まさに日常の中の非日常を体験していた。

この会議に私が参加出来たのは様々な人のお陰であった。まず、会議自体を私に紹介して下さった我がサークルのOB天野氏。受けるように強制、いや薦めて下さった国際部部長トッティ氏。受けるべきか迷っていた時に背中を押してくれた両親。参加が決定した時に部活を長期間休む私を受け入れてくれたラクロス部の仲間たち。本当に本当にみんなに感謝を伝えたいと思う。

では、そんな人々に私はこの体験が自分に何を教えてくれ、何に気づかせてくれたと報告するだろうか。多分全てを挙げると卒論を書く羽目になるので2つ挙げれば、多様性の重要性和「可能性」の発見だろう。

広島で第二次世界大戦中の原爆の使用の是非について分科会で議論していた時の事である。そこでは様々な意見と感情が息苦しくなるくらい錯綜していた。「科学の進歩が止められないように、原子爆弾の使用は止められなかった」「広島と長崎が原爆の恐ろしさを教えてくれたことにより冷戦中原子爆弾は使用されなかった。つまり、この犠牲は以後の国際社会に大きく貢献した」「たかが原子爆弾が落とされただけなのに広島と長崎は特別扱いされている」「私がトルーマンの立場であったとしても原子爆弾を日本に利用していただろう」余りにも私と意見が違うので絶句もしたし、その意見を聞くことの辛さで友達と肩を抱いて泣いたりもした。しかし、私にとってその場で聞いたすべての見解は大切だったように思う。全ての意見が正しいと言っているわけではない。ただ、自分とは異なる意見を言う同世代の人の存在を実際知ること、深く自分の意見と向き合い考えなおす機会を私は与えられた。そして、この機会のお陰で一層自分の考えの脆さ、そして同時に正しさを再確認した。そのような自己の考えの

形成のためにも意見の多様性は重要なだろう。

そして、「可能性」。自分自身の英語力やコミュニケーション能力の向上の可能性。学生たちの情熱で世界を変えることができる可能性。“What about…”の生む笑いの可能性。そして、日米両国の世界貢献への可能性。私はこれからの21世紀社会の主軸となっていくであろう学生たちと1ヵ月衣食住を共にし、彼らの問題意識の高さ、好奇心の強さに感動した。そして、その彼らが引く張る日米両国の未来への希望は確実に育っていると感じた。私たち学生は内に大きな夢と希望を抱え、それを実現させるための情熱に溢れている。そしてこの情熱は様々な扉を開ける「可能性」に繋がっているだろう。

第59回日米学生会議は、思い出にまだしたくないくらい今の私にとって大切なものだ。この1ヵ月は私の全てではないが、私の人生において必要不可欠な時間だったと思う。

そして、そんな時間を共に過ごせた71人の仲間へ一言！

Best wishes for all of your futures and love you all tons! Don't forget about me (^0^)/

加納康宗

JASCが終わって20日近く。今から振り返ると夢のようだけど、確かに存在した非日常の1ヶ月。東京の街を慣れた感じで歩いている時も非日常を強烈に感じた。全て日常を基盤としながらも、1つ1つが貴重な非日常だった。

実は今もJASCのことを思い出してばかりいる。最後の方にみんなの前でしたスピーチは毎日心の中で反響している。「非日常との別れ」は心の中で明確にしたつもりだけど、やっぱり寂しい。戻ってきた日常に違和感はないけど、JASCerに会うと少しだけあの世界に戻れた気がして嬉しい。

このJASC全体を感想文にしっかりとまとめるのは不可能だし、最後のレセプションで「私の経験」を数分間スピーチする前も話題を絞るのが辛かつ

た。強引にまとめてGW（春合宿）からの日々が陳腐に見えるだけかも知れない。しかしお世話になった世間に送り出す報告書である。ここはその巻末に用意されたpureな主観の場である。小論文としては失格だけど、JASCの感想を徒然に書く。即ち“JASC徒然草 ダイジェスト版”

期末試験の終わった3時間後に興奮状態でオリセンへ駆け込んだ。7/25.13:30→30分遅刻。アメデリを迎えるまでの30時間、オール日本語空間が刻々と名残惜しくなる。ワクワクすると同時に一抹の不安が膨張していく。意見の背景となる個人的事情まで互いに理解した4人のRTに5人が入り、全て英語でコミュニケーションすることになる…。

遂にアメデリが来た。「武邏弩」と墨で書いたシンプルな扇子を持ってバスの前に行き、Bradを迎えた。古いステレオタイプだが、見た目も声も絵に描いたようなアメリカ人だと思った。アメデリ全体にアジア系と黒人（African Americans）が思ったよりも多いことに少し驚きながらも、興奮を抑え切れなかった。全く未知なアメリカの学生36人と1ヶ月間の“同棲”生活 in Englishを送り、生涯の友達とLife Changing Experienceを得ると聞かされていた。遂に始まったのだ。

思い出を具体的に連ね始めると本当にキリがなくなる。僕はあまり感情的にならない気質だが、あの1ヵ月間には喜怒哀楽も笑いも涙も汗も緊張も安らぎも孤独もドキドキも連帯感も憂鬱も沈没も…全てがあった。なかったのは暇と日常だけ。またマジメな議論も遊びもコイバナ(←脇役でした ^-^;)も全部あった。そこになかったのは僕のJASC-love。ただあまり話せなかったアメデリもいたのは残念。英語で積極的になれなかったからだと思う。TOEICや大学受験の英語をバリバリやったところで、早口でスラングも入る日常会話となると訳が違う。アメリカ滞在経験を持つジャパデリとの落差を感じた。分科会や普通の会話の後に噂話やコイバナまで英語で積極的に入れるかどうか1つの分かれ目だったと思う。議論での「内容で頑張るしかない」

という以前からの心がけは正しかったと思うけど、当然それで全てが解決できる訳がない。日本語なら簡単に分かる程度の気質や癖も、英語だと時間がかかる。少なくとも中高では加点法的に評価された英語力も、JASCにいと（完璧からの）減点法自己評価になる。でもこれは本当に嬉しかった。

いつだろう、海外経験アリの割合の高さに抱いた劣等感が消えたのは。いや自分で自分を誤魔化して消したのだ。本会議が始まる頃、英語に困って当たり前という意識を押し殺したのだ。プライドなのか、諸刃の刃である「根拠なき自信」なのか、分からない。でも卑屈にだけは意地でもならない自分に京都で気付いた。

分科会は国際交流の古き理想を体現したと思う。トピックは、政治も思想も感情もモロに絡むナショナリズムや歴史、民族。互いの思いをぶつけ合い、政治や歴史・文化を語り合い、幼稚だったら絶対喧嘩になる所を互いが理性的に反論し、それでも時に感傷を隠しきれず…そんな中で僕は参考人宜しく自国を語っていた。歴史は小中高時代の趣味（歴史の漫画や雑誌）と受験勉強のご利益を感じた。もはや一般論だが、外国人と話す自国の教養の大切さを思い知らされる。内輪ネタだが、Nancyと僕の議論はPBと並ぶ“Dangerous RT”の象徴的存在だった。3通のJASC-mailと京都でのスピーチはNancyへのrespectだった。

SchlachetとBoの日本に関する知識には驚いた。彼らと日本の歴史や文化を議論するのは楽しくて仕方なかった。もっともっと話したかった。「神 = God, gods」とする辞書にはよく疑問を抱いた。でも何となく、I love 八百万の神。

JASCでは尊敬できる人たちにたくさん出会った。別れてからの寂しさは半端ない。アルムナイ同士になっちゃったけど、いつまでも繋がりを保ちたい。

JASCはある意味で魔法だ。1ヵ月間とはいえ、72人に共通の強いidentityを抱かせるのだ。非日常を共有したから？ いやそれだけではない。でもこのidentityが全体の仲間意識を指すなら、1ヵ月間

第5章 参加者の声

特殊な空間に全てを晒してある種の戦友や同志になったからだとは今は解釈する。ただこの解釈も有形無形に影響を受ける将来の中で変遷するであろう。そしてこの再解釈はpost-JASCの重要な一面なのだ。

参加前からこの1ヵ月+事前活動が果たしてLife-Changingなのか疑問に思っていた。でも今は自信を持って言える。Life-Change by JASCはlet it happenではなくmake it happenなのだ。JASCで本当に沢山の思い出や友達が出来たし、自分を見つめ直すことも出来た。受けてきた沢山の影響はこれから自分の中に浸透して自分の思考や行動を変えていくのだろう。JASCを「楽しい思い出」で終わらせてはもったいない。JASCは参加者が自身を通して他人や社会に生かしてこそ最大限に意味を持つ。京都のファイナルフォーラム後に高々とスピーチした(エッセイ参照)時の自分は今も自分の中で毎日スピーチしている。JASCersは社会と歴史の期待と要望を負っているのだ。選民意識ではなく、自らの可能性と社会的役割を見出すことの重要性を強調したい。

“JASCは本会議が終わってからの本番だ”という言葉がある。1人のOBとなった今、JASC syndrome (JASC-familyへのhomesick) 対策も兼ねて1つ解釈を加える。“本番は地味なところにこそ見出されるべきなのだ”

Japan-America Student Conference, banzai.

川口耕一郎

ちょうど一年前、59回 JASCの理念を話し合うための理念合宿に向けて、委員長としての抱負を書き上げていた。期待と不安が重なる中での文章だったが、報告書の間を借りて、その抱負を今一度読み返し、委員長としての一年間を振り返ってみたい。

委員長としての抱負

1. 59回JASCの顔として

委員長として当然の役割だけど、対外的な仕事これから多くなる。これはEC全員に共通したこと

だけど、外部の人は自分達を見て59回JASCを判断する。だから、好印象を持ってもらえるように、OB、企業、一般学生と接する時は、常にJASCの意義だとか、59回の理念とかをしっかりと伝えられるようになりたい。そして、口コミが一番の宣伝になるわけだから、JASCの素晴らしさを周りの友達に熱く語って、アピールしていきたいな。

2. 全体を見渡せる広い視野

これからECのみんなはサイトと分科会を持つことで、自分の仕事だけで精一杯になると思う。そこで俺が第三者の視点から、全体のバランスを取っていく。まずサイトは、他と比較しながら、各サイトで自由時間がきちんと確保されているかとかを横断的に見ていく。そして分科会に関しては、各分科会の議論がきちんと進行しているかを常に確認して、全ての分科会が一定のレベルの成果を発信できるように、アドバイスをしていく。本会議中はどこまで時間があるか分からないけど、分科会にはどんどん顔を出していきたいし、俺も一人で寂しいからみんな仲間に入れてね。いつもみたいに喋り過ぎて、邪魔するとかはしないからさ(笑)

3. 常に余裕を持って、楽しむ

これからは財務活動とかサイトコーディネートとかで外部と接することが増えてきて、ECとしての仕事も大変になっていくと思う。想定外のトラブルがあるかもしれないし、みんな壁にぶつかるかもしれない。でも、そんな時だからこそ委員長はみんなを励ますぐらいの余裕を持たないといけないと思う。トップが凹んでたら、その組織全体にそれが伝染するから。そして、常に2歩、3歩先のことを予想して、どんなトラブルにも冷静に対処できる余裕を身に付けていきたい。それに何よりも大事なものは、ECとしての活動を楽しむことかな。ECの仕事は、社会のためでもなく、家族のためでもなく、自分自身のためにやるもの。そしてなんでやるかって言ったら、楽しいから。そんな気持ちを最後まで忘れないでいたい。常に笑顔で、EC8人で和気あいあいと活動できたらいいよね。

4. 尊敬されるよりも、感謝される委員長になる

俺が一番意識したいこと。委員長には色々なタイプがいると思う。多分OBの話を開くかぎり、今までの委員長は自分の分科会を持ち、対外的なこともする、仕事をバリバリこなす万能な人だったように思うし、そんな人が評価されていたのかな。でも俺はそれが理想の委員長像かというと必ずしもそうじゃないと思う。

俺が目指しているのは、デリ一人ひとりに目を配って、彼らが快適に楽しく1ヵ月を過ごし、自分の力を最大限に発揮できるような環境を作っていくこと。それは正直かなり地味な作業だと思う。自分の分科会を持ったりするのは目に見える形で成果がある。でもデリに気を配るってことは、もしかしたら誰にも気付かれないかもしれない。

この前OBと会った時に、分科会を持たないことを言ったら、かなり厳しく批判された。「やる気がない」とか「責任回避をしている」とか。でもその時彼らに言ったのは、俺は別にやる気がないからでもないし、楽をしたいから分科会を持たないんじゃない。自分の分科会に費やす労力を、JASC全体のために還元したいから。JASCの最大の意義を「絆」だと思うから、それを生むデリ同士の交流が活発に行われるような環境を作っていきたい。バリバリ仕事をこなす委員長の方がカッコイイし、たぶん尊敬される気がする。でも俺は8月20日にデリに「すごい」って尊敬されるより、「ありがとう」って感謝されたい。もしかして本会議中は気付かれないかもしれないけど、後になって振り返って、この委員長がいたからJASCを楽しめたって思ってもらうことが一番の目標かな。

改めて読み直すと少し恥ずかしいが、一年間を通して初心を貫徹することができたのではないかと考えている。

私がJASCに対して抱いていた理念。それは、「太平洋から世界へ〜グローバルパートナーシップの探究と次代の創造」というテーマに全て反映されていた。一年間の活動を通して幾度か修正はされたが、

参加者の絆を深め、社会に開かれた「史上最高」の会議にするという二点にあった。そして、理念を実現するために実行委員16名、特に開催国の日本側実行委員8名の結束を強めることを最優先して日々の活動に取り組んできた。

参加者の絆を深めることは、日米の学生による相互理解、信頼醸成を目指す会議伝統からも自明であろう。そもそも実行委員長に立候補したのも、もう一度58回のような熱い夏、熱い仲間を生む会議を自身の手で作りたいという思いがあったからだ。アメリカから帰国して間もない頃は、「絆」、59回テーマで言えば、「グローバルパートナーシップの探究」の実現を最も重視していたように思える。

しかし、委員長として財務、広報活動、秋田サイト担当者として本会議の企画を進めるにあたり、「絆」に加えて、会議の「社会発信」という新たな基軸が加わった。そこには、自分達の活動を多くの人に知ってもらいたいという気持ちもあった。だがそれ以上に、社会から多くの協力を得ながら、外に開かれない閉鎖的な会議運営に対する批判を様々な場面で受け、会議の成果を社会に還元すべきではないかという問題意識からの衝動によるものであった。閉鎖的な会議運営を続けていたら、いずれ会議が終わる日も近いかもしれない、いや59回自体できないかもしれない。資金不足を理由に希望していたサイトを変更することを強いられた時は、61回以降のJASC日本開催存続自体に強い危機感を覚えた。その時からだ。59回だけでなく、60回以降、特に日本開催のJASCの未来につながる礎を、この59回JASCで築いて見せると言い聞かせるようになったのは。

「72人の学生が素晴らしい経験を積む意義は分かりません。でも、それだけで具体的な協力にはつながりません。」

そう幾度となく大人達に跳ね返されながら、日本側実行委員で社会発信の意義、実現可能性を話し合った。社会発信とは言っても、学生による1ヵ月の

第5章 参加者の声

短期間会議という制約がある以上、限界がある。前年度の58回でも、分科会の成果を通して社会発信を目指したが、それが必ずしも実現したとは言い難かった。更に、発信する手段は何か、媒体は何か。東京はまだしも、秋田、広島、京都で大規模な発表の場を素人の学生実行委員に作る事が出来るのだろうか。実行委員会発足から半年近く実行委員内で幾度となく話し合ったが、答えは出なかった。

考える前に、行動に移さないと。見切り発車ではあったが、東京、秋田でそれぞれ一つずつフォーラムを企画した。学生の Opiniオンリーダーとして社会問題に対して提言を行いたい。国際交流の先駆けとして、同年代の学生に刺激を与えたい。そして、フォーラムを通して社会に開かれた、社会にとっても有意義なJASCを築きあげたかった。幸いにも、東京ではJASCジャパン、アジア財団、そして秋田では秋田日米協会にそれぞれフォーラムの主催団体として全面的なご協力をいただいた。箱はプロが作り、我々学生は中身を埋めるという連携が生まれた。大人の経験、学生の熱意が融合したことで、素晴らしいフォーラムになり、会議の成果の真の社会発信がはじめて可能となった。

そして、以上の「絆」、「社会発信」の実現には、実行委員会の団結が不可欠だと感じていたが、日々の実行委員としての仕事、理念の話し合い、参加者の選考などを通して、個々人の会議に対する思いも共有できたのではないかと思う。そして、互いに信頼できる仲間になることができた。一年前、実行委員が会議企画、運営に要求される信頼関係を築けるかが不安だった。お金をもらうわけでもない。地位、名誉を得るわけでもない。学業、就職活動などと両立させながら、時としてプライベートを犠牲にして、全てを会議に捧げることが求められる。実行委員の会議に対する情熱、互いの信頼関係が成熟してはじめてJASCは成立する。59回は、その二つの要素を各自が共有したからこそ、無事終えることができたのではないかと思う。

一年間の集大成である最終サイト京都。あろうことか、ファイナルフォーラム前日に体調不良で倒れてしまった。一人ベットに身を隠していた時、発表の準備に向けたデリゲートの声が聞こえてきた。ふがいなさ、寂しさ。「俺」のJASCだったのがという孤独感。だが、ふと充実感に浸ることもできた。一年前は、開催国側の実行委員長として一人で会議を背負っている錯覚に陥っていた。そして、自分の会議に対する情熱が、他の実行委員、デリゲートに共有されれば、会議は成功すると確信していた。そんな一年越しの夢が今、目の前で実現している。自分が寝込んでいても、問題なく他の実行委員が会議を運営してくれている。デリゲートが情熱を持って「史上最高」のフォーラムにしようと言いながら準備をしている。「俺」のJASCが一年後には「全員」のJASCに。恋人のような存在だったJASCをこれ以上独り占めできない寂しさもあったが、体中から湧き上がる感情は今まで経験したことのないような達成感、充実感だった。

抱負では、尊敬されるよりも、感謝される委員長になるなどとクサイことを口走っていたが、本会議直前に一時は仕事をこなしながらも、余裕を持ってデリゲートに接する「カッコいい」委員長を目指そうと目論んでいた。でも、やっぱり最後までカッコつけることはできなかった。デリゲートの前では地味な役回りだったけど、汗かき屋に徹したからこそ初志貫徹することができたと思う。

この1ヵ月で、自分の限界も知り、挫折も味わった。会議の運営上に課題もあり、多くの関係者の方々にご迷惑をお掛けした。しかし、そんな時は常に実行委員、デリゲートのみんなが支えてくれた。委員長が会議を先導するのではなく、支えられるとは全く情けない話だが、それも59回が成熟したメンバーに恵まれていたからに違いない。

60回実行委員選挙後、新実行委員の何人かがこんなことを言っていた。

「59を超えて、来年は史上最高の回を目指そうぜ!!」

「史上最高」の回。去年は、私が口に出すだけで実行委員からも失笑がもれていた。でも、今年は違った。毎年の実行委員会が団結して「史上最高」の回を作り出すことに一年間情熱を傾ければ、必ずデリゲートは付いてくる。そして、JASCの永続も約束されるだろう。

菅家万里江

2006年、8月も終わりに近づいた日の黄昏時、サンフランシスコの海辺で私は一人思いをめぐらせていた。遠くでは他の参加者の笑い声が聞こえるが、私の声その中に交わることはない。第59回日米学生会議実行委員選挙を翌日に控え、私は海を眺めながら自分に問いかけていた、「やるか、やらないか」。葛藤の最大の争点となったのは、「果たして自分にそんな能力があるのだろうか」ということだった。すでに学業と学外のスピーチ活動で両手がふさがっていた上に、第58回日米学生会議で取り立てて目立つ存在でもなかった私が、70年以上も続く伝統ある会議の日本開催の実行委員という重役を引き受けていいのだろうか。答えは出ず、ただ悪戯に時間だけが過ぎてった。目の前に広がるフレスコ画のような海は、半分は暗い雲に覆われ、半分は真っ赤な夕焼けに染まっており、私の未来の選択を暗示するようであった。

宿泊先に向かうバスの中で、今回京都サイトを手伝ってくれた第58回参加者の真田が「一緒に委員をやろう」と話しかけてくれたが、自分に迫り来る大きな決断の時のことで頭がいっぱいで、なかなかうまく話をする事が出来なかった。それほど、委員に立候補することは私にとって大きな選択だったのである。そのためか、バスを降りた後、果たして自分が何をしていたのかよく覚えていない。気がつくと、服も着替えぬままベッドの中で眠っていた。

部屋の扉を開けたとき、仲良くしていた参加者の一人がニコニコしながら話しかけてくれた。「マリ一、委員に立候補するんだね、頑張ってるね!」その

言葉にあっけにと取られてしまった。私は立候補用紙に自分の名前を書いていなかった。信じられない気持ちで用紙が貼ってある扉の前に行く。

そして、そこには、私の名前があった。

驚きもあったが、嬉しい気持ちがこみ上げてきた。自分では言語の壁、知識の無さに阻まれて、この会議に全然貢献できていなかったと思っていた。しかし、誰かが私を信頼し、委員に足る存在として私を推薦してくれた。それが、言いようもなく嬉しく、有難かった。思い返してみれば、挫折しそうなとき、臆病になりそうなとき、不安なとき、誰かがいつも私の側にいてくれて、私の背中を押してくれた。それが日米学生会議だった。そんな会議と、すべての支えてくれた人、そして私の名前を書いてくれた人に恩返しをしたくて、委員に立候補することを決めた。選挙の約一、二時間前のことだった。

あまり準備する時間も無かったため、選挙では、自分が素直に思ったことを伝えた。そして、幸運にも当選することが出来た。

川口が実行委員を務めることが決定した後も、副実行委員長座は空いたままだった。副実行委員長に興味はあったものの、ここでも私は自分を信じきれなかった。果たして、自分にそんな器があるのだろうか。そんな重役について大丈夫なのだろうか。怖い、不安だ、逃げたい。そんな思いが心を渦巻いていた。そんな時、川口が声をかけてくれた。

「副実行委員長やらない?」

川口としては、一向に決まらない委員の役職決めに業を煮やただけだったのかも知れないが、彼の言葉が不安を解きほぐしてくれ、また自分を信じる事が出来た。こうして私は、第59回日米学生会議副実行委員長に就任することになった。

それからの年月は、まさに、失敗と挫折と苦悩と焦燥、そして喜びと達成感の一年であった。川口をはじめ当会議の実行委員全員が私よりはるかに高い能力と人間性を兼ね備えており、そのような人々と一緒に仕事出来ることを光栄に思う反面、自己嫌悪に陥ることも何度もあった。特に、副実行委員長

としての立場、役割といったものもよくわからず、どのように動けばこの会議に貢献できるのか、始めは全くの手探り状態であった。その上、大学二年次に70単位を申請していた私にとって、学業と日米学生会議の仕事の両立は難しく、なかなか思うように仕事を進めることが出来なかった。毎日毎日、自己嫌悪と疲労感に悩まされていた。

状況が変わり始めたのは、12月の報告会の頃であった。それによって、第58回会議の終焉と、第59回の胎動を強く感じ、自分が次の会議を担っていくのだという使命感を改めて強く感じた。また同時に、「副実行委員長という不安定な立場」から脱却するため、歴代の実行委員長の方に「実行委員長が望む副実行委員長像」をうかがうこともはじめた。その中から、副実行委員長に求められていることは、「チェア（実行委員長）と同じビジョンを持ちながら、チェアに至らない部分を補填する」こと、「チェアとバイスの両方で完全な状態になるようにする」ことであることがわかり、それからは川口との連携により重点を置くようになった。これ以降、川口とよく話し合う機会を持つようになり、お互いの長所短所を指摘しあったり、委員長と副委員長の仕事の分担を決めたり、委員会の現状について多く意見を交わしたりした。これによって、今まで川口だけが抱えていた仕事の負担をお互いのコンセンサスの元でうまく分担できるようになった他、委員会内外の情報をシェアしあい、「チェアとバイスのツートップ体制」で委員会運営を行っていくという方針を固めることが出来た。これが、私の意識を変えることとなった。この頃から、手帳の余白に書かれたタスクの量も次第に多くなっていった。（尚、少々話はずれるが、会議を終えて強く思うことは、「チェアとバイスのツートップ体制」こそが、過剰労務に陥りがちな実行委員長を助け、他の委員と委員長のギャップを埋める最良の方法であるということである。この体制を次代にも引き継いでいきたいと思う。）

春休み及び三年次になってからは、ほとんどの時間を日米学生会議に費やすようになった。春休みには、主に講演会の統括を行ったり、選考の補助とし

て働いたりした。また、第一・二回秋田出張を行い、秋田サイトのコーディネートを本格的に始動した。尚、この出張のことは川口がサイトコーディネーター後記で詳しく記述しているのでそちらをご参照いただきたい。その後も、春合宿の全体責任者を担当したり、秋田サイトの総責任者として秋田サイトに関する全体の責任を担うようになってきた他、副実行委員長として外部の方とお会いする機会も増え、会議へのコミットメントは着実に増えていった。春合宿後は、サイトの最終的な詰めと、分科会運営、及び賛助会理事会等への出席などに迫られた。迫り来る本会議への緊張と、実際の参加者と会議を作っていく面白さに、睡眠時間が短くても疲れを感じなくなっていく。特に、分科会のメンバーとの毎週末のミーティングが楽しみで、土/日の午前中はずっとミーティングと称した井戸端会議に費やしていた。会議参加者が私に仕事を乗り切るエネルギーを与えてくれた。

あれだけ時間と労力を費やしてきた本会議は、仕事に追われるうちにあっという間に過ぎていった。そんな中、自分の能力の限界に直面することもあったし、周りの人たちの温かさに胸動かされることもあった。また、自分と社会のつながりをよりいっそう肌で感じることになり、自分がこの世界に組み込まれていることを強く感じた。そして、将来はこの世界のために何か貢献できる仕事につきたいと心から思った。71人の参加者と泣き、笑い、苦悩し、真剣に議論しあい、忘れられないひと夏をすごせたことは、私の一生の思い出である。

また、この会議を通して本当に成長することが出来たと思う。外部の方との折衝、副実行委員長としての責務、分科会の運営、委員との協力、秋田サイトの運営とフォーラムでのパネリストの体験、すべてが私の糧となったし、本当に色々学ばせていただいたと心から感謝している。実行委員の皆、参加者の皆、歴代の実行委員の方々、アルムナイの方々、そしてお世話になった皆様様に、心より感謝の意を表したい。

特に、実行委員長の川口には、本当に色々なことを学ばせてもらったし、様々な場面で支えてもらっ

た。様々なアクターの狭間で悩み、大変な思いをしたと思うが、どんな仕事も正確かつ着実にこなし、第59回日米学生会議の成功に向けて身を粉にして貢献してくれた。本当に偉大で、心から尊敬できる実行委員長だった。副実行委員長として、彼は歴代の日米学生会議で史上最高のチェアであったと心から思う。

2007年8月20日、第59回日米学生会議は終焉を迎えた。サンフランシスコから一年間、私が副実行委員長として日米学生会議運営に従事してきた長いようで短く濃密な年月が、ついに終わりを告げた。あれから約3週間が経過し、今私はVirginiaのthe College of William and Maryに留学に来ている。膨大な量の宿題に追われる毎日でも、この会議のことを思い出さない日はない。そしてそれはきっとこれからもずっと同じだろう。

菊池なつみ

JASCに参加した1ヵ月、それは不思議な世界だった。朝起きると仲間がいて、自分からえいやっと動き出さなくても、良い刺激にさらされ続け、常に挑戦する機会が与えられ続けていた日々。今から思うと、その日々は信じられないほど恵まれていた特殊な日々だったのだが、私はその日々をあまりにも当たり前前に受け取って、ただ楽しんでいた。そして、その特別な日々は私の日常となり、59thのデリ達の存在が自分の中に当たり前なものとして浸透し、ずっとこの日々が続いていくような不思議な感覚に捉えられていたので、その日々が終わりをつげる日になってもそのことをしばらく実感できずにいた。フェアウェルパーティーで感動的な言葉を聞いても、アメデリが早朝のバスに乗るのを見送りに行き、別れの言葉を交わしている間もまだ信じることができずにいた。アメデリがバスに乗った瞬間、本当に自分の側から彼らがいなくなった瞬間、これ以上現実を否定できなくなった瞬間、次から次へと乱暴なまでに零れ落ちる涙を抑えられなかった。

JASCに参加した前後で自分の何が変わったのか。客観的に見ると、自分がJASCに参加したことによ

って大きく成長したとは言いがたいかもしれない。内向的な性格は相変わらずだし、積極的にボランティアに参加するようになったわけでもない。ただ、私そのものは大きく変わることができなかったとしても、自分の中に世界が一つ増えた、そんな気がする。その世界は、義務感と少々のプライドから読んでいた灰色の新聞の国際欄に彩りを加え、ニュースの背景に人々の顔や考え、意見、生活を思い浮かばせる。その世界は自分の限界と、他者の魅力を教え、もっと知りたい、関わりたい、学びたい、そう思わせる。きっと、JASCで過ごした1ヵ月は、自分の中に時間をかけて浸透していき、やがて自分の一部となり、自分を変えていくのだろう。JASCで過ごした1ヵ月をこれからどう生かしていくのか、自分がどのように成長していくのか。自分が本当に試されているのは、これからなのだと思う。JASCに参加して本当によかった。この強い想いが、数十年後により深みを持っていえるようになることを願って。

金 大鐘

「プライスレス」

ありきたりの単語だが、JASCを形容するにはこれしかないだろう。

お金では買えない経験をいくつもして、多くを学んだこの1ヵ月。

東京では世界銀行でパリとガーナの学生とテレビ会議を通じて議論をし、アジアユースフォーラムでは高円宮妃殿下とお会いし、横須賀基地ではシーファー駐日大使とも話した。オリンピックセンターの洗濯所では、男二人で筋トレをしていたらアメデリの女性に見られ、本気でゲイと間違われた。プライスレス。

秋田では、ホームステイ先で美味しいご飯とお酒を飲みながら世界情勢について論議を交わし、白神山地や竿燈祭りを訪れ、日本の大自然や地元の伝統を肌で感じる事が出来た。自身は、秋田フォーラムでは明石元国連大使と茂木健一郎さんに続いてスピーチもこなした。また滞在先である国際教養大学の寮の一室は、毎晩パーティールームと化し、昼間に見せるシリアスなアメデリの姿と夜の姿とのギャ

ップにただただ感心してしまった。プライスレス。

広島では、原爆ドームと平和記念資料館を訪れた際に、色々な国の言語が飛び交うのを聞いて、広島は世界の平和を象徴する都市なのだと改めて感じ、また地元の高中生や大学生の平和に対する意識の高さにも驚かされた。宮島観光では、あの世界遺産である厳島神社の鳥居の横で、海水パンツ一丁で泳いだりもした。プライスレス。

京都ではファイナルフォーラムに向けて日米一つになってプロジェクトに取り組み、徹底的に議論を重ねた。厳しい暑さや門限の厳しい大学の寮にステイしていたこともあって、体調不良者やストレスアウトするデリが続出。フリークアウトしたアメデリ女性に「Bitch!」と言われ、男性にも「Bitch」という単語が使えることを学んだ。プライスレス。

しかし何よりもプライスレスなもの—それは自分が「JASCer」の一員になれたという事実である。それは今後一生涯消え去る事のできない事実であり、大きな財産であると思う。「JASCer」というだけで、これまで出会えなかったような人たちと出会い、訪れなかったような場所を訪れ、経験できなかったようなことを経験できる。そんなJASCに参加できたことを誇りに思うと同時に、この会議の歴史を創り、支えてきた先代の方々に心から感謝したい。プライスレスなひと夏をありがとう、JASC!

櫻 静香

私にとって、JASCというものは、アカデミックなフォーラムに参加することでもなく、日米代表の学生の会議でもなく、日常的で何気ないながらも印象的なディスカッションの場面の集まりでした。会議初期の分科会では、アイスブレイキングとして行った自己紹介で、人は単なる日米でくくれないということを実感したジャパデリ。人種も育ってきた環境も特に多彩であったアイデンティティの分科会では、「アメリカ人」でありながらアメリカから完全に国民と認められないことでの心の葛藤を訴えるメンバーの言葉もあり、国籍と、民族と、アイデンティティのずれから生じる問題に気付かされることが何度もありました。また、わずか数回目の分科会で

ありながら盛り上がるメンバーを横に、議論が理解出来ず、雰囲気にも馴染めない悪循環に陥った私。そして、その事実を分科会の時間で話すことにより、アイデンティティのメンバー全員が、皆がついてきていることを確認しながらディスカッションを進めるスキルを備え始めた時期。自分自身も、その後は驚くほどのスピードで意見を述べられるようになったことによる、最高の満足感。問題を抱え、ホームシックになり、それを仲間に告白し、仲間の助けによってそれを克服していく。それは、まさに起承転結を含む分科会でした。

それぞれのサイトでも、そのサイトに訪れるごとに、私たちのディスカッションに普段とは全く違う話題や雰囲気を提供してくれました。特に、晴天の広島の空の下で、サンドイッチを食べながら原爆について話し合った時間。その瞬間は、言葉に表せない程心に残っており、このJASCでこのような素晴らしい青春をさせてもらえることに心から感謝しました。日本人として、アメリカ人として、又は一人の人間としてどう原爆を見るのか、そして、自らのバックグラウンド的理由を交えて、なぜそのように考えるのかを話し合ったこと。その分科会の輪は、いつしか知れず他の分科会のメンバーまで交えて膨らんでいたのが、今でも印象的です。広島サイトは、日米に直接関わる問題であるために、アメリカ人の学生と、日本人の学生どちらが欠けていても出来ないディスカッションのチャンスを作ってくれました。日米代表として選ばれたとはいえども、まだ無力な私たちが世界の問題に関するきれい事の解決策で留まるのではなく、私たち自身に直接関わる問題についてどう感じているのかを理解し合えたというこの機会を与えてくれました。

この、それぞれの立場の者が、一堂に会し、双方に直接関わる問題に関して、語り合い理解し合おうとするディスカッションの積み重ねであるJASC。これが私の日米学生会議です。

佐藤逸美

私が、JASCのプログラムを通して一番心に残ったこと、それは、ファイナルフォーラムに向けて取

り組んだグループディスカッションです。

最初の頃は、アメデリとジャパデリの間に大きな溝がありました。気が付くと、議論がアメデリだけで進められていて、ジャパデリが全く参加出来ない、という状況が何度も発生しました。もちろん、その大きな原因の一つは英語力不足から来るものだと思います。私自身、アメデリの発言を頭で和訳している間に、次の話が進んでしまって話についていけなくなった事が何回もありました。ただ、私は、原因は英語力不足だけではなかったように思います。それ以上に、日米の議論方法や価値観の違いが大きく関わっているように感じました。

まず、日本とアメリカでは、討論の仕方が大きく異なります。アメリカ人はとにかく、よく発言します。議論が白熱して来ると、手を挙げるのも忘れて我先にと自分の意見やアイデアを主張します。相手の話が途中で、どんどん発言します。それに対して、日本人はとても静かです。意見を求められて初めて、ゆっくりと発言し始めます。相手の話が終わる前に次の人が話し始める事は、ほぼありません。また、発言するスピードも全く違います。アメリカ人は、考えることと話すことが同時進行で行われます。そのため、話している間に意見や主張が変わることも少なくありません。それに対して、日本人は考えてから話します。そして、自分の中でアイデアが確定するまでは発言することを控えます。さらに、ファイナルプロジェクトを決める上で何を重視するかも違っていました。アメデリは、早くプロジェクトを決めて行動し始めたい、という人が多くいました。それに対してジャパデリは、多少時間がかかってもプロジェクトで何をするかをしっかりと熟考したいという人が多かったように感じました。最初、議論がなかなか進まなかったのは、お互いこのような違いがあるということ、認識していなかったからだだと思います。

私がアメデリとディスカッションをしていく中で一番大切だと感じたのは、自分を理解してもらう努力をする事です。やはり、自分の事を一番理解しているのは自分自身です。同じ日本人でも他人の気持ちを理解することは、とても難しい事です。まして

や、相手が育った環境や価値観の全く異なるアメリカ人の場合、やはり、ある程度自分から気持ちを伝える努力は必要だと感じました。また、英語力はもちろんあるに越した事はありませんが、それ以上に身に付けなければならないことがたくさんあることも実感しました。コミュニケーションは一般的に、言葉、話し方、ボディランゲージの三つの要素から成り立っていて、言葉の要素は全体の一割にも満たないと言われています。今まで、英語力ばかりに気を取られていましたが、どう伝えるかということも、工夫していく必要があると感じました。

この1ヵ月を通して、アメデリと共に議論し、答えを一緒に導き出していく過程は、私にとって、とても有意義な経験でした。もちろん、後悔もたくさんあります。ファシリテーターに挑戦しなかった事、相手の意見にすぐ流されてしまった事、あまり事前学習をしなかった事、他にもいくつかあります。でも、後悔は多少残るくらいのほうが良いと思います。もしも100%現状の自分に満足してしまったら、次に繋がらないからです。私は今、内閣府の世界青年の船というプログラムに参加しています。その活動の中で、JASCでは出来なかった事に少しずつ挑戦しています。具体的には、アシスタントリーダーをやったり、自主活動を企画したり、などです。小さいことかもしれませんが、もしJASCに参加していなかったら、どちらの活動にも参加していなかったように思います。JASCは、私に一步踏み出す勇気をくれました。挑戦する楽しさを教えてくれました。これからも、JASCでの経験が“Life Changing Experience”だったと胸を張って言えるように、自分のペースで成長し続けて行きたいです。

篠原由香里

この報告書を手に行っている人は大きく2種類に分かれると思う。1つはJASCを知り尽くしている人たち。そしてもう1つはJASCに興味を持ってくれた人たち。そんな後者の方々に聞きたい。この一連の参加者感想のページ、どこか異様な空気を感じないだろうか。少なくとも私が選考前に報告書を読んだ時は、「ジャスカー」だの「ジャスクシンドローム」

だの集団意識が強い単語の羅列、そして何人かに一人の割合で必ず書いている「あの1ヵ月が何だったのか未だによく分からない」「うまく表現できない」「夢だったんじゃないだろうか」という類の文章のオンパレードを前に、期待がつのると同時にどこかカルト的なものを感じてさーっと引いたのを覚えている。

そりゃあ1ヵ月も一緒に暮らしたら少しは名残惜しくなるだろうけど、なにもそこまで思い出に固執しなくても…。まさか毎朝変な踊りとか歌とか儀式とか強制されるんじゃないかなろうね…。もともと国際交流や団体活動が好きでちょくちょく関わってきた私は、いくらそこに属す人や活動内容が大好きでも、その集団そのものに必要以上の帰属意識を持つことには常に抵抗があった。だから4月に自宅のポストに合格通知書が入った封筒が届いてから皆に直接会うまでは、参加できることに喜びを感じながらも「私はあんなふうにとっぷり余韻に浸かることはまずありえないな」と勝手に決めつけていた。の。だった。が。

あれよあれよという間に本会議が過ぎ去った今、こうして前と同じように過去の報告書を読み返してみると、以前は理解できなかった文章に共感している自分に気づく。確かに私もジャスクシンドロームに悩まされたし、この数ヵ月を通じて感じた気持ちはなかなか言葉に落とせない。皆で日本海沿いのテトラポットをよじ登って見つめた夕空の美しさ、分科会メンバーと徹夜して作ったファイナルフォーラムのビデオが完成した瞬間のみんなの笑顔と歓声など、頭の中には鮮明に焼き付いている光景も感情も、他人には思い通りに伝えられないのだ。充実感と虚無感が同時に攻め込んでくるようなこのもどかしさ、今なら身にしみて分かる。そして一番不思議なのは手のひらを返したように結局こんなことを書いている自分の態度。目の前にある落とし穴を余裕で避けて通るはずがいつの間にか自分から足を踏み外してしまったような、そんな矛盾めいた感覚に驚きを隠せない。

だけどその理由はたぶんこれだ。それだけJASCが魅力的で衝撃的な場所だったから。多種多様なバ

ックグラウンドと考え方があって当然で、議論する時はとことん追求し、遊ぶ時は思いっきり弾ける食欲さあふれた空間。70人全員がそれぞれ本当に魅力に満ちあふれており、私はそんな環境に常に圧倒され感銘を受け続けていた。周りのJASCerから学んだ幅広い教養と柔軟な発想の重要性。今まで頭をかすめることもなかった哲学的な思考方法。効率のいい会議の作り方。ちょっと変わった人生観に恋愛観。語学と知識の壁はあったがどれも勉強になり、なによりそういった会話そのものが楽しくて一年分くらい笑った。

思えば私はこの数ヵ月間、ありとあらゆる刺激を与えられる一方だった。私は誰かに何かを返すことができたのだろうか。何もしていなくても常に何かを与えられる状態に甘えて、せつかくの恵まれた環境を前に自分の短所である慎重すぎる性格を押し出してしまった場面が何度かあったことが悔まれる。分科会やシンポジウムやリフレクションで、話す機会も土台も動機も全て揃ってあとは踏み出すだけ、という瞬間にたじろいで挙手せずに終わったり。自分とは対照的にどンドン前に出てスポットライトを浴びていくデリやECの積極的な姿はとてまかこよくて、でもそう思った瞬間には時すでに遅しで。衝動や感情の赴くままに行動に移す勇気と決断力も時には大いに必要だと感じた。会議中にある人が語ってくれた“Don't wait for the time to come because it will never come”というフレーズは日々私の中で重みを増し続ける。これはもちろん、あの1ヵ月限定のきらびやかな世界だけに通用することではなくて。きっと平凡な毎日の一瞬一瞬にもチャンスや発見への道が開かれており、がむしゃらに追いかけるだけの価値や理由は、ただそれだけで十分存在するのだろう。

そんなこんなで今まで過ごしてきた夏休みの中で間違いなく一番感情が凝縮されていた20歳の夏は、第59回日米学生会議の記憶であふれている。みんながくれた優しい言葉や手書きのJASCメールは、あの戻らない時間は、夜の砂漠を照らす一番星のように高く遠いところで輝き続け、振り返るたびにキラキラ光り、迷った時には道しるべとして導いてくれ

る気がする。70年前からいろんな化学反応をとげつつも変わることのない想いを引き継ぎ、消化し、次代に残していくこの素晴らしいさを、日米両国の学生に一人でも多く感じてほしい。心からそう願う。

杉山亮太

いつまでも続くと思っていたこの会議が終わったことがいまでも信じられないでいる自分がいる。もちろん会議自体は今後も続いていくし、友情が切れることもないだろう。自分にとって、日米学生会議は、学生生活のすべてになっていた為、突然もう終わりだよといわれても、それを受け入れられないでいた。感想文を書き渋っていたのは、そこで終わりなんだと改めて実感しなくてははいけなからだった。初めて16人の実行委員が結成されてから一年、本当に最高の仲間ができたと思う。会議初日、一年ぶりに再会し、抱擁を交わし、初めて第59回日米学生会議の参加者が全員揃った事を実感したとき、なんともいえない感動だった。そのとき、今までの苦労はすべて吹き飛んでしまった。「Everyday is the last day of JASC, make the best out of it.」という目標を掲げ、プログラムのひとつひとつ自分のできる最大限でこの機会を活用すべく努力した。東京、秋田、広島と会議が進むにつれて、その思いは強くなっていったが、京都に着くと思ってもよらないトラブルの連続に、プログラムに参加できなかったり、参加者と夜話したりできなかった事が非常に残念だった。とはいえ、一番力を注いだファイナルフォーラムが成功を収め、新実行委員も決まった。もう明日アメリカ側の参加者は帰ってしまうという最後の日の夜、アメリカ側実行委員の一人、アリッサと話したことを忘れられない。“Does friendship really last forever? If we don't meet, will our friendship just fade out?”という質問に答えられずにいたが、“It is up to us.”とあってハグするしかなかった。日米学生会議の本当の価値は、会議参加者間の絆の深さにある。これを絶やさないうこと、これが自分にとってのこれからの目標である。It's you who can make the difference. 何かを変えたいとき、それは自分を変えることから始まるのだと思う。日米学生

会議は、「変える」ことができる人、すなわち自分を「変えられる」人が集まっているから面白い。この会議は、多くの人の数え切れない努力の塊であり、そのすべての人たちに感謝を込めながら、このような会議がこれからも続いていくよう祈っている。

「ありがとう、そしてこれからもよろしく願います。」

高井竜輔

分科会、フォーラム、スペシャルピック。本会議終了後三週間程を経た今でさえ、会議中の様々な光景が目の前に蘇ってくる。

1ヵ月間に及ぶ本会議の間、人種も国籍も異なる72名の若者が海を超えて集う。類いまれな知性でディスカッションをまとめてくれた彼、卓越したリーダーシップと運動能力で陸上のヒーローとなった彼女、プロ歌手顔負けの歌唱力で皆をうっとりさせたあの子に、独自の恋愛論を語らせたら右に出る者はいなかったアイツ……。様々な“特技”で会議に花を添える彼らの傍らで、実行委員でもないのに率先して荷物を運び、ゴミを集め、他の参加者の体調を気遣い、黙々とスライドの編集をしてくれた人たちがいた。言わば裏側から会議を支えてくれた多くの参加者の姿に、胸が熱くなった。

サンフランシスコ、昨年の夏。心の底から会議を満喫し、この会議を作り上げてくれた実行委員と参加者に感謝がしたい。その一念だけで壇上に立ち、スピーチを行った僕に一年後の会議をどうしたいかなんて見通しは全くなかった。

会議の余韻も醒めやらぬまま始まった実行委員ミーティング。毎回山のような資料を作り、目を輝かせて会議の理念や展望を語る他の実行委員を前に、乗り切れない自分がいた。彼らが語る「相互理解」や「信頼醸成」という言葉が、実体のない、上滑りしたものに感じられた。1ヵ月先の見通しも無い中で日々振られる膨大な仕事に対応していくのに精一杯で、59回会議の理想を思い描く暇などどこにも無かった。

変化が訪れたのは、年が変わった三月も終わりの時期だった。選考作業も佳境に入り、28名の参加者

の内、数少ない残りの枠を何人かの候補者で争っている。そのとき初めて（或は一年間の活動を通じて最も激しく）、実行委員のエゴが表面化し、衝突した。ある者は分科会の都合を優先させ、ある者は会議全体のバランスを考えて候補者を推した。選考中ずっと感じてきた違和感がピークに達した僕は言った。

「集まった人たちが会議を作るんだろ？自分たちで作った基準に適合しない人間を弾くなんて、どうかしている」

この発言が奇貨となって、それまで黙っていた他の実行委員も次々に口を開いた。選考合宿中一番長くハードな議論が幕を開けた。仮借ない応酬の末に辿り着いたのは、個人的な利害や感情で参加者を推薦している実行委員は一人もいないという事実だった。

実行委員の誰もが、59回会議を最善のものにしたと強く願っていた。しかしながら、何を以て最善とするか、そこの部分にズレがあった。参加者を選ぶまでの6ヵ月間、日本側実行委員八人を結びつけてきた会議の成功という理念。その理念の内に潜んでいた微かな不協和音が、参加者の最終決定という土壇場になって軋みを挙げ、噴出したのだった。

何を以て会議の成功とするのか、思うところを洗いざらいぶちまけ、共有する作業が続いた。涙を見せる者もいたこのプロセスを通じ、漸く全員の思いが反映された理念が形になったと感じられた。異なる絵筆と絵の具を持ちながらも、ひとつのキャンバスに向かって絵を描くようにして会議の全体像を得た僕は、妥協でも譲歩でもなく、共に会議を作り上げる28人を選ぶことが出来た。そこから先は、簡単だった。分科会、財務、サイトコーディネーティング。会議の「成功」を目指し全身全霊で駆け抜けた。（進路への不安やプレッシャーへの弱さから、JASCへ100%切り替え打ち込むのが遅れたことは悔やんでも悔やみきれない）

日米学生会議とは何か。一年間の実行委員活動を通して何を得たかと問われれば、人であると答える。会議を作り上げるのは人であり、人に影響を与え、人を変え、人をつくるのは常に人である。確かに、

ひとりの力には限界がある。しかし、ひとりとは他のひとりを変えていける。

僕は信じる。人の力と、人が人を変えていく可能性を。これほどまでに単純でいて、だが普遍的で力強い事実自分に自分の目を開いてくれた日米学生会議にはいくら感謝しても足りない。

最後に、一年間を共に過ごし、悩み、笑い、ぶつかり合い、今となっては家族以上恋人未満のような第59回日米学生会議実行委員会のみんなに改めてありがとうと言いたい。お調子者で、仕事が甘く、夢見がちでああだこうだ言ってるだけの男を厳しくも優しくも見守り続けてくれ、しっかりした仕事ぶりできちんとフォローしてくれた皆がいてこそこの会議の成功だった。そして、そんな実行委員の面々をさらに大きな温かい目で見守ってくれた参加者のみんな！本当にありがとう。いい出会いと忘れられない思い出に満ちた一年だった。

この前、吉祥寺にいいお店を見つけたんだ。一年後のミーティングの続きは、そこでしょうぜ。

高野恭平

私はこの日米学生会議で何を得たのだろうか。自分の所属する暴力と平和の分科会では参加者が泣き出すほどの直情的な議論ができた。これほどの熱い議論はなかなか経験できるものではない。また、寝てしまうのがもったいないと思わせるほどの魅力的な友人たちとの出会いもあった。こちらも日米学生会議から私に与えられたとても大切なものだ。

では、これで十分だったのか。これらは多くの方々のご協力、そして莫大な予算に値するだけのものなのか。本気で世界平和を目指し太平洋を渡った歴代の志に応えられるだけのものを、この会議の中で私は見つけられたのだろうか。そうした想いが私の肩に重くのしかかる。ときに素直にはしゃげなくなる。私の悪い癖だ。必要以上に責任を感じてしまう。今までの人生の中でも、そういった重みに負け、つぶされかけそうになったことも一度や二度ではない。しかし、重りはときに人を動かす原動力となりうる。地球の引力に縛られ地を這うことしか許され

なかった少年が、空に想いを馳せ、ついには飛行機を作りだしたように。

1934年、数人の強い意志から日米学生会議は始まった。私はその想いをしっかりと背に背負い込み、これからも一步一步前進していこうと思う。自由に飛びまわる鳥たちに憧れながら。

竹内菜緒

“毎日楽しいけど、何かが足りない。このまま大学生活を終わらせていいのか。”

—そんな自分の大学生生活に疑問を感じ始めていた時、ふと大学のメールボックスに入っていた1枚のチラシ（フライヤー）を手にとった。普段はそんなチラシなどそのまま捨てる事がほとんどなのだが、なぜかあの桜と星が散っている青いフライヤーは私の目に留まった。これが、後に私の大学生生活に刺激が強すぎるくらい最高の“スパイス”を与えるきっかけとなった。

桜が舞う春、日米学生会議の参加が決まった。受かると思っていなかったので、最初は嬉しいよりも驚きの感情のほうが大きかった。激励会に参加した時、頭が良さそうな（実際にとても頭がきれいな人たちだ。）実行委員や参加者に初めて会って、自分とはとてもない会議に参加するんだ、と初めて気づかされた。日米学生会議に参加することは、それはとても名誉な事であり、そして素晴らしい経験（その日、“Life Changing Experience”という表現を10回以上聞いた。）になることは間違いないと、会議経験者は口をそろえた。その後の春合宿の際に、参加者と深い交流をしJASCの“すごさ”を確信したと同時に、正直不安を覚えたのも事実である。そろいもそろって優秀でキャラが濃い参加者の中、自分は果たして会議に貢献できるのか、そして本当にJASCに参加していいのだろうか？

本会議前の事前学習は、とても充実していたし、それによってJASCへのモチベーションもあがっていった。テレビ局や広告会社、カリフォルニア大学の教授との勉強会etc… 大学でメディア・コミュニケーションを勉強している私にとって、全てが魅力的なもので、案の定とても素晴らしい経験となった。

事前学習を重ねるごとに不安よりも“Exciting”な気持ち、前に進まなくてはいけない、という思いが高まっていった。しかし、いざ本会議がはじまる直前になると、その“Exciting”な思いよりも、これから1ヵ月集団生活する事に対し、そして皆の議論についていけるか、などという不安で逃げ出したい気持ちが出てきた。

一人で持てないほどの大きなスーツケース（多分ジャパデリでは一番大きかったと思う。アメデリで一番のSamには負けたけど。笑）をもって、いざ本会議へ挑んだ。直前になって不安が再発した私だったが、いざ会議に参加してみると・・・結論から言うと、70人の仲間との1ヵ月は本当に素晴らしかった。素晴らしい、という言葉では抑えきれないほど。色々なことに驚かされ刺激され、知的好奇心が高まり充実していた毎日だった。JASCを通して、普段気づくことができなかった色々なことに気づかされた。いつも行っている新宿もJASCerと行けば、そこには普段とはちがう空間が広がっていた。日本だけど、日本ではないようだった。人と出会える奇跡、そして出会った人とコミュニケーションできる幸せと素晴らしさを感じた。コミュニケーションとは、他者を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程のことを指すが、JASC中その過程を感じることができた。たとえ価値観が違う相手がいたとして彼らの考えに賛同することができなくても、その「過程」を上手く共有することができれば、良いコミュニケーションを取れたと言えるだろう。人との出会いによって今まで気づかなかったものに気づかされる可能性が広がるのもコミュニケーションの魅力でもある。自分が、“意味”を見出ししていくのだから。私にとってJASCは考える「きっかけ」を与えてくれる場であった。

JASC中に辛かったこと・悔しかったことも沢山あった。その中でも一番印象的なのはRTでのことだ。私の所属していたRT内では、アメデリとの意見のすれ違いがあった。彼らのアイディアに納得がいかないのに、自分の意見をなかなか言い出せなく、そうしているうちに話し合いだけはどんどん進んで

いった。本当に辛かったし悔しかったし、自分が情けなかった。ある時、他のRTにいる友人に自分の思いを聞いてもらったところ、その思いを皆に伝えたら?と言われた。でもそうしたら、またRTの方向性を変えることになってしまう…。しかしこのまま終わらなくなかったので、空気を読めていないことは承知だったが、思い切って皆に自分の考え、メディアに対する思いを伝えた。RTディスカッションの流れを乱すような意見だったのに、RTの皆は私を受け入れてくれた。「今まで気づけなくてごめんね。Naoの意見を言ってくれてありがとう」とJessaに言われた時、涙がとまらなかった。その時、辛いことや悔しいことを克服できるのは自分しかないと感じたと同時に、JASCという素晴らしい環境におかれている幸せを感じた。

そして、楽しかったこと・・・ありすぎて何をどこから話していいかわからない。JASC中の楽しかったことを頭に描くと数々の場面ででてくる。新宿でガールズナイトを企画して皆をしゃぶしゃぶに連れて行ったこと。六本木のクラブで大勢のJASCerと踊り狂ったこと。Susannahと映像の素晴らしさやお互いが作った映像について話したこと。秋田のホームステイ先でMorganとお酒を飲みすぎて、おなかを抱えて笑ったこと。皆で輪になって折鶴を折ったこと。アルファベットで“JASC”とマヨネーズで書いた広島風お好み焼きを作ったこと。宮島で鹿にスカートを食べられそうになったこと。毎晩のように誰かと遅くまで語ったこと。姫路城でちょっとはしゃぎすぎちゃったこと。京都でTJがRTのメンバー全員の似顔絵を書いて皆で笑ったこと・・・他にも多くのシーンが鮮明に頭に浮かぶ。

そして何よりも、JASCは私にとって「挑戦」の場でもあった。これがLife Changing Experienceかどうかは、現段階ではわからない。だけどJASCは私にとってLife “Challenging” Experienceであり、自分自身を見つめる素晴らしい機会となった。RTはもちろん、一つ一つのフォーラムで刺激を受けた。そして何よりも70人の仲間と本音で話せたことが良かった。

JASC中に感じた感情を一つ一つ挙げていくとき

りがないので、この辺でストップにしようと思う。ここで書いたことは、ほんの一部である。最初に言ったように、全てを文章にあらわすことができないし、JASCを形容するのは非常に難しい。表現にも限界があるようだ。ただ一つ素直な気持ちを言葉で表すとしたら、こんなにもJASCから得るものが大きいとは思わなかった。半年前は全く知らなかった70人の素晴らしい仲間との絆。JASCは、そこらへんにあるサークルとは全然違う、私が求めていた以上のものだった。

幸運にも、私は第60回の実行委員を務めさせていただくことになり、来年も本会議に参加することになった。まずは私が1年前見たような素晴らしいフライヤー、ポスター等を作って1人でも多くの人にこの素晴らしいJASCを知ってもらいたい。そして、ただ「楽しい」だけの会議でなく、一人ひとりの参加者に、そして社会に「意味」がある会議を作るべく、この1年JASCに精一杯力を注ぎたい。“笑顔”で第60回を最高の会議にすること、ここに誓う。

Thank you very much.

武田尚樹

JASCに応募したのは、自分をもっと良く知りたいたいという思いからである。日本で生まれ、生後6ヶ月から12歳までアメリカに住み、アメリカ人だと思って育った自分。そして、日本へ帰国して、アメリカ人ではないことがわかった自分。日本では7年間自分のアイデンティティーを探しながら過ごしてきたある時、日米学生会議のチラシが目に入った。日本とアメリカ。自分が探していたものがここで見つけられるかも知れない！そう思い応募した。目的を達成できたかどうかはわからないけど、想像していた以上のものをJASCは与えてくれた。

春合宿、“A life changing experience”って聞いたとき正直、“whatever, what can a month do to someone’s life?”って思った。Well...it did a lot. JASCを通して自分は社会のために何ができたかは定かじゃないけど、人生で初めて、社会のために働

きたいと思った。今まではアメフトとかで自分のため、チームのために努力したことはあったけど、社会のために努力しようと思えるようになったのはJASCのおかげだと思う。そしてわずかではあるかもしれないけど、自分にも何か貢献できるものがあるのではないかと思わせてくれた。

何よりJASCは楽しかった。みんなで笑ったり、泣いたり、自分の人生の中であんなに充実した1ヵ月はいままでなかったと思う。そして、大変勝手ながらその1ヵ月で強く印象に残っている思い出を書き並べさせて頂きたい。

The following are my best JASC memories :

毎晩389での“会議”はさすがに秋田に行くころには体が持たなかった。進司とりょうちゃんは本当にすごいと思った。

世界銀行フォーラムのテレビ電話でのスピーチは楽しかった。えり、Hiro、マシユ、場違いなスピーチをしちゃって申し訳ない。

RT Dinnerでお菊が鶴の恩返しをAmedeleに熱心に説明して、「こいつやる！」って思った。

居酒屋でぼたくりにあいそうになって出て行って(とっきーありがとう!)、そのあとコンビニでお菓子を買ってみんなで食べたあのアクシデント。

Alissaとお互いのアイデンティティーについて話して、答えが見つかったわけじゃないけど、多くの人が同じような悩みを抱えていることがわかった。

スキットは両側とも爆笑で特にあのMoのParis Hiltonのimpression は最高だった。“I didn't know sake had alcohol” 笑。その日Boと俺とお互いプレゼント忘れてgift交換のふりしてたなあ。

Capture the Flag で転びながらセーブしたのは正直恥ずかしかった。その後足撃ってもっと恥ずかしい思いしたし。

お台場でえり、Bo、Mo、Lindseyとのプリクラは最高だった! たぶん人生のなかでのベストプリクラショットだったと思う。

横須賀米軍基地でKelly少佐と真剣に安全保障に

ついて話し合えたことは貴重な経験だった。俺みたいな無知な学生に耳を傾けてくれたことを本当に感謝しています。

高井くんのJASC LOVEについてHost Familyと話したのは今考えると爆笑! CaseyとHost Fatherの宗教と戦争の関係についての意見の違いとかもおもしろかったし。TJも含めてみんなで食べたHost Motherの美味しい家庭料理は忘れない。ありがとうございました。

白神山地は想像以上の美しさだった。そしてガイドさんのギャグの“T”は大変だった。特にブナッコーリーのギャグは本当にどうしようかと思った。

Special TopicsでのKendallの友達がRonaldを盗んだ話は爆笑だった。あとKendallの秋田での“Hooooo!!!”と“What about?”も。

俺と進司とジフで夜、Couple探しに行って、結局見つけたのが酔ったマシユとひろりゅうというなんとも言えない落ち。

俺とJazzで竿燈祭りを真ん中で見てたときラッキーなことに竿燈が倒れてきてそれを持つことができた。Jazzに“Take! You saved my life!” って言われて、大げさだけど、初めて人の命を救ったかも笑。宮島はめちゃくちゃ楽しかった。小川でゆうきに手で押し合うやつで負けたのは悔しかったけど・・・ズボン濡れちゃったし。広島風お好み焼きもおいしかった!

広島を学生を交えて平和について真剣に考え、語り合うことは自分にとって一生に一度の経験で、学ぶことがたくさんあった。逆に自分はなにを与えられたかと思うと悲しくなる。

Ayaと先頭をきってホテルに帰るときに、毎回間違った方向に曲がって、BoとMarquitaに注意され、二人で方向音痴であることを再認識した。そのあとNancyとキャシーの部屋でSchlachetが登場したときの涙がでるほどの爆笑。

清水寺で真田さんに仏教について教えてもらって初めて自分の宗教について考えることができた。そのあと八ツ橋を試食しまくって、晩御飯が中華の食べ放題で後悔しまくったのを覚えている。

キヌセミとNazi Campの関係性についてBradと

の話、Hidemi達とのEC話での異常な盛り上がり、なおの古い情報の提供、キヌセミではcurfewがあった分みんなと楽しい会話ができた。

ファイナルフォーラムが終わったときの達成感は何んともいえない。唯一の後悔がもっと日本側の意見を反映させたかったってこと（マリー、お菊、詩乃、亜紀ごめん）。

そして8月20日・・・お別れのときの涙。さよならを言うのは慣れているけど一度にあれだけの人数にお別れを言うのはさすがに耐えられなかった。バスが行ってしまったあとHidemiとおもいきり泣いて、来年のJASCの成功を誓った。あのあと表情一つ変えないれいるいに二人とも慰められたことは今考えると恥ずかしい・・・。

最後に、こんなすばらしい機会を与えてくれた59回の参加者、特に実行委員に心から感謝したい。この1ヵ月は本当に楽しかった。一生の仲間、そして一生忘れられない思い出ができたと思う。みんなありがとう。

土岐吉史

日米学生会議を振り返ると「後悔」と「可能性」と2つの言葉が思い浮かびます。

英語の壁、アメリカ人学生との目まぐるしく意見の飛び交う、早い展開のディスカッション。日本語であれば考えを伝えることができるが、英語の壁を必要以上に考えるため緊張と不安に自分の意見が押しつぶされ、一步踏み込んで発言することができませんでした。今振り返ると、英語の文法や単語のミスなど気にせず、発言をすればよかったと感ずることがあります。完璧な英語を話すよりも、自分独自のアイデアを発言し、自分の考えを参加学生と共有することが重要です。考えを共有することで新たな考えが生まれるため、ディスカッションの意味も増すこととなります。そこに気づかず、黙っていた自分に「後悔」の念を感じます。

しかし同時に、「可能性」を感じることもできました。同じ学生がアジアユースフォーラムで英語スピーチをし、秋田フォーラムでは英語によるパネル

ディスカッションに参加をしている姿を目の当たりにしました。メディア分科会のディスカッションにおいても英語の細かい間違いは気にせず、まず自分の考えを伝えようとする熱い姿を目にしました。また、学生会議全体を運営する実行委員の姿にも刺激をうけました。会議の計画、予算、広報、リクルーティング等、すべてにおいて学生である実行委員が舵をとり、会議を進めていきます。特に印象に残っているのは、関西での広報活動に協力した時の実行委員の姿です。重圧感をもった企業の役職につかれています方を相手に、会社からの協力や協賛金をいただくために学生会議を強くアピールし、失敗し断られることがあっても、下を向かず積極的に行動する姿が目には焼きついています。同じ学生がここまでできるなら、学生の自分も自分独自の考えさえあれば、失敗を恐れることなく自分の意見を発言し、自分を信じてもっと積極的に行動することができるのではないかと「可能性」を強く感じました。

日米学生会議に参加し、もっと発言や行動をすればよかったと「後悔」を感じると同時に、積極的に堂々と発言、活動する仲間の姿を見て、自分もやればできるのではないかと「可能性」を強く感じました。来年の4月から、私は企業で働きます。同じ「後悔」を繰り返さないため、自分が感じた「可能性」を強く信じて何事に対しても積極的に取り組み、自分自身を成長させていきたいと思ひます。

平井麻祐子

56回の報告書に顔を突っ込んで、読んでいた、、、大学生になるのが待ちきれなかった、あの時から3年、私の夢は叶った。

JASCとは一体何だったのだろう。

本当のところ、未だにJASCというものの存在が自分の中で大きすぎ、消化し切れていないのだと思う。その証拠に未だ周りの人にJASCを説明する際、上手く説明できずにいる。お土産話も、断片的でファンタジー小説のハイライトの部分だけを切って貼り付けたようなものだ。

ただいま言えることは、先輩方の言葉を借りるなら、「自分が、自分でいられる場所」であった。

普段の大学生活でも、今までの人生の中でもこれ程、個の尊重と尊敬が自然に守られている空間に出会ったことがなかった。当たり前だと思っていたその環境から離れた今、71人の個性あふれる人々が共鳴していた環境が懐かしくてたまらない。もうJASCが終わってしまった事実を思い出すまでに朝起床後に時間がかかるほどだ。

しかし、ただ自分が自分でいられるという言葉の意味は、現状に甘んじるということではない。Fellow JASCers 1人ひとりに尊敬すべき点が多々あり、私にとってのrole modelであった。そんな70人が周りに四六時中いるというのは、自分の限界をひしひしと感じなくてはならないということである。自分に何が出来るのか、改善点は何か、今どうしてそう考えるのか、毎日の1分1秒が私にとっての成長の機会であった。あの言い回し、気配り、リーダーシップ、ヒューマニティー、、、今も私の目標である。

会議の終盤、私は周りのJASCerたちに、こんなことを言っていたと思う。

「大学生活がこのままJASCであればいいのに。」

大概のJASCerは「このまま続いたら体力が続かないよ！JASCに殺されちゃうよ！」などと笑いながら言い、持てるエネルギーをすべてつぎ込んできた自分たちの会議の終わりを少しでも思い出すまいとしていた。しかし不意に口からでたその言葉に私は自分のJASCに対する気持ちを一番表していたと思う。毎日が実りのある学習であったJASC、それ以上の学習はないと思ったから口から出た言葉だ。今まで知らなかった学術的分野への学習意欲も湧いた。また、人は宝である。議論は心から楽しめるものである。衝突は避けられない、避けてはいけない、、、など人生における教訓も経験から学んだ。単純に考えてみれば、全くバックグラウンドも、考えも異なる71人が集まり、議論し、共同生活をしている環境は滅多にあるものではない！

まだJASCの全貌を、私のJASCの経験を書ききっ

ていないように思うのはなぜか。それは本当にJASCから得られるもの大部分、「経験」として語れるものというのは、そして学生である私たちが成果を生み出したといえるのは、これから先の選択が重要であるのだろうと私は思っているからだ。このJASC確かに私の人生の中でゆるぎない地位を占めているが始まりに過ぎないのだ。この経験を顧み、語り、学びを実践することによって、これからの人生の局面でどれだけJASCの経験が生かされてくるか、今以上の意味を持つもの出来るかが決まるのだ。

あれだけ悩んだJASCの意味も、自分自身の貢献の仕方も、59回のこの報告書を読みながら考えよう！

よかった、私のJASCは、夢は、まだ終わっていない!!

廣瀬裕子

2006年8月末。第59回日米学生会議の準備を開始した。

私にとっては、日本語でのミーティング、全く異なる性格の仲間、「日本人」として日本のあらゆる側面を紹介し、アメリカ側参加者の滞在をなるべくストレスレスなものにしなければと自分にプレッシャーをかけ、かなり緊張していた。

実行委員という経験は、58回会議では完全には向き合っていなかった仲間と向き合う機会を与えてくれた。好みも仕事の進め方も性格も育った環境も全く違う8人のJEC。この8人でどんなチームとしてやっつけていけるか、何度も考えたことはあったが、共通に持っているものは58回会議の思い出と、共に会議に参加した仲間を大切に思う心。そして、59回を史上最高の会議にするという目標だった。これが59回の準備に力一杯取り組む根本にあったのではないかと思う。同じ想いをAECも共有していることをメールやオンラインミーティング、そして特に本会議で確信した。毎週のミーティングや日々のメール交換を重ねるごとに、正直に自分の考えを伝えられ

る心の底から信頼する仲間となっていた。

自分とは全く異なる人と共に同じ目標に向かう機会を与えてもらったことに心から感謝している。それぞれの違い、長所と短所が融合する。私たちの場合はでこぼこのパズルのように融合して、すばらしいチームが生み出された。最初はぎこちなかったり、フラストレーションがたまっていたりしたミーティングも、最終サイトではミーティングを行わなくてもスムーズに運営が出来る程、チームとして団結していたように思う。それぞれがベストを尽くし、刺激し合い、励まし合い、支え合った。16人いなければ、この会議は成り立たなかった。71人いなければこの会議は成り立たなかった。

広島サイト、予算、財務活動、メディアへのアプローチ、アメリカ側とのリエゾン、色々なことにチャレンジさせてもらい、一つ一つから学んだ事は計りしれない。しかし、全体として学んだ事は、JASCを通じて築いてきたものは、「絆」であるということ。この絆は参加者の間だけでなく、後援団体の方々、アルムナイの方々、様々な企業の方々、それぞれのサイトで協力していただいた方々、JASCの活動を通じて関係を築いて来た全ての人々と結んできたものである。仕事として何かに取り組むのではなく、「絆」を意識して、一人の人間と向き合うことを意識しながら人と接することで、仕事は仕事でなくなり、新しい可能性が生まれる。

一つでもこの絆が結ばれていなければ、今回のような形で第59回会議を実現することは可能ではなかった。一人ひとりに深く感謝を申し上げ、これから先、私自身も色々な絆を築いていく事で、私からも何か与えられるよう、力を尽くしたいと思う。

一人の人の笑顔に心が救われたり、
一人の人の言葉が考えるきっかけを与えてくれたり、
一人の人の努力に心を打たれ、頑張ろうと思ったり、
一人ひとりがお互いに与える影響は大きい。
一人の力には限界もあるが、可能性もある。

それぞれが自分の周りの環境を設計し、絆を通して形作る力を持っている。

留学中のパークレーの町を歩いていて、ふと本屋さんの前で立ち止まる。
「あ、この本、アダムが好きそうだな・・・読んでみよう。」

あの人が興味のあることがもっと知りたくて、もしくは考え方の理由が分からなくて、もっと話がしたくて、それが×70人以上となり、自分のアンテナが自然と広がっていく。そんな風にJASCで出会った方々、そして参加者一人ひとりのimprintは確実に私の中に残っている。

今一人ひとりと感じている絆と信頼を、お互いを受け入れる感覚を忘れずに、心を開き、ステレオタイプを乗り越え、人を信じる力をこれからも養っていきたい。

廣田隆介

JASCが終わって早三週間・・・未だに夢にはJASCerがごろごろ出てくるし、朝起きればみんなのいびきが聞こえてくる気がしてならない。これ程ヒドいJASCシンドロームに襲われているのは自分だけかと思っていたら、他のデリのFacebookやmixiの日記を読んで、あながちそうでは無さそうだと気付いて、ホッとしたりもする。そんな奴らの日記やWallにコメントを残せば、「時差なんか関係ないぜ」って勢いで返信が返ってきて、それを見て一人ニヤニヤする自分。学校や他のコミュニティーの友達となんか全然連絡を取らずに、JASCワールドにしがみついたがってる自分を見て、「このままじゃヤバイ！早く日常に戻らなきゃ！」なんて危機感に襲われたりもする今日この頃。報告書作成の責任者になったくせに、JASCを文章化することで本当に59回が終わってしまう気がして、寂しくて、なかなかの全体感想をまとめられない自分。いくらどうあがいてみても、この4ヵ月間を紙にまとめることはできなさそう。行く先々で聞かれる「日米学

生会議って何？」という質問は、もはや愚問に聞こえてしまっただけではない程だし。それと同時に、この素晴らしい経験をJASC外の人々に上手く伝えられない自分が、もどかしくて堪らない。

こんな状態で文章を書くのは申し訳ないけれど、書いている内に何か見えるものがあるかもしれないから、この場を借りて自分なりにJASCを振り返らせてもらいたいと思います。

日米学生会議、通称JASC。大学一年次からその存在は知っていた。大学二年次には、第58回に参加し数段に輝きを増して帰ってきた友人を見て、とても悔しい思いをしたことを今でも覚えている。そして大学三年次の2007年夏、二年越しの夢が叶って、ついにJASCに参加することができた。このような背景から、自分は周りのジャパデリと比べて、かなりの熱狂的JASC信者であったに違い無い。そしてそれは、大学入学以後ずっと物足りなさを感じていた自分自身を、JASCが一気に変革してくれるのではないかという期待感の表れでもあった。

その大いなる期待を、JASCは決して裏切りはしなかった。普段は集団行動が苦手な自分が、ここまでJASCにコミットすることができた最初のキッカケは、やはり春合宿において尊敬できる多くの仲間に出会えたことが挙げられるだろう。全員がアカデミックな議論を難なくこなす事は勿論のこと、筋肉自慢、コメディアン、音楽家、哲学者、旅人、冷静沈着な人、人情味厚い人・・・JASCは本当に様々なタレントを持った人達の集まりで、その強い個性に最初は圧倒され、自らが埋没してしまう不安にさらされたことを覚えている。そして普通ならそれらの個性は衝突し合い、結果として無秩序状態になってしまう所が、JASCにはそれらが上手く調和した、とても居心地の良い空間があった。やはりそこには、JASCerに共通する突出した能力、つまり「人を受け入れる能力」の存在があったと感じている。この素晴らしい能力を発見した瞬間、自分の中で何かが変わった。

そして、いよいよ第59回日米学生会議本会議が始まった。異国の地からやってきた、新たな36もの強

烈な個性。しかし、不思議と打ち解けるのにはそれ程時間はかからなかった。朝から晩まで毎日のように寝食を共にし、アツいディスカッションを重ね、時にはぶつかり合いながらも、次第に互いのことを理解し合っていた。いや、理解し合ったというよりも、お互いを「日本人」や「アメリカ人」として捉えるのではなく、「一個人」として、そして「友人」として理解する土台ができたと言った方が正しいかもしれない。そして一度「友達」になれば、後は野となれ山となれ。そこには国籍や人種、言語の壁を越えた相互理解と信頼の輪が、確かに存在した。

このような本会議の印象を裏付ける証拠は、山というほどある。時差ボケと寝不足に耐えながら世銀フォーラムを乗り切り、蒸し暑い新橋のガード下で共にラーメンをすすった時のあの一体感。代々木公園でアメリカ版ドロケイのようなゲームに燃え、Tシャツが搾れる程の汗を共にかいたこと。アジアユーザーフォーラムにおける達成感。その後クラブで全員が踊り狂い、挙句の果てに終電を追って東京の夜の地下を走り回ったこと。居酒屋での公開恋愛談議・・・東京だけでもまだまだあり、もはや記憶のピースごとに書き出していたら、決められたA4四枚なんてスペースはすぐに使い切ってしまうそうさ。それ位あの夏の記憶は濃く、鮮やかに自分の脳裏に焼きついていることにも気付かされた。このような鮮やかな記憶のワンピースを形作ってくれた全ての人に、ありがとうと言いたい。

ここまでまとまりのない徒然とした文章を書いたけど、書いてみてとりあえず分かったことは、やっぱりJASCについて文章化するなんて、現時点ではまだ不可能だってことだ。もちろんこれらの記憶は美化されている可能性は否めないし、まだまだ解釈の余地があるだろう。JASCについて自分の言葉で説明するには、相当長い時間が必要そうさ。しかし幸運にも自分は、もう一度このJASCに参加するチャンスを得ることができたらいい。そして今自分は、過去の参加者がどれ程このJASCを愛しているかを知っている。この責任は、極めて重い。そんなJASCを愛する全てのデリ達の思いを胸に、JASC

第5章 参加者の声

のバトンを次の世代に繋いでいくプロセスを、他の15人の仲間と共にしっかりと作り上げて行きたいと思う。

古屋佑樹

日米学生会議にはいろいろな動機、希望をもって臨んだ。

それらが達成されたかどうかはわからない。

充実していたなと思う、また思いたい自分がいる。しかし一方で、しっかりと「形」としてつかめたもの、得たものが何かあるのかと問われると一瞬エアポケットに落ちたような気分にならないこともない。

感想をつづりながら、自身が得たものを振り返ってみたい。

そもそもは英語でディスカッションをする。それによって自身の英語能力を鍛えることができる。こういう（浅薄な）理由で興味を持った。

分科会、スペシャルピック、各フォーラム…さまざまな機会を通じて英語でディスカッションをする機会があった。その中で自分の意見を発信することができたと思う瞬間はあった。これには満足を感じている。しかし一方で他の人が発言している内容が分からない瞬間が訪れ、そこから「分からないスパイラル」に陥ってしまったことがあるのも事実。自身の英語能力を情けなく思い、また分からないときに分からないと表明することができない自分自身にも腹が立つこともあった。

しかし悪いことばかりでもなかった。広島フォーラムでディスカッションをリードしたときはグループの議論をどう進めるのか他のリーダーとじっくり話し合うことができた。その際にお互いの考えで共通すること、相違することが洗い出され、刺激され、興味深い体験だった。またディスカッション自体もうまく運び、達成感があった。

一方で世銀でのディスカッションコーディネーターはうまくいかなかった。どう進めるのかということのを他のリーダーと話し合うことができなかったこと

が主原因であったが、悔やまれる。

次に人との出会い。

特別な意味での出会いは「鹿」としかなかったが（笑）、広い意味での出会いはたくさんあった。これもやはり会議が始まる以前から求めていたものであった。

バックグラウンド（国籍、環境、大学、宗教、食生活etc）が異なり、「違い」を知ることができた。

例えば、大学。日本は授業を適当につめ、適当に通い、適当に単位を取得し社会へと進む。しかし話をした人の大学では授業は少ししか取らないが、それにかかる時間や気持ちの違いを知った、こういう大学生活もあるのだなとも。

あるいは例えば一緒に出かけることがあると僕や僕の友人などは多少不快なことがあっても、あるいはあまり求めていなくても拒否したり、不平を言うことはない。しかしある人は思いのままに表情、態度、言動に出していた。僕自身、不快に感じるのかなと思っていたが、この人はそういうものなのかと思うと、意外とそんなに不快な気持ちにならないことを学ぶことができた。少しこれには驚いた。

一人ひとりの顔を思い出すと限りないエピソードが綴られそうなので、これについてはここで筆を止める。

相互理解について。

上記のように違いがあることは分かっていた。だからそこをお互い理解しあうことが必要な面もあるだろうし、ぜひしたいと思っていた。

おそらくこれは達成された、というかより正確に言うと既に達成される環境ができていた。というのはアメリカから来る学生も理解しようという姿勢であり、特に利害が対立することもない。このような条件下でお互いを理解し合えないということがあろうか。できないとしたらそれは「子供」だと主観的に感じる。

しかしその中で、理解はしあえても歩み寄ることができない面はあったことは否定できない。

例えば世銀での環境で、温室効果ガスを排出する

ことはよくない、削減しなければならないという発言に対して、経済成長の観点から削減することはできないとする意見、あるいは温室効果自体存在しないという意見が乱立した。お互いに理解を示すことはできてもそこには「Yes, but...」の世界が待っていた。交渉とは違うので歩み寄る必要性はないとは言えるが、理解の先には歩み寄りができてもよいのかなと感じた。

飲み会。
楽しかった。

スポーツ。
楽しかった。同じ人間だなと思えた。

ダンス。
楽しかった。同じ人間とは思えなかった。

日米学生会議。
楽しかった。本当に楽しかった。

何を得られたのか、何が足りなかったのか、また振り返る必要はあるけどこれだけは確かなことだと断言できる。

参加してよかった。

この機会を作ってくれた実行委員のみんな、協力、援助して下さった方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

堀沙織

どんな人にも学ぶべきところがある。向かい合って話をすると、その人にしかないものが見えておもしろい。ふいに出る言葉や行動も、他でもないその人から出てくるもの。考え方や選択のしかたも、習慣なり経験の積みかさねから導かれたものであったりするのだ。本当にさまざま。

たくさんの人と出会っても、その中に、自身の理

解者であったり理想的な人物像を追い求めて、探し回っているだけでは自分はあまり変わらない。

自分と異なる価値体系に生きているように見えて親近感が持てない人、一瞥して通り過ぎてしまいそうな人にこそ、何か学べることはないかと、丁寧に向き合ってみるの方が、自分の視野を広げてくれるように思う。

そして、人から素直に学びとるためには、やわらかい感性をもち、できるかぎり自分自身が相対化できていなければならない。心に余裕をもっていなければいけない。そして、人から学びながら自分もまた澄まされていく。

自分を知らないために、「人」から学べず、自分の価値観を「人」に投影してありがたがったり非難したりだけでは、もったいない。やはり、自分自身の基準とする人間像から人を測りがちで、安易な人物評は、自身の価値観が色濃く出たものにとどまることも多い。自分を知ることなしに、人を知ろうとしても、見えないものが多い。

人と出会い学ぶと、自分の気持ちや考えのバリエーションもゆたかになる。人のいろんなリズムにふれて、それに呼応することで感覚もゆたかになる。そして、何らかの形で感化されて、自分に変化がある。しかも、人間ってそれぞれにおもしろくて感動的!と思わせてくれる。

これからそれぞれに変わっていきだろう70人の仲間に、この先もずっと学んでいきたい。

本郷亜紀

「第59回日米学生会議」それは、予想外、いや予想以上の出来事ばかりだった。間違いはない。京都は私の普段の生活の場である。それにもかかわらず、JASCerと共に過ごした京都はいつもとはまったく違う非日常だった。何がちがうのか。なぜちがうのか。理由は単純で、そこにJASCerがいたからである。真剣に考え、真摯に受け止め、投げ出さずに理解しようとするJASCer一人ひとりの姿勢や71色の個性が、何か不思議な何か特別な空気を醸し出していた。

「一生懸命」遊ぶときも学ぶときも休むときも、常に真剣に取り組む。

私は、自分の中に何らかの大きな変化が起こることを期待して応募した。しかし、JASCで何を得意か抽象的なことばかりでどこか掴めない。それでもこの機会を最大限に実りあるものにしようと、自分に課したルールである。

直前合宿に向かう前、私は、JASCに参加するために書いた小論文をもう一度読み直した。自分は、何をこの1ヵ月で学びとることができるのか。一番意識していたことだが、一番不明確なことでもあった。英語でのディスカッション、1ヵ月の集団生活、相互理解…予想できることをいろいろ書いていたがどれもこれもまだびんとこない。

しかし、東京で日本側参加者のみんなと再会した瞬間、それは、最初から決めてしまうことではないし、掴めるものでもないと思った。本当に様々なバックグラウンド、才能をもつ人々に出会い、話し、そして感じる。会議中はアンテナを高く持って、それに終始しているのではないか。そうする価値があるのではないか。そう信じられるほどに、魅力的で、心底「すごい」人がたくさんいた。JASCは人材の宝庫だった。

そして、第59回日米学生会議が終わった直後の今、JASCとは何だったのかと振り返る。参加の合格通知が届いてから、事前活動も含めて約4ヵ月、JASCにとっての自分、自分にとってのJASCというようなことは結局、常に頭の隅にあった。JASCは私の人生の転換期とはならないかもしれない。しかし、自分とは異質なものに触れることで、自分自身の長所や短所を再確認し、時には今まで気づかなかった自分を発見した。例えば、議論の中で気づいたことがある。ここにいる参加者は、一つものを学んだとき、それを吸収し自分の中で構造化するに終わらず、消化して、自分らしさという濃い味付けをしてアウトプットしているということである。そこにこそ、議論を面白くする素がある。私が自分に物足りなさ、不甲斐なさを感じている原因であることに気づかされた。私はこれまで、特に大学に入ってか

らは、自分の学びと、将来の職業とはどう関係があるのか、どう結びつけるのか、どうすれば一貫性のある学びを通すことができるのかと、合理的な考えばかりが浮かんでいた。学びの先にある職業を意識しすぎていた。これが悪いことだとは思わないが、しかし、それではつまらない。どんなことも、必ずどこかで繋がりがあり、学べば自分に面白さを加えてくれる。フィルターを通して覗いていた世界が急に明るくなった思いだった。

JASCに参加した後で、自分の何が変わったのか、今でもそれはわからない。しかし、自分のこれからの何かを変える原動力を得た。それぞれのJASCerがそれぞれの分野でがんばっている。そんなJASCerを見ては、知的好奇心と活動心が駆り立てられる。今の自分をじっくり見つめ直すことができ、人生を開拓していく上で、その選択肢を確実に増やせる視野を得、道は違うが共に前進する仲間を得て、変化という成長の第一歩を踏み出すことができた。これこそが、JASCでの学びの結果である。

応募前、私にとってのJASCは、自分への挑戦だった。

そして会議が終わった今、私にとってのJASCは、JASCerである。

“JASCer”この言葉は私にとって誇りでもあり、重い言葉でもある。JASCerになれたから、こんなにすばらしい仲間に出会えた。防衛大・米軍基地の見学や、日本人の私が、日本人の家庭にホームステイすること、様々な国の学生とテレビ会議やパネルディスカッションを行うこと、著名な方々とお話してきたこと等、貴重な体験はJASCerとして経験したからこそ、より素晴らしかったのだろう。また、時には、将来の夢や社会について思っていることを赤裸々に語り合った。まだまだ若い私たちが大きな話を真剣にした。JASCerだからこそたった1ヵ月の間にできたのだと思う。

本会議終了後も、偶然で道でJASCの仲間を見かけると、寸分の躊躇いもなく自然と笑顔で声をかける。そしてまた、毎日会っていた会議中のようにす

ぐに語り合い始めることができる。ほんの数ヶ月前まではまったく知らない人だったことが信じられないくらい、太い人間関係、信頼関係が今ここにある。アメデリお見送りの日の朝、流した大粒の涙がその友情を物語っていた。この夏得た一番の宝である。すぐには会えなくても、どこかでみんなが活躍していると思うと、また、JASC中の1ヵ月を振り返ると、まるで水を得た魚のように、私の中の好奇心とやる気が駆り立てられる。そんな心の支えとなっている。

みんな、ずっとずっと一生よろしくお願ひします。

これからJASCerの一員として、ここで得た経験を今後の自分に、そして近い未来にどう貢献することができるのか。内輪で思い出話に花を咲かすだけに終わらず、72人一人ひとりが考えていかなければならないことだろう。自己完結では終わらせない。会議が終わった今、私はたくさんの自分への課題を持って帰ることとなった。新たな挑戦、さらなる努力が必要となる。しかし、仲間という原動力を得た私は、何とか乗り越えられるという希望でいっぱいである。

59回日米学生会議に参加できて本当によかった。これからの新しい時を最大限に輝かせることができる糧としていきたい。

後援の方々、実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

間嶋絵梨

JASCで思い知ったこと。

それはinputとoutputの重要性。「人間は考える葦である」という言葉があるがまさにその通り。私の人生の中で、こんなに毎日、色々考え続けたことはなかった。なんで、なぜ、どうして？米国人の父と日本人の母を持ち、父は東京に来た時、靖国神社に絶対足を踏み入れようとしなかったわ、と言ったあなた。なぜあなたは貴重な観光日に靖国神社に行こうと思ったの？浴衣を着てはしゃぐ私の心に物悲しさを宿らせた秋田・竿燈祭りの火。死者の送り火であるこの火に日本古来の趣深さを感じるんだ、と伝

えたけど、この気持ち君にちゃんと伝わった？したり落ちる汗を拭いながら見た広島。日中は川が輝き、緑あふれる公園を夜は光が原爆ドームを照らし出す、そんな町を歩きながら、原爆投下の日に思いをはせる。一体なにが起こったの？なぜ原爆が？京都であったtalent show。みんながpop songやdanceを披露する中、君が歌った「イムジン川」。君はどんな気持ちで、なんでその歌を選んだの？星空の下で君がぼつり、ぼつりと話すのを聞いた仁和寺の夜。あの日君はなにを思った？そして私は何を思ったのだろうか。

こんなに五感が研ぎ澄まされる経験はきっとなかなか出来ない今、心から思う。とにかく人を、物を、出来事を、理解しようと考えることを考え続けた。そして、この考えるという手段を手助けしてくれるのが、日ごろの経験、感性、教養・知性であったりするのだと思う。JASCは日常から切り離された所にあるとは思わない。日常生活の積み重ねの上に、この夏のJASCの経験があり、今がある。確かに、JASCは限られた人が参加出来る集団である以上、JASCの経験全てを実生活に応用できるか、と言われればNoである。ただ、JASCの経験を生かす場所は、今私たちがいる、この場所、なのである。59thJASC楽しかったよね、こんなことがあったよね、とJASCer同士で話すのも良いけれど、この経験を将来どう生かしていきたいか、を話すことはもっと大切だろう。そう、心に秘めて自己完結するのではなく、outputすること。私は自己完結ほど怖いものはないと思った。私が思うに考えるという行為そのものが自分のフィルターを通すということ、つまりどうしてもbiaseがかかる。それが自分の意見を持つ、という事だと思うが、自分の意見を人に伝え感化を受け自分自身を進化させる、相手の意見に納得出来ないなら、ここは私はこう思うと伝えて議論を深める、それこそ自分を伝え、相手を理解しようとする、自分をそして相手を思いやる行為なのではないか。私は、JASCに参加する前はinputは好きでもoutputは好きではなかった。不必要な衝突を生むくらいなら、別に言わなくてもいいや、私はこう

第5章 参加者の声

思うんだし、と勝手に自分を納得させていた。でもそれは自分の成長を止めるに等しい行為だったに違いない。JASC中にそれに気づきoutputを心がけようとしたが、どの場面でも皆に等しくoutputが出来たか、と問われれば首を横に振らざるを得ない。まだまだ、私の言葉、知識に確固としたものがないといやというほど実感したし、自分の未熟さを思い知った。言葉、文字、態度は私自身を表す鏡だ。教養・知識というものはすぐに身につくものではない。だからこそ私は本を読み、人と出会い、さまざまな意見を聞き、考え伝え続けたいと思う。

感謝を。

実家は四国、大学は金沢と地方で生活する私がJASCに少しでも関われば、と思えば広島でのsmall discussionのfacilitatorに立候補したのは、人前が出るのが苦手だった私にとってちょっとした変化だったように思う。広島について自分なりに勉強をしてtopicをあげ、discussionに臨んだが、しっかりとした意見をもつJASCerのdiscussionのfacilitateを2時間半出来るのだろうか、と不安で仕方なかった。意外にも当日は思った以上に時間が早くたち、もっとdiscussionしたかったな、というのが感想だ。皆の意見は学ぶことも考えることも多かった。そしてなにより、様々な意見を聞くのが楽しかった。きっと、enjoy出来たのも拙いfacilitatorの私を陰ながら皆がサポートしてくれたからだと思う。ありがとう。

両親に。生まれも育ちも日本。見渡せば田んぼ。そんな私がどうにかJASCでもやってこれたのは両親のおかげだと思う。英語という手段を身につける重要性を教えてくれたから。(まだまだ道半ばだが。)今、2人の言っていることがよくわかる。まず、勉強したいことをみつけなさい、それを深めるためにいつか必ず英語が役立つ日が来るはず。私は医学を勉強するのが好きだ。いくら勉強しても飽きないし、1つ知ることには人の不思議さ美しさを感じる。帰省する度に私が痩せていくのを嘆き、同年代の子が可愛い格好をしているのを見ては、一緒に買い物に行

こうと誘う母。ここはこうなるんだ、と説明しつつ今は勉強でも何でも絵梨がしたい事が出来る時期だよと説く父。まだまだ分からない事だらけの学んでいる最中の毎日が楽しい。今、私があるのは2人のお陰。ありがとう。

JASCに関わる全ての方に。2007年59th日米学生会議を通して私がbig summerを経験出来たのは今回の開催に向けてご尽力して下さいました皆様あってこそだと心から思います。いつかこの夏得た経験や今学んでいる事が少しでもpublic welfareのために還元出来るようこれからも歩んでいこうと思います。ありがとうございました。

そして一夏をとともに過ごした59thJASCerへ。京都で解散後、一人反対方向の新幹線に乗る時、これからは誰もいない中、全て自分でしなくてはならないと一気に現実に引き戻された気がした。皆こそがJASCを通じて私が得た一番の宝物。色々ありがとう。そしてこれからも一生よろしくお祈りします！

松田浩道

あの圧倒的な夏が過ぎ、自分の中で整理しようにもしきれなかった数週間がすぎた今、ようやくJASCの1ヵ月がぼんやりと心の中に形を結びつつある。日米学生会議を振り返ること、それは実行委員であった自分にとってはこの一年間を丸ごと振り返ることだ。第58回会議でのアメリカでの経験から、長い準備期間を挟んでの瞬く間の1ヵ月。正直なところ、完全に満足の行く参加ができたかといえばそんなことはない。本会議中、運営面にミスがないように常に気が張りつめていた分、中身である会議中の議論になかなか集中して参加できなかったという思いや、自分の分科会や担当だった広島の企画で「ああすればよかった」という思いはどうしても残る。いまさら気づいても自分にとっての日米学生会議は既に終了し、もうやり直すことはできないという冷酷な事実の前に、会議終了直後は取り返しのつかない後悔の念に襲われたりもした。

しかし、いくつかの悔しい経験を含めて、JASC

の一年間は心地よい思い出になりつつある—それはおそらくは時間の経過による美化だけではなく、力不足なりにも精一杯情熱を傾けたことを素直に肯定できるからであろう。

第58回会議でのアメリカでの経験は、自分にとって、とてもこれで終了させてしまえるものではなかった。素晴らしいチャンスをも自分の力不足で活かしきれなかったという思い、また、他人の作ってくれたものにただ乗っかっているだけだったという思いが残り、まだ日米学生会議でやるべきことを全然成し遂げられていないと感じた。とにかく挑戦してみようと思い立って実行委員に立候補し、サンフランシスコで59th JASCが始動した。

実行委員としての一年間はあっという間だった。深夜遅くまでパソコンに向かい書類を作ったり、大量の応募者一人ひとりにメールを送り続けたりといった作業が懐かしく思い出される。慣れないながら全国の大学に片端から電話をかけポスターを送ったり、説明会や講演会を企画したりといった広報活動。広報を終え、責任者として取り組んだ選考は相当大きなプロジェクトで、一通りやり終えたときには一緒に動いた実行委員のことを今までよりずっとよく理解できるようになっていた。激励会、5月の春合宿で実際にデリゲートを迎えることができた時からは、ますますやる気が上昇した。一生にもう二度とないせっかくの機会だから、という思いで事前活動には極力参加するように心がけ、いろいろな分科会の事前活動に顔を出しては多方面の議論を楽しんだ。日米学生会議側の責任者として準備した防衛大訪問も、有意義な企画に仕上がったと思う。担当の広島サイトやナショナリズム分科会の準備はパートナーの実行委員と熟考と議論を重ねてできる限りの準備をし、本会議を迎えた。

本会議中は、とにかく滞りなく会議が動くように気をまわし、いつも気が気ではなかった。直前合宿の時点で部屋割りのミスだとかバスの遅れだとか様々な不測の事態の対応に追われて大慌てだったし、ある程度会議が軌道に乗った後でも、70人もの

大きな団体を動かすにあたって、実行委員ならではの独特の気の張りつめ方があった。特に自分の担当の広島に入ってから、バスの遅れが予想以上であることから急いで夕食の場所を変更して到着場所を調整してもらったり、講演者の直前のキャンセルの連絡を受けてすぐに対応を判断したりといった場面でその場の機転が試された。迷う人を出さずに大人数での移動をきちんと予定通り誘導するという仕事も、先頭を歩きながら常に緊張したものだ。サイト運営は大勢の親切な方々のサポートと綿密な準備のかがあって、ますますスムーズにいったのではないかと思う。広島でのシンポジウムを終えた日の夜に、ほっとしながらアメリカ側の広島担当の実行委員と散歩して広島の平和について交わした会話が懐かしい。

その反面、正直なところ分科会では力を出し切れなかった思いが残っている。実行委員に選ばれた時から分科会運営の方法については様々に思いをめぐらせ、自分なりに下調べをして来たり、日本側の事前活動で様々な活動ができたことは非常によかったが、それらの準備を本会議においてうまく活かし切ることができずに自分の力不足を実感することとなった。サイト運営の負担から、分科会のリードについてはアメリカ側のパートナーに極力任せてしまおうとした甘えもあったように思う。できることならば、去年からぜひとも達成したいと思っていたような深い議論をもっと思う存分繰り広げ、自分自身ももっと積極的に発言できるような参加の仕方をしてみたかった。毎回十分に準備をして臨み、議論の中身に全力で集中する余裕も、その場で高度な話題に対して意義のある発言を英語で繰り広げるような力も十分になく、やや残念な思いが残った。

とはいえ、会議が終了した今になっても、アメリカ側分科会メンバーとはメールのやり取りを通じて議論の続きができています。毎回相当な長さの文章を送り合って真剣な議論を繰り広げていると、本会議中に話しきれなかったことも、十分議論の続きはできる、挽回のチャンスはあると多少安心できる。本会議中の分科会の議論に不満だった参加者には申し訳ないが、日米学生会議は議論を始めるきっかけに

すぎなかったのだと理解しておこう。

さて、第59回日米学生会議は自分にとってどのような会議だったのだろうか？日米学生会議を経験することで自分はどのように変化したのだろうか？一年前に比べて、度胸はついた。一年前は、一人で企業に乗り込んで交渉ができるようになるとは思っていなかった。さらに、大量の仕事を限られた時間でこなす作業を一年間続けて来て、一度に多くのものごとを抱えてもつぶれずに平然とやり遂げる力も身に付いただろう。英語の力も、去年に比べたらこれでもまじになった。

しかし、そのような外面的、技術的な面を超えて、数々の尊敬する人に出会い、人生を変えるような刺激を受けたことが何よりも大きい。世界の問題を自分のこととして感じ取り、一生懸命取り組む参加者や実行委員に出会い、議論する中で大きな刺激を受け、エンパワーされ続けた。開発や平和構築の分野で将来一緒に仕事をしたいと心から思えるような人に会い、影響を受けた。それだけではない。自分を除いた実行委員の15人をはじめ、参加者のみんなに出会えたこと、サイトコーディネートの過程で、同年代や高校生の学生さんを含め多くの広島の人々に出会えたこと、これらの貴重な経験は自分自身に取ってはかり知れない重要性を持つ。

一夏をともに過ごした素敵な仲間は、皆すでにそれぞれの道へと進んでいる。早速外国へ留学し新たな生活を始めている人も、次の学生活動に精を出している人も、大学や資格試験の勉強に本腰を入れ始めた人も、第60回日米学生会議の実行委員として活動を始めた人も、様々だ。全ての参加者にとって、この夏の経験が何かしら今後の人生の糧となっていくことを心から願っている。リユニオンが、今から楽しみでならない。

改めて、多数の支援者の皆様にお礼を申し上げると同時に、参加者のみんな、実行委員のみんなに「ありがとう！」と言いたい。最後に、昨年作ったJASC SONGを歌って実行委員の役目に一区切りをつけることにしよう。

—いつでも 振り向けばすぐそばにある
あたたかな思い出を心に抱き
これからも一歩ずつ歩いてゆこう
変わらない友情を胸に誓い—
JASC Forever!

間橋大地

「日米学生会議？・・・へえ、もう59回になるんだ。」

初めて日米学生会議（JASC）を知ったのは、大学のHPに掲載されていたことからだった。そのころ、大学の授業・サークル、別府での活動に限界を感じていたときだった。何をやるにしてもAPUという、ある意味で外の世界と隔離された「非現実世界」で満足している周囲の人間に、嫌気を感じていた。そんな時に出会ったJASC。自分のこれまでの大学生生活の力試しにしてみようと考え、参加することになった。

春合宿後から7月、ひたすら開発RTの勉強ばかりしていた気がする。気が付けばRTのことを考え、気が付けば開発の本を読み、気が付けば開発RTの合宿に参加していた・・・春合宿で出会った仲間、彼らとは本当に熱中できる仲間だと直感した。だからこそ、これほどまでに熱く、没頭できた。大学に入ってから初めの気持ちであった。

いよいよ本番・・・しかし、大学の試験期間と重なり、直前合宿に参加できないどころか、なんとアメドリよりも遅く（つまり東京に一番最後に）到着したデリになってしまった。今考えてみれば、直前合宿に参加できなかったことは、後々に大きく影響していたのだろう・・・

アメリカからの新たな36人の仲間との出会い。さらに、レセプション、訪問、観光とハードな日程の東京サイト。前から分かっていたことだが、英語で進行されるJASCに、少々ストレスを感じてくる。アメドリとは英語で話せるが、会話の共通ネタが少ないため長続きしない。しっかり予習を繰り返して

きたが、それでもRTのディスカッションについていくので精一杯。追い討ちをかけるように蓄積される疲労・・・なかなかJASCの流れにのれない日々が続いていた。

転機は秋田であった。生まれて初めて訪れる町で、東京と同じくらいの暑さに戸惑ったが、それでもホストファミリーの日沼さん一家の温かいもてなしで、2泊3日を穏やかに過ごすことができた。この時になって、初めてJASCと真っ向からぶつかってみようと思った。

「なんか、不思議な感じだ・・・」

広島に到着し、初めて原爆ドームを見て、平和記念公園を歩いた。夜でライトアップされていたこともあったのだろう。国技館、東大寺、これまでに何度か初めて訪れる場所に“圧倒される”ことがあった。しかし、これほどまでに心が揺さぶられる、強烈な“何か”を訴えかけるような場所は初めてだった。やはり、広島は“ただ”の街ではないと直感した。

そして、京都。この頃になるとアメデリとも自然と会話ができるようになった。アメデリの中にも、簡単な日本語を覚えてくれる学生もいた。会話が弾む。心から楽しめるようになった。

今、終わって振り返ると、後悔ばかりが脳裏に浮かぶ。しかし、後悔があって満足していないからこそ、次につながると信じている。

「次は何をしようかな・・・」

卒業まで、あと1年半。新たな挑戦が始まる。

三窪英里

2007年7月26日、午後18時半。オリンピックセンター。私たちを待っていたかのように夏本番の暑さを迎えたその日、米国側参加者36人を乗せた成田からのバスを待った。

直前合宿、第1サイトと東京での10日間の滞在を担当していた私は、経験したことのないような興奮と使命感を全身に覚えていた。

バスの遅延。とっさのスケジュール変更、早速求

められた的確な判断力と対応。

正直なところ、これから始まろうとする1ヵ月が「魔物」のように思えた。恐怖という意味ではない、ただ目の前に見えないとてつもなく大きなものが立ちまわっている感覚だった。そして自分の役割を果たすことへの責任を重く感じていた。

思えば、理念を設定して、それを形に落としていく作業の繰り返しだった委員会活動。

しかしこのバスが到着した瞬間からすべてが実体となっていく。この全く想像のできぬ1ヵ月は何をもたらし、73年の歴史にどのような軌跡を刻むのか。そして、自分ができることとは？ただただ、見えなかった。

しかしバスが無事に到着し、米国側実行委員8人と再会、日米の実行委員16人がはじめてひとつになった瞬間、

「できる」と思えた。

魔物という言葉は脳裏からすっかり姿を消した。

そうだ、私には同じテーマ目標に向かって1年間苦楽を共にした頼もしい仲間がいる。

こうして2007年夏、私の人生最大の挑戦は始まっていった。

しかし、7月26日のこの瞬間を迎えるまでの道のりは想像以上に長く険しかった。

「第59回日米学生会議テーマ“Advocating Japan-America Participation in Global Change”太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」

このテーマの下、私たち実行委員は1年間走り続けてきた。

What is Advocating?

自問自答は1年間続いた。

日米学生会議ができるAdvocateとはなにか？

社会に対して発信できることとは何か？

自分には何ができるのか？

広報、選考、財務活動、サイトコーディネー

ト・・・

仕事は毎日波のように次々と押し寄せてきた。

What is Advocating?

苦悩や迷いもあった。

力の限界を感じ、テーマに対して会議に対して懐疑的にならざるをえないときもあった。

私たちが会議に求めるものは何か、それをどのように具体化して実現させていくのか。

「自分たちの頭で考えて行動しているはずなのに、なんでリミットを感じたりするのだろうか。いい会議を作るためにもっともっとできることがあるよね。」思いを形にすることの厳しさにいつも奮闘していた。

What is Advocating?

でも私が一緒に働いてきた仲間は情熱にあふれていた、いつも本気だった。みんな、睡眠より何よりJASCの成功のために必死だった。

What is Advocating?

暗中模索の中、時には仲間と本音での衝突を繰り返しながらも、こうやってテーマに向かって取り組む「姿勢」が心から好きだと思えた。

いつの日からか、全員の中にECs as a “TEAM” for 59th JASC としての自信と結束が芽生え始めた。

そして本会議が東京を皮切りに始まった。

What is Advocating?

いってしまえば空想上の計画にすぎなかったこと全てが、実体となって動き出す。そこには生身のJASCerの声があり、笑いも涙もあった。実行委員としての1ヵ月は現実となっていく会議を俯瞰するような特別な立場にあり、会議の中身をとにかくひとつひとつ丁寧にこなしていく感覚だった。しかし、私は実行委員であると同時に会議の参加者でもあり、昨年よりもっと心震える場面に遭遇したい、参加者全員をよりよく知りたい、という焦りにも似た思いに駆られていた。

What is Advocating?

そして第59回会議を振り返った今、思う存分議論したし、最高に楽しんだ気がする。

秋田でみた竿燈祭りのちょうちんの色も、広島平和記念資料館の前で自身のアメリカ人アイデンティテ

ィーに憤りを覚え狼狽していたあの子と話したことも、人生・仕事・結婚について夜を徹して話したあの日のことも・・・全ての時間が「第59回JASCの思い出箱」いっぱいにつめられた。

What is Advocating?

しかし、それでもこの1ヵ月間は瞬く間に過ぎ、まだまだ話したかったことは山ほどある。また、実行委員として活動した1年は実に多くの出来事があり、成功もあれば学ぶべき失敗も多く容易に総括できるものではない。それでは、学業や就職活動との両立に奮闘しながら、奔走した1年間、そしてこの1ヵ月間は何だったのだろうか？何を残し、何を達成することができたのか？

What is Advocating?

この問いへの解答は困難を極める。それは自己反省と自己評価に依拠せざるをえないということ以上に、正確にはこの解答が現在導き出せるものではない性質を持つということに気づかされているからなのかもしれない。おそらく全てを知ることや、行動することには1ヵ月という時間はあまりに短く、テーマにしてきたadvocateとはこれから一生かけて続けるものであることを、1ヵ月といえども非常に濃密な時間を過ごしたからこそ感じているのではないかと思う。

ただ、今1つだけ確信をもっていえる答えがある。それは、私はこの夏JASCからとてつもなく大きな「ギフト」をもらったということだ。会議を終えた今、1年間の結果が全て結びついた「第59回JASCの思い出箱」が、一生携えていける特別な「ギフト」に変わっていることに気づく。その「ギフト」は、私の価値観や人生におけるプライオリティーを自分でも戸惑うほどに根本から変えた。将来の軸がトゥーンとできたような、そんな気がする。そして、その「ギフト」の中身をはちきれんばかりにつめてくれたのは、よりよい社会を作るためにどのように働きかけようか、自分は何をもって世界に貢献しようか、そんなことをいつも真剣に悩み考えている70人の仲間たちだった。

“Spread love everywhere you go, Let no one ever come to you without leaving better or happier” —

—Mother Theresa

そんな仲間たちはこの大好きな言葉の意味を真に教えてくれるような、互いを認め合える素晴らしい人々だった。自分とは大きくかけ離れた極端な意見を聞くこともあるし、生き方の違いからわかりあえないこともある。しかし、全てを受け入れてきちんと反応を示してくれる、自分らしくいられる環境をつくってくれる思いやりの心にいつもありがたい気持ちでいっぱいだった。

最後に、このギフトにきゅっと固く結ばれたりボン、それは一緒に苦労し、達成した日米の実行委員間の絆である。そしてそのリボンの片隅にはfaith—信頼の文字。会議の最後にある実行委員の仲間からうけとった手紙にはこうあった。

“僕らはみんな、エリに対して信頼がある。そのことをいつも忘れないで”と。

すーっと胸の中で張り詰めていたものが解かれ、熱いものがこみ上げると同時に、全てが報われる思いがした。そして、私がもらった一生大事にしたいこの「信頼」の二文字は、他の実行委員に対して私も同じように抱えていることである。1年間共に働き、いつも励ましをくれた素晴らしい実行委員のみんなへ感謝の気持ちでいっぱいだ。

さあ、明日から手にしっかりとこのギフトを携えて踏み出そう。

望月進司

JASCに参加して、僕は何を得たのか？だとか、どう今後の人生に影響が出るのだろうか？だとか正直、そんなの全然分からない、てのが本当に正直な気持ちなわけであって、勉強したかと言われると難しいところだし、昔どこかの漫画でみつけたことばで、「ジェットコースターに乗っているときに『ああ、もう後何分で終わっちゃう、あのカーブを過ぎたら終わっちゃう』なんて考えていたら何も面白くない」というのがすごい印象的で（多分、というか絶対、細かいところは違っているはずだけど）、僕はJASC中そんなことばを何度か思い出した。だか

ら、ああ、まあJASCの間にJASCの意義だとかJASCで何をしようだとか考えたりはせずに — 意識して — 何も意識しないよう、何も考えないでただ楽しもう、終わったらきっと、色々解るよ、そう思っていたんだけど、まあ本当は時々意識しちゃっていたんだけど、

あはは、結局今も何もわかつちやいないんだな。でも、

JASCでは本当に色々なカッコいい人、素敵な人に会えて、いやあこの人には敵わないや、あ、でもこの人あの人にも敵わない、ああ、俺なんてまだまだだな、頑張らなきゃって、強く思ったし、この人とその人あの人と友達になりたい、もっともっと、遊んで話して一緒にいたいと思ったりした。それだけで十分だろう？そうも思えるんだ。というのも僕は常々、僕の人生で一番大事なものは他の人であって、それは家族であったり友人であったりすると思っていて、そういう意味では僕はJASCで僕にとって一番大事なものを得たのかもしれない。そして、新しい友達ができたという意味では、僕の今後の人生にとって一番嬉しい変化があったのかもしれない、そう思うわけなんだ。

後、話は変わっちゃうんだけど、JASCで会った人たちは、友達であると同時に僕にとってすごいでっかいライバルであるという気がしているんだ。JASCの雰囲気さがそうさせるのか僕らがそういう年頃なのかとかは知らないけどJASCでは将来の夢だとか目標だとか照れちゃうような話を色々暴露しあう機会が色々あったわけで僕は色々な場面ですぐいでっかい話をして、今となってはもう後には引けない、ていう気持ちが結構強くなってしまっているんだ。他の皆はでっかい夢に向かって着実に努力をして進んでいたりして、口ばっかで何もしていない僕はこうしちゃいられない、やばいやばいという気持ちが少しずつだけ湧いてきているんだ。やっぱ僕って人間はセルフエスチームってやつを必要としている人間だから、俺って格好良いって思え

ないと何もやっていけないから、何かその根拠となるような、でっかい格好良いことをしないとイケないという気が本当にしているんだ。そういう意味でもJASCは僕にとっていい刺激となったのかもしれない。

何だか支離滅裂でわけのわからない文章になってきたけどもう一度話を変えると、とりあえずJASCが終わる直前に僕は心からこいつのためなら体を張りたい、と感じた瞬間があって、理性なんてそっちのけで文字通り体が動いちゃった瞬間があった。ちなみにECに立候補したことなんだけど。冷静にクールに後になって考えたらとことん馬鹿な話なんだけど、学生の中の思い出としてはそういう青臭い気持ち悪い経験も嬉しいものだよな？今となっては落選して心底ほっとしているんだけどね。

というのは半分くらい嘘で本当はすごい寂しいからほっとしたっていうのも負け惜しみと自己防衛なのかもしれないんだけどね。あははわけがわからないよね。でも、一つわかったのは、普段普通していると自分がどういふ人間なのかだとか自分は何が好きで何を大事に思っているだとかなんてなかなかよく分からないことが多いと思うんだけど、このときばかりは「あ、俺ってこういう人間か。こういうものを大事にしている人間なんだな」というのがわかった気がするんだ。要するに自分についてもよくわかった、ていうこと。僕がJASCで一番学んだことは自分自身なのかもしれない、ていうことなんだ。

わけがわからなくなった文章をどう締めくくってということ程やっかいなことも少ないよね。でもまあ無理やり頑張ってみるとすると（今思いついたんだけど）JASCで何を学んだとかどうライフチェンジングだったとかがよく分からないのはジェットコースターがまだ走り切っていないからなのかもしれないな。

全くオリジナリティを感じない話で恥ずかしいけ

どとりあえずこれで終わります。最後にJASCに関わる全ての方々、お疲れ様でした！そして本当にありがとうございました。第59回日米学生会議は楽しかったです。

安田雅治

そこに広がっていたのは、悲惨な現実だった。

うなだれるもの、嘔吐を続けるもの、熱か、自分の症状にうなされパニック状態にあるものもいる。自力では歩けなく屈強なアメデリに運ばれるものもいた。あるものは、脱水症状を起こして切迫した危険な状態にあった。

それは最終サイト京都に着いた瞬間だった。笑顔のものは誰もいない。バスの運転手も含めて。救急車が宿舎を往復し、不安が71人、JASC関係者を覆った。健康なデリゲーツでさえも疲れに埋没し、もちろん実行委員はそれ以上に右往左往していた。

会議が十分に終わりがねない事態であった。

会議終了までに、10人前後が病院に運ばれた。そこにとどまらず、感染症の疑いが、食中毒の疑いがあるということで、保健所の調査が入った。

そのことがかえってさらに不安を煽ったかもしれない。保健所も、所見で食中毒などと断定がしにくかったようで、意外に緊張した様子はあまり見られなかった。慣れもあるかもしれない。あとは、最初に通報した病院のある管轄の保健所から、宿舎の地域のある保健所へと案件が移ったこともあったかもしれない。というのも、初めに通報を受けた保健所の方とそこからの依頼を受けて調査をした別の保健所の方とは、だいぶ緊迫感というか雰囲気違ったからだ。そこに少し驚きも感じた。

ウイルス感染して消化器に症状をおこしているものがいた。中の一人からノロウイルスが見つかったということで、保健所から消毒についての指導があった。医者診断結果は人それぞれやはり、ちがうものであったようだ。感冒の者もいれば、日射病に近いもの、消化器には特に問題なく鼻と喉に症状があるもの、熱のあるもの。ストレス、疲労、過労、睡眠不足が主な原因と推察されたものたちもいた。

しばらくあって、保健所の結果が出た。摂食行動調査（つまり、JASCerがそれまでに立ち寄ったすべての飲食店へのヒアリング）、症状の出たものへの検診等の結果だった。結果は「原因不明」。感染源も、ノロウイルスの集団感染があったのかも、なぜあれだけのJASCerが症状をみせたのかも、すべて不明だということだった。

会議に平静がもどったのはいつのことだったのだろうか。

起こる事は起きてしまった。そこでどのような対処ができたのだろうか。取り返しのつかないことが起きなかったという点では、危機管理は成功したと言ってよいと考える。他方、危機を起こしてしまったプロセス、危機回避の仕方には、多くの反省すべき点があったように思われる。体調がすぐれない参加者たちのケア、デリの疲労度を見た上での会議の柔軟かつ適切なマネジメント、関係先との調整など。

原因は以下のものが考えられる。しかし専門家からも確固たる意見がない以上、これも推測の域は出ないものである。

1. 気候

要するに暑さである。一番症状を訴えるものが多くなったのは8月13日。その日の中の姫路城見学が一番デリの体力を奪ったようである。ちなみにこの日は、広島を朝に出発し、兵庫県西部で科学施設見学、そうめんがメインの神戸日米協会レセプション、姫路城見学、そして夕方に京都の宿舎になる立命館大学に到着、自由時間という予定だった。

その前後の広島も京都も、もともと夏は酷く暑い気候で有名であるのだが、それに加えて、記録的な猛暑が続いた2007年に59回会議はぶつかってしまった。水分を補給する、直射日光は避ける、つらくなら涼しい場所で休憩を取るなど、暑さの管理が徹底できなかった。

ちなみに補足すると、ここに関しては、当日のプログラムの責任者が自分であっただけに、医者が言うには、それが一番の要因ではないだろうというこ

とではあったが、私自身はずっと心苦しく思っていた。

2. 疲労

今年のJASCは暑かった、それだけで十分に疲労はたまる。それにJASCは集団生活であるし、日常ではない緊張の場面も続く。疲労の原因は多くある。夜、宿舎外へ遊びに出て、遅くに帰ってくるものも多かった。それに関わらずとも慢性的に睡眠不足のものが多かった。第3サイトの終わりには疲労もピークに来ていたのだろう。

3. ストレス

JASC本会議は何かとストレスがたまることが多い。ストレス管理の連続。ある意味だれにとっても、自分のストレス、自分自身を正面から見つめざるをえない試練の1ヵ月と言える。だからこそJASCは、他では味わえない大きな実りを与えてくれるものであると思う。話はそれだが、ストレスほど人を病に巻き込むことはない。大きな壁の前に、個人のストレスマネジメントに限界があったのだろう、そしてデリのストレス状況を踏まえた上での柔軟な会議運営も不完全であったことも、結果からみれば否定できないだろう。

4. 衛生管理

食べる前には手を洗う、食器はいつも清潔にしておく、口に入れるものは必ずきれいにしておく。基本的なことが徹底されていなかった。自分が上記の件について一番携わったECであたったので特に記しておきたかった。

ところで、私は、国際交流の目的とは一言でいえば「相互理解と平和の醸成」であると思う。言い換えれば、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米にある、よって学生もその一翼を担うべきである。」ご存知JASCの創立以来のテーマである。

お互いを理解しあい、信頼で結ばれあい、それが時を越えて続いていく。これが国境を越えた誤解、偏見を少なくし、平和に貢献していく。もうこれは

実践に特化した平和教育かもしれない。

友人になれば、その友人に起きること、友人の故郷で起きたことは自分の問題になる。何かをせずにはいられなくなる。それがたとえパレスチナの紛争であっても、温暖化による海面上昇で難民化するナウルであっても、飢えの続くサブサハラであっても。ひょっとしたら、交流事業は、グローバルイシューを解決できる大きな手段かもしれない。理想的に書きすぎたかもしれない。理論は間違いない。

補足すると上記の体調不良のアクシデントなどは理論だけではいかにいい反例だろう。いくら金銭と労力を投入しても、健康問題で会議が壊れていれば、悪い思いしか残らず、相互理解は後退していたかもしれない。学生だけで運営するという理想と、学生による運営の限界という現実。ということも忘れてはいけない点である。

立ち戻って、JASCが素晴らしいと思えることは、JASCは危機をも相互理解に変えうるという点だ。すなわち、

ずっと親友でいられそうだと思うこと。

これこそが本当の価値だと思う。JASCのプログラムで、アカデミックな討論、文化交流は大きな柱であり、セールスポイントである。よく言われていることではあるが、国際交流の本質はむしろプログラムの外にある。飲みに行ったりぐうたれたり、翌朝辛いと分かりつつも、夜な夜な時を忘れて語り合ったり、芝生の上で、クラブで、ビーチで、気が狂わんばかりに騒いだり、、、しとしとレストランで語ったり。実は一番効果的な信頼醸成の場なのだ。

カップルを探しに茂みに向かう探検隊な男ばかりの3人組を秋田で見かけた。自分も昨年は夜な夜な、うまくいかない恋愛について語り合った大事な仲間がいる。未だによくわからないおかしな絆がそこにある(報告書が出来上がるころには、そこから卒業していることを切に望む)。

健康危機の例をはじめに取り上げた理由は、その事例を通じて、一緒に困難に立ち向かった仲間、時には助け、そして助けられ、助け合った仲間と自分

との人間関係が一気に深まったから、その貴重な機会だったからである。

“太平洋から世界へ〜グローバルパートナーシップの探究と次代の創造〜”

これは、59回会議のテーマである。これをよこしまに解釈したジョークもすこし流行った。“Tangible”なカップルが6組できた(8月18日現在、安田調べ)。昨年では考えられないこと。冗談だけで言っているのではなく、とても貴重ですばらしいことである。繰り返しになるが、1ヵ月一緒にいただけなのに、70人と他にない親友にずっとい続けるような気持ちにさせてくれる。そうなる可能性が実際に高くある。

この事実。ほかではないものだと自信がある。

何年か後に、何十年か後に、59の仲間と一緒にこの報告書を読みたい。

山本詩乃

2年前の立命館大学滋賀キャンパス一。

それが私とJASCの初めての出会いだった。

ひょっこだったわたしは日米学生会議の一般公開環境フォーラムに見学に行った。

そこでJASCerのパワーに圧倒され、涙が出るほど自分の無力さに打ちのめされた私は、絶対に2年後あの会議に出る、と心に誓った。この会議こそ自分の弱い部分、改善すべきところを仲間と切磋琢磨しながら伸ばすことができる場だと感じた。

当時留学が決まっていた私にとって、それは十分すぎるほどの動機付け、まさにLife Changingな刺激になったのだった。

こんな長年の思いを抱いて参加したJASC。

最初は気合十分で迎えた。でも、春合宿で皆の高い能力と意識を目の当たりにして、大きな不安に襲われた。

春合宿でのOBの方の“エリートとしての使命を持ち、人から学ぶだけでなく自分で何かを発信できるようにするべし”

というありがたいお言葉も、それをばねに成長する余裕がなくて、会議が近づくにつれJASCの歴史や、

意義がただただ自分に重くのしかかっていた。自分に何か人に発信できるものはあるか？エリートとしての使命？忙しい学校生活すら満足にこなせていけない自分にはほど遠い言葉に思えた。

また数少ない地方参加者の一人ということも一つの不安要因であった。

自分の大学の授業の質や機会の数、学生のモチベーションなど、JASCと比べてしまったらやはり大きな差があった。

本当にやる気も能力も高いみんなに会えて、脳が日に日に活性化される刺激を感じる一方、JASCにどっぷりつかってしまったら、ますます自分のこれからやっていく環境に対して否定的になってしまうんじゃないかという不安が終始ついて回った。だからといってこのチャンスを無駄にしたくない、帰ってから自分の場所でどんな風にこの経験が生かせるのという答えをずっと模索し続け、見つけられずにいた。

フェアウェルでこのことをOBの方に話すと、「それならば山本さんの情熱で、ここで学んだこと、吸収したことを今度は地元や地方に住む一人でも多くの人に伝えていくことが大事なんだよ」とおっしゃってくださった。世界にこんな問題があるんだということ、それに向けて自分達にもこんなことができるということ、学生にこれだけできるということ、日米学生会議にかかわる皆の熱意や高い意識、国際交流の楽しさ、私には今みんなに伝えたいことがいっぱいある。これをどんな風に伝えられるかまだ考えきれていないけど、何らかの形で、地元の皆や、中高生に伝えていくことで、社会に還元していく。

また、この日米学生会議で身をもって学んだことは、アメリカ側実行委員長Morganが秋田のリフレクションでいつてくれたこの言葉。

“Take risks if you want to get the most out of it”だ。

この言葉はJASC中自分の行動を大きく変えてくれた。

JASCの意義や自分の役割にとらわれることなく、自分がその場でできることを精一杯やろうという気持ちに変わっていた。

それでもうまくいかないことがあったり、消化不良に陥ることは多々あった。そんな時わたしを励まし続けてくれたのは、JASCERのみんなの一举一動だった。

積極的に質問したり、スピーチに挑戦したり、いろんな遊びを提案したり、常に挑戦し続けるほかのJASCERの姿は本当に励みになった。

会議中考えたこと、学んだことはここには書ききれないほどある。

しかし一番の収穫は、その人たちが世界のどこかで頑張ってるんだって思うだけで自分も頑張ろう、自分も前向きにチャレンジしてみようって思えるような仲間がたくさん出会えたことだ。

後悔がないかといえば、大嘘になる。後悔は大有りだ。

本当はもっともっとデリのみんなといろんなことを話したかったし、自分の無知さや英語力、人とのコミュニケーション力などなどへこむことはたびたびあった。もっと挑戦できた場面もたくさんあった。でもこの悔しい気持ちがこれから私の人生の中で大きな原動力になると思う。

リスクを負う。挑戦する。最大限を得るために。

この気持ちをいつも胸に、これからがほんとうのスタート。

最後に・・・

このJASCという最高の場所で一緒に過ごした最高のみんなへ
本当にありがとう！！！！

そしていつか、福井に遊びに来てね！

吉川真由

細胞や遺伝子、食品成分についての多少の知識はあっても、世間や社会の動きに疎く、教養や常識を持ち合わせていない私にとって、日米学生会議に参加し、英語で議論するということは大きな挑戦で

第5章 参加者の声

あった。開発分科会に属していたが、日本語でもなかなか理解しがたい内容を果たして英語で議論できるのかという疑問を抱えながら私のJASCは始まった。

アメデリが到着するまでの事前研修の2日間が一番不安だった。日本が初めてのデリもいるアメリカ側と違い、この住み慣れた土地、日本でそんなに刺激的な経験ができるのだろうかという疑念がいつも心の中にあった。しかし、アメデリを見た瞬間、その疑念は一気に吹き飛んだ。まるで魔法にかけられたように、日本ともアメリカとも言えない世界がにわかに出来上がった。

普段見慣れている町もジャスカーと行動するとまったく違って見えた。分科会での討論をはじめ、観光、フォーラム、イベント、そして日々の生活までもが新鮮な発見の連続だった。

特に同じRTメンバーとは共有した時間が長い。

事前勉強会も含め、話しに話した。時にはぶつかり合ったり、時には冗談を言ったりしながら。果たして私たちが議論した成果の行方は・・・？

私自身は、分科会での話し合いが日本やアメリカ、世界に影響を与えるだろうとは最初から期待していなかった。

今世界中の専門家たちが、例えば開発問題について考えている中で、私たちが1ヵ月やそこらで話し合った結果がそう画期的で有り得ようか？けれど、誤解しないでいただきたいのは、この議論は大いに意味があったということである。

1ヵ月間も同じ釜の飯を食べ、こんなにも真剣に議論をする経験は後にも先にもありそうにない。私にとって、ジャスカーと赤裸々に、そして真剣に世界を考え、議論をできたこと自体に大きな意味があると思う。きっとジャスカーはこれから世界を引っ張るリーダーになっていくだろう。今回の経験がお互いの理解を深め、一生ものの友情を育ててくれ

た。これから先の、日米の関係に橋が架かったのだ。将来「やあ」といってまた一緒に活動をできる日があることを楽しみにしている。

JASC最終日、「起きなさい」と夢から覚まされる思いがした。もう少し眠っていたかったが、また日常が舞い戻ってきた。いや、やっぱりJASCは夢ではなく、確実に現実だった。

李 凌毅

JASCはどうだったのか、JASCで何を得たのか、JASCとは何か。JASC経験者が一度ならずとも自分に問かける質問だ。他者から、積極的な答えを求められる質問でもある。そんな質問との対峙が、時にはJASCと化し、時にはJASCを盛り上げ、そして時にはJASCを損なう。

本会議がスタートする以前から、JASCは楽しかった。春合宿でお互いを知りあい、いくつもの勉強会・飲み会を経てその人々が仲間と化していく。大学に入り、クラスなどのグループの繋がりが薄くなり、個人個人の関係が主流となる中、「仲間」という概念は懐かしく、居心地がよかった。腰を下ろして深い話をするだけでなく、ワイワイとバカ騒ぎもできる。何も求められてなくて、存在が許される、居場所が自然とある感覚。それがJASCだと思う。本会議が始まり、スケジュールや寝食を共にしていくなか、更にそんな仲間気質は深まったように思われた。大人数でのパーティー、少人数での真剣な議論、とにかくどこかに行けば人がいて、自分がそこに入れるという感覚があった。みんながオープンで、より多くの人と話そうとしており、お互いに気を遣いあっていて。一人でいるとぼんっと肩を叩かれて会話に引き込まれたり、祭りに着ていく浴衣がないと思えば誰かが貸してくれたり、とにかくみんなで楽しもうという精神が満ち溢れていた。

そんなフレンドリーさが充満した環境は一方で、プレッシャーをも引き起こすものであった。あまりにも周りが充実しているように見えるから、自分が物足りなさを持っていることに対して疚しさを覚えてしまう。なぜ自分は100%じゃないのか焦燥感を

覚える。楽しむために自分に無理をさせる。楽しむという努力をするあまりに、気持ちが空回りをしてどんどん取り残されていってしまう。そんな風を感じる参加者は多かったように思えた。私もその一人であった。会議日程が終盤になるにつれ、これまでの会議に関して感想を求められるようになる。自分の気持ちを適切に表現できなくて、「楽しかった」などと一般的なフレーズで会議を締めくくりたくなくて、なにより、率直な感情から隔離された美辞麗句で会議を距離のあるものとして認知させたくない思いが複雑に絡み合い、私は批判やネガティブな意見しか口に出せなくなっていった。

JASCとは何か。それは楽しさや挫折感、模索や感銘、1ヵ月間で人が体験しうる全ての感情をひっくるめたものだと思う。それは多分人生と一緒に、みな終局的な幸せを求めて躍起になっている場所。冒頭にあげたような質問に対する焦りのあまりに、一つ一つの瞬間を楽しめなくなっているといけないと思う。答えが見つからないからといって、全てを否定してはいけないと思う。肯定するもの、否定するもの、改善していくもの、全てを真っ直ぐ見つめて、正しく表現していかなければならない。ここは桃源郷でもネバーランドでもない、人生の継続の中の一部である。人生を生きるように、JASCを生きる。

It's your life, it's up to you how to live it.

渡辺恭子

第59回日米学生会議 (JASC) に挑むことを決めてから、終わった今、この経験を感想としてまとめるのは困難だと感じている。強いてこの感情を表現するならば、文字や文章という“枠”に収めたくない。という感覚だろうか。この夏を思い出にはしたくないという寂しさがそうさせているのかも知れない。

思えば、JASCに応募すると決めてから、晴れて参加者となった後も、私はずっと迷っていた。自分自身の意思で参加したいと思い応募した日米学生会議だったが、合格通知を受け取ったの束の間の喜びの後、不安が押し寄せてきた。1ヶ月近くにも渡る集団での生活をうまく過ごせるのか。ディスカッションをするだけの英語力・知識が足りるのか。様々

な思いが入り混じり、辞退すら考えてしまうこともあった。自分自身にとってのJASC、JASCにとっての自分、それが分からなくて、自分の答えが出せなくて、ずっと自分がJASCに参加していることに違和感を抱いていた。しかし、私は、現実から逃げていた。大事なものは、先の不安ではなく、今この瞬間に向き合うこと、自分自身に向き合うことだった。出来ないこと、やりきれないこと、知らないこと、分からないことはたくさんある。でも、分からないことを悩んでもしょうがない。自分に今、何ができるのか。悩むよりも、行動し変化を起こそうとすること、それが一番私には足りていなかった。

そもそも参加したいと思った理由は、広島で平和を考えるシンポジウムを開催する活動をしていた事もあり、全国の学生が、ヒロシマや平和についてどういう考えを持っているのか興味があったから。偶然見かけた、参加者募集のリーフレットに書かれていた暴力と平和の分科会、まさに私がみんなと考えたい事はこの分科会にあると思った。実行委員を含み、多様な価値観を持って集まった日米の学生10人。ディスカッションでは、意見が割れる事もあった、しかしながら、お互いがお互いを尊重し自由に意見を言える場がそこにあった。真剣に、時におおぶさげ。最高の分科会、最高のメンバーに出会えた。それだけ、最高の場、人に出会えたからこそこの今、正直やり残した事と感じることはたくさんある。英語が分からなくても、もっと自分の意見を言えばよかった、もっとディスカッションをすればよかった。もっと、もっと。そういう気にさせてくれる、本当にモチベーションの高い、そして素晴らしい人たちが集まっていた。

第58回の報告書で見つけた“Life Changing Experience”という言葉。第59回でもその言葉をよく耳にした。私にとってのJASCがそういうものになったかどうかはまだ分からない。ただ、このJASCに参加することで考えた事、悩んだ事、普段は出来ない素晴らしい経験の数々、そして大切な仲間と過ごした時間、全てが今の自分を作り、そしてこれから先、自分自身に影響を与えるものだという事は確かだ。会議実現まで企画・準備をしてきた実

第 6 章

エッセイで綴る 日米学生会議

これからの日米学生会議に向けて 菅家万里江	150
国際交流 — スピーチ表現 加納康宗	152
日米間の議論の違いから得た教訓 土岐吉史	153
日米学生会議の社会的意義— 第59回日米学生会議の挑戦 松田浩道	154
思い出になるJASC 安田 雅治	155

第6章 エッセイで綴る日米学生会議

これからの日米学生会議に向けて

第59回日米学生会議日本側副実行委員長
菅家万里江

<はじめに>

第30回日米学生会議参加者を母に持つ私にとって、この会議は憧れの存在であり、完全無欠で、永続するものと信じていた。しかし、この会議の財政状況が芳しくなく、開催意義が疑問視されている事実直面し、衝撃を受けた。日本で最初の国際学生会議であり、個人的にも非常に影響を受けた思い出深い会議であるので、会議が存続することを心から望んでいる。それには会議の意義を我々がもう一度考え直し、旧体制からの脱却を図らなくてはならない。本稿では、これからの日米学生会議に向け、委員としての経験から提言を行う。

<日米学生会議の意義>

「世界で最も重要な二国間関係」。故マンسفールド元駐日大使は、日米関係をそう表現した。太平洋戦争から半世紀あまりで、日米関係がこれほど成熟したことは驚くべき事実であるし、「日米間の平和」を理念に掲げる日米学生会議にとって、この言葉は目的が達成されたという点で非常に意義がある。しかし、皮肉なことに、それは会議の存亡を脅かしているのも事実である。すなわち、「日米関係が良好な今、果たしてこの会議を行う意義はあるのだろうか」という声が会議内外を問わず挙がってきているのである。

それでは、日米学生会議の意義とは何か。歴代の報告書に綴られているように、「教育機関」「相互理解」といった言葉のみに集約されてしまうのか。それとも、設立時のように、外交的な意味も持つのだろうか。以下、故マンسفールド元駐日大使の言葉を軸とし、悲観論的・楽観論的立場から、日米学生会議の意義を問い直してみたい。

まず、悲観論的な視点からはじめたい。そもそも、米国は日米関係を「最も重要な二国間関係」と本当に捉えているのだろうか。否、この点に関してはまだ疑問の余地があるといえる。私は現在米国に留学

しているが、CNNやABCなどの報道機関でも、大学の国際関係などの授業でも日本が登場するのは稀で、米国における日本のプレゼンスは限定的であると感じる。一方、日本は米国に政治的・軍事的・経済的に大きく依存しており、米国に関するニュースを見ない日はない。このようなアシンメトリーな関係の中、我々は「最も重要な二国間関係」というレトリックに甘えていいのだろうか。先鋭的な草の根交流団体として、米国の学生に、日本や日本の学生の考えを知り、対日意識を高めてもらうことは、依然重要ではないのだろうか。この点において、利害関係に囚われず、自由な議論が出来、多くを吸収する力を持つ学生の時期に、交流し、相互に影響しあう日米学生会議は、非政府的外交使節としての意義を現在も失ってはいないといえる。

もちろん、日米関係を「最も重要な二国間関係」としても、会議の価値は十分にあると断言できる。秋田フォーラムのパネルディスカッションで言及した通り、将来の日米学生会議は、危機感からではなく、二国間関係が世界平和に対して貢献できる更なる可能性を追求していくべきである。政治・経済・文化など多岐にわたる分野に関して、互いの資源を共有し、協力しあうことで、一国では困難な影響力、そして多国的な協力では成しにくい、柔軟性や迅速性を持ち合わせた政策の実現が可能になる。

当会議ではこの考えの下、「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」というテーマを打ち立てた。「日米関係の成熟による太平洋の平和を、混沌とする世界の平和につなげる」という第59回会議の理念は、会議の原点に回帰すると同時に、70年以上の時を経て、会議が一步前進したことを意味する。テロ、環境問題、貧困、移民、様々な問題が山積するグローバル社会の中で、世界第1位と2位の経済大国が協力して貢献出来る可能性を探ることが、今後の日米学生会議の意義であると私は考える。

<日米学生会議の成長の必要性>

今日、日米学生会議の社会的意義が低下したと指摘されるのには、他にも要因がある。それは、会議

が前年度の参加者による運営のため、内容が社会的な貢献より、次年度の会議の参加者のためのものとなり、内輪的になるのである。そのため、会議の伝統や意義を理解していても、賛助団体としては社会的成果がより短期的で明白である他団体を支援することになり、必然的に日米学生会議に対する援助額が減少する。これは会議の存続において非常に深刻な問題である。

改善策の一つとして、「他の団体と共催して、大きな社会的な意義のある企画を行う」ということがあげられる。第59回会議では、英語名で“Advocating Japan-America Participation in Global Change”という理念を掲げ、その中核を成す“Advocate”という言葉の下、アジア財団との共催のアジアフォーラムと、秋田日米協会との共催の秋田フォーラムを開催した。どちらも箱（資金・場所の提供）は共催団体が、中身（発表者・発表内容）は日米学生会議が担当するという役割分担を行い、日米の学生の問題意識を広く社会に発信するフォーラムであった。特に、私が直接手がけた秋田フォーラムを例にとり、共催によって得られるメリットについて言及したい。

秋田フォーラムは、地元高校生及び大学生150人を含む総勢300人の来場者数を記録し、複数のメディアから取材も受けた。レセプションも含めてその予算総額は200万円規模にのぼり、第59回日米学生会議の中でも大きな企画となった。このように、社会的な大規模な企画を達成することが出来たのも、ひとえに秋田日米協会の方々のご協力があったからであった。フォーラムの企画、及び講演者の招聘、来賓者、政府高官の方々への挨拶の依頼などは実行委員が行ったが、それ以外の、高校・大学への広報、メディア（テレビ・ラジオ・新聞）への呼びかけ、財務、当日の進行、会場の設営、レセプションの内容決定・進行など、ほとんどの仕事は、秋田日米協会の方々が行ってくださった。特に、財務・広報の二点については、地元密着型で行わなければ成功せず、その点で、秋田日米協会の方々のご協力は不可欠であった。また、協会のほうで既に何度か大きなフォーラムを開催した経験があったため、そのノウハウ、ドゥハウを全面的に提供していただくことが

出来た。このように資金的・能力的な協力体制を全面的に得られたのも、ひとえに「共催」の形を採用したからであろう。

では、なぜ、「共催」なのか。それは、「後援」等と比べて、関与の度合いが大幅に強まるからである。「後援」は、名義的な性格で、全面的な協力を得ることは難しい。しかし、「共催」であれば、その団体の事業の一部として取り組んで下さり、全面的な協力が得られるのである。学生が運営するという日米学生会議の弱点、すなわち、学生の時間的・能力的限界を補い、より社会的意義のある企画を行う方法、それが他団体との共催で企画を遂行することである。

尚、この項の始まりに、「社会的意義のある企画」と「参加者の満足を図る企画」の二項対立を示したが、このように共催によって大きな企画を行うことは、決して会議の質を低下させるものではない。社会的意義のある企画を通して、会議参加者が、参加者としての自覚を持ち、会議の意義を見出す契機になり、会議に関わる意識も向上する。現に第59回日米学生会議では、これらのフォーラムを通して参加者が会議の可能性を見出し、意識の向上につながったと考える。

海外留学が容易になり、様々な国際交流プログラムが存在する今日において、「日米学生会議」の伝統と名声に甘えているだけでは、この会議はその他の国際交流系の団体の中に埋没してしまうだろう。それを防ぎ、この会議を後世まで存続させるためにも、積極的に外部と提携しあい、社会発信をし、日米学生会議の存在意義を社会にアピールしていくことが必要である。

<おわりに>

事務所においてあった過去の報告書の山を読み進めるうちに、私たちは毎回同じ過ちを繰り返し、同じ苦悩を抱えていることを痛感した。「会議の限界」「開催意義の相対的低下」など、このエッセイで取り上げた項目は、過去10年の報告書を紐解けば其処此処に見つけることが出来る。日米学生会議の最大の欠点としては、第55回日米学生会議日本側実行委員長の乗竹氏もそのエッセイで言及していたことだ

が、委員が毎年交代してしまう、ということにある。それは逆に会議の形骸化を防ぎ、多くの学生に会議運営の機会を与えるという点で非常に意義のあることであるが、積年の反省が次代の会議運営に生かされないという短所を持つ。しかし、我々（特に次の代の実行委員）は、過去から学ばなければならない、何が日米学生会議に求められており、どのような変革の必要性があるのかを。そしてそれを自分たちの会議の中で達成し、次の会議へ引き継いでいかなければならない。そうしなければ、日米学生会議はいつかその歴史に幕を下ろすことになってしまうだろう。私がこの文章を本報告書に記載することを決意したのも、そのような使命感と危機感があったからである。

無論、この文章が後代の実行委員の目に触れるかどうかは定かではない。だが、この拙作文が多少なりとも後世の実行委員及び日米学生会議の糧になれば本望である。

国際交流 —— スピーチ表現

第59回日米学生会議参加者 加納康宗

The masters of this reception and wonderful audience thank you very much.

My name is Yasumune Kano, a part of Japanese delegation. I am honored to make a speech on my experience at the final reception of the 59th Japan-America Student Conference.

The most precious thing I got during JASC is friendships and deepest understanding with everyone I met, especially the members of the nationalism round table. I had precious time with all ECs and delegates. I wouldn't have met all of you if I were not in JASC but now every one of you is ever-lasting friend. It is impossible to speak everything in a few minutes so let me talk about this matter at the end of my speech.

In JASC, I learned a special subject "relationships". I was surprised and stressed to realize so

many differences. One of the most important things in JASC is to get along with different people because more than 70 students are living together for a whole month. Some of us may have struggled with a few friends. As it is JASC, however, we cannot ignore troubles. There is no way to escape.

There may be more stress when we talk about politics or sentimental issues. My round table was nationalism and we often had intense discussions. To others, I may have just been the image of "Japanese conservative". In fact, I used to be burdensome for liberal teachers in high school days, especially in Japanese history class. To be honest again, I was feeling guilty 10 days ago in Akita for causing conflicts. In the following site Hiroshima, I found myself sarcastically saying "fortunately" when there was nothing intense. I felt shameful right after that. JASC is where students exchange their opinions without hesitation or political responsibility. If I were a politician or a government employee called "bureaucrat", I would. But we are students and don't have to worry about such things. We just have to be honest and avoid misunderstanding. I became confident about it in Kyoto, where I finally felt what is called mutual understanding. Today's final presentation was a part of the very agreement we achieved after the intense discussions called "peace building". I know that many people worried about our intensity but we finally made it. Then, I stopped feeling my round table was tough and started to feel at home there. At the same time, I gave up seeking for my JASC-love. It was the first time ever to feel at home where I once felt like getting away from. Besides, it is rewarding to explain culture and history of our country in a foreign language. I vividly remember how hard it was to explain Japanese original concepts like "every dead is a Buddha" or "imperial family state" in English. However, when I finished them with help of perfect bilingual friends, it

was moving. So, Hiro, Shinji and Rui, thank you very much. I was not fluent in English but I felt like I have something to contribute to the round table. At the same time, I promised that as long as I'm on the table, I will never let any Ame-dele to say "misterious" about Japan. Of course, it is also a good chance to clarify what we take for granted.

Yesterday, during the preparation for today's final forum, I suddenly got absent-minded behind Nancy, great organizer of today's presentation. I was not sleepy or apathetic but was coming up with the following for the last paragraph of this speech.

I am not confident whether we can really contribute to the peace of the world. I cannot say I have understood everything of the United States of America. However, I have no doubt that we 72 JASCers have established deepest understanding with one another. We have JASC identity and culture in common. We are global citizens working for pacifism and development as micro media. Even though we may have different nationalism, we have this JASCism in common by sharing the same experience and memory of this summer. Our great alumni Mr. Kiichi Miyazawa and Eleanor Hadley, who passed away this year, have accomplished the supreme goal of JASC and this is the mutual understanding that society and the history are expecting us to practice again.

Lastly, it took me a whole month to say this in front of all JASCers. It is my genuine pleasure to meet every one of you. I'm proud of all of you. My JASC-love is JASC.



日米間の議論の違いから得た教訓

第59回日米学生会議参加者 土岐吉史

約1ヵ月の日米学生会議を終え、大阪に戻りました。平静な生活に戻りJASCを思い出すと、白熱した分科会の議論が頭に思い浮かびます。そこに日米間の議論の違いから得た教訓があります。

ファイナルフォーラムに向け準備を進める過程で、議論が白熱する分科会。私が所属していたメディア分科会では、毎日激しい議論が進められていました。英語が母国語ではない私にとってこの議論のスピードについていくのは本当に大変でした。そもそも、日本人の議論の「カタチ」とアメリカ人の議論の「カタチ」に違いがあることを強く感じました。

日本式の議論の進め方は熟考型です。ファイナルフォーラムで少しでもやってみたいと思うことがあっても、すぐに発言するのではなく、具体的なプロセスや問題点を考えたうえで、「これで大丈夫だ」と思えば、1つのアイデアとして提案します。発言をするまでに時間がかかるのは、自分が納得するプロセスが成立するまで熟考するからです。このように、日本ではそれぞれが熟考したアイデアを提案し、その中で1番良いと思われるモノを選出し議論の答えとします。

一方、アメリカ式の議論の進め方はブレインストーミング型です。ほんの少しでも、アイデアがあれば、たとえそれが不完全だとしても熟考せずにどんどん発言します。頭に浮かんだモノをすべて言葉にし、アイデアとして提案します。この断片的に浮かんだ不完全なアイデアをそれぞれが限りなく出し合い、一つひとつの破片を重ね合わせることで、大きな1つのアイデアを組立てる。この作業により全員の意見の集大成を議論の答えとするのです。開始当初この様な議論の違いにとっても戸惑い、議論について行く事ができませんでした。しかし、東京観光や各地で開かれるフォーラムや夜の飲み会を通じて、分科会メンバーとプライベートな部分分かち合うことで、それぞれの考え方、性格、発言の方法などが理解できるようになりました。個人の性格

や考え方を理解できたことは、アメリカ式でめまぐるしく進む議論にとても役立ちました。「あ、彼はこう考えているな。」「はいはい、あのことか。」などと、少しずつ考えがわかり、議論についていける様になりました。

しかし、ファイナルフォーラムを完成させるには議論について行くだけでは十分ではありません。アメリカ人学生に日本式の熟考型プロセスを理解してもらい、それと同時にアメリカ式に近い形で日本側もアイデアを提案することが必要だと感じました。

そこで、分科会での対応策をとりました。メディア分科会の日本人リーダーも、この日本とアメリカの議論形式の違いに気付いていたので、アメリカ側に、「議論の進め方が違うので、スピードについて行けない時はスピードダウンをしてほしい。」「議論中、黙っている人がいても、それは何も考えていないのではなく、その人なりに頭の中でプロセスを熟考しているんだよ。」と説明をし、議論の違いに理解を求めました。

次に個人的な対応策として、まず「Yes、No」をはっきり文頭で発言するようにしました。発言者の考えに対して自分の立場をはっきりと文頭で表明することで、どの部分と同じで、どの部分が違うと意思確認がしやすくなるためです。そこで大切なのは、「I don't agree with you」ではなく、「I don't agree with your idea」と言うことです。「I don't agree with you」ではその人自身を否定することになります。「I don't agree with your idea」とその人のアイデアを否定している意思表示をし、意見の違いを説明することが大切です。日本式、アメリカ式の議論の違いに気づき、互いに歩み寄ること、また個人としてその人自身を否定するのではなく、アイデアを否定することで議論をうまく進めることができます。

秋田フォーラムのゲストスピーカー、茂木健一郎さんがおっしゃっていました。「学生の強みは、その発言に一切責任を持たなくてよいことだ」と。企業に勤めるようになると、社会的立場から発言に注

意しなければならなくなるが、学生は人を傷つけることを除いては、自由に物事を発言できる。議論においても頭に浮かんだアイデアがあればまず発言してみる。発言をすると同時にプロセスを熟考し、納得のいく説明をすることができれば大成功です。頭に浮かんだものをうまく瞬時に発言する「瞬発力」の大切さに気がきました。

最後に、日米学生会議の議論を通じ次のことを学びました。議論の違いを認め、お互いが歩み寄ることによりよい議論を作り上げることや、学生の強みを活かした「瞬発力」を兼ね備えた発言をすることです。また、英語によるアメリカ人学生相手の議論という事で、自分の意見をうまく伝えられず、「もっと発言すればよかった…。もう少し英語ができれば…」と今になって後悔を感じます。しかし、同時に、同じ世代の学生が活発に意見を発言し、果敢に議論を進める姿を見て、「同じ学生であれだけできるから、自分もやればできるんじゃないか。」と強く可能性を感じます。来年の4月から私は企業で働きます。今回感じた「後悔」を繰り返さないため、仲間から学んだ「可能性」を強く信じて自分自身を成長させていきたいです。

日米学生会議の社会的意義—

第59回日米学生会議の挑戦

第59回日米学生会議実行委員 松田浩道

日米学生会議の社会的意義とは何か。何のためにこの会議を運営するのか—日米学生会議に参加するもの、特に実行委員に選ばれたものが必ず一度は考える問いであろう。

歴史を辿れば、設立当初は非政府外交使節としての役割、貴重な草の根交流の場としての意義が極めて重要であった。しかし、長い年月を経て日米関係は変化し、学生が運営する企画としての目新しさも薄れる中で、日米学生会議が依って立つべき成立根拠は一見すると弱まりつつある。その中で、特に財務活動などを通じ外部の方々と接し、いかにたくさ

んの団体、企業からこの会議が支援を受けているかを実感した実行委員を中心に、何らかの形で日米学生会議は社会に価値を還元していかなければならないという使命感が生まれることとなる。

昨年の第58回会議では、目に見える形での短期的成果の発信を目標に掲げていた。具体的には政策提言の作成などが提案され、それらによって実際に社会を変えて行くことが目指された。しかし、学生としての力の制約から、このような試みが実際に社会に対してどれだけインパクトを持ちうるかということについてはどうしても限界があった。

今回の第59回会議では、そのような短期的目標を掲げる動きはあまり目立たなかったといえるだろう。各分科会では最終フォーラムで議論の過程と結論を発表することを主な目的とし、活動を行った。

その背景には、目に見えない参加者の成長という日米学生会議の教育的効果に注目し、長期的に社会に価値を還元して行くことに集中することで日米学生会議本来の力を発揮できるのではないかという思いがあった。しかし、社会的な貢献のために積極的に努力することを諦めた訳では決してない。第59回会議の挑戦として、一般公開のフォーラムを各開催地で開くこと、さらに教育効果を狙う対象を日米学生会議参加者にとどめず、社会一般に大きく開くことが試みられた。秋田フォーラムでの学生との交流会、広島での2日間の現地学生とのプログラム、そして京都での交流会と、なるべく多くの地元大学生、高校生と交流する機会を確保し、一般公開のフォーラムでもなるべく多くの観客を集めるよう努力した。従来、日米学生会議に参加した72名だけを対象とする講演会などの企画は充実していても、本会議中に日米学生会議を社会に開く機会が少なかったことと比較して、第59回日米学生会議のこれらの試みは特筆に値するだろう。

多くの日本の学生にとってアメリカの学生との交流の機会は今現在においても貴重であるし、現地の学生との交流で学べることは互いに非常に大きい。日米学生会議の持つ力を参加者だけにとどめず、広く一般に開く。それによって日米のパートナーシップの価値を社会に“Advocate”し、広く多くの学生に

刺激を与えることで「次代の創造」につなげて行く。第59回日米学生会議のテーマに込めたこのような思いが実現されるか否かは、会議参加者、または各地で企画に関わった一人一人の学生の今後の活躍にかかっている。

思い出になるJASC

第59回日米学生会議実行委員 安田雅治

朝起きて、すぐに朝食の準備にとりかかる。すぐに出なければいけないので、ゆっくりもしてられない。荷造りもまだ半端だ。なんとか寮を出る。不安に思ったが、ちゃんと彼女はトラム(路面電車)の駅に来ていてくれた。しかし、3日というのは、短すぎた。出会ったのはおとといのパーティ。自分は今もう今日オランダに行かなくてはいけない。次に会えるのはいつになるか、もう会えないかもしれない。

朝食をとろう。町で1番有名で雰囲気のある通りへ行った。そこは1年中オープンカフェと客でにぎわっている。しかし今日は土曜の朝、人はほとんどいない。まずは、名物のホットチョコレートをオーダーしてからゆっくりと過ごした。

話はおかしな方向へと進んでいく。普通ならロマンティックになるところだが、ドイツと日本という現実を感じると、その話はだんだんと空虚に響き、いつしか話から熱気は消えうせ、そこにはむなしさだけが漂っていた。沈黙が始まりそうだ。

その時彼女のほうから口に出してくれた。

「まだまだこの街知らないでしょ、どこかつれてあげようよ」

何を望んでいたのだろう、なにも望んでいなかったのかもしれない。いまだにわからない。街をまわり、しばらくして駅に着いてしまった。駅の中の名所も案内してくれた。時間まで電車で一緒に待つことにした。

第6章 エッセイで綴る日米学生会議

そろそろ出発だと、車内放送を通訳してくれた。目の前にはしあわせそうな母子がいる。

とにかくドアへと動く。それから1分経つ、でも10分あったように思える。発車のベルが鳴った。彼女はホームへと戻る。大声で叫びあった。間もなくドアは閉じる。ゆっくりと滑り出す。彼女もあわせて歩き出し、すぐに全速力で、最後まで手を振って走ってくれた。目の前にいた姿が、すぐに豆粒の様になってしまった。

翻って、第59回日米学生会議。いったいそれはなんだったのか。71の違った答えがあるはずだろう。答えなどでないかもしれないだろう。

JASCに関わって1年半。

JASC 59というものをまだまだ消化できていない。やりきったと言い切っているほかのECがうらやましくおもえることもある。自分の中で8割くらいができなかったこと、やりきれなかったこと。

いま思えば、ECになるきっかけはサンフランシスコのラーメン屋だった。そこでイチローにもあった

のだが、もうそのことは人に言われたいと思えない。

今、バイト先のギャラリーでこの感想を書いている。毎朝、ギャラリーの鍵を空けて、セッティングし、お花の手入れが終れば準備は完了だ。そのあと、開店前の一時にスタッフルームでタバコをふかしていると、トリュフォーの映画の主人公になったみたいな気がしてくる。客はほとんどこないからずっと感想を書いている。頭にのぼってくるのは、さっきのドイツの話ばかり（もう2年前）。そんないい思い出でないのかもしれないのに。しかし、JASCの思い出が無い訳では決してない。むしろあり過ぎて消化しきれない。そもそも、もはや思い出ではなく、日常すら変えてしまった。そして根付いてしまった。

Anyway,

むなしく思うことだけでもなければ、悔やむことだけでも終わらない、キラキラしているものだらけ。でも、ただのいい思い出では終わらない。

それが自分にとってのJASC59ではなかったかと感じている。

第 7 章

第60回 日米学生会議概要

第60回日米学生会議テーマ

“Students Redefining Their Role through Insight and Action”

新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮していた4人の日本人学生が太平洋を渡り、日米学生会議を創設した。以後、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ数々の困難を乗り越えながら、学生同士の率直な対話が相互理解を深め、平和の実現に貢献するという創設者の信念が継承され今日に至る。日米学生会議は創設時より学生独自による会議の企画、運営が行われ、毎年夏日米交互で開かれる約1カ月の会議は、日米の学生による相互理解と友情を醸成する場であり続けた。

現在の日米関係は、歴史上最も成熟した二国間関係とも言われるようになり、創立当初の目的は達成されつつある。しかし我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズム、環境問題、貧困、民族問題など様々な問題が山積している。このような状況の中で日米両国は、良好な二国間関係のみに満足せず、「世界の中の日米」という視点に立った行動が求められている。一方で、数々の困難を乗り越えながら日米関係に寄与し続けてきた日米学生会議は、良好と思われがちな日米関係、国際交流の一般化、社会貢献を掲げる学生団体の増加など様々な要因によって差別化と新たな価値の創出が求められている。第60回日米学生会議は、“Students Redefining Their

Role through Insight and Action”「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」をテーマとして掲げ、ポートランド、ロサンゼルス、モンタナ、ボストンで開催される。この記念すべき第60回会議を機に、日米関係、また日米学生会議自体を問い直し、さらなる発展への追求を目指す。

日米両国の学生は、文化や言語の壁を乗り越えながら、特定の利益に拘束されない率直な議論を交わすこととなる。その過程において、参加者は自身の考え方や価値観の根幹、そして社会の中における自身の役割を見つめ直す機会に遭遇するだろう。第60回日米学生会議では、分科会活動、フォーラム、フィールドトリップなどで個人が主体的に行動する場を設けることにより、自身の考えや思いを積極的に発信していくこととなる。また、政府、地方自治体、NGO、NPO、有識者の方々及び会議参加者以外の学生との対話を積極的に取り入れ、共に再考する機会も創出していく。このように日米学生会議を通じて得られた経験や成長はそれぞれの参加者に蓄積され、築き上げた信頼と絆は様々な問題を解決する一助となり、必ずや世界に平和をもたらすための礎となるだろう。第60回日米学生会議は、学生独自の意見や考えを発信し、行動する場を設け、未来への強固な基盤を創出することにより、新たな潮流を生み出す会議となることを目指す。

主催

財団法人 国際教育振興会

企画・運営

第60回日米学生会議実行委員会

開催期間

2008年7月28日(月)～2008年8月22日(金)

開催地

ポートランド

ポートランド、1935年アメリカで初めて日米学

生会議が開催されたこの土地から私たちの旅は始まる。ポートランドは雄大な山々と穏やかな気候に恵まれ、自然の豊かさと都市の機能性が調和する街として知られている。このような魅力あふれる街である一方、この土地は日米間の暗い歴史も刻んでいる。日系アメリカ人強制収容所などの第二次世界大戦の負の遺産。現在では強固な同盟を持つ二国ではあるが、日本とアメリカはほんの60数年前までお互いに憎しみあっていた。この土地で私たちはポートランドの魅力を堪能しながら、日米関係の過去、現在、そして未来について再考させられることになるだろう。

ロサンゼルス

ロサンゼルスはアメリカで人口第2位の西海岸を代表する大都市である。西海岸最大の商業、金融拠点であるのと共に、アメリカ最大の貿易港であり、対アジア貿易における役割は巨大だ。ハリウッドに代表されるエンターテインメント産業が常に世界をリードする一方で、電子機器、宇宙産業、バイオ産業など様々な最先端技術の成長も著しい。また、ロサンゼルスは民族多様性で知られ、特定の人種が過半数を占めていない数少ない都市でもある。われわれ参加者は超大国アメリカの活気の根源に触れるとともに、アメリカを象徴する多様性を肌で感じることとなる。

モンタナ

モンタナは日本とほぼ同じ面積を有し、100万人ほどの人々が農業や牧畜を主として暮らしている。またイエローストーン国立公園を始めとして、ロッキー山脈、グレートプレーンズなど、雄大で豊かな自然に恵まれており、アメリカの原風景を現代にまで留めている。一方で、キリスト教信仰心の深い人々が多く住んでいることや、白人入植者とネイティブアメリカンが最後の死闘を繰り広げた歴史など、多様な側面を持つ土地でもある。本サイトでは、大都市とは異なるアメリカの一面を、ホームステイや環境フォーラム、ネイティブアメリカン居留地への訪問などを通じて参加者に

体感してもらう。そして人が自然との共存を図るここモンタナから、アメリカの原点とこれからを見つめ、多様なアメリカ社会への理解を深める事を目的とする。

ボストン

ボストンはアメリカの東海岸に位置し、マサチューセッツ州の州都である。英国的な雰囲気のある歴史的建造物が多く観光地としても有名である。近郊には有名なハーバード大学やマサチューセッツ工科大学を擁していて、日本の高等教育機関との違いを比較し、再考するきっかけとなるであろう。また、ボストン美術館や科学博物館などといった芸術関連の施設も充実している。そして今年メジャーリーグでワールドチャンピオンとなったボストン・レッドソックスの本拠地がある。本サイトは学術面・エンターテインメント面の双方から特化した都市で、我々の1ヵ月間の議論の集大成を社会に発信する最適の場となるであろう。

会議の過程

第59回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC,Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者の決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36人、合計72人の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に分かれ、第60回会議のテーマである「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。また、フォーラムでは、分科会での討論の結

果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第60回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に、社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第60回会議における分科会は以下の通りである。

法と社会

Comparative Law and Society

マイノリティー問題

Minority Issues: From Social Discrimination to Social Contribution

CSRと市民～新たな社会発展の視点～

Corporate Social Responsibility in Development

現代社会と伝統～調和と共生の模索～

Exploring the Relationship between Tradition and Modernity

科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～

Ethics: Holding Science Accountable to Humanity

環境と人間～自然と共生するために～

Communicating Environmental Ethics: Media, Mindset and Ecological Inspiration

悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～

Memory of Tragedy: Examining Vehicles of Bias, Education and Peace

Field Trip

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わ

ることのできる貴重な機会であり、議論をより現実的視点から行うための礎とする。

Special Topics

限定された議題を扱う分科会とは異なり、参加者が個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見、及び議題設定能力を養う、同時により広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させることも求められる。

Conference Wide Discussion

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アルムナイや専門家をゲストスピーカーとして招き、第60回会議のテーマである「再考と創出」を掲げ、既存の事柄への問いかけをするとともに、新たな潮流へと向かう可能性について参加者と共に考えることを目的とする。

Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者と思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

Forum

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなど、参加者に学術的経験を得てもらうことを目的とする。さらには、分科会の成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者と共有することによって、第60回日米学生会議の成果を社会に発信することも目的としている。

第 8 章

日米学生会議に
ご協力いただいた
方々

○第59回日米学生会議主催・後援団体

会議全般

主催：財団法人 国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、社団法人 日米協会、日米文化センター

秋田サイト

後援：秋田県、秋田市、国際教養大学、秋田日米協会、秋田魁新報社、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送、NHK秋田放送局、朝日新聞秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局、産経新聞秋田支局、日経新聞秋田支局、河北新報秋田支局

広島サイト

後援：広島市、財団法人広島平和文化センター、広島市立大学広島平和研究所、中国新聞社、広島日米協会、株式会社中国放送、財団法人広島国際文化財団、学校法人武田学園、合同産業株式会社、株式会社ユアーズ

京都サイト

後援：京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会、京都商工会議所、学校法人 立命館大学、財団法人 大学コンソーシアム京都、京都日米協会、京都新聞社

○ご協力いただいた方々

会議全般

財団法人 国際教育振興会

顧問 山室勇臣

理事長 大井 孝

日米学生会議事務局 相澤始枝

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃殿下

会長 椎名武雄

副会長 南原 晃

事務局長 伊部正信

事務局 佐々木文

The Japan-America Student Conference, Inc

理事長 Robin L. White

専務理事 Regina Dull

事務局 八木沢ひろ子

Ashley Neeley

外務省

大臣 麻生太郎

広報文化交流部 部長 山本忠通

大臣官房 参事官 廣木重之

広報文化交流部 人物交流室 外務事務官

小山久子

文部科学省

大臣 伊吹文明

大臣官房 国際課 課長 渡辺一雄

大臣官房 国際課 総務係長 井部真人

大臣官房 国際課 総務係長 平田純一

米国大使館

大使 J. Thomas Schieffer

文化担当官 John G. Moran

広報・文化交流部 教育・人物交流担当官

Nini J. Forino

広報・文化交流部 教育・人物交流室

松元美紀子

広報・文化交流部 教育・人物交流室 大谷桂子

広報・文化交流部 教育・人物交流室 落合安代

東京アメリカンセンター 畠山陽子

岩手県

総合政策室 政策推進課 主事 増澤 享

総務部人事課 人材育成担当 女鹿智恵

財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

専務理事 吉澤誠司

広報渉外部 GHRD課 岩楯圭介

財団法人 世界平和研究所 理事長 大河原良雄

国際交流基金日米センター

市民交流課 課長 岩永絵美

知的交流課兼市民交流課 上級主任 今井隆志

市民交流課 山本訓子

市民交流課 山田文子

日米教育委員会

事務局長 David H. Satterwhite

事務局長補佐 Marigold S. Holmes

社団法人 青少年育成国民会議 国際交流振興部

大畑洋二

社団法人 日米協会 専務理事 渡辺 隆

財団法人 国際教育財団 常務理事 永谷文江

財団法人 石橋財団 常務理事 中山 暁

京王観光株式会社 東京南支店 主任 吉田和明

ブルーバンブー株式会社

営業企画室 荒木遼太郎

営業企画室 瀬川いく

株式会社千修 第四営業本部 営業第一部

宇津木義彦

富士電機ホールディングス 代表取締役社長

伊藤晴夫

富士電機ブレイントラスト株式会社

ビジネスサポート事業部 住田尚子

メルシャン株式会社 取締役相談役 鈴木忠雄

ドイツ証券株式会社 取締役会長 橋本 徹

いちごアセットマネジメント株式会社

代表取締役社長 Scott Callon

パートナー 清水早苗

日本IR協議会

専務理事 前澤秀忠

研究員 高際俊介

住友商事株式会社

理事 金融事業本部 副本部長兼アセットマネジメント

部長 高井裕之

文書総務部 部長代理 松村泰二

公文教育研究会

グループ広報室 東京広報デスク 小林聖佳

グループ広報室 東京広報デスク 伊藤美香

朝日新聞社 マーケティングセンター 高部恭子

山陽新聞東京支社 編集部長 八木一郎

岩手日報 東京支社 記者 神田由紀

財団法人 電通教育会 事務局長 小川武夫

株式会社第一ピーアール 藏本齊幸

事前活動

防衛大学校 校長 五百旗頭真

慶應義塾大学 総合政策学部 学部長 阿川尚之

東京大学 東洋文化研究所 教授 田中明彦

同志社大学 法学部 教授 村田晃嗣

大和証券グループ本社 CSR室 次長 金田晃一

イーナ・コミュニケーション

クリエイティブプロデューサー 樋柴ひかる

財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ文化交流センター 所長 山川敏夫

文部科学省

国際統括官付 国際統括官補佐 日本ユネスコ国内委

員会事務総長補佐 大村浩志

初等中等教育局 国際教育課 国際理解教育

専門官 都築 智

大臣官房国際課 総務係長 平田純一

財団法人 日本ユニセフ協会 学校事業部 副部長

三上 健

京都市教育委員会

JICA 業務グループ 連携促進第1チーム 主任

倉科和子

NPO学習学協会代表理事 本間正人

靖国神社 大山晋吾

三菱商事株式会社 山本哲也

株式会社TBSテレビ 報道局取材センター

外信部 田勢奈央

株式会社電通 第8営業局 吉野次郎

NHK スペシャル番組センター

チーフプロデューサー 宮本英樹

JICAアフリカ部 調査役 山本愛一郎

京都大学農学部 准教授 辻村英之

京都大学東南アジア研究所 地域研究第一研究部門

ランヒセラ・ドロテア・アグネス

NGO「ヒランガニ・ン・ゴタアンド」

トーマス・C・カンサ

「ほっとけない世界の貧しさ」CSOネットワーク

共同事業責任者 今田克司

東洋学園 理事 富澤 暉

ピースボート 事務局 渡辺里香

特定非営利法人 岡崎研究所 所長・理事長

岡崎久彦

東京サイト

VISA International Asia Pacific, Ltd. 広報部

部長 井村 牧

Executive Vice President & General Manager Japan

Jim Allhusen

東京都産業労働局観光部 振興課観光まちづくり係

主任 森田幸雄

墨田区文化観光協会 すみだ観光プロデューサー

千葉良規

株式会社アルメック 第二計画部・上席研究員

海口晴彦

世界銀行東京事務所 上級広報官 岩崎弥佳

コンサベーション・インターナショナル

日本プログラム代表 日比保史

環境省 地球環境局地球温暖化対策課 協力係長

小林 豪

千葉大学大学院人文社会科学研究所 地球福祉研究

センター 准教授 上村雄彦

特定非営利活動法人 ブラネットファイナンス

ジャパン 事務局長 ロン・ババクア

第8章 日米学生会議にご協力いただいた方々

NHK スペシャル番組センター

チーフプロデューサー 館谷 徹

アジア財団

副理事 Allen C.Choate

日本代表 龍舎アルセニ

パートナー推進マネージャー 吉村ひとみ

ヒューマン・アソシエイツ株式会社 第二事業部

進藤哲夫

米国海軍省

在日米海軍司令官 海軍少将 James D. Kelly

在日米海軍司令部 法曹 Erik L. Jorde

横須賀地方総監部幕僚長 海将補 小澤 勇

防衛大学 人文社会学群長 教授 孫崎 享

東京プリンスホテル 鈴木 愛

東京外国語大学地域文化研究科 教授

特定非営利法人 日本紛争予防センター

理事 伊勢崎賢治

東京大学大学院法学政治学研究科 教授 藤原帰一

青山学院大学 国際政治経済学部教授 押村 高

早稲田大学国際教養学術院 教授 関根 勝

独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センター

秋田サイト

秋田県

知事 寺田典城

副知事 西村哲男

教育委員会 教育長 根岸 均

学術国際部 部長 森山祐二

学術国際部 学術国際政策課 課長 和泉 勤

学術国際部 学術国際政策課 副主幹 舩谷修美

学術国際部 学術国際政策課 副主幹 千葉圭司

学術国際部 学術国際政策課 国際教育担当

木村 薫

東京事務所 総務企画課政策情報班 主任

佐藤邦明

東京事務所 主査 仲村陽子

山本地域振興局 局長 堀江敏明

山本地域振興局 総務企画部長 久米 実

山本地域振興局 総務企画部 地域企画課

企画・地域振興班 主査 古井正賢

秋田市

市長 佐竹敬久

総務部秘書課 課長 鈴木 忍

商工部商業観光課 観光政策担当 主査

齊藤ひかる

能代市

市長 齊藤滋宣

企画市民部 次長 工藤金美

企画市民部 市民まちづくり課 課長 戸松重男

企画市民部 市民まちづくり課 課長補佐

佐々木和子

八峰町

町長 加藤和夫

産業振興課 商工観光係長 柴田 要

産業振興課 主任 門脇朝哉

産業振興課 日沼宏平

藤里町

町長 石岡錬一郎

事業課 商工観光係 主査 田代文久

総務課 行政改革推進係 主任 石岡敏彦

在札幌米国総領事館

総領事 Marrie Y. Schaefer

総領事代理 Ian T. Hillman

国際教養大学

理事長・学長 中嶋嶺雄

事務局次長・秘書室長 佐々木昌良

事務局学生課 課長 武田 勝

総務企画課 企画室 室長 吉崎 誠

総務企画課 企画室 辻田豊英

総務企画課 企画室 松本和義

総務企画課 企画室 佐藤直人

総務企画課 企画室 佐藤初美

総務企画課 企画室 佐藤善成

総務企画課 総務施設班 古谷光孝

学生課 学生支援班 班長 小林和世

学生課 学生支援班 清水康成

カフェテリア レストラン SUNSUN 支配人

金沢直樹

日本政府代表 スリランカ平和構築及び復旧・復興担当

明石 康

秋田日米協会

会長 須田精一

事務局長 鈴木力雄

関口博子

参議院議員 金田勝年

金田勝年参議院議員 政策担当秘書 東 秀美

秋田魁新報社

常務取締役 編集局長 小笠原直樹

編集局 政治経済部 部長 佐川博之
 能代支局 支局長 小川浩義
 政治経済部 記者 藤田 向
 東京支社 記者 田中敏雄
 北羽新報社
 代表取締役 八代 保
 記者 武田幸一
 ABS秋田放送
 取締役報道制作局長 立田 聡
 営業局販促事業部 部長 荒谷元子
 報道制作局アナウンス部 松井梨絵子
 ガッツエンターテイメント 代表取締役 石垣政和
 由利工業株式会社
 代表取締役 須田精一
 経営企画室 取締役室長 須田哲生
 経営企画室 松橋恭太郎
 秋田ビューホテル 販売内務室長 佐藤和宏
 アルファビジョン 代表取締役社長 千葉康彦
 ユーランドホテル八橋 代表取締役社長 松村讓裕
 カリフォルニア大学アーバイン校 准教授
 Jonathan M. Hall
 財団法人 秋田県国際交流協会 事務局長
 福田博司
 株式会社ニューフォト北日本 映像制作 課長
 松原和夫
 <ホームステイをお引き受けいただいた皆様>
 能代市
 山谷公一、工藤金美、吉岡和男、藤田豊治、増山裕弘、
 油井日出男、佐藤利春、工藤 学
 藤里町
 加茂谷芳文、藤田主計、斉藤栄作美、新川泰直、成田
 清子、安部得直、菊池博悦、福司 満、佐々木和昭
 八峰町
 笠原幸子、田村京子、柴田和子、佐々木光子、木藤
 直、中嶋茂光、福土正信、酒沼宏平、太田治彦、柴田
 要、工藤金悦、武田 武
 広島サイト
 広島市
 企画総務局 国際平和推進部 平和推進担当課長
 手島信行
 企画総務局 国際平和推進部 平和推進担当
 山口芳明
 企画総務局 国際平和推進部 平和推進担当

戸井裕次郎
 企画総務局 秘書課 岩崎 学
 財団法人 広島平和文化センター
 前理事長 斉藤忠臣
 理事長 スティーブン・リーパー
 国際部国際交流・協力課 重村隆彦
 国際部国際交流・協力課 本田博之
 平和記念資料館啓発担当 主事 仁井田政治
 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
 元副館長 荒谷 茂
 副館長 中川雅裕
 主事 中谷美保子
 財団法人 広島観光コンベンションビューロー
 下岡憲子
 広島市立大学
 国際学部長 大東和武司
 事務局学部運営担当 河村千鶴子
 広島市立大学広島平和研究所
 所長 浅井基文
 事務室主幹 津村 浩
 講師 ロバート・ジェイコブズ
 社団法人 広島青年会議所
 理事長 高橋正敏
 専務理事 黒谷雅樹
 広島商工会議所 商工部 産業振興チーム
 秋田和宏
 中国新聞社
 特別顧問 今中 亘
 元報道部長 増谷 寛
 報道部長 枳敷啓太
 記者 森田裕美
 記者 金崎由美
 広島日米協会
 会長 山本一隆
 専務理事兼事務局長 安藤欣賢
 財団法人 広島国際文化財団 事務局長 実平悦夫
 株式会社中国放送
 代表取締役専務 安東善博
 事業センター専任部次長 宮崎 寛
 学校法人武田学園 理事長 武田哲司
 合同産業株式会社 代表取締役社長 網野公泰
 株式会社ユアーズ 代表取締役社長 根石紀雄
 オタフクソース株式会社 営業本部販促グループ
 チーフスタッフお好み焼士 川相庸一

第8章 日米学生会議にご協力いただいた方々

お好みフーズ株式会社 代表取締役社長
佐々木栄史
キリンビール株式会社 広島支社課長代理
小林義弘
JA広島中央会
企画広報部次長 市原耕治
企画広報部課長 久保井晃浩
観光広島流お好み焼き教室三三三 代表取締役
尾川英司

株式会社インターグループ 中村 航
ホテルサンルート広島 営業主任 湯浅 勝
リーガロイヤルホテル広島 料理部事務所課
国際会議場 マネージャー 石田悦朗
広島学院中学・高等学校 小田和明
広島女学院中学高等学校 向井 均
広島経済大学 教授 田中 泉

<平和公園ガイド指導>

清水恵子
住廣寿子
山根美智子

京都サイト

京都府

知事 山田啓二
総務部長 太田 昇
教育委員会 教育長 田原博明
教育委員会 指導部社会教育課 太田明美
国際課 主幹 山口浩司

京都市

市長 榊本頼兼
教育委員会 教育長 門川大作
教育委員会 教育長秘書 大山剛生
教育委員会 指導部 担当部長 永田和弘
伏見区 区長 水田雅博

京都商工会議所

理事・事務局長・総務部長 山下徹朗
総務部 課長 日野直樹

学校法人 立命館

総長 川口清史
国際部 衣笠セミナーハウス 衣笠国際教育課
課長補佐 田中清子

財団法人 大学コンソーシアム京都

理事長 八田英二
小笠原知広

重田裕之

社団法人 京都日米協会

会長 村田純一
副会長・専務理事 西村宗也

京都新聞社 社長 増田正蔵

社団法人 大阪日米協会

事務局長 黒川省二

須賀順子

関西電力株式会社 京都支店 支店長室長

梅田 哲

株式会社ガクシン

編集チーフ 大久保智徳

記者 岩田拓真

財団法人 京都市国際交流協会

財団法人 高輝度光科学研究センター

社団法人 神戸日米協会

会長 キラン.S. セティ

井上淳也

野村祥子

株式会社島津製作所

地球環境管理室 室長 天野輝芳

島津創業記念資料館 兼松秀明

種智院大学

学長 頼富本宏

入試課 課長 古川洋一

第5回京都学生祭典実行委員会

実行委員長 藤田卓也

井出 茜

辻亜紗里

株式会社でんでん

代表取締役CEO 田尻敏寛

石谷彰一郎

総本山仁和寺執行 真言宗御室派総務部 部長

沖田定信

総本山仁和寺 御室会館

株式会社堀場製作所

常務取締役 佐藤文俊

管理部 広報チーム 三菅あゆみ

京エコロジーセンター

株式会社ワイズポケット 会長 寶槻 徹

日米会話学院 副学院長 John Freeman

静岡文化芸術大学 学長 川勝平太

<京都フォーラム通訳>

安部礼子

河村睦美

○日米学生会議アルムナイ協力者

青山泰司、天野順一、荒島由也、飯田智紀、池田早希、市川裕康、井上敏之、井上雅章、井上裕太、岩沢雄司、岩崎洋一郎、梅崎 渉、江川響子、大高 巽、大原 学、小笠原瞳、尾田亜沙美、笠井寛子、唐沢由佳、河上洋右、木ノ上高章、国松永喜、小迫由衣、五所恵美子、小林悦子、小林規威、佐藤友紀、真田雄太、塩崎哲也、鹿谷幸史、鳥村明子、清水経義、杉田道子、須藤 淳、高沢健史、高橋裕美、竹内幸美、武田興欣、千代明弘、辻喜久子、出浦寛子、長崎智裕、中瀬正一、永田隆介、中山智夫、生板沙織、西田尚弘、西納由紀、乗竹亮治、ハナ・ハイネケン、袴田隆嗣、波多野綾子、平岡萌子、廣田良平、黄アラム、福田愛奈、グレン・フクシマ、福谷尚久、富士岡篤臣、古澤昭子、降旗健人、寶槻 徹、細野恭平、堀内宗忠、堀抜巧二、三谷佳孝、源 飛輝、宮崎あゆみ、安田 立、山崎秀之、山崎繭加、山田裕一郎、山室勇臣、山本東生、由井啓太郎、吉野次郎、吉原健吾、王 雄揆

○賛助者・団体・企業

独立行政法人 国際交流基金日米センター
財団法人 国際教育財団
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
財団法人 日商岩井国際交流財団
財団法人 平和中島財団
財団法人 三菱銀行国際財団
財団法人 広島国際文化財団
社団法人 東京倶楽部
社団法人 日米協会
社団法人 大阪日米協会
学校法人 武田学園

イオン株式会社
エアバス・ジャパン
オタフクソース株式会社
お好みフーズ株式会社
株式会社オリエンタルランド
キッコーマン株式会社
キリンビール株式会社
合同産業株式会社
株式会社三和
JA広島中央会
新日本製鐵株式会社
住友スリーエム株式会社

住友不動産株式会社
セコム株式会社
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
大成建設株式会社
株式会社竹中工務店
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
東京電力株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
日本アイ・ビー・エム株式会社
野村ホールディングス株式会社
株式会社日立製作所
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
本田技研工業株式会社
松下電器産業株式会社
三井不動産株式会社
三井物産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
メルシャン株式会社
株式会社ユアーズ
橋・フクシマ・咲江
堤 清二
南原 晃
西田尚弘
橋本 徹
宮澤喜一

協和発酵工業株式会社
伊藤忠商事株式会社
公文教育研究会
日本電気株式会社
モルガンスタンレー証券株式会社
住友商事株式会社
富士電機グループ
株式会社サンブリッジ
いちごアセットマネジメント株式会社
内古閑宏
鹿谷幸史
西野謙二

編集後記

会議が終わってもしばらく安心できないのが報告書担当の実行委員である。しかし、本年度は報告書スタッフの働きにより、まずまず早いペースで完成のめどがついたことをうれしく思う。

文字にする作業というのは不思議なもので、書き手の気持ち次第ですでに起こったことをいくらかでも作り出せてしまう。実行委員と参加者だけでなく、新聞記事や外部の方からの声もなるべく取り入れながら作成してきたとはいえ、この報告書に表現された日米学生会議は、ごく一面からとらえたものに過ぎないだろう。この本を手にとって日米学生会議に興味を持った方は、是非説明会や講演会に参加して、会議の価値を自分自身の日で確かめてみてほしい。また、将来の実行委員や参加者は、この報告書からなるべく多くのことを学びとって教訓を活かしてほしいと思う。

最後に、日米学生会議を支えてきてくださった方々にここで改めてお礼を申し上げたいと思います。数多くの支援者の方々の助けなしには、日米学生会議は今まで存続してこれませんでした。感謝の気持ちを込めて、第59冊目の報告書を世に送ります。

第59回日米学生会議実行委員 松田浩道
2007年11月12日



第59回日米学生会議実行委員

編集スタッフ

松田浩道、高井竜輔、廣田隆介、間橋大地、平井麻祐子、
加納康宗、本郷亜紀

発行

第59回日米学生会議実行委員会

〒160-0004東京都新宿区四ツ谷1-21 齊健ビル3階

<http://www.jasc-japan.com/>

Japan-America Student Conference Since 1934

主 催



財団法人国際教育振興会

企画・運営

第59回日米学生会議実行委員会